

---

# 三国志演義 ~ 異世界の者 ~

シュヴァルツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三国志演義〜異世界の者〜

### 【Nコード】

N55440

### 【作者名】

シュヴァルツ

### 【あらすじ】

乱世の最中一人の男がこの地に舞い降りた男は何のために降りたのかすべては神のみぞ知ること

## 神のみぞ知る

こんにちは、シュヴァルツです。初めましての方は初めまして  
今回もまた、恋姫ネタでやらせていただきます。

主人公も強いネタでやりますが、前回の物も参考にしてある程度に  
させたいとおもいます

また、戦闘描写もダメな方なので大らかな気持ちでお願いします。  
感想や要望も待っていますのでどんどん送ってくださいね

他の方の小説も参考にしたいのですが何か良いものはありますか？  
良かったら教えてください

一応形式としては台本形式で書きたいと思います

## あらすじ(前書き)

また、このネタでやらさせていただきます

## あらすじ

ここに、一人の男がいる

彼の名は、神田光男、国際防衛大学に通う大学生だ

成績優秀で武器の知識量も豊富、戦術類も得意でスポーツ万能の完璧超人だ

(うらやましいぜこんちくしょう！)

神「あゝあ今日もやっと終わったぜ」

及「なんや、神ちゃん完璧超人がなにゆうてんねん」

こいつは及川高校からの腐れ縁ってやつだ

神「うるさいなゝ俺だって人間だぞ。そんな、毎日毎日勉強ばかりじゃあ疲れるっつの」

及「ほほー。超人らしからぬ言葉も出るもんやなー。そや、今夜合コンなんだけど行く？」

神「却下、俺今日は用事あるから。いつもんとこ」

及「なんや、またあの武器ショップ行くんか？よーあきないな」

神「いいだろーおれの趣味なんだから」

そう、神田は部類のガンマニアなのだその知識量はスーパーコンピユーター並みである

及「分かったでも、今度はちゃんとあけといてーな」

神「ああ、わかったよ」

それから、及川と別れ車でガンショップのケンドに向かった  
（数十分後）

カランカラン

神「おっちゃん、来たよ」

お「おう、よく来たな。まあ入れ」

この人は、ケンドショップのオーナーのケンドだ。小さい頃はよくこの店に来ておっちゃんと遊んだ  
そのためか武器の知識量は半端なくなった

神「話って何？」

お「ああ、お前も二十歳だろう？だから、プレゼントを用意したんだ」

神「プレゼント？マジで!？」

お「ああ、こいつだ」

カウンターの奥から布に包まれた何かを持ってきておれの前に置いた

神「妙に高そうだね」

お「ああ、こいつは自信作だ見てくれ」

バサッ！

神「おお〜」

そこにあっただのは四丁の銃だった

お「デザートイーグルを基本設定して大口径の弾も扱えるようになってる。こいつなら装甲車までなら簡単に逝かせるぜ」

神「スゲー」

見た目はデザートイーグルだがスライドが大きく変換され大口径の弾も扱えるように設定しており銃自体が壊れないようにセッティングされていた

神「名前とかあるの？」

お「一応、左からセイバー、トムキャット、ファントム、ライダーだ」

神「ほほー、よろしくなみんな」

そのとき銃から返事があったような感じがあった

お「大事に扱ってくれよ」

神「ああ、もちろんだよ。おっちゃんじゃあ俺もそろそろ帰らせてもらっわ」

お「おう、気を付けてな」

そういつて俺は店を後にした

その道中・・・

神「ふんふんふん」

神田はかなりご機嫌だった。そりゃあそうだろう、ガンマニアからしてみればおっちゃんからいきなりプレゼントで銃をもらえればと家まであと数十メートルというところで・・・

カン！

神「ん？」

神田は足元で音が鳴ったので見下ろしてみると一枚の銅鏡があった

神「なんだ？これ」

おもむろに手に取ってみたと

ピカー！！

神「うわ！？なんだこれ！？」

と言っているうちに意識が切れた



## 主人公設定（前書き）

主人公設定に入らせてもらいます

## 主人公設定

名 神田光男（20）

格好 大学の授業で扱う迷彩服を着ている

顔は中性的だが体つきはきちっと引き締まっている  
しかも、本人の知らない所でファンクラブができるほど

性格 冷静沈着でどんなことにも対応できる 親しい人には優しく  
するしかし、自分の身に危険が来る時や嫌いな奴には徹底的に縛り  
上げる（裏の性格ではFATEのギルガメッシュのような性格）

趣味 射撃・サバゲー

サバゲーなどでは援護タイプに回る  
後、アニメやゲームなども見ている

スポーツ系は基本的にどれでもできる武術もすべて習得しているが  
一番得意なのはバレットアーツという物  
（バレットアーツとは銃撃と打撃を組み合わせたもので様々な技に  
応用できる）

因みに気も扱えてそれを応用して自家製のレーダーを作った（レー  
ダーは大型レーダーよりも遙かに性能がいい）

（こっからは三国志についた時の能力）  
創造

自分で思ったものを簡単に作り出せる能力。

無限倉庫

この倉庫にはなんでも入っている優れたもので様々なものがある

どこだここはああああ！！！！

神「う、うん？」

えっと、俺は確か家に帰る途中で変な銅鏡を拾ってそれが光って気を失ったんだっけというか……

神「ここはどこだ？」

辺りを見渡すと砂、砂、砂、だらけである

神「取り敢えず持ち物を確認してみっか」

持ち物

4丁銃

おっちゃんからもらったやつ

バック（大学からそのまま店にいったため）

バレットライフル（何故があった）

M60 軽機関銃（上と同じ）

M870（これも同じ）

バンドナ（弾無限）

携帯

筆記用具

ノート

世界の武器百科辞典（授業で使う為持ち歩いている）

神「よし、取り敢えずは大丈夫だな」

その時、後ろから声を掛けられた

？「おい、にいちゃん」

神「はい？」

後ろを振り向くと頭に黄色い布を巻いた三人組のおっさんがいた

神「あ、すみませんここはどこですかね？」

出来るだけ相手を刺激しないように喋った

お1「なんだ？場所すら知らねえのかだったら手間賃として身の回りの物おいていけや」

神「ご冗談を無理に決まってるじゃないですか」

お2「何だと！？こらー！！」

そう言っつて刀を俺に向けて来た

お3「おら、これでもおいていかないかい？」

神「ふふふ、ははは！！！」

お1「なにがおかしい！！」

神「そんな物で俺に勝てるっても？」

お2「な、なんだとー！」

と言っておっさん2が突っ込んで来た。俺はそれに対して  
態勢を低くし銃が突き出る形にした

神「ふん！！！」

ザッ

お2「！？？」

神「THE END」

ダン！！

お2「グハ！？？」

ドサ！！

お1「お、おい」

神「安心しろ死にやしない。それからどうする？」

殺気を交えながら残りを見た

お1「く、くそお前ら行くぞ!!」

お3「わ、わかった」

そう言って逃げ出した

神「ふう」

?「お見事です」

神「ん？」

振り向くとそこには、

とっだっはああああ！！！！！（後書き）

作「こんにちはは作者です」

神「神田だ」

作「いや〜ついにやりましたよ第二弾恋姫無双」

神「そうだな」

作「おまけに、今回も銃を使うよ」

神「確かにでもな・・・」

作「なに？」

神「いや、同じネタもどろかなって思って」

作「・・・そこは突っ込まないで」

神「まあいいや、次回もお楽しみに」





関「ど、どうかしましたか？」

神「あ、いや、なんでもない」

どういうことだ！？関羽に張飛に劉備って三国志に出てくる武将じゃないか！？

あの光のせいでもっかに飛ばされたということか？

もしかしたら、パラレルワールドってやつか？本で見たことはあるけど

まさか自分が体験する羽目になるとはな

とそんなことを考えていると声を掛けられた

関「あ、あの！」

神「ん？ああ、ごめん。まだ名前を言ってなかったね。神田光男だ」

関「神田さまですね。やはり、天の身遣い様ですね」

神「天の身遣い？なにそれ？」

何、その神様のな扱いは？そりゃあ確かに名前に神ってついてるけどそんな大層なもんじゃないぞ俺は

劉「占い師の管路ちゃんがいったの「乱世おとづれしとき天から武人があらわれるだろう」って」

関「はい、しかも先ほどの戦いを見る限り占いどおりの戦いでした」

神「いや〜それほどでもないしな」

本当にバレットアーツなんて興味もった程度だしな

劉「あの、それでお願いがありません」

神「何？」

劉「その、乱世を止めるために手伝ってください！！」

神「理由は？」

劉「今、この世界では民が重税に苦しまれ賊に襲われるということが続いています」

関「しかも、お役人は見て見ぬふりで何もしません」

張「だから、鈴々達と一緒に悪い奴を倒してほしいのだ」

神「なるほど、なら劉備君の理想は？」

劉「みんなが笑って暮らせる世界を作ることです」

神「甘いな」

三「！！？」

神「確かに理想としては立派なことだ。だが、みんなが笑って暮らせるということは先ほどの賊も含まれることになるぞ？ましてや、

そのために殺し合いをすることになる。」

劉「……………」

分かっているのか。確かに理想としては立派だ  
しかし、理想を抱いたまま死ぬのはとっても無残なことだ。なによ  
り……………」

神「それでも、覚悟はあるか？」

覚悟がなければ自分たちの故郷ぐらいで十分だ

劉「……………」

神「ん？」

劉「あります！！私たちは自分たちだけでなくこの大陸すべての人  
たちが笑って過ごせる世の中にしたいんです！！」

ふっ目が据わってやがる。だが、それもまたよし。ならば……………」

神「分かった。それだけの覚悟があれば十分だ」

関「ならば！」

神「ああ、君たちの理想に賛同させてもらおうよ」

劉「あ、ありがとうございます！」

そう言うと俺の手をブンブンと上下に振った

神「おお、これが女の子の手か柔らかいな」

と、女の子特有のやわらかさに堪能していた

そして、今後の方針を決めるため近くの町で昼食を摂ることとなっ  
た

## 天の身遣い（後書き）

作「第2話おわり」

神「よかったな」

作「この次はいよいよ大規模な戦闘が行われるからよろしくね」

神「マジかよ〜でも、俺も前線に出るんだろ？」

作「ああ、ついでに三国志の世界から来た時の能力も発揮されるから」

神「そうか、まあバレットアーツだけでも十分だと思っがな」

作「まあまあ、そこはご都合主義ってことで」

神「なら、仕方ないかでは・・・」

作・神「次回もお楽しみに！」

## 初めての戦闘

それから、俺達は今後の方針を決めるために近くの町までいった

丁度、昼時だったので飯屋で決めることにした

〈飯屋〉

ガツガツガツ！！

神「すごいな・・・」

今、俺の前では皿が山のように積まれていた

張「おかわりなのだ！！」

その原因はこの張飛である

食べる量は半端じゃないんだもん

神「すごいな・・・」

劉「あははー」

関「そんなことより神田様、これからどうしましょっ？」

神「そっだなー」

それよりだな

神「気になったことがあるんだけど」

関「はい？」

神「最初に会った時別の名前で呼んでたよね？」

関「あつそれは・・・」

劉「真名だよ！」

真名？なんだそりゃあ

神「真名ってなに？」

関「真の名と書いて真名といいます。これは、家族の者や親しい人にだけ呼ばせて良いものです。しかし、本人の許可なしに勝手に呼ばれた場合、問答無用に切り捨てられます」

神「へーそうなんだ」

怖えー！真名って怖えー！もし、あの時呼んでたら切られてたな・・俺

劉「そうだ!!」

劉備が何か思いついたらしい

劉「私たちの真名。教えようよ」



関「そうですね」

張「さんせいなのだ！」

神「いいのか？」

劉「これから、一緒に戦う仲間なんだからいいんだよー」

神「そんなもんか」

関「では、改めて姓は関、名は羽、字は雲長、真名は愛紗」

劉「私の名前は劉備、字は元徳、真名は桃香」

張「鈴々は張飛、字は翼徳、真名は鈴々」

神「よろしくな、愛紗、桃香、鈴々」

三「はい！」

神「さて、これからの方針だが、「大変だー！ー！！」」

全「！？」

外を見ると町人達が騒いでいた。愛紗が外に出て近くの町人に聞いた

愛「どうした！？」

町「賊が攻めてきたんだ！早くあんた達も早く逃げな！」

そう言つとどっかにいつてしまった

神「どうした？愛紗！」

愛「賊が攻めてきたようです。私は迎撃してきます！」

そして、町の外へ行ってしまう。

神「待て！愛紗！クソッ」

桃「ご主人様ー」

神「桃香、俺は愛紗を追いかける！町の人たちを頼む！」

鈴「鈴々も行くのだ！」

神「いや、鈴々はここに残って桃香を手伝ってくれ」

鈴「む、仕方ないのだ」

神「えらいな」

なでなで

鈴「にや、気持ちいいのだ」

神「することしたら、もっと撫でてやるぞ」

鈴「分かったのだ！」

神「よし！じゃあ俺も追いかけてくる」

桃「気を付けてね！ご主人様」

鈴「こっちは任せるのだ！」

神「応！」

そう言って俺は愛紗を追いかけた

続く・・・

## 初めての戦闘（後書き）

戦闘は次に回します。期待していたらごめんなさい…

## 初めての戦闘2

（愛紗 side）

私は、一人で町の外に飛び出し、賊がいると思われる方角に向かった・・

しばらくすると、額に黄色い布を巻いた集団がいた、おそらく、あ奴らであろう

愛「待てい！」

賊「なんだ！貴様は？」

愛「我が名は関羽！幽州の青龍刀である！貴様らがこの町を襲うというなら私を倒してからにしてみらおうか！」

賊2「へっへ、いい女だな。倒して俺らの慰め物として使おうや」

と不意に近づいてきた賊を・・

ザシュッ！

賊2「ぎゃあー！ー！」

賊「てめえ！何しやがる！」

愛「御卓はいい！さっさとかかってこい！」

賊「相手は一人だ！困んでやつちまえ！」

全「応！」

そこから、私の戦いが始まった・・

〈愛紗 side out〉

俺は、桃香達に町の人たちを任せ愛紗のいる町の外にやってきた

しばらくは何もなかったが所々で死体や血痕が見えてきた。

なるほど、戦いながら移動したのか、と思いつつ移動していると丘の向こうから声が聞こえてきた。

丘の上に立ち見ると数十人の男が愛紗の回りを囲っていた。

愛紗も疲れているのか肩から息してしまっている。そろそろ、限界なのだろう。

とその時、愛紗が死体を踏んでこけてしまった。そこに、賊が突っ込んできたのだ。

俺は、急いでバレットライフルを用意して襲いかかる賊に照準を向けた。

神「ロックンロール！！！」

ドコオオオオン！！

＼愛紗 side＼

私としたことがぬかった！

賊の死体を踏んでこけてしまったのだ！そこに賊が一人突っ込んできたのだ

賊「死ねやー！」

私はもう駄目だと思い目を瞑った・・・

その時

？「ロックンロール！！！」

ドコオオオン！！！！

賊「ぎゃあ！」

バタッ

愛「？」

私が見た物は頭が吹っ飛んだ賊の姿であった。何事かと思い回りを見渡すとそこには・・・

＼愛紗 side out＼

ふう、なんとか間に合ったぜ。賊共はいきなり味方がやられて放心状態だ

そこで、俺は愛紗から離すために声をあげた

神「我は神田光男！天の身遣いである！貴様らの所業しかと見たぞ！今から天罰を加える覚悟せい！」

賊「ひ、ひるむなー！ー！倒せばいい話だ！全員でかかれー！」

うおおおおお！！！

そして、賊がこっちに向かって走ってきた。

俺も走って、賊の集団に向かっている

途中でスライディングして前にいた賊を上には飛ばした

神「おら！」

賊「グハア！！！」

そして、落ちると同時に回転しながら銃を撃った

ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！

賊2「ぎゃあ！」

賊3「ぐあ！」

賊4「ひぎゃあ！」



どンドン、蹴散らしながら愛紗の方に向かっていった

神「大丈夫か？愛紗」

（愛紗 side）

私はしばらく呆けていた

ご主人様の戦いに・・・まるで、舞いでも舞っているような戦いで美しく感じられていた

賊を上にあげたと思ったたら落ちる勢いで得体のしれない物を振り回していた

そして、回りにいる賊はどンドン倒れて行った。

倒しながらご主人様は私に近づいた

神「大丈夫か？愛紗」

（愛紗 side out）

あちゃ～こんなに服が汚れちゃって賊共には消えてもらおうか

神「フッフ、俺の女に手を出すとはいい度胸だな雑種共が」

こんな時、あれが出せればな～

愛「ご、ご主人様！？」

神「ん？」

愛紗の声に手元を見ると光っていた

神「うお!？」

しばらくすると、光は収まりそこにあった物は・・・

四丁のショットガンであった

神「こ、これは!？」

神田が驚いたのも無理はないそこにあったのはストックを切り詰めたダブル・バレル・ショットガンであった。

この銃は片手でも扱えるようになっていた。だが距離が短いのが特徴だ

神「これなら、いける!」

そう言って手足に付けた

神「行くぞ!愛紗」

愛「は、はい!」

そう言ってまた、賊の集団に突っ込んだ

賊「死ね!」

神「甘い！」

ダアン！

賊「ぎゃあ！」

神「どんどん、かかって来い！雑種共！」

そして、回りは死体の山となった。

神「ふう、なんとか終わったな」

愛「そうですね・・・」

フラッ

神「おっと」

愛「ごごごごごごごごご主人様！？」

神「よく頑張ったな。愛紗」

愛「・・・はい」

神「立てるか？」

愛「足がふらふらします」

神「しょうがないな。よっと」

ポスッ

愛「へ？」

因みに今の状態はお姫様抱っこである

愛「じゅじゅじゅじゅしゅじんさま!？」

神「こら、暴れるな。しばらくは我慢してくれ」

愛「・・・はい」

神「よし、いい子だ」

そのまま、町に歩いて行った

こうして、俺の初戦闘が終わった・・・

## 平和の一時

賊との戦闘を終えた。俺たちは街に戻ってきた。

〜街の中〜

どうやら、賊の別働隊がいたわけでもなかったようなので街の状態は無傷に近かった

神「どうやら、別働隊はいなかったようだな」

愛「そうですね。」

因みに愛紗はもう、降ろされてる。

降ろす時、少し寂しそうな顔をしたがどうしたのだろうか？

そんななか・・・

桃「ご主人さま〜」

桃香が走りながら近寄ってきた

神「おう、桃香大丈夫だったか？」

桃「うん！こっちは何ともなかったよ！それにしても・・・」

神「なんだ？」

桃「返り血すごいね・・・」

神「あ、ああ」

今、二人の状態は返り血がものすごく付着していた

神「後で、洗えば何とかなるよ」

愛「そうですね」

神「それより、どうしたんだ？」

桃「あ！そうそう、街の人たちがお礼に宴会を開いてくれるって！だから・・・」

だきっ！

神「お、おいおい桃香」

いきなり桃香が抱きついてきて神田は困惑しているようだ

だきっ！

神「愛紗？」

反対側から愛紗が抱きついてきた

愛「みんなが待っています。早く参りましょうー！」

神「・・・ああ！」

そう言っつて民がいる宴会場に向かった

その後はどんちゃん騒ぎだった。

俺は、一足先に失礼して城壁で一人飲んでいた・・・

神「これから、どうなるのかなぁ」

はは、今になつて手が震えだした。

人を殺したのはあれが初めてだったからな。

なんか、情けないな

これからも、こんな風に正常でいられるかな・・・分かんないや

桃「ご主人様」

神「ん？桃香かどうした？」

桃「一人でこっちに行ったからどうしたのかな？つて」

なんだ、心配して来てくれたのか

神「いや、ちょっと考え事を・・・な」

桃「どんな？」

神「いや、言うのも恥ずかしいんだが人を殺したのは今回が初めて

なんだ」

桃「……………」

桃香は黙って聞いてくれている

神「だから、この先みんなを守っていけるのかなって正常にいられるかなって思ってたさ」

ふわっ

神「桃香？」

桃「大丈夫だよ。ご主人様、みんなが付いてる。だから悩み事とか遠慮せず私たちに言ってくればいいよ。それで、ご主人様が少しでも楽になれば」

神「桃香…ありがとう」

それから、俺は桃香の胸で少しだけ泣いた……

桃「どう？ご主人様」

神「ありがとう……楽になった」

これからも、この仲間たちと一緒になら何でもやれそうな気がした

それから、二人で飲んだ

しばらくして、俺はあることに気がついた



神「そうだ！」

桃「どうしたの？ご主人様？」

神「いや、さっきの戦いするとき不思議なことがあったんだ」

桃「どんな？」

神「自分で思った物が具現化できる能力がついたみたいなんだ」

桃「??？」

桃香はイマイチ分からないみたいだ。

神「今、やってみせるよ」

そう言って頭の中に創造した

ピカッ

桃「わっ！？なにになに！？」

少し、光った後、一丁の銃が出てきた

その形は古いライフルのようだが中身はとんでもない武器である

桃「ご主人様、それなに？」

神「ああ、これは銃って言うって俺の国の武器なんだこれだと、弓兵

よりも遠くに速く敵を倒せるんだ」

桃「へえ〜」

イマイチ分かってないみたいだな。だったら・・・

神「じゃあ、桃香、あっちの方を見てて」

桃「え？う、うん分かった」

そう言っって言われた方向に向いた

神「行くぞ…バーネットホーク!!!」

カチツ

ドウオオオオオン!!!!!!

桃「ひゃあ!？」

驚いて尻もちをついた

神「どうだ？」

桃「どうもなにも、わけが分からない」

神「まっ俺にはこんな力があることを分かってほしい。でも、悪用したりはしない。桃香たちのためにあると思ってくれ」

桃「ご主人様・・・」

その後、また一人で飲みなおした。

## 桃香の友達って大守!?

宴会から一夜明けた後、俺達は食糧や路銀を町の人達からいただいて旅を続けることにした

神「さて、これからどこに行く?」

愛「そうですね、路銀の方が心もとないので近くの大守に客将をす  
るといのはどうでしょう?」

神「それが、一番たまるのか?」

愛「ええ、今の世なら一番早く貯まる筈です」

神「そうか、じゃあそれでいこう。そう言えばこの近くの大守って  
誰がいる?」

桃「分かんない」

鈴「知らないのだ」

愛「もう、しっかりしてください桃香様、この近くだと公孫贄です  
ね」

桃「公孫贄?公孫贄……」

と桃香が独り言を始めた

桃「あ—————!!」

神「な、なんだ!？」

桃「公孫贄って友達の白蓮ちゃんだ!」

あらら、友達のこと忘れてたみたいだな

かわいいそうに公孫贄・・・

愛「お友達の事を忘れないでください!」

桃「ごめんなさ〜い。」

神「そ、それより早く行くこつぜ」

桃「うん! そうだね」

それから、しばらくして公孫贄が大守をしているという町にやってきた

神「活発だな」

愛「そうですね」

町の人達を見るととても活発でいい大守だということが分かる

そして、城が見えてきた

兵「なんだ! 貴様らは!？」

桃「劉備と申します。大守さんに会わせていただけませんか？劉備が来たと言えば分かる筈です」

兵「そこで、少し待て」

そう言っつて中に入った

桃「はふゝ怖かった」

神「そうか？」

桃「そうだよ」

神「大丈夫だよ危ない時は俺が守ってやる。もちろん、愛紗もな」

二「は・はい！」

少し、惚気が入ったようだ

兵「お待たせしました。ついてきてください」

兵士について行って一際大きな部屋に入った

兵「公孫贛様、連れてまいりました」

公「御苦労、下がっていいぞ」

兵「はっ」

ガチャン

桃「白蓮ちゃん！」

公「桃香、久しぶりだな」

桃「うん、久しぶり」

玉座には桃香の友達、公孫贄だ。

髪は赤で、体は華奢に見えるが武器は剣を使っていることが分かる。

なぜ分かるかって？伊達に大学通ってるわけじゃあないぞ！

公「それで、こっちの三人は？」

愛「申し遅れました。姓は関、名は羽、字は雲長です」

鈴「鈴々は張飛なのだ！」

神「神田光男だ」

公「へえ」

じろじろ

なんだ？そんなに珍しいか？

神「どうした？」

公「あついや、なんでもない。それより桃香」

桃「なに？」

公「今まで何をしていたんだ？」

桃「えーと、賊退治」

公「それだけ？」

桃「うん！それだけ」

公「はあ〜桃香、ただ単に賊退治なら自分の村だけでいいじゃないか」

桃「それじゃあ、いけないんだよ。皆が笑って暮らせる世の中になきゃ駄目なの」

神「そういう訳で、公孫贖の客将をしたいと満場一致になったんだ」

公「だとしてもお前たちの力がな・・・」

？「だったら、腕試しはいかがですか？白珪殿」

そこに、現れた女性、はたして彼女の正体は！？



謎の女性現る……その正体は？

「なら、腕試ししてはいかがか？」

そう言いながら柱の陰から一人の女性が姿を現した

「趙雲か……」

趙雲？ああ、蜀の五虎将軍の一人か……こつちじゃあやっぱり女性なんだ。

てことは曹操や孫権とかもやっぱり女性なのかな？

と一人考えに老け込む光男だった

「白蓮ちゃん、その人は？」

と桃香が聞いた

「私は趙雲、白珪殿の所で客将をしています。以後お見知りおきを」と言っで一礼した

「それで、腕試しとは？」

公孫贇が聞く

「私と一対一で試合をすればいいかと」

「なるほど」

「ですが、そこのお二人は私の勘では猛者に入るかと  
と行って愛紗と鈴々を指さした

「そ、そんなことは・・・」

愛紗は照れた

「試合をするならそちらの御仁とやってみたいですな  
そう言っつて俺を指さした

「俺？」

「そう。あなたには関羽殿みたいに覇気がまったくないに思える」

「失礼な！ご主人様は私よりはるかに強いぞ！」

と言っつて愛紗が反論した

「まあまあ、愛紗落ち着けて」

「しかし！」

「要は俺の強さを見せればいいんだろ？」

「いかにも」

「ならそれでいい。公孫賛殿もそれでいいかな？」

「あ、ああ」

「じゃあ場所はどつする？」

「中庭で行えばいいかと」

「じゃあ決まりだな」

そう言つて中庭に移動した。

〈中庭〉

俺達は中庭に移動した。

「さて、始めるとしようか」

「その前に神田殿」

「なんだ？」

「得物は？」

と言つて自分の武器指さした

「ああ、武器ね……」

何しようかな？ 相手は槍だし、素手だとやりづらいよな？ だったらあれを出すか……

そう思って創造した

「トレース・オン」

因みにこの言葉は昨日思いついたものだ。黙ってやるよりは幾分マシだろ

そこで一振りの剣を出した名を螺旋剣ガラトホルグ

これは、俺の好きなアニメの好きなキャラが使っていた物だがこれが出てくるとは自分でも驚きだ

「「「な!?(にゃあ!?)」「」」

愛紗と桃香以外が驚いていた。

「神田殿、今それをどこから取り出した?」

「ん?これが、企業秘密ってやつだ」

と笑いながら言った

「それじゃあ始めるとしますかね」

そう言っつて構えた

向こうも構え出した

「では、始めるぞ………始め!!--」

そう言った後、趙雲が最初に動いた。

「まずは、腕試しに……ハイ！ハイ！ハイ！」

と連続の突きをかましてきた

「よっ！よっ！よっ！」

ガキン！ガキン！ガキン！

俺がガラドボルグで防いだ。

「ほほう、中々やりますな。では、本気で行かせてもらいますぞ」

そう言った瞬間、更に突きの嵐が俺を襲った

「おわ！？アツブないな」

そう言いながらもすべての突きをかわした

「じゃっ今度は俺の番ね」

そう言った。流れるように攻撃を出した

「そらそらそら」

ガキン！ガキン！ガキン！

「くっ」

趙雲は僅かにイラついているように見えた

「こんなものか？我われを楽しませてくれよ！」

あつヤベツ裏の性格が出ちゃった。

「なめるなー！」

と言つて趙雲がキレちゃった。ヤベツ

その間にも趙雲の攻撃はやまない。しかし、キレているせい攻撃が単調になった

「そんなことしかできないのか！？雑種！」

ガキン！！

そう言つて攻撃をはじき……

「興が覚めた……終わりだ」

そう言つて剣を低めに構えた

「天地乖離エヌマ・エリシユす開闢エヌマ・エリシユの星！！！！！」

ブワアアアアアア！！

「なっ！？」

思わず防ごうごうとしたが……

「うわああああああ！！！！！！！！！」

思いっきり吹っ飛ばされて地面に叩きつけられた。

・・・・・・・・

しばらく沈黙だったが

「しよ、勝者、神田光男！」

公孫贇がはっと気づき試合終了を言った

そして桃香達の所に戻った。

「ご主人様おめでとう」

「さすがです。ご主人様」

「お兄ちゃんすごいのだ！！」

と三人が誉めてくれた

「ありがとう。みんな」

「おめでとう神田」

「ありがとう、公孫贇」

いや、あんな大技ができるとは思ってもみなかったな

そう思っていると趙雲が近づいた

「感服しました。神田殿」

「いや、趙雲さんもすごかったよ」

「いや、神田殿には敵いませぬ。それより、」

「ん？」

「今度から私の事は星とお呼びください」

「いいのか？それ真名じゃあ・・・」

「良いのです。惚れ惚れとしましたから」

笑顔で言ってきた。

ヤベツいい顔・・・

「分かった。それじゃあ俺の事も光男って呼んでいいよ」

「承知しました。光男殿」

「それよりご主人様」

「なんだ？桃香」

「ご主人様、戦ってる時、口調変わってたよね」



ああ〜バレテたか〜まあいいや

「ああ、あれか。あれはめったに出ないんだけどな〜俺がキレた時にでる裏の性格なんだよ」

「あれが？」

「ああ、でもキレた時以外でないから大丈夫だよ……………たぶん」

「多分なの！？」

いや、だって切れた時以外でないからな〜あれ。大丈夫だろ

「それより、公孫賛」

「なんだ？」

「これで認めてもらえるかな？」

「ああ、しばらくここで客将というのはどうだ？」

「もっちろん！ありがとう白蓮ちゃん！」

そう言っつて握手しながら言った

俺達はなんとか寢床に有り付けたわけだ……………

謎の女性現る・・・その正体は？（後書き）

「作者です」

「光男だ」

「いや、裏の性格出ちゃったね」

「ああ、そうだな」

「あんまあせんないんだね」

「焦ってもしょうがないだろ」

「それはそうだけど、なんかつまないじゃん」

「そう言われてもな」

「まあいいや、次回は政務と戦闘をやってもらうから」

「おう、てか政務って何するんだ？」

「まあ簡単にいえば事務処理的な奴だよ」

「ふうん、大学でやったレポートみたいなのか？」

「そんな奴。それと入れたい武器とかある？」

「そうだな。とりあえずロケラン・・・」

「ちょっと、対人戦だよ!？」

「いや、作者を殺るための・・・」

「ちょっと！俺狙い!？」

「いや、ストレス発散に」

「そんなことで、俺殺されるの!？」

「いちいち、うるせえな。私の言うことが聞けないのか？」

ヒュウン

「やめて！そのゲートだけは開かないで！そ、それよりもう次に行くよー!」

「そうだな。それじゃあ」

「次回もお楽しみに!」

また、勝手に行っちゃったよ！

星との試合に勝利し、約束通り客将という形で置いてもらえることになった

代わりに政務などの事務処理を手伝うことにした。最初は公孫賛も遠慮していたが、俺達が好きでやっていることだということとしがしぶ了承してくれた。

俺の部屋

俺は黙々と政務をこなしている。いや、中国語、習っという正解だったな。

しかし、その隣では……

「ふえ〜」

桃香がへこたれていた。なぜいるかというところ、一緒にやろうと俺の部屋に来たのだ。俺は快く賛成した。

「よし！これで終わりっ」と

バサッ！

最後の報告書を積み上げて終わり宣言をした。

「え〜！ご主人様、もう終わったの!？」

桃香が驚いていた。だって、大学のレポートより簡単だったんだもん……

「ああ、桃香も早く終わらせろよ」

「じゃあ、手伝って……」

「おいおい、そんなことしたら桃香のためにならないだろう？！しっかりやりなさい」

「ふえ〜」

あらら、余計にやる気なくしちゃったよ……仕方ないな……

「なら、終わるまで見てやるから」

「本当!?!」

「ああ、だからしっかりやりなさい」

「はい!」

そう言って再び政務に戻った。

〜数分後〜

「終わった〜!」

そう言って最後の紙を置いた

「良くやったな」

なでなで

「えへへ」

笑顔いっぱいであえてくれる。……やべえ、超、可愛いんですけど……

「よしなら、公孫贄の所に持っていくか」

「うん！」

そう言っただけで部屋を出た俺達は公孫贄の部屋に向かった。

〈公孫贄の部屋〉

しばらく歩いたところで、部屋に着いたが、両手が塞がって開けることができなかった。大きな声で呼ぶことにした。

「おい！公孫贄、こちらの報告書が終わったから開けてくれ！両手がふさがって開ける事が出来ないんだ」

「分かった。ちょっと待ってろ」

中でガタガタと音が聞こえる。機密文書とか見られるとまずいものもあるんだろう。

そして……

ガチャ

「お待たせ、もういいぞ」

「「お邪魔します」」

そう言って近くの机に報告書を置いた。

「せっかくだから、お茶でも飲んでいかないか？丁度、休憩しようとしてたところだ」

「じゃあお言葉に甘えて」

そう言うと公孫贇はお茶を用意してくれた

ズズッ

「うまいな」

「本当だね」

「だろ？この前手に入れたんだ」

そう言って三人は和んでいたが突然、公孫贇が……

「なあ、桃香、光男」

「なに？」「なんだ？」

「この後の事は考えているのか？」

「この後の事って……」

「つまり、俺達がいっここを出ていくかということだろ？」

「ああ、桃香の理想は素晴らしいと思う。だからこんなところで終わりにしてはいけないんだと思うだ。」

確かに、桃香の理想は笑って暮らせる世を作ること、それならばもっと他の所にも行かなければならないということだ

「大丈夫だよ！」

「桃香？」

公孫贇と俺が素っ頓狂な声を出してしまった。

「だって、ご主人様や白蓮ちゃん皆がいるんだよ？なんだってやれる気がするもん！」

自信満々に言った

「ふっそうか」

公孫贇は笑顔で答えた。

その時！

「公孫贇様！」



一人の兵士が駆け込んできた

「どうした!？」

「たった今、物見から報告がありまして、黄巾党らしき集団がこの町にむかっているとの報告が！」

「分かった!すぐに準備しろ！」

「はっ！」

なんと、あの時の賊がまた来やがったのか。なら、それ相応の礼をしなくちゃあな

今の光男は裏モードに入っていた

「桃香、光男」

「うん!(応!)」

返事を返して俺達は門前に移動した

〈門前前〉

門前に来た所なのだが何やら騒がしい。俺は近くの兵士に聞いた

「おい、どうしたんだ？」

「はっ、それが集団を見つけたと趙雲様に報告したら……」

「あんな烏合の衆、私一人で片づけて見せよう」

「といって単騎で乗り込みました！」

「なんだと!?!」

クソツ!なんでこの世界の人達はそんな一人で行きたがるかな!

仕方ない!

「公孫贖!」

「どうした!?!」

「星が単騎で例の集団の所に向かったらしい!俺は援護してくる!」

「分かった。こっちも準備が整い次第、向かう!」

「頼む!」

そう言っ<sup>て</sup>創造した。作るのはアレだ……

ピカー!

「な、なんだ!?!」

「あれが天の身遣い様の力なのか?」

「す、すごいな」

回りの兵士たちがなんだか言っているようだが今は、関係ない！

光が収まった後、そこに現れたのは、一台のハンヴィーだった。

屋根にはM2キャリバーが装備されている。

ブオン！ブオン！

よし、行くか！

そう思つて、アクセルを全開にした。

（星side）

私は、黄巾党らしき集団がこちらに来ているとの報告があったので単騎でその集団に近づいた。

「あれか！」

すぐ出た所に頭に黄色の布を巻いた集団がいた。

「待てい！！」

「なんだ、てめえは！？」

「我が名は趙雲、この先の公孫賛の客将をしている者だ！貴様らがこの先の町を襲つたというのならばまずは、私を倒してからにしてもらおうか」

「ははは！何言つてやがる！こつちには一万いるんだぞ！一人で何

「ができる!?!」

「その一人にやられるかもな」

「なんだと!?!おいお前ら!」

「『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』」

そして、私の戦いが始まった

〈星sideout〉

俺はハンヴィーを飛ばして町の外に出た。すぐ近くで新しい戦闘があつたようだその証拠に、負傷したおっさんや死んでいるおっさんもいた。

しばらくすると、丘の向こうから声が聞こえてきた。

バレットを持ちだして偵察に入った

スコープでのぞいてみると、星を中心に黄色い布を纏った男たちが切り込んでいったがすぐに星によってやられていった

しかし……

「!まずい!」

星が死体を踏んでこけてしまった!その隙を突くように一人の賊が突っ込んできた!



現代兵器をなめるなー!!

（星side）

あれから私は長時間戦ってきた。しかし、倒しても倒しても奴らはきりがなかった。

「くそ、手が痺れてきた」

やはり、数では勝てないのか？そう思っていると……

「きゃあ!？」

私は倒した賊の死体を踏んでこけてしまった

そこに……

「死ねやー!!」

一人の賊が突っ込んできた

私はもう駄目だと思い目をつぶった

しかし……

「double or nothing!」

ドローン!!

「ぎゃあああ!!!」

「？」

何が起こったか分からず目を開けてみると、突っ込んできた賊は頭から血を流していた。

回りを見渡すとそこには……

（星sideout）

ふう何とか間に合ったかやっぱり遠距離からヘッドショット決めるとは、やっぱこういうことは天才だな俺

そして、俺は星から遠ざけるために大声を出した

「我おれは神田光男!!!雑種共、俺にかかって来い!!!」

「な、なめやがって!!!おい、お前ら!!!」

「『『『『『』』』』』』」

うおおおおお!!!!!!!!!

そう言ってこっちに突撃してきた!

俺は冷静に創造した

「トレース・オン」

そうやって二台の戦車を出した

「一台は”T-95” アメリカ軍が作ったプロトタイプの超重戦車だ

二台目はドイツ第三帝国軍が作った超重戦車”マウス”だ

この二台があれば充分だろ

そして、手を上げた

「fire!!」

ズドーン!!!

ズドーン!!!

二台の戦車が火を吹いた!

「う、うわああああ!!」

「た、助けてくれ!!」

「死にたくないよー!!」

フフフ、雑種共が哀れに泣いているぞ。じゃあ、我も突っ込みますかね

そう思って、セイバー、トムキャット、ファントム、ライダーを装着した



「うおおおおお！……！！！」

声を出しながら賊の集団に突っ込んだ！

「おら！！」

ドカツ！！

「ガハツ！！」

ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！

一人の賊を吹っ飛ばしてから周りにいる連中を銃撃で倒しながら星のいる所まで進んだ

そして……

「大丈夫か？星」

俺は星に話しかけた

「……」

星は啞然としたままこっちを見ていた

「おい！？星、どうした！？どこか痛めたのか！？」

俺は心配になって星に近づいた。

「っは！？光男殿、どうしてここに？」

「お前が一人で突っ込んだって聞いてな。援護しに来たんだよ」  
笑いながら言った

「そうでしたか。すみませぬ」

「良いつて気にするな。それより……」

俺は立って回りを見渡した。

「黄色ばかりで飽きてんだよね。色変えた方がいいんじゃない？」

ガチャン！

そう言つてM60を構えた

「変えないと、強制的に赤に変えちゃうよ ……！」

ダダダダダダダダダ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

「うわああああ！！」「助けてくれー！！！！！」

賊共は、弾の嵐をくらつて細切れになつていった。

「よし、星、行くぞ！！！」

「承知！」

俺達は賊の中に入った

その中で俺はハンドガンからショットガンに変えた

「そらそらそら！！！！！」

ダアン！ダアン！ダアン！ダアン！

近くにいた奴らは吹っ飛んで他に奴らを巻き込んだ

そして、反対側からは……

ドオーーーン！！！！！！

超重戦車が攻撃して進んでいる。

そして、一万いた賊はあっという間に二千まで減った。

俺は最後の警告を出した

「おい、雑種共、ここまでやられてまだやる気か？我にとっちゃあ  
どうでもいいんだがな。決める。生きるか、死ぬかをな」

「お、俺達の負けだ。好きなようにしろ」

「そうか。だったら付いて来い。もし、抵抗でもしてみろ一瞬であ  
の世に行かせてやるから」

殺気交じりで言ってやった

そして、雑種共は大人しく付いてきた。途中、公孫贄とも合流し雑

種共を兵士に任せて俺達はゆつくりと凱旋した

「それにしてもこれはなんだ？」

公孫贇が戦車を見て聞いてきた

「ああ、これは戦車と言って未来の兵器なんだ。城壁だって壊せるぜ。」

「！！本当なのか？」

「ああ、だったら試してみるか？」

そう言って公孫贇の城を指さした

「やめてくれ！！！」

全力で拒否された

「ふっほんの冗談だ。」

「うそつけ！今、笑っていただろ！！！」

「も〜ご主人様、白蓮ちゃんを苛めちゃ駄目だよ」

と桃香が笑いながら言ってきた

「あはは、ごめんごめん、つい・・・な」

「うう、本当か？」

上目づかいで聞いてきた……ヤッべめっちゃ可愛い

お持ち帰りしていい？

ダメ？

「それにしても、銃というのはすごい物ですな」

と星が言ってきた

「ああ、でもあっちに有った兵器の方がもっと恐ろしいぞ」

「そうなのですか？」

「ああ、一瞬で地形を変えてしまう物やさら地にしてしまう物もあった。」

そう、あっちに有る核兵器や爆弾に比べたらこっちの世界の方がマシに思えてくるかもしれない

でも、結果的には人を殺してるんだから変わりはないか……

「ご主人様？」

桃香が心配そうな顔で見してきた。

「大丈夫だ、なんでもない」

笑顔で言った

「そっか、でも耐えられなくなったら……」

「ああ、その時は相談するさ」

そう言いながら城に戻っていった……

## 新たな旅立ち・・・新たな仲間

賊を盗伐した俺達は公孫贇の城で宴をやった。

翌日、旅立つことにした

く王宮く

「行ってしまうのだな」

公孫贇が言ってくる

「ああ、今まで世話になった。ありがとう」

「ありがとう！白蓮ちゃん！」

「いって、古い友人の頼みなのだ」

恥ずかしそうに言った。俺は昨日から考えていた提案を出して  
みることにした

「公孫贇、一つ頼みがあるのだが・・・」

「なんだ？」

「城下町で兵士の募集をしたいんだがいいかな？」

「ちよっ・・・それはさすがに・・・」

やっぱり駄目かな？と思っていると

「良いではないですか。伯珪殿」

「「星」」

また、柱の陰から現れた星

「友の旅立ちの時、門出を祝ってやるといのが友としての贈り物だと思えますが？」

「それは……そうだけど……ええい！分かった。好きにしろ  
！！」

公孫贇が折れたようだ

「ありがとう、公孫贇」

「言つな！こっぴばずかしい」

顔を赤くしてプイツと横を向いた

「じゃあ、俺達はこれで」

そう言つて公孫贇の城を後にした

（城下町）

俺達は城を出て城下町で兵を募ることにした。



すると……

「す、すごいな〜」

なんと、目の前には多くの兵士希望者がいた。

どうやって集めたかって？それは俺の数少ない所持品から（武器は売ってないよ！？）出して一番、金銭面が整っている愛紗に頼むことにした

桃香や鈴々では売った時、足元をすくわれる可能性があるからな

「ご主人様、いっぱい集まったね〜」

桃香が言ってきた

「ああ、正直ここまで集まるとは思いもしなかったがな」

なんで、こんなに集まったんだろう？

理由は愛紗が応えてくれた

「ご主人様の武に惚れてしまったんだそうですよ」

うそ〜ん、だって俺、剣術とか使っていないよ？現代兵器で戦ってたもん

「そ、そうなのか〜すごいな〜」

「ご主人さまももっと、胸を張ってください。」



その事を言った瞬間、皆が声を出して歓喜していた

そして、俺達は出発した。多くの兵を抱えて……

〈平原〉

俺達は南に移動していた。この近くは平原が多く賊が出没しやすいとの情報が入っていたからだ。

なぜそんな危険地帯に行くかって？

それは、兵士諸君を鍛えるためだよ。兵士として希望してくれた人たちの中には農民からが一番多く、逆に元兵士や傭兵をしていた者が少ないから、こうして実戦で経験してもらうことにしている。

いきなり、やらせても仕方ないから、訓練で鍛え上げることにした。俺直々に……

そのおかげか、みんな逞しくなり正規の兵士と同じ動きをするものまで現れた。さすがに驚いたけどね

そして、俺達は、近くに町があるというのでそこで今日は休むことにした

〈町〉

町に着いてみると、みんなの表情が変わった

公孫贖の所より活気がなく住民は皆暗い顔をしていた

俺はこの町長と話をすることにした

（町長の家）

町長は70を過ぎたお爺さんだった。

「どうして、この街は皆、落ち込んでいるのですか？」

「はい、ここ最近、賊が攻め込んできて食料や金目のものを強奪していきました。お役人に頼んでも、知らんぷりするばかりで、私たちはもうどうしていいのやら」

なんとまあ、国を守るはずのお役人は役立たずのクソヤローみたいだ。自分たちの所さえ守っていればそれでいいと思っているようだな、

光男は心の中で呆れ半分怒り半分の状態になっていた。

「お願いです！一日だけでもいいです。私たちを守ってくれませんか!?!」

「いいですとも、一日だけでなく数日はここに留まっていますから」

「本当ですか!?!ありがとうございます!」

と数日、留まることが決まった時！

「町長!」

一人の住民が駆け込んできた

「どうしたのじゃ!?!」

「ま、町の外に賊が……」

「なんじゃと!?!」

おおっと噂をすれば何とやらか……

そう思って駆け込んできた住民に聞いた

「おい、兄ちゃん、相手はどのくらいだ?」

「は、はい。ざっと見て5万かと」

「そうか、」

そう言っつて俺は町長の家を出ようとした。しかし……

「どうするおつもりじゃ!?!」

町長が聞いてきた

「決まってるんだろ。奴らを殲滅してくる」

「それは無理じゃ!いくら、私兵がいても……」

「大丈夫、俺には他に力があるからな」

ニヤリと笑って言った。そして、みんなのところに向かった

「町の中心」

俺は皆を町の中心に集め、軍議を行った

この街は、北、西、東に門がある。南は山になっているのでそこからは来ないはずだ。つまり、この三つの門を守れば俺達の勝ちというわけだ

皆に作戦を伝えようとしたとき、声が掛った

「あ、あの！しゅみません！」

「ん？」

振り向いてみるとそこには、可愛らしい少女が二人いた。一人はベレー帽をもう一人は魔女帽子を被っている

「あ、あの、天の身遣い様ですよね？」

「んまあ、世間じゃあそう呼ばれてるけど、俺に何か用？」

「「あ、あの私たちを仲間にしてください！！」」

二人が叫びながら、言った。相当の恥ずかしがり屋なんだな

「理由は？」

「は、はい。私達は水郷塾というところで勉強してきました。しかし、



嘘だろ！？あの、臥竜鳳雛で有名な二人がこゝ、こんな可愛らしいちびっ子だとおおおおおおおおお！！！！！！

光男は内心、驚きと混乱に支配された

「よ、よしとりあえず、二人は仲間にするから……」

「ご主人様！！いくらなんでも！！」

愛紗は反対しているようだ。

「まあまあ落ち着けて今、彼女らの力を見せるから、孔明、土元、これをどう見る」

と言って街の地図を見せた

すると……

「はい、まずは、それぞれの門に兵士さんたちを配置します。」

と孔明が言う

「それと、門自体を頑丈にしていましましょう。多少なりとも時間は稼げるはずですよ。それと城壁に弓を扱える人を配置し、牽制を掛けましょう」

と土元が言った

「どうだ？」



「これは……この短時間に策を思いつくとは」

愛紗は驚いていた。そりゃあそうでしょ、天下の臥竜鳳雛だもん

「それじゃあ、決まりだな」

「ええ、彼女達を仲間にしましょう」

「というわけだ。孔明、土元」

二人は一気に明るくなった

「ありがとうございます！」「」

「よし、それじゃあ今の策で実行するぞ！」「」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

俺達の防衛戦が始まった……

防衛線じゃ〜！

俺達は、朱里と雛里の策どおりに配置した。

因みに、真名も読んで欲しいと言われた。……愛紗と桃香が後ろから睨んでいたが……マジで怖え〜

そんなこんなで俺も配置された。場所は東門、賊が一番多く来る場所だ。

「光男様、どうしますか？」

副官の兵士が聞いてきた。

「それじゃあ、まずは弓で相手を牽制して、俺はちょっと準備があるから、指揮の方、よろしく！」

「はっ！承りました！」

ピシッ！と敬礼して返事をした。

俺は城壁を降りて、東門を見た

（多分、弓の力で少しだが、相手は遅くなる。だとしたら、長距離攻撃でやるべきか……だったらあれを出すか……）

そう思って、創造した

「トレース・オン」

想像したのは、自走砲だ。PZH 2000というドイツの自走砲であつちの世界で言われた。世界初となる52口径の155mm砲を搭載している。

1分間に8発砲撃ができる代物だ。

それを四台ほど出した。

町の道路は狭いので縦に並べるしかなかったが砲身が回るので他の自走砲に比べたら使い勝手がいい

これで、準備が整った。

その時だった

「放てー！ー！ー！！！」

ヒュン！ヒュン！ヒュン！

どうやら、敵が近付いてきたようだこっちもおっばじめますかね？

（副官side）

私は光男様と一緒に配置された。

場所は東門、情報ではここが一番賊が攻め込んでくるらしい。

正直、怖い。私は農民から出てきてこの部隊に参加した

光男さまは分け隔てなく我らと話をしてくださる。普通、偉い人なんかはただ威張ってばかりで自分からは何も思っていない。

しかし、彼は違う。

彼は身分に関係なく他愛もない世間話や訓練でも一緒に付き合ってくださった。

だから、私は決めた。死ぬまでこの人に付いて行くと……

そう考えに耽っている

「副官！敵が来ました！」

来たか……

「よし、弓を構え！……放てー！……！」

ヒュン！ヒュン！ヒュン！

私は私にできることをしよう！

（副官 side out）

俺は準備を終えたので副官の所に戻った

「どつだ？副官」

「光男様、予想通り敵を足止めぐらいにはなりました。」

予想通りか・・・だったら

「よし、このまま続けてくれ。後ろから援護射撃をする」

「分りました」

そう言っつて、俺は城壁を降りた。

「さて、と」

距離はざっと500って所か。弾は爆撒型を使用しよう。

ウイイイイン ガチャン！

「撃てー！ー！」

ズドン！ズドン！ズドン！ズドン！ズドン！ズドン！

それぞれの砲門から弾が発射されていく

そして・・・

ドカン！ドカン！ドカン！ドカン！ドカン！ドカン！

弾は城壁を越えて賊がいるところに集中放火をした

城壁の上つて見てみると、多くの賊が倒れていた。爆発に巻き込まれて死んだ者もいる。

腕や足がもげて見た目がグロテスクな状態になっている者もいた。

もちろん、無事な奴もいたが、今の砲撃で恐怖に怯えているようだ  
俺はさらなる追撃を掛けるために兵たちに指示を出した。

「よし！このまま表に出るぞ！敵は浮足立っている！全員、続け  
ー！ー！」

「「」  
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」  
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

そのまま、表に出て、追撃を開始した

それから、東門は完全に守り切った！

「よし！皆、他の所に援護しに行ってくれ！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」  
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

防衛線じゃ〜！（後書き）

ちよつと短めになりました。ごめんなさい

防衛線じゃ〜！2

俺達は東門を守り切って他の門に援護に回り始めた

俺は、被害の大きい西門に移動した

〜西門〜

西門に配置されていたのは愛紗だ

「愛紗！大丈夫か！？」

「ご主人様！？どうしてここに？」

「東門は大丈夫！賊は全滅した！援護に来た」

「そうですか。では、お願いします」

西門は思ったよりも酷くなっていた。多少、門のおかげで塞がれているが、それも時間の問題だ

「トレース・オン」

俺は創造してある兵器を出した

その兵器とは、M2ブラットレー アメリカ軍のIFVで25mm  
機関砲が主力だ

「愛紗！皆を門から遠ざける！」



「ど、どうしてですか!?今、引いたら門が破壊されます!」

「構わない!門は破壊する代わりにこいつを投入する!」

そう言ってM2を指さした

「ご主人様、それは?」

「後で紹介するよ。それより……」

「分かりました」

そう言って、愛紗は城壁の上に居る皆をどかせた

俺は、ブラットレーに乗ってエンジンを始動させた

ブオン!ブロロロ!!

「よし、行くぜ!」

ウイイイン、ガチャン!

「fire!」

ドン!ドン!ドン!ドン!

ドカーン!!

「うわあ!?!」「なんだ!?!」





ガバツ！

「おう、桃香」

飛び込んできたのは桃香だった。

「良かった〜どこも怪我してないよね？」

「当たり前だろう？俺を誰だと思ってるんだ？」

「それでも、良かったよ〜」

と言って顔を埋める桃香

そこに・・・

「ご・主・人・様」

嫉妬神こと愛紗さんがいました

「あ！えと、アレの紹介をするんだっ たな」

「あっはい、で何なんですか？」

「ああ、こいつはM2ブラットレー、歩兵戦闘車だ。こいつがあれば歩兵の援護ができる」

「へ〜そうなんだ」

代わりに答えたのは桃香だった。そして、二人してブラットレーの周りを見始めた

「とりあえず俺達の勝ちだな」

「そうですね。皆！勝鬨を上げよ！……！」

「「「「「「「「ウオオオオオオおお！……！！……！！……！！」」」」」」」」

こうして、俺達の防衛線は無事に終了した。

いつの間にか県令に・・・

賊との戦闘を終えたあと、俺達は町長の家に向かっていた

「町長の家」

「本当にありがとうございました」

と町長が礼を言ってくる

「いえいえ、当然の事をしたまでですよ」

と俺が言う

「でも、本当に良かったね〜お爺ちゃん」

と微笑みながら言う桃香

「それで、あなた方にもう一つお願いがあります。」

「何かな？」

「この県令になって下さいますか？」

「はい？」

俺は思わず聞き返してしまった

「厚かましいとは重々承知しています。ですが・・・」

と言ったところで桃香が聞いた

「お爺ちゃんどうしてなの？」

「実は、貴方達が賊退治してる間にこの県の県令がどこかに行っちゃってこれではこの街は終わってしまいます！だから、どうか……」

「おいおい、県令ってのは何か知らないけど要は責任者が逃げ出したってことだろ？呆れて物が言えないぜ」

「よし！分かりました。俺で良ければ手を貸しますよ」

「本当ですか！？」

「ああ、ここで会ったのも何かの縁だ。きつちりやらせていただきますよ」

「ありがとございませう！！それではさっそく皆に知らせてきます  
「！」

そう言っって町長は家を飛び出して行った

「これで、良かったんだよな？」

「うんー！」

「それで………一つ質問なんだが………」

「何？ご主人さま」

「県令つてなんだ？」

「ええ！！？ご主人さま、知らないで引き受けたの！？」

「でも、あれだよな。責任者であることには変わらないだろ？」

「それはそうだけど。じゃあ説明するね」

「頼む」

「県令っていうのは州、？、県、の次にくるもので四番目に力が強いんだよ。だから、町を治めるときとかは全部この部分が来るの」

なるほど〜つまりあっちの世界でいう県知事みたいな物か……

「なるほど、分かったぜ。ありがとう桃香」

なでなで

「えへへ〜」

そうこうしているうちに町長が戻ってきた。

「お二方、こっちに来てくれんかのう。皆が待っているのじゃ」

「よし、行くつか桃香」

「うん！」



そう言って町長の家を出た

（三日後）

あれから、町の整備を始めたが資金が心許無かったのでまずは、商業面で稼ぐことにした。

と言っても、俺が向こうの知識をちよいと加えれば後は爆発的に広がっていくだけだ

それと、朱里、雛里もいてくれるので経済状況がすぐに分かるそんなこんなで資金が集まったので町の整備に着手した

「ご主人さま、城壁の方ですがこのぐらいの高さでよろしいですか？」

と愛紗が聞いてくる

「……ああ、このぐらいでいい。あと、一部分を広めにしておいてくれ」

「承知しました」

そう言って部屋を出て行った

因みに俺はいろんな報告書や資料などを見て立案などを考えていた。県令は桃香がしている

「まさか、こんなにも大変だったとは思ってもよらなかったぜ。でも、これも皆のためだ。頑張るぞー!!」

そう言っつて仕事に励む光男だった

〈数日後〉

何とか街の復興にも成功し、経済状況も安定してきたので久々にお暇をいただいた。なので、気晴らしに兵士みんなに会いにきた

兵士みんなも私兵から公式の兵士になり喜んでいた

〈鍛錬場〉

「よう、皆久しぶり！」

「お久しぶりですね〜光男様。どうですかい景気の方は」

「まあ、ぼちぼちつてとこかな。みんなもすっかり鍛練してるか？」

「勿論ですとも、毎日しっかり鍛えて、もしもの時でも安心できますよ」

「ははっそりゃあ頼もしいな、どれ、俺も久々にやりますかね〜」

「おっそうきましたね。皆！光男さまが相手をして下さるそうだぞ。遠慮はいらねえやつちまえ！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「ちよつま、お前ら！」

「かかれー！ー！」

うおおおおお！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

「そつちがその気ならこつちもやってやらー！ー！」

そう言つて兵士との真つ向勝負に挑んだ俺、結果は！？

10分後

鍛錬場の真ん中に一人の男が立っていた

「ふふふ、ははははは！ー！ー！ー！<sup>おれ</sup>私の勝ちだな！ー！」

立っていたのは光男（裏モード）だった

ほかの兵士たちは皆気絶していた

「いやあさすがですな。光男様」

「そついつお前こそな。副官、正直ビックリしてんだぜ？」

「いやいや、光男様には敵いませぬ」

「それじゃあ、俺はもう行くわ。明日は皆に休んでいいて言つてて」

「分かりました」

そうやって俺は鍛錬場を後にした

〔城壁〕

俺は一人、城壁で酒を飲んでた

酒は無限倉庫にあったものだ。これも先日気がついたことだった。

「ご主人様？」

「ん？愛紗か、どうだ一緒に」

そうやって酒を掲げた

「では、失礼して」

そうやって隣に座った

「良い眺めですね」

町を見ながら愛紗が言う

「ああ、そうだな。なあ、愛紗」

「なんででしょうか？」

「絶対、ここを守っていつか」

「……はいー」

そう言ってまた、二人で酒を酌み交わした

黄巾党・・・抗菌党・・・抗菌コート!! (前書き)

すみませんつまらない物をお見せしました

黄巾党……抗菌党……抗菌コート!!

俺達は街の整備が終わり、経済状況も軌道に乗ってきたので今後のことについて話し合うことにした

街の一角に屋敷を立ててそこで住むことになった。ついでに屋敷の一角に会議室も設けた

無論、会議室という言葉はこの時代にはないので俺が教えたのだ。

防音・防火に優れるこの部屋なら斥候が来ても内容は聞き取れないだろう。まあ、俺たちみたいはまだ、勢力にもなっていない所なんかほっとくと思うけど、

〈会議室〉

「さて、今後のことについてなのだが、朱里・雛里」

「はい」

二人が返事をして軍議が行われることになった

「まず、私からですが、現在、大陸全土で賊が暴れまわっています」と朱里が言う

「それに対して、官軍は？」

愛紗が質問する

「はい、ろくに指揮は取れず、敗退するばかりです」

「要は役に立たない烏合の衆みたいなものか」

と俺が言う

政府軍がろくに動かないから諸侯が自分達で仕留めて名声を取ろうとしているわけか……だとしたら会ったときは捨て駒として使うべきだな。

「さらに、諸侯が動き出して黄巾党の討伐に出ました。まあ、上からの命令も来ているようですが」

「だとしたら、今後どうすればいい？朱里」

俺が質問する

「はい、今後はできるだけ情報を集め、動きを調べます。さらに、近くに賊が現れる場合、率先して倒していきましょう。」

「そうだな。それがいいか桃香もそれでいいか？」

「うん！それでいい！」

「じゃあ、次に雛里」

「はい、では街の経済状況を報告します。街の復興は完全に成功しました。また、ご主人様の天の国の案で街にいろいろな商家が寄るようになりました」



「そうか、街の方は順調というわけだな。」

「はい」

「それじゃあ、今後の方針は黄巾党の情報を集め、尚且つ撃破に努めることにしよう。他に質問はあるか？」

「……………」

「なければ、終了する。では解散」

そう言っただけで俺達は解散した。

「ご主人さま」

「どうした？桃香」

「これから、街に出掛けない？」

「おっいいね、さっそく行こうか」

「うん！」

そう言っただけで俺と桃香は街に出掛けることになった

「街」

「うわ、賑わってるね」

「そうだな。いろんな商家が来てるって言ってたしどんなのが来るのか見てみようぜ。桃香」

「うん！」

そう言っつて商家の方を見に行つた。

俺達は街を散策し城壁の方に来ていた

「いや〜すごかつたな」

「そうだね〜」

「そろそろ、屋敷の方に戻るか」

「うん！」

そう言っつて俺らは屋敷の方に戻つた

〜屋敷〜

屋敷に戻つてみると皆が慌てていた。副官を見かけたので何があったのか聞いてみることにした

「どうした？副官」

「あつ！光男様、大変です！」

「だから、どうした？」

「賊がここに攻めてくるとの情報が出来まして大慌てで準備していたんです！」

なんだと？俺らが城壁に行ったときは何にもなかたが戻ってくる途中で攻めてきたということか？

「して、数は？」

「ざっと見て8万かと」

「マジかよ！？」

なんでそんなにいるんだよ！？少なくとも俺らの倍はいるぞ！？あもう全部、政府が役に立たないからこうなるんだ！

「防衛体制に入れ、住民は広場に避難してもらおう。おれも準備してくる」

「はっ分りました」

そう言っつて副官と一旦別れた

（城壁の近く）

俺らは城壁の近くで会議を行うことにした

「よし、軍議を始める。朱里」

「はい、現在、黄巾党は私たちの街から4里の所を移動しています。ほぼすべてが西門から来ると思われます」

ということとは先日、政府軍が戦ってきた処じゃねえか。まったく人はいるのに烏合の衆とはあいつらのことを言うんじゃない？

と内心、官軍を馬鹿にしている光男だった

「重点的には西門を置いて、予備として北門にも兵を置いておく。それでいいか？」

「はい、そういう風にしましょう。では、他に質問はありますか？」

「……………」

「では、解散してください」

そう言ったあと俺達は各々準備に取り掛かった

（城壁）

俺は城壁に来ていた。何をするかというところ…………

「トレース・オン」

城壁の広い部分にあるものを出した

それは、第二次世界大戦では世界最大級の戦艦についていた砲塔

戦艦大和の46？砲だ（3連装ver）

城壁にいた兵士たちは

「なんだあれ？」

「光男様、強力な武器を出したんじゃないか？でも、どんなのだろ  
う」

と様々な声が聞こえてきた。

すると……

「ご主人様、これなに？」

桃香が聞いてきた

「これは、戦艦砲と言って、本来なら船に取り付ける武器なんだ」

「船？船ってあの川に流れてる所を移動できる？」

「あっそうか」

この時代じゃあまだ海には出てないんだっけ？しょうがない説明するか

「桃香、海は分るか？」

「うん、あの、でっかい水溜りでしょ？」

そうか、こっちじゃあまだ、その程度か

「ああ、これを取り付けられるのはその海で限られる船なんだ。長

距離で敵を仕留めることができる」

「へ」

「まあ、こいつは音がでかすぎるからな。長時間はできないが一発、二発ぐらいならなんとかかなると思う。それ以上やったら城壁が壊れかねん」

そう。いくらこいつが強いつていっても肝心の土台が強固じゃなきゃあいけないからなこの時代の城壁だとすぐに持たないだろう

「だから、こいつでやった後、愛紗達が出てくれ俺も一緒に出るか」

そういうと一人の兵士が……

「敵軍、来ましたー!!」

「来たか、よし、みんな城壁を降りてくれ!」

そう言っつて全員を城壁から降ろさせた

「それじゃあ、世界最大の艦砲射撃を始めますか」

そう言っつて46?砲の上にたった

ウイイイイン

「適距離、1000m、主砲発射よーい!」

ガチャン！！

「撃てー！！！！」

ドオオオオン！！！！！！

そして、勢いよく発射された砲弾は………

ドカアアアアアアアン！！！！！！！！！！！！！！！！！！

巨大な爆発を見せた

「よっしゃああ!!命中!!」

今の砲撃で大体、二万位やれただろう

後は地上戦でやるか

「よし!みんな、行くぞ!!敵を圧倒させるんだ!!」

「」

そう言って俺らは賊を迎撃することになった







官、しっかりと準備はしとけよ?」

「ええ、分かっています」

「それじゃあ、戻るとしますか。俺らが我が家に」

そう言っつて街に引き返した俺達であった

「?????side」

「人和!!!大変よ!!!」

「どうしたの?ちい姉さん」

「私たち、いつの間にか反乱分子にされたっつて情報が!」

「なんですつて!?!?どういうこと!?!?」

そんな馬鹿な、私たちが何をしたっつて言うの?

「さっき、戻ってきた人達が怪我を負っつていて聞いたたら軍に襲われ  
たっつていうの!」

「という事は私たちは賊扱いになっつてるの?」

「多分、あれじゃあないかな?」

「天和姉さん!!!」

外から天和姉さんが戻っつてきた

「どづいつことなの?」

私が聞いた

「ほら、私達の団体つて、人が多くなつちやっただじゃない? そのせいで細かい部分までは見れないじゃない、その人たちがもしかしたら村とか襲っているんじゃないの?」

「確かに、それはあり得るわね」

もしかしたらこのままどうなるかわからないわね

私達は悩むことしかできなかった

（??? side out）

俺らは、情報を集めるため、各地に隠密部隊を放った。

そして俺らは軍議を行うことになった

（会議室）

「では、これから会議を行います」

進行は朱里だ

「現在、密偵を放っていますが、未だに情報は入ってきません。分かり切っているのは黄巾党の人数は多数、筆頭は張角です」

なんとまあこれだけ密偵を放っているのに情報は未だに入っていないか……

「なあ、朱里」

「なんですか？ご主人様」

「という事は拠点と呼べるべき場所はないということか？」

「多分、そう思われます。場所を転々として居場所を掴めなくしているでしょう」

「それだと、時間がかかるかもしれない」

愛紗が独り言のように言った。

確かに時間はかかるかもしれないがこの方法しかないのだ。現代なら衛星とか使って簡単に探りだせるのにな。

まあ、無い物をねだっても仕方ないか

ここは、待つに徹しますか

「現状はこのまま維持だな。だけど、密偵は徹底的に探りをさせる。時間はかかるかもしれないがこれが唯一の方法だ。それでいいか？」

「……」  
「……」  
「……」

「よし、それじゃあいつもの仕事に戻ってくれ。朱里、何か分かかったら教えてくれよ？」

「はい、分かりました」

そう言っつて俺らも業務に戻ることにした

自分の部屋へ

俺は、報告書をまとめ上げて仕事が終わったので、銃の整備をする事にした

「まずは、バレットライフルからだな」

こいつは今のところ使用率が一番高い、おかげで、いろんな所が汚れてしまっている。俺は倉庫からバレットの部品を取り出し交換する事にした

こいつの弾丸は12.7mm弾だ。いちばん有名だとM2キヤリバーとかの弾と同じだ

「さて、交換しますか」

そう言っつて作業に入った。

しばらくして……

コンコン

「ん？はい」

「ご主人様、ちょっとよろしいですか？」

訪ねてきたのは愛紗だった

「愛紗か？良いよ入ってきて」

ガチャ

「失礼します。ご主人様、この……」

と言ってそのまま止まってしまった

「？どうしたの、愛紗？」

「いえ、何をなさっているのかと思って」

「ああ、これか俺の武器の整備だよ。いくら天の国の武器とはいえちゃんと整備しなきゃあ動かないからな。」

「因みにそれは？」

「これは、バレットライフルと言ってスナイパーライフルの一種だ。」

「ばれつと？すなはばー？」

初めて聞く言葉に困惑する愛紗

「ん〜こっちで言うと弓に近いかな。でも、弓より遠距離で速く撃つ事が出来るんだぞ。」

「へ〜そうなんですか」

「なんなら、実際に撃つ所を見せてあげようか？」

「よろしいのですか？」

「ああ、俺の国を知ってもらったいい機会だからな。今、鍛錬所とか開いてるか？」

「はい、先程、私の隊が鍛錬を行っていましたが、その後は誰も使う予定は入ってないです」

「んじゃ、決まりだな。一緒に行こう」

「はい」

そう言っつて俺と愛紗は鍛錬所に移動した

↳鍛錬所↳

「よし、じゃあ見せてあげよう」

「お願いします」

「でも、的はどうしよう？」

「それなら、あの木はいかがですか？」

愛紗はそう言っつて鍛錬所の端にあった木を指さした



「お！あれは良的になるな。じゃあ、行くぞ」

そう言っつて伏せ撃ちの状態に入った

「あ！そつだ。愛紗」

「はい？」

「音には気お付けろよ。こいつは結構でかいからな」

「分かりました」

そつ言っつて俺は構え直した

「そら！」

ドコーーン！！

「きゃ！？」

やっぱり驚いてしまつたか無理もないよな

「大丈夫か？愛紗」

「は、はい。それにしてもすごい音ですね」

「まあ、それだけの威力があるということだ。見てみな」

「え？・・・なつ！？」

愛紗は木の方を見て驚いた。木のど真ん中に大穴が開いているのだから

「どうだ？」

「すごいとしか言いようがありません。天の国の武器はすごい物です。ね。」

感心したように言った

「まあな。でも、愛紗たちの方が十分すごいと思うよ？」

「なぜですか？」

「だって、鍛錬とか行って初めてその強さまで行ったんだろ？正直、俺らより十分すごいよ。」

「そ、そうでしょうか／＼／＼」

愛紗は照れながら言った

「愛紗、この先もずっと俺のため、いや、民のためにその武を貸してくれないか？」

「もちろんです。この先もずっとご主人様と一緒に……」

そう言って互いの協力を示した

黄巾党、みーつけた！

賊の大量殲滅戦が終わった俺達はしばらく、平穏な日々を送っていた

しかし、間諜の報告から事態は一変する

ダツダツダツダ

バタン！

「すまん！遅くなった！」

俺は急に呼び出しをくらって急いで、皆のいる部屋に向かった

「いいえ、大丈夫ですよ。ご主人様。ささっ席にお座りください」

愛紗が席を引いて言ってくれた

「ありがとう、じゃあ朱里、始めてくれ」

「はい、先程、間諜さんから最も有力な情報が入りました。黄巾党の本隊が見つかったそうなんです。他の諸侯も動いており、結構な数になります。」

朱里が報告書を読みながら言った

「して、黄巾党の数は？」

愛紗が聞く

「はい、訳、30万と言われていているそうです」

「「「さ、30万!!?」「」」

おいおい、いくらなんでも集まりすぎはしないか? 30万なんて旧ドイツ帝国並みじゃねえかまあ今回は俺らだけじゃないから良いんだけど

「朱里、」

「はい、なんですか? ご主人様」

「他の諸侯は何処が出るんだ?」

「はい、まず魏の曹操さん・呉の孫策さんなどです。他には官軍が  
出動しています」

「なるほど」

官軍はどうでもいとして魏の曹操と呉の孫策か一度は見てみたい  
な

「よし! さっそく準備するぞ!」

「「「「応!!」「」」」

そう言った瞬間に兵士が入ってきた

「申し上げます! 光男様にお客様が来ています」

「客？一体誰が？……分かったとりあえず行くよ」

「はっこちらです」

そう言っつて俺達は兵士の案内で客がいる部屋に行った

く客間く

「君は！！」

「おや、久しぶりですな。神田殿」

「星！久しぶりだな〜どうしたんだ？こんなところに」

「いやなに、あれから、白珪殿からお暇を頂いてですね。いろんな所を旅をしてきたんですよ。そんな中、こちらで神田殿がここやってっていると聞いたので来たんですよ」

「そうか〜まあお茶でも飲めよ」

そう言っつて茶を出す

「ありがとうございます」

ズズ〜

「このお茶は美味しいですな。」

「ああ、俺が民に教えたのさ。この地域は茶が作れるのに最適だっ

「だから」

「ふっあなたはやはりお優しい方だ。決めた！」

そう言つて星が突然膝を突き臣下の礼を取つた

「この趙子龍を貴殿の配下に入れて下さい」

「え！？突然どうしたの！？」

「私は先程、旅をしたと申しましたね？」

「あ、ああ。それがどうしたの？」

「私はいろんな諸侯を見てきました。しかしどの諸侯も私の眼中には入らないものばかりでした。しかし、神田殿は違つた。あなたには惹かれるものがある。ゆえに入れていただきたい」

「……分かつた。なら、星。君の力を貸してくれ！」

「承知しました。この趙子龍、命ある限り……」

こうして、星が仲間に加わつた。

それから、俺達は準備を進めた。

まだ、軍の数は少ないがそれでも、一人一人が武将並みの力を持っている。だから、どんなことにもあきらめないのである。それが、俺らの軍のやり方だ

〔平原〕

俺達は黄巾党が潜んでいるという古城まで進軍していた。

この古城は昔、太守がいたらしいが途中で死んでしまい。誰も手を付けずそのまま賊の住処になってしまったらしい

「いや〜それにしても広いな〜」

「そうだね。ご主人様」

桃香が答える。

星もあの後、皆と真名を交換したらしい

「星ちゃんが仲間に加わってくれるなんて良かったね〜」

「そうだな。正直、俺もビックリしたけど、良かったよ。よし、ここら辺でいいかな?」

「うん!そうだね。じゃあ、みなさん、設営お願いしまーす!」

「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

そう言って兵士たちが設営準備を進めた。

「ん?」

俺はある事に気付いた

「どうしたの？ご主人様」

「いや、あそこに見えるのは他の諸侯かな？って思ってた」

そう言っただけを見た方向には他の軍らしき団体が設営していた

「まあいいや、それより、俺らも準備しちやおうぜ桃香」

「うん」

そう言っただけ俺達は陣営の中に入っていった



黄巾党、みつけた！（後書き）

星さんが仲間になった！！

黄巾党、殲滅だ！

俺達は陣を形成しその中で軍議を行うことにした

「じゃあ、朱里始めてくれ」

「はい、ご主人様、今、私達はこの地点に居ます。そして、古城に黄巾党がいます。そして、他の諸侯はここら辺に居ます。」

と地図で説明しながら言った

「とりあえず、それぞれ準備をしておいてくれ。俺が先陣を開く」

「そんな！危険です！ご主人様」

愛紗が反論した

「まあ待て、愛紗、主を信じないでどうする？」

星が口をはさむ

「しかし！」

「主は我々より遥かに強い、それは、お主も分かっておるっ？」

「そうだぞ。愛紗、俺はそう簡単にやられないぞ。なんせ、すべての戦闘技術を持っているからな。あんな、農民上がりの奴らにやられるような俺じゃないぞ」

しかし、油断は禁物だからな、しかし、奴らは圧倒的な力を見れば抵抗せずに終わるであろう。そんな中で反発する奴はいるのかな  
楽しみだ

神田は内心わくわくしていた

「よし、準備を開始してくれ！」

「「「「おっ！」「「「「

そうやって俺達は準備を開始した

（夜）

俺達は準備を整えた

「よし、それじゃあ、俺の力を使ってその後、愛紗たちで突撃してくれ」

「トレース・オン」

そうやって出したのは列車砲を出した

しかも、80cm砲のカノン砲だ

装填時間は遅いがそれでも十分だろう

「ご主人様、これは？」

桃香が聞いてきた

「ああ、これは列車砲と言って長距離で威力の高い弾を積んでるんだ」

「「「「へ」」」」」

みんな、感心したように言った

「とりあえず、こいつでやった後に愛紗たちが突撃してくれ」

「はい、分かりました」

愛紗が答える

「OK、それじゃあいつちよ派手に行ってみよう!」

ウイーン

ガチャン!!

「発射ああ!!!!!!!」

ドオオオン!!!!!

そこから、俺達の戦いが始まった

〈曹操side〉

私は黄巾党の居場所が掴めたので軍を進めて陣を作っていた

その時！

ドオオオン！！！！

「きゃあ！？」

い、今のは一体何！？

その時、桂花が天幕に入ってきた

「華琳様！！」

「桂花！？一体何があったの！？」

「私にも分かりませんが、義勇軍の劉備の所から砂塵が上がっています」

どういうこと？一体何があったというの？

そう思いながら私は天幕を出た

（曹操side out）

俺は列車砲で数発撃つた後、突撃をしていた

「そら！皆、行け！！」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

ブオオオオオ！！！！！！

俺はハンヴィーで一緒に行っていた。

キキ ツー！

そして、古城の前に止まった。

「よし、皆、手分けして首領を探すんだ。」

「「「「「応！」「」「」」」」」

そうやって俺達は搜索を開始した

「ん〜何処かな〜？」

「死ね！！！」

「おっと」

バキヤ！

「グワツ！！！」

ドサッ

「はったわいもない」

そうやって搜索を再開した

〜30分後〜

「どうだった？皆」

俺は古城の前に集合していた皆に聞いた

「申し訳ありません。ご主人様、どうやら逃がしてしまったようです」

愛紗が残念そうに言った

「そんなに落ち込むな、愛紗、これだけの被害なんだ。再起は不能に近いだろう」

「主の言つとおりだ。これだけの被害なら賊共は簡単には復活できないだろう」

「よし、それじゃあ戻るとするか！」

「」「」「応！」「」「」

そう言つて俺達は陣に戻った

（陣内）

俺達は陣に戻った後、そのまま休むことにした。明日ぐらいに帰るつもりだ、

しかし、思わぬ来客が来た

「劉備様！客人が見えました」

「お客さん？誰だろう？」

桃香が聞いてきた

「さあ？とりあえず通してよ」

「はっ分かりました」

そう言っつて兵士が出ていった

数分後、三人組の女子が天幕に来た

「あの〜どちら様ですか？」

桃香が聞いた

「私は曹操よ。」

へえ〜これが曹操か、という事は後ろに居るのは夏侯姉妹ってことか？

今までの流れから驚かなくなった神田

「こっちに天の身遣いと言うのはいるのかしら？」

「あゝ多分、俺の事だと思うけど、それがどうかした？」

「へ〜それじゃあ、あなたがさっきの大きな音を出したの？」



「さつき?.....ああ!列車砲の事か」

「れっしゃ.....なに?」

「俺の国の武器さ。一発で大勢の奴らを始末できる」

「それは.....今出せる物なの?」

「出せるけど.....見る?」

「ええ、ぜひともお願いするわ」

そう言つて俺達は天幕の外に出て広い所に出た

〈平原〉

「よし、ここなら良いだろう.....トレース・オン」

そう言つて列車砲を出した

「「「なっ!?!?」「」」

三人とも驚いているようだ

「どっ?」

俺は曹操に聞いた

「これは、すごいわね。どう?あなたでよければ我が軍門に来てもいいのだけど?」

「そ、曹操さん！」

思わず桃香が叫んだ

「すまないな。曹操、俺はそっちに行きつもりはない」

俺が断言するように言つと……

「なんだと〜華琳様の言う事が聞けないのか!？」

そう言つて、夏侯惇が剣を振りかざしてきた。

「よつと!!!」

ガキン!!

俺はハンドガンで受け止めた

「なつ!?!」

「まだまだ、甘いな新兵<sup>ルキ</sup>」

ドカツ!

「グハツ!!!」

ドサツ!

「それで、来てもらえない理由はあるのかしら?」

曹操が聞いてきた

「桃香の夢を叶えるためだ」

「そう、なら劉備、あなたの理想は？」

曹操が桃香に聞いた

「はい、皆が笑って暮らせる世の中を作ることです」

「はっ甘いわね」

けなすように言った

「だからこそ、面白いじゃないか。そう言った賭けをするのが……」

俺はニヤリと笑いながら言った

「あなたも物好きね。」

「まあ良く言われるよ」

「分かったわ。今は、引いてあげる。でも、あきらめたわけじゃないから」

「そうか。なら、奪ってみるよ。」

そう言った後、曹操は自分の陣地に戻った

「良かった」

桃香が安心したような声を出した

「何がだ？」

「だって、ご主人様がどっかに行っちゃうと思ったんだもん。」

「それはないさ。だって俺はここに居るのが幸せだからな」

そう言って桃香を抱きしめた

「え？ちよつちよつとご主人様！？」

「俺はどんな時でも桃香のそばから離れるつもりはないよ」

「う、うん」

そう言って俺達はキスをした

## 反董卓連合

黄巾党殲滅から、数日が過ぎてある事件が起きた

”皇帝の死”という

都である洛陽では大慌てになり、大將軍の阿進が十常時によって追放され行方不明になったのだという

その代わりに董卓という人物が代わって都の太守となり洛陽を納めているという。しかし、これに激怒した袁紹は各地に文を出し反董卓連合を作り上げた

俺達は街に戻ったのと同時に朝帝から呼び出しをくらったがなんと、桃香が平原の相となり、なんと太守になった。これは驚いたね！

そんなこんなで城を持つことになった俺達は引越して作業で忙しかったが、城に着くと同時に文が届いたという訳だ

今は軍議を行うことになっている

（城内）

俺達は城内の一角で軍議を行うことになった

進行はもちろん、朱里と雛里だ

「」では、軍議を行います」「

二人が声をそろえて言う

「まず、袁紹さんから文が届きました。大まかに読んで見た結果、連合を作ることになったそうです」

「連合？」

桃香が疑問に思うような声を上げた

「はい、簡単に言うと悪い事をした人がいるので一緒に倒しましよ  
うということですね」

「本当なの！？それは」

桃香が驚く

「待て、桃香」

俺が止める

「何？ご主人様」

「いくらなんでも、おかしくはないか？」

「どういうことですか？ご主人様」

愛紗が聞いて来る

「それができた理由だよ。阿進が十常時に追放されてその後、すぐに董卓が出てきた。そして、その数日後に袁紹から、文が大陸全土

に広がった。あまりにも不自然じゃないか？」

そう、いくらなんでも速すぎるのだ。董卓が太守になってその数日後に袁紹が文を出す。まったくタイミングが良すぎるってんだ

これは裏が欲望丸出しの事件じゃねえか気持ち悪いな

「それは、つまり」

愛紗が気づいたように言う

「ああ、袁紹が仕組んだかもしれないってことだ。その裏に袁術がいるかもな。そんなもって董卓だ」

「董卓さんがどうしたの？」

「俺の世界じゃあ董卓は悪逆非道で有名なんだ。だけど、こっちの世界でも同じとは限らないということだ」

劉備や曹操などが全員女に変化している。という事は、董卓なども反転しているのではないかということだ。だが、確信してるわけじゃない

「なるほど、ご主人様の世界では私達はおとこになっているということですね」

「ああ、そうだ。だが、確信してるわけじゃない。実際に見てみなきゃあ分からないし確かめることもできない。だから、おれは行ってみようと思いたいが皆の意見も聞きたい」

そう言って席に座った

「私もご主人様の意見に賛成だよ！どんな人であれ民の人達が苦しんでいることに変わりはないんだから」

そう言って桃香が賛成した

「私もご主人様の意見に賛成です。民が苦しんでいるのならば、それを助けるのが通り全力を尽くしましょう」

愛紗が言う

「私も、どんな猛者に会えるのか、楽しみだ。それに、主の役にも立ちたい」

星が言う

「よし、決まりだな！皆！準備してくれ！」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

そう言って俺達は準備を開始した



やっぱり袁家は馬鹿だね〜

戦の準備を終えた俺達は連合が集結しているという場所に移動していた

「ふわ〜暇だね〜」

俺は馬に乗りながら言った

「仕方ないよ〜着くまで我慢しようよ。あっ！そうだ、ご主人様、ご主人様の国の話をしてよ」

桃香が言った

「まあ、少しは暇つぶしになるか。俺の国にはな、結構発展してたんだぞ」

「どんな風に？」

「いろんな所さ、こういう風に戦はなかったし平和そのものだ。」

「へえ〜すごいね〜」

「それだけじゃない。電化製品もあつたし娯楽も充実してた」

「でんかせいひん？」

「電化製品って言うのは電気を使って動かす物なんだが、この時代じゃあ電気もないよな〜」

「ふうん、良く分からないけど、すごい物だつてことは分かったよ！」

「そうかそうか、おっ！話しているうちに着いたみたいだな」

俺がそう促すと桃香も前を見た

前方にはいろんな軍の旗がひしめいていた

そして、それぞれの所で兵士があちらこちらで動いていた

そんな中、一人の兵士がこっちに近づいて聞いて来た

「長旅、ご苦労様です！所属と兵数を教えて下さい！」

「平原の相、劉備です。兵数は8000です」

持っていた。バインダー（向こうの言い方は分からないので）に書き込んでいった。そして

「分かりました。では、場所に案内するので付いて来て下さい！」

そう言われたので、兵士について行き広い場所に案内された

「ここが、あなた方の陣地です！では！」

敬礼して去って行った

「よし！皆！陣地を構築してくれ！」

俺が指示を出す

「桃香、軍議の場所に行くぞ」

「うん！」

〈軍議の場所に行く途中〉

「桃香」

「なに？」

「お前が大将だからな。俺は副官として行く」

「どうして？」

「俺は、天の身遣いとしての名目があるが、桃香は平原の相の肩書しかない。だから、お前が大将だ」

「分かった！」

元気良く返事をしてくれた

「よし、いい返事だ。おっここか」

そう言って一番でかい天幕に着いた

その時

「おーっほっほっほっほー!!!」

「「!?!」」

突然の声に驚いたがそのまま天幕に入った

「・・・・・・・・ドリル」

俺は思わず椅子に座っている女性の髪形を見て呟いた

「どりる?」

桃香が聞いて来た

「いや、なんでもない」

その時声を掛けられた

「神田」

「ん?公孫賛」

隣に座っていたのは公孫賛だった

「もう、連合の大將とか決まってるだろう?誰なんだ?」

俺が聞いた

「・・・・・・・・決まってるんだ」

「は？」

俺は思わず聞き返してしまった

「だから、決まってるんだ。やりたいのがあるが自分から出ようとしないんだ、他の諸侯も誰もやりたがらないですつとこのままなんだ」

「誰だよそいつは」

「あそこに座ってる袁紹だ。」

見えないように指さす方向には金髪のドリル頭がいた。それにしても、ポリウムがすごいな。曹操よりもありすぎだろ

おれは心の中で思った。

それにしても、早く決まらないかな。暇すぎる。これなら、陣地で射撃訓練でもしとけばよかったな

その後、公孫贇の進言で自己紹介する事になった

「さて、皆さんがそろった所でそれぞれの自己紹介をしてもらいましょう。まずは、そのくるくるおちびさんから」

曹操の方を見て言った

「はいはい、おばさんは黙っててね。私は、曹操よ。よろしくね」

そう言って座り、どんどん他の諸侯も言った

そして、

「袁術の客将の孫策よ。よろしくね」

隣に座っていた孫策が自己紹介して座った。次は俺達の番だ

「平原の相劉備です。」

そう言って座った

「劉備さん、」

袁紹が声を掛けてきた

「はい？」

「誰ですか？そのブ男は」

そう言って俺の方を指さした

このやろく殺されてえのかくこのクソ女は

俺は殺人衝動に駆られたがなんとか抑えて自己紹介した

「申し遅れました。私は神田光男です。巷で噂されている、天の身遣いとは私の事です」

そう言った瞬間に回りがざわめいた

「はん！天の身遣いだらうと関係ないですわ！三公をだした我が袁家に比べれば！オーっほっほっほっほ！」

と言った

「それは、すごいですね。じゃあ、あなたが大将でよろしいですね。

」

そう言った瞬間に他の諸侯も賛成し、あっという間に終わった

陣地に帰る途中

「いやー終わった終わった」

「ご主人様、すごいね」

「そうでもないさ。あーゆーのは学校で習うからな」

大学時代では誘導尋問も習っている神田である。こんなのはお茶の子さいさいである

その時

「そのあなた達」

声を掛けられた

「「え？」」

振り向くとそこには褐色美女が二人立っていた

「もしかして、孫策殿と周瑜どのですか？」

俺が聞いた

「良く分かったわね！そうよ」

「それで、お二人はどのような用件で？」

桃香が聞いた

「さっきの誘導は見事だった。よくあいゆうのができたな」

「そんなことないですよ。日常茶飯事ですから」

「所で、神田？」

孫策が聞いて来た

「なんですか？」

「その敬語口調、やめたら？」

あれま、ばればれでしたか

「……………分かったよ。これでいいか？」

「よろしい」

とにこやかに行った



「それで、江東の麒麟児が何用なんだい？」

「あたしってそんな風に呼ばれてるの？」

「まあ回りが言ってたからな。で？」

「実は、あなた達と同盟を組みたいのよ」

なんとまあこんな弱小勢力と同盟とは物好きもいたものだ

「いいですよ」

「桃香！？」

なんと！即返とは大胆な事を

「そんなに簡単に言っちゃっていいの？」

孫策が聞いて来た

「はい！私達のような弱小と勢力を組んだ方が後が楽でしょう？」

桃香が言った

「んまあ桃香が良いって言うなら俺は何も言わない」

そう言った

「じゃあ、決まりね！これからは私の事、雪蓮って呼んで」

「私も冥琳と呼んでもらいたい」

と真名を言った

「じゃあ、私の事も桃香って呼んでください」

桃香が言った

「よろしくね。桃香」

「こちらこそ、よろしくお願ひします。雪蓮さん」

ここに、蜀兵同盟が決まった！

## 真骨頂

俺達は軍議を終えた後、しばらく次の命令が来るまで暇になっていた。なので、俺は陣から離れ、少し、広い所で射撃訓練をすることにした

く平原く

「さて、何を出すかな」

そろそろ、新しい物にでも挑戦するか。

よし、決めた

「トレース・オン」

そうやって出したのは様々な種類の銃器である。ピストルからロケランまで種類は豊富だ！

まずは……

くピストル編く

M92F

アメリカ軍や民間で幅広く使われている銃で安定性がありとても使いやすい銃だ

ダン！ダン！ダン！

俺は遠くに設置した的に向かって撃った

「やっぱりこいつは使いやすいな。次はっと」

コルトパイソン

軍はもちろん、世界中の警察が使用しており民間でも使われる銃だ。特に警察が一番多く、オート化するなかで未だに根強い人気がある

ドオン！ドオン！

「ん〜手に来るね〜でも、今の時代じゃあ弾が少ないからあんまり使わないかな〜」

コルトガバメントM1911A1

銃の中で最も古く現代だと100年以上を行く銃で多くの戦争で活躍してきた名銃である

パン！パン！

「やっぱり100年以上じゃないってのは伊達じゃあないな〜」

よし、次はライフルに行ってみよう

スナイパーライフルも  
ライフル編

M4A1

アメリカ軍の代名詞ともいえる銃でいろんなバリエーションがある。もちろん、SOCCOMなどの特殊部隊でも使われるほどだ

タタン！タタン！

「これも、使いやすいな。選ぶときは場所を考えるか」

M14ライフル

アメリカ軍の中でももっとも古いライフル銃で別名木製のライフル銃とも言われる

パン！パン！

「こいつはどちらかと言うとスナイパー系で行った方がいいかもしれんな」

M70

アメリカで開発されたボルトアクションのスナイパーライフルだ

パン！ガチャ！パン！ガチャ！

「こいつも場所を考えてやった方がいいな」

と射撃訓練をしていると

「主！」

星が声を掛けてきた

「ん？星かどうした？」

「これから、軍議を行いますので来て下され！」

「よし、分かった！」

そう言つて星の後を付いて行つた

〈天幕〉

天幕に着いた。どうやらみんな揃つてるようだ

「すまん。遅くなつて」

「大丈夫ですよ。では、朱里始めてくれ」

愛紗が言つた

「はい、先程、袁紹さんから文を貰いまして私達が先陣をすることになりました」

「……なんだつて!？」

俺以外が皆驚いて言つた

「ご主人様は驚かないんですか？」

「なんで？理由なんかあるじゃんか。俺達は連合の中じゃあ一番、弱小勢力だ。だったら考えることは一つ、捨て駒にすることだ。後

は、俺が気に入らないんじゃないか？天の身遣いとして胡散臭いってことだ」

俺が言うと皆、納得したように落ち着いた

「そう言えば、朱里」

「はい、なんですか？」

「俺達は先陣なのは良く分かった。それでおおまかな作戦は？」

「……………」

朱里が黙ってしまった

「しゅ、朱里？」

「あの……………その……………これを認めてしまったら、私は軍師をやめかねます」

「そんなに酷いの？」

「……………はい」

「とりあえず、言ってみてよ」

桃香が言った

「え〜と」雄々しく華麗に進軍せよ」との事です」

「「「「はい?」「」「」」

その場に居る全員が聞き返してしまった

「袁家はやっぱり馬鹿なんだな。あんなのを総大将にしちゃった俺  
つてけっこう重罪だよな?」

「そ、そんなことないよ」

桃香が言った

「今からでも遅くはない。消して他の奴を……」

光男は乱心していた

「やめて!それにどこからだしたの!?その包丁!

手にはいつの間にか出された包丁が握りしめていた

「ふっほんの冗談だ」

ニヤリと笑いながら言った。その瞬間その場にいた全員が固まった

俺は気を取り直して朱里に聞いた

「朱里、相手の兵数、武将などは分かるか?」

「残念ながら分かりません。斥候を送って入るんですがどの人も洛  
陽から戻って来ないんです。」



と残念そうに言う朱里

「そうか、そんなに警備が固いのか？じゃあ、そのの？水関と虎牢関の武將は分かるか？」

「はい、？水関には張遼、華雄の二人です。虎牢関には呂布だけです。」

「張遼と呂布だな気お付けるのは」

「なぜですか？ご主人様」

愛紗が聞いて来た

「俺の世界じゃあ張遼と呂布は超が付くほどの有名なんだ。神速の張遼、人中の呂布がな」

それほどの有名なんだ、性が代わってもそこは絶対に変わらないだろう。

「ご主人様、私達の力があれば！」

愛紗がそう言った

「愛紗、兵法の基本は敵を知るよりもまず己を知れだろ？」

「うっ……はい」

愛紗は落ち込んだ

「そんなに落ち込むな。で、戦闘方法だがまずは挑発を掛ける」

「挑発？」

桃香が分からないと言った表情をした

「あつちには華雄がいるんだろ？だったら話が早い。挑発を掛けて関から出るように仕向ける。その担当は愛紗にやってもらいたい」

「はっはい！」

突然言われて席を立った

「朱里、他に必要な事はあるか？」

「はい、作戦はご主人様がさっき言った通りにして下さい。それからご主人様の力も必要です」

「それはなんで？」

桃香が聞いた

「はい、私達の印象を抑えるには武勲を得るか。強烈な印象を残すことしかありません。そこで、ご主人様の力が必要になってくるわけです」

朱里が説明した

「じゃあ、他に質問はあるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「解散！」

そして、俺達は準備を開始した

（数時間後）

俺は、陣地の中で高い所からスナイパーライフルで関の方を見ていた。

因みに使っているのはバレットM83A2だ

こいつは、俺がまだ向こうの世界にいたころアメリカ軍が開発した対戦車ライフルである。M82A1をベースに様々な所が改良され、機能・射程・弾数が大幅に上がっている。セミオートにもできるが基本はボルトアクションだ。

弾は12.7mmより遥かに大きい13.5ミリ×99ミリ弾を使用する

マガジンは大型の箱型マガジンだ

「そろそろ、愛紗が挑発を掛ける頃か」

しばらくして愛紗が華雄に挑発を掛けた

そして・・・

ギギギギイイイ

関の扉が開き中から大勢の兵士が出てきた

俺は初弾を装填しこう言った

「お祈りは済ませたかい？」

ドコーーン！

先頭にいた兵士をふっ飛ばしその後ろに居た奴も馬ごと巻き込んでそのままドミノ倒しになって行った。

華雄は何が起きたか全く分からず困惑していた。その時、愛紗が出てきて華雄に一騎打ちを申し込んだようだ。

しばらくは打ち合いをしていたが、華雄は疲れ始めていた。当然だろう。長時間、斧を振り回していれば、でも、愛紗もすごいなく、月刀を振り回して疲れを感じさせない

さすがは軍神と言ったところか？

そうしているうちに愛紗が決めて幕を下ろした

そして、俺達の軍が最初に入り、回りをあつと驚かせることに成功したのだ

俺はハンヴィーで愛紗を迎えることにした

ブオオオオオ

「愛紗　　！！」

「ご主人様！？」

キーっ！！

ガチャ！

「お疲れさん、ほれ、手ぬぐい」

そう言つてタオルを渡した

「ありがとうございます。ご主人様」

「ん？なに？」

「最初の攻撃はご主人様がやったのですか？」

「うん、あれはすごかったでしょう？」

「はい、まさかあんな風になるなんて」

「まあ何はともあれ無事でよかったよ愛紗、」

「ご主人様く／＼／」

そこには桃色の世界が広がっていた

「愛紗、疲れたらどう？車に乗って行かないか？」

「車って言うとアレの事ですか？」

そう言ってハンヴィーの方を指さした

「ああ、」

「ぜひ、お願いします」

そう言ってハンヴィーに乗り込むのだが、愛紗は初めて乗ったので  
いろいろ困惑しながらも車の性能にビックリしていた

こうして、俺達の戦いは勝利した

真骨頂（後書き）

オリジナル銃を作っちゃいました！

k o r o u k a n n ! !

俺達は？水関を突破して、次に待ち構える虎牢関に向かっていた。俺達の軍は後方に下げられ連合に付いていく形となっている

「ふわ〜暇だな〜」

俺は欠伸を欠きながら言った

「ご主人様！他の兵に示しが付きません！」

愛紗が言ってきた

「だって、暇なのは確かじゃん？それに、愛紗だって同じだろ？」

「そ、それはそうですが、しかし！それでもです！」

「はいはい、分かりましたよ。欠伸は欠きません。その代わりに、前の方を見て来ていいか？」

「分かりました。くれぐれもお気をつけて」

「ほいよ」

そう言っつて俺は前に行った

前には雛里がいて状況を報告してくれた

「よー！雛里」



「はい？あつご主人様」

トテトテと近づいて来る雛里、その動作が可愛い

「どうされたんですか？」

「うん、ちょっと前方の方が気になってね。見に来たんだ。先鋒はどこの軍なの？」

俺は雛里に聞いてみた

「はい、先鋒は袁紹さんと曹操さんの軍です」

「なるほど」

袁紹はどうでもいいとして、曹操は規律ある軍だからなぐちやんとした動きをするだろう

「なあ雛里」

「はい、なんですか？」

「袁紹の軍はどう思う？」

「.....」

雛里は黙ってしまった

「ひ、雛里？」

「……あの人は軍人とは呼びません。ただの役に立たない集団です。」

と雛里らしからぬ事を言った

「あはは〜手厳しいな〜雛里は、まあでもその通りだよ。あいつらは軍人にも置けないただのクソ虫だ。特に袁紹自身は」

そう。軍人ならばしつかりとした大義を持つ事が大切である。これはいつの時代でもそうだ。しかし、袁紹はただの高飛車のお嬢様だけ自分の家から大物が出たとしても本人が何もしなけりゃあ腐って行くだけだあれば、典型的な馬鹿である

と考えているうちに戦闘が始まったようだ

すると……

「おーっほっほっほっほー！皆さん！華麗に進撃なさい！」

袁紹の声が聞こえた。正直言ってウザい

「魏の将兵よ。今こそ力を見せるときぞ！存分に力を振いなさい！」

「……………」

「」

兵士がその呼びかけに答えたように突撃して行った

俺はM83A2で状況を見ていた

その時

ギギギイイイ

虎牢関の扉が開いた

「！離里！全軍に通達！我々は突撃しそれぞれの武将を抑えろ！  
兵士は本隊を守ってくれ！張遼は俺が！呂布は愛紗、鈴々、星に向  
かわせる！」

「は、はひ！分かりました！」

俺はそう言つとハンヴィーを出し乗った

ブオオオオ！！！

「よっしゃあ！！パーティーの始まりだぜ！！」

そう言つて思いっきりアクセルを踏んだ

〈虎牢関前の平原〉

おれはハンヴィーで張遼がいる虎牢関の西側に來ていた

「どこっかな？おっ！」

俺はある部隊の前で止まった

〈張遼side〉

うちらは呂布ちんの部隊と共に虎牢関を出て敵を迎撃していたが、だんだん押されるようになりうちらと呂布ちんは離ればなれになってもーた

そんな時一人の兵士が聞いて来た

「張遼様」

「ん？なんや」

「洛陽の方は大丈夫ですかね？」

「大丈夫大丈夫、まだ、虎牢関が落とされてないんやから、それに今から行っても遅いわ。それやったら、一人でも多くの連合の兵士を道ずれにしようや」

「そうですね。それが董卓様のためになるなら」

兵士達もまだ頑張れるようやな

その時やった

ブオオオオ

「なんや、あれ！？」

うちはいろんなとこの珍しいもん見とるけどあんな鉄の塊が高速で走ってるとこなんか行った事ないで！？

それはうちの前で止まった

そして、一人の男が降りてきた

（張遼 side out）

ふう〜やっと思つけたぜ。俺はハンヴィーを降りて張遼らしき部隊と対面していた

「あんたが張遼だな？」

「そやったら、どないすんねん？」

「決まってる！戦いたいのださ！」

俺はそう断言した。

「……つぶあつはっはっはっは！！」

「あれ？なんかおかしい事言った？」

「あつたり前やん！でも、そういつとこ好きやでつちは、お前ら、この戦いには手えだすなや？」

「し、しかし」

「いいから！ええな？」

「……分かりました」

「おっ！張遼さん中々仲間思いな所がありますね〜じゃあ、一つだけ良いですか？」

俺はお願いを言うことにした

「なんや？」

「この勝負、勝ったら俺達の仲間になってくれませんか？」

「こいつらはどうなるんや？」

「もちろん！後ろの方達も含めてですよ。」

「分かったであんたが勝ったら仲間になってやるっやないの」

そう言っつて自分の得物を出した

俺もいつもの銃に持ち替えてバレットアーツモードにしてある

「でりゃあー！！」

ダッ

「およー！！」

ガキーン！

張遼が振った偃月刀と銃で受け止めた

「やるやないの！そんなちっぽけな物で受け止めるなんてな！」

そう言いながらも力をどんどん入れる張遼

「そう言いながらも力、入れてるじゃないですか、因みにこれはどんなに力が加わろうと決して壊れることはありませんよ」

俺は余裕たっぷりと言った

「ずいぶん余裕やないの。ならこれならどうや!」

そう言っつて一旦離れ、再度、振りが連続で来た

ガキン!ガキン!ガキン!

「よっよっよっ!」

俺は全部避けた

「それじゃあ、今度は我の番だぞ!」

そう言っつて打撃を連続で出した

「そら!そら!そら!そら!」

ガキン!ガキン!ガキン!ガキン!

「くっ!」

「これで!終わりだ!」

渾身のパンチを込めた

「どりゃあ!!」

ガキン!!パキヤ!!

偃月刀が折れてしまった

「そ、そんなうちの偃月刀が折れるなんて……」

「これで、終わりだな」

「うちの負けや約束通り仲間になつたる」

「やった〜!で、どうしてそんなに落ち込んでるのさ?」

「そりゃあ、うちの得物が壊れてしもつたからな。落ち込んでいらねへんで」

ああ、なるほどな〜

「だったら、直すよ」

「へっ?」

「だから、直すつて、あ!それとも、新しいのがいい?」

「できれば、直してほしいんやけど、新しいのって?なんや?」



「じゃあ、今出すよ。トレース・オン」

ピカー！

「な、なんや！？」

突然の事で驚く張遼

そして、光が収まると・・・そこには偃月刀があった

「ほら」

「そ、それどつから出したん！？」

「ああ、これは俺の特殊能力なんだ。これで、いろんなものが出せるよ。因みに今使ってるのより遥かに強度が上がってるから」

「ほんまに！？」

「ほんま」

「ありがとうそや！うちの真名受け取ってや！」

「いいのか？」

「ええつてええつてうちはそれ以外何もないからな」うちの真名は霞や。よろしゅうな」

「分かった。じゃあ俺の事も光男って呼んでいいから」

「分かったで！光男」

こうして、新たな仲間ができた！

## 飛將軍

俺は霞を俺達の本陣に連れてから（もちろん、ハンヴィーで）愛紗達の所に向かっていた。相手はあの飛將軍・呂布だ。

正史では劉備・関羽・張飛の三人がかりでも倒せなかったという一節がある。もちろん、正史がすべてとは言わないが、あの強さは変わらないと思う。

だからこそ、俺と言つイレギュラーがいるんだ。覆してみせる！

（愛紗 side）

私達は呂布と対峙していた。しかし、私・星・鈴々の三人がかりでも倒せないとはどういうことだ！？

「愛紗」

星が声を掛けてきた

「……なんだ？星」

「このままじゃあ埒が明かない。一気に叩きこむぞ」

星は意を決したように言った

「そつだな。これで決めよう！」

呂布は依然としてこちらを見ていた

「……………来ないの？」

「これからのだ！うりゃりゃああ！！」

鈴々が突っ込んでいった

ガキン！ガキン！

「……………弱い」

「うにゃあ！？」

「鈴々！！」

鈴々が弾き飛ばされた

「……………終わり」

呂布が自分の得物を振り上げた

それが降ろされようとした瞬間

パァー！！パァー！！

何かの音がした

そして、それが止まり一人の男が降りた

「よう、間に合ったようだな」

私は見た瞬間、希望が湧いた

（愛紗 side out）

ふう〜何とか間に合ったぜ。

「よう、間に合ったようだな。愛紗、鈴々、星」

「ご主人様！」「主！」「お兄ちゃん！」

三者三様の答えが出てきた

「お前らは休んでろ。後は俺が引き継ぐ」

俺がそう言った

「そんな！危険です！ご主人様！」

愛紗が言った

「心配するな。俺は異世界の者だぜ？地獄なんかいくらでも見てきた」

そう言って呂布の方を見た

「………強い？」

「どつだろつな〜？なんせ三國一の武將、呂布が相手だからな〜」

「……………来い」

「おう！言われなくてもな！」

そう言っつて俺は呂布に突っ込んだ

ガキン！ガキン！ガキン！ガキン！

交互の武器が混ざり合った

「……………強い」

「おっ？ほんとか！？愛紗く聞いたか？呂布に強いつて認められたぞ〜！」

俺は愛紗に手を振りながら言った

「ご主人様！それよりも前を見て下さい！」

ガキン！ガキン！

「よつと！」

その時だった

「恋殿〜！！！」

「「??？」」

俺と呂布は二人して首をかしげた

「恋殿！関が落とされてしまいましたぞ〜ここは引くしかありませんぞ〜！」

そう言つて小さな女の子が間に入ってきた

「ねね？落とされたの？」

「そうですぞ！急いでここを離脱するしかないですぞ！」

あれま、いつの間にか関はどこかの軍に落とされたようだな。だったら、これ以上戦う理由がないな

「・・・でも、今戦つてる」

「そんな事をしてる場合じゃあ、その凡人！今すぐ戦いをやめるですよ！」

小さな女の子が言ってきた

「そりゃあそうだ。戦う理由がないからな。行けよ」

「「え？」」

二人していった

「だから、行けよ。ここに残つてもどこかの軍に捕縛されちまうぞ。あっちの方ならどこも展開はしていないから脱出できるだろう。」

俺は逃げ道を言った

「そ、そんな！見え透いた罠に従うですか！？そこまでできてないですよ！」

少女が言った

「おいおい、俺は確かに連合の人間だが、そんな嵌めるような人間じゃあない。信じてくれ」

「……………ねね。出る」

「出るってまさか、こいつの言った逃げ道にですか！？」

「コクン」

呂布は頷いた

「……………この人、いい人。だから信じられる」

「ありがとう。呂布。さあ、早く行くといい。じゃないと他の軍が来ちまうぞ」

俺はそう言って逃げるように言った

そして、二人は俺が言った逃げ道を行った

「ご主人様！」

「なんだ？愛紗」



「どうして、あの二人を逃がしたのですか!？」

愛紗が言ってきた

「どうしても何も、戦う理由がないじゃないか。関は落とされ、残った武将は自分達だけ、だったら逃げ出した方がいいだろう。それの方が後がいい」

それを言った瞬間に愛紗は黙ってしまった

「分かりました。しかし、簡単に逃がしてよかったですか？」

「ああ、また、対峙するかも知れんが、俺はもっと闘ってみたいからな」

ニヤリと笑いながら言った

「主も物好きですな」

星が言った

「本当は星も思ってるんだろう?」

「はて?何のことやら」

星はしらばっくれた

「まあいいや。よし、皆の所に戻るか!」

「」「」  
「」  
「」

そうやって俺達は陣に戻った

月さん可愛い〜

俺達は虎牢関を突破してとうとう、都の洛陽の目の前まで来た。しかし……

〜連合軍陣営〜

「う〜ん」

俺はスコープで都を見ながらうねった

「どうしたの？ご主人様」

桃香が聞いて来た

「いや、洛陽の方を見てるんだが城壁に兵士がいない。」

「???どういうこと?」

「普通なら城壁の門を閉めて籠城戦をするはずなんだが、人の気配が全くない」

そう。敵が本陣に来たのなら城に籠って籠城戦をするはず。なのに洛陽には人の気配が全くないという事なんだ?

「桃香、霞を呼んで来てくれないか?」

俺がそう言った

「霞さんを？分かった」

そう言つて走り去つた

（数分後）

「光男、呼んだ？」

霞が来た

「なあ、霞、一つ聞いていいか？」

「なんや？」

「お前達は外に流れる噂は知ってるか？」

「知つとるで、董卓が悪逆の限りを尽くしてらつて噂やる？」

霞は真面目な顔で言つた

「ああ、そつだ。」

「それは全くのウソや。月がそんなことするわけがないやんか」

「それは、董卓の真名か？」

「そつや。んで話は戻るけど、噂を流したのは張讓（ちやうじやう）つて言う奴や。あいつは月の父親と母親を人質にとつてこの戦争を起こしたんや」

霞は淡々と言つた。そして・・・

「お願いや!!月を……月や詠をこんな形で死なせたくな  
いんや!!」

霞は涙を流しながら言った

「分かってるさ。霞、良く言ってくれたなありがとう」

頭を撫でながら言った

「光男……ありがとう!!」

抱きつきながら言った

そして、俺は皆を集めて話をした。

霞は頭を下げながらお願いをしていた

「ほんまにお願いや!!」

「頭を上げて下さい。霞さん」

桃香が言った

「そつだぞ。霞、事実が分かった以上目的も変わった」

愛紗が言った

「そつなのだ!董卓と賈馱を助けるのだ!」

鈴々が言った

「それに、我々はもう仲間ではないか。霞」

星が言った

「そうですね。霞さん、仲間が助けを求めるならしっかりと答える。それが私たちなんですよ」

朱里が言って雛里も頷いた

「みんな……ほんまにありがとう!!」

霞は改めて礼を言った

「さて、それじゃあ、作戦だが全員を連れて行く訳にはいかない。まず、人員だが俺、桃香、霞、愛紗の四人で行こうと思っている」

「ご主人様、それはどういうこと?」

桃香が聞いて来た

「全員で行ったら連合の誰かに見つかって反劉備連合なんて物ができちまう可能性があるからな。だから、残りはここで、待機して普通に振舞ってくれ」

二人は頷いた

「でも、ご主人様なら一人で勝てそうな気がする」

桃香が言つと皆が頷いた

「おいおい、俺がいくらなんでも強いからって数には勝てないぞ？俺だって人間なんだからな。まあ、その気になりゃあできるかもしれないがな」

笑いながら言つた

皆は青ざめた顔をした

だが……

「よし、作戦決行だ！」

俺が一声かけりゃあ

「oooooooooooo!!!」

そう言つて俺達は行動を開始した

（連合陣地の外）

俺達四人は連合軍の陣地の外に居た

因みに正面からは行かない。なぜなら、袁紹と袁術が一番乗りを掛けて競っているからだ……くだらない

そんな中霞が質問してきた

「なあ、光男」

「ん？どうした霞」

「行くのは良いんやけどどうやって行くんや？歩きだと見つかるで霞が最もなことを言った。大丈夫だよ、そのためにわざわざ、見つからない方策があるんだから」

「大丈夫だってそのために俺がいるんだから」

笑って言った

「トレース・オン」

そう言っている物を創造したテクニカル車だ

こいつは民兵やゲリラが最も使う車で安上がりかつすぐに使用できるメリットがある

「ご主人様、これは？」

愛紗が聞いて来た

「これはテクニカルと言って現代でもっとも使われる車なんだ。これで、近くの城壁まで行く。皆は荷台に乗ってくれ」

そう言って皆は荷台に乗った。俺は運転席に乗った

「じゃあ、行くぞ」



ブオオオオ

（数十分後）

キーッ

「よし、皆着いたぞ」

そう言っつて俺達は西側の城壁に着いた

「ご主人様、どうやって上がるの？」

桃香が聞いて来た

「じゃあ、ちよつと車から離れてろ」

そう言っつて三人を離れさせた

そして、テクニカルを城壁の横につけて

「車をどおすんねん？」

霞が聞いて来た

「まあ、見てなっつて」

そう言っつて手元のスイッチを押した

ポチッ

ウイーン

テクニカルの荷台が上がり簡易式のエレベーターができた

「「「おおー！」「」」

三人は驚いた

「よし、良好だな。皆、のってくれ」

そう言っつて俺達は荷台に乗り城壁を昇った

「城下町」

俺達は城下町にいた

だが……

「誰もいないな」

俺が言った

「そうですね。それに街がきれいすぎます。」

愛紗が言った

「言った通りや。住民は強制退去されたんや。でも、少しはのこっ  
とるらしいで」

霞が言った。

その時！

ヒビーン

遠くで馬の鳴き声が聞こえ、馬車の音が聞こえた

「こつちだ！」

そう言つて俺達は聞こえた方に行つた

く広場く

広場に着くと兵士が馬車を守るように囲んでいた。俺達は物陰から様子見している

「敵か？」

愛紗が言つた

「ありゃあ、張議のよこの兵士や。と言う事は前者か後者って事になるな」

霞が言つた

「多分、前者はあり得ないだろう。すでに逃げているだろうし、俺は後者に賭ける。とにかく、俺が奴らを引くからお前達で馬車を確保してくれ」

三人が頷いた

そして、俺は三人から離れ人気のない裏路地に入った

「さうで、どっつすかな」

俺はいろんな方策を考えた

暗殺式で行くか・派手に一発行くか

どちらかだろうけど、派手に行ったら連合の奴らに気づかれちまう。  
だったら……

そう思って創造した

「トレース・オン」

出したのはVSSサイレンサー狙撃銃という銃だ。

こいつは消音が付いていて派手な音が出ない。隠密向きだ

建物の陰に身を潜め一人の兵士に照準を合わせた

「ジ・エンド」

パシユ

「ゲハ!？」

そう言っつて兵士が一人倒れた

「おい、どうし・・・」

パシユ！ドサツ

異変に気が付いた兵士も倒されその他も倒されて行き、馬車の周りには誰もいなくなった

そして、桃香達が馬車に近づき

ガチャ

扉を開けた

「あ、あんたたち誰!？」

馬車の中にいた緑色の髪の子が言った

「あ 待て待て、詠、こいつらは味方や」

霞が言った

「霞！無事だったのね!!」

「まあ、無事うちゆうてもこっちの軍に下ったしな」

「霞さん、御無事で何よりです」

「月っちも無事でよかったわ」

「それで、そちらの方は？」

董卓が言った

「初めまして、董卓さん。私は劉備と言います」

桃香が挨拶した

「りゅ、劉備って連合のやつらじゃない!!霞!どうして!?!」

もう一人が言った

「だから、言ったやろ?負けて軍に下ったんや」

「それはそうだろうけど、でも、どうやって入ったの?正面はどっかの軍が争ってなかったっけ?」

「それは、俺が説明するよ」

「.....あんたは?」

警戒心Maxで言われてもな〜まあいいや

「俺は、神田光男、劉備軍に所属している者だ。それで、さっきの説明なんだが、俺達は西側の城壁を昇って来た」

「嘘よ!!どうやって城壁を昇ったって言うの!?!」

と賈馱が言った

「それは、簡単。俺の力を使ったからさ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・証拠を見せてみなさいよ」

「分かった。簡単なものでいいか？」

「ええ」

俺は創造しある物を出した

「トレース・オン」

出したのは手鞠を出した。

それを董卓に渡した。となりで賈馱が騒いでいるが気にしない

「・・・・・・・・これは？」

「手鞠と言って、俺の国に伝わる遊び道具の一種なんだ。」

そして、もう一個だして実演した

ポーンポーンポーン

「こうやって遊ぶ物なんだ。やってみな」

頬笑みながら言った

ポーンポーンポーン

「こうですか？」

「そうそうそう！うまいうまい」

「クスッ」

董卓が笑った

「やっと、笑顔を見せてくれたね。やっぱり女の子は笑顔でいなくっちゃな」

俺も笑顔で言うと周りも笑顔になった

「どうだろう？俺と一緒に来てくれないかな？」

「でも……私のせいで……たくさんの人が死にました。」  
「うーむまだ、迷ってるようだな」

「それは関係ない」

「え？」

「戦争つてのは個人で起こせるもんじゃない。人と人の主義の違  
いから始まるもんなんだ。だから、君一人が背負うことはない。も  
し、それでも駄目な時は俺も一緒に背負ってやる！」

俺はそう言った

「……………」



董卓は黙ったまんまだ

「どうだろう？一緒に来てくれるね？」

俺はもう一度聞いた。すると……

「……………はい！」

董卓は笑顔で言った。賈馱もなんだかんだで了承した

「でも、ご主人様、保護するのは良いとして、どうする？」

桃香が聞いた

「あー名前の事か。でも、顔は割れてないんだったよな？愛紗」

俺が聞いた

「はい、二人は名前は通っていますが、顔は連合でも私たちぐらいです」

愛紗が答えた

「よし、二人は死んだってことにして、俺達の所で保護しよう。もし、聞かれても二人は侍女って事にしておけば良いだろう」

「そうだね。二人もそれでいいかな？」

桃香が聞いた

「はい、それでいいです」

「仕方ないわね」

「でも、呼び名はどうするっ..」

俺が疑問に思った事を言う

「それなら、真名を受け取ってください」

董卓が言った

「そうね。それなら隠し通せるからね」

賈馱も賛成した

「じゃあ、二人とも教えてくれるかな？」

「はい、私の真名は月です」

「僕は詠よ」

「月に詠か。良い真名だな。二人ともよろしく！」

そう言っつて俺は交互に握手した

こうしてなんとか保護できたのである

## 復興作業

俺達は月と詠を保護した後、なんとか陣に戻った。その後、袁紹の軍が洛陽に一番乗りし俺達もその後が続いた。

袁家馬鹿二人は全軍を使って董卓の搜索に当てたみたいだ。残りの軍は、炊き出しや復興作業を行うことになった

そして、俺達の軍は炊き出しを行った

「はい、順番に並んでくださーい。まだまだ、ありますから慌てなくていいですよー」

俺は、列が乱れないように指示を出していた。女性陣は炊き出し物をどンドンお椀に盛る作業をしていた。

「はい、おじいちゃん、熱いからゆっくり食べてね」

桃香が渡す

「ありがとうございます。」

おじいさんは素直にそれを受け取った

数十分後、炊き出し物はすべてなくなってしまい、そのまま家の修理などを行うことにした。家のほとんどは、焼かれてしまっていた。

情報によると黄巾党の残党がいたらしく洛陽が混乱してる時を狙って襲ったみたいだ。許せないな

まあ、それは後にするとして今は復興作業に集中しよう

まずは、状況確認だ。家のほとんどは焼かれて骨組みしか残っていない一旦壊して新しく建ててるようだ。だが、壊したあとの運搬が大変みたいだな

だったらあれを出す

「トレース・オン」

そうやって出したのは戦車を回収する装甲回収車だ。これは、戦車が壊れた際に回収できる代物だ。それを、運搬専用にした物だ

「ご主人様、これはなに？」

桃香が聞いてきた

「これは、戦車回収車という物で、本来なら戦車を運搬するんだが、これは輸送専門の車両なんだ。これなら多くの廃材を運べるだろ？」

俺が説明した

「ふ〜ん、じゃあ、これは？」

そうやって指差したのは荷台と運転席の間にあるクレーンだった

「これは、クレーンって言って人が持てないような重い物でも簡単に持ち上げることができるんだ」



「「「「「おう!!」「「「「「「

その合図と共に他の兵士たちも復興作業に入った

数時間後、俺達の担当する区域の復興作業が終了したので、他の区域にも応援を回した。俺は雪蓮達の区域に向かっていた。

「おい、雪蓮!」

「ん?ああ、光男どうしたの?」

「いや、こっちの復興作業が終わったからさ。ほかの所にも手伝いとして回ってる」

「ええ!?もう終わったの?いくらなんでも早すぎじゃない?」

雪蓮は早く終わったことに驚いていたようだ

「んまあ俺の力を使ったからな、その分作業が順調に行っただって訳だ」

「どうやったの?」

「それはね………」

俺はさっきやったことを雪蓮達にも見せた。最初出したときは妖しだのなんだの言われたが俺がちゃんと説明するとみんな納得してくれたようだ。

その後、復興作業をして無事に終えた。

俺が帰ろうとした時、雪蓮が「一杯付き合わない？」と言われたので快く賛同した。

そして、場所を変えた

（城壁）

俺達は人気のない城壁で月見酒と洒落込んだ

最初は何ともない雑談をしていたが俺はあることに気がついた

「なあ、雪蓮」

雪蓮は酔っているのか顔を見るととても艶やかになっていた

「ん〜？なに〜？」

「ここら辺の井戸で光る印を見つけたか？」

すると、雪蓮の顔が変わった

「……………どうして知ってるの？」

「いやなに、俺に知ってる歴史ならまさに見つけているからなの洛陽で」

「はあ、それをいわれちゃあしょうがないわね」

秘密がばれた子供のように笑顔で言った

「あなたの言う通りよ。確かに伝国の玉璽を見つけたわ。井戸で」

「やっぱりか〜じゃあもうひとつ、いつだか分らないけど袁術に対して反乱するんだな。」

「どうしてそこまで!?!」

「いや〜一言で言うならおれの国の歴史ってところかな」

「はあく光男には敵わないわね。そうよ私達、孫呉はこのままでは終わらない。いつか袁術から奪われた土地を必ず取り返してやるんだから」

月を睨むように雪蓮が言った

「そうか、なら俺にも手伝わしてほしい」

「え?」

雪蓮が素っ頓狂な声を上げた

「いや、だからその反乱に俺も手伝わしてほしいって言ったんだけど?」

「でも、あなたの利益は?」

「普通の奴ならそういう風な見返りつてものを求めるがな、俺達はもう同盟してんだぜ?それだったら問題ないだろ?」



俺はそういう風にいった

「ありがとう。光男」

雪蓮は素直に礼を言った

「気になさんな。そうそう。いつ反乱を起こすのとか時期を教えてくださいませんか？さすがにそこまで分らないからな」

「分かったわ。一か月前くらいに鳩を飛ばして向かわせるわ。それなら猶予はあるでしょ？」

「ああ、そうしてくれるとありがたい」

「じゃあ、話はこれくらいにしてもっと飲みましょ？」

そう言って酒を掲げた

「ああ、そうだ！あれがあったはず」

そう言って倉庫の方にあった代物を取り出した

「それも、光男の能力？」

「ああ、こっちはなんでも入っている倉庫みたいなものだ。いろいろあるぜ？おっ！これだこれだ」

そう言って取り出したのは一ビンのワインだった

「光男、これはお酒？」

「ああ、そうだ。ワインて言うローマとかそっちのお酒だよ」

「へー！あの羅馬の！？飲んでみたい！！」

勢いよく飛びついてきた

「おわ！？危ないだろ！？落ち着いて」

そう言ってグラスを取り出し注いだ。その傍らで雪蓮がわくわくしていたが

「はいどうぞ」

そう言ってグラスを渡した

「ありがとう！これ、よく見ると赤いわね。血みたい」

「それは赤ワインって言って葡萄とか果物から作られるものなんだ」

「へ〜すごいわね。それじゃあ頂きま〜す。ゴクッゴクッゴクッ」

そう言って雪蓮は勢いよく赤ワインを飲みほした

「プハッー！うまいわねこれ」

「お気に召して良かったよ。さっもつと飲もうぜー！」

「おー！」

そうやって俺達は小さな宴会を開いた

## 久々の休日

反董卓連合が解散して俺達は自分たちの町に戻っていた。

霞、月、詠はなんとかこつちに慣れようと頑張っていた。因みに月と詠は俺直属のメイドになってもらった。

詠が最初は騒いでいたが月に説得され渋々了承した。それから二人で協力してメイドの仕事在必死に覚えている

霞は、自分の部隊とともに鍛錬している時々、愛紗や鈴々、星と一緒に鍛錬をして中を深め合っているようだ、実に素晴らしいことだ

俺はというと久しぶりに休みができたので中庭で日向ぼっこをしていた

「うーん、こつちいう暇なときは久々だな」

誰もいない中庭で一人呟いていた

その時

「光男〜！」

「ん？」

今、どっからか声がしたなどこだ？

「こつちやこつち」

「こっちって……あ」

声のしてるほうを見てみると霞がこっちに近付いていた

「やつほー光男、なにしてるん？」

「見ての通り日向ぼっこだよ。久々に休みが取れたからな、昼飯食った後、ずっとここにいたよ」

「ふーんそうなん」

「霞はなにしてたんだ？」

「うちはさっきまで愛紗と一緒に鍛錬してたんよーで、終わってこの後、何もなければどうしよかな？って思ってたん」

「つまり、暇なわけかじゃあ、街に行くか？」

「ほんまに？」

「ああ、俺も暇だったし、霞には早くこの街に慣れて欲しいからな」

そう言って俺達は街に繰り出した

（街）

ザワザワ

街に出てみると最初に来た頃より活気に満ち溢れていた

「すごいな、光男のここはものすごい活気やで」

「そうだろう?」

そう言いながら霞と一緒に町を廻った

時々、店のおっちゃんやおばちゃんからいろんなものをもらったりしていた。それを食べ歩きながらさらに廻って行った

「ん?なあ光男」

「どうした?」

「あそこにいるの桃香と愛紗ちゃん?」

「どこだ?」

俺は周りを見たが二人の姿を発見できない

「あそこや、子供がぎょうさんおる所」

そう言って霞は指さした。

指さした方向をみるとたくさんの子供に囲まれた桃香とその傍らで見守る愛紗の姿があった。愛紗はこちらに気づくと近づいてきた

「ご主人さま、どうかされたのですか?」

愛紗が聞いてきた

「いや、霞に街の案内をしてるんだよ。なあ？」

「そうや、うちはこの街に来てから日が浅いからな、愛紗との鍛錬が終わった後、光男に会ってな、暇だって言ったら街を案内してもらってるんや」

「そうか。どうだ？街の感想は」

「もう、すごいな！民の人々は活気に満ち溢れてるしみんな友好的や」

霞は思ったことを言った

「そうか。それは良かった」

愛紗も満足そうに言った

「あ！ご主人様だ！」

桃香も気づいたようだ

その後、子供達も「みつかいさまだー！」と言って半分ぐらいがこっちにワラワラと来た

「よう！皆、元気にしてるか？」

「うん！みつかい様も一緒にあそぼー？」

「おう、いいぜー何して遊ぶ？」

「うーんとね、この前、やった鬼ごっこがいい!」

一人の男の子が言うと皆も賛成したようだ

「じゃあ、鬼ごっこしようか。じゃあ、俺が鬼だからな。霞と愛紗もやるぞ」

「「え?」」

二人はやると思ってなかったらしい素っ頓狂な声を上げた

「だから、二人もやるぞ。鬼ごっこ」

「い、いやうちは……」

「わ、私も……」

「二人とも、そう簡単に逃げられると思ってんのか?フッフッフッフ」

光男の後ろに黒い影が見えていた

( (怖!!!) )

二人は強制参加するはめになった。

最初は子供たちと一緒に遊んでいたが途中、鈴々などが参加して武将鬼ごっこになってしまい。子供たちは観戦側に回ってしまった



夕方

武将鬼ごっこが終了してその後、子供達はそのまま解散した。俺達も城に戻る事になった

鈴々などは先に帰ってしまい、今は霞と一緒に帰っている

「いや、疲れたな。霞」

「ほんまやで、あそこで愛紗が出てくるとは思わなかったわ」

「本当だよな、霞、今日は楽しかったか？」

「うん！ほんま、こんなに楽しかったことは久々や」

「そうか、少しは慣れただろう？」

「あ！もしかして……」

「ああ、霞にも早く慣れて欲しくってな実は桃香ぐるみでやったことなんだ」

「光男、ほんまにありがとう！」  
だきっ

そういつて、霞は光男に抱きついた

「良いってことよせっかくに仲間になったんだ。だったら、仲良くするのが道理だろう？」

そうやって俺と霞は城に戻って行った

## 乱世の兆し

俺達はしばらく、平穏な日々を送っていたが乱世は突然やってきた。それは一つの一方が来たところから始まる。

それが来たのは軍議の時だ

「……………なんだって!?」「……………」

俺と霞以外の皆が驚いたように言った

「ですから、袁紹さんが公孫讚さんの領地に攻めはいり占領したと  
のことです。」

「それで、白蓮ちゃんは!?!」

「はい、なんとか脱出したとの報告は入っていますが行方が分  
からない状態です。」

「そ、そんな……………」

桃香は落ちるように座り込んでしまった。

無理もない。仲良しだった友達がこうなればだが……

「落ち込むのは早いんじゃないか?桃香」

「ご主人さま……………」

「行方が分かってないんだろっ？だったらどこかで生き延びてるはずだ。」

「そう・・・だよな。白蓮ちゃんはどこかで生き残ってるはずよね」

桃香は何とか落ち着いたようだ

「それよりだ。朱里」

「はい、袁紹さんはそのまま南下し我々の領地に迫っています。」

「そういうわけだ。馬鹿袁家が俺達の領地に来ているんだそうだ。俺を怒らせた代償は大きいぞ。ふっふっふっふ」

この時、光男は裏モードに入っていた。

「朱里、それで敵の数は？」

愛紗が聞いた

「そこは、雛里ちゃん」

「うん、敵の数は約20万人です」

「ええ！！そんなに多いの!？」

桃香が驚いたように言う

「まあ、落ちつけよ桃香」

「だって、私達の倍はいるんだよ！？ご主人様」

「桃香様の言うとおりで。兵法の基本は相手の数より多く揃えることですよ」

「んなもんしつてら、だがな、こっちはおれの力があるんだぞ？それで、慌てる必要があるのか？」

「どづいことですか？ご主人様」

愛紗が聞いて来た

「だから、俺達の軍は一騎当千のお前達と異世界の俺がいるじゃないか。これほど良い条件が揃ってるのは他でも見ない事だぞ」

俺はニヤリと笑いながら言った

「じゃあ！..」

桃香が明るくなる

「ああ、袁紹がここに来るのなら迎え撃ってやるつじやないか。本当の地獄をあの高飛車女に思い知らせてやるぜ」

俺の現代兵器と歴戦の武将達がいるんだ。これに勝るものはないだろつ

「朱里」

「はい、なんですか？ご主人様」

「袁紹軍の行動は逐一報告させる。それとどの方面から来るのかも朱里と雛里でやってくれ」

「「御意です」」

二人の声がハモった

「それから、愛紗」

「はい！」

「全軍の訓練をやれ総指揮はお前に任せる」

「分かりましたご主人様」

「桃香」

「なに？ご主人様」

「桃香は内政の方を頼む」

「まっかせてよ」

「それから、月と詠をここに呼んでくれ」

あの二人にも手伝ってもらわなきゃな

数分後兵士に連れてこられた二人

「あの、お呼びでしょうか。ご主人様」

月が用件を尋ねる

「うん、二人とも袁紹軍がここに来るのは知ってるよね」

「ええ、聞いたわ。それでどうするの？」

「詠は軍師としての力を発揮してもらいたい。月は桃香の補佐を頼む」

「分かったわ。朱里、雛里に聞けばいいのね？」

「ああ」

「あの私は」

「月は前は太守だったろう？ だったら内政の事は分かるよな？」

「はい」

「さすがに一人じゃあ抱えきれないだろうから。桃香と二人で協力してくれないか？」

「分かりました」

「頑張ろうね！ 月ちゃん」

「はい、桃香様」

よし、これでいいだろう。後は、準備を怠らない事だ

柔よく剛を制すとも言っしな。数だけがすべてじゃない

「なあ、光男」

「ん？どうした霞」

「光男は何するん？さっきの話だと光男は何も付いてない気がするんやけど」

ああ、そのことが

「なに、ちよつとした準備さ。現代兵器の真骨頂とも言える物をだすからな。ただし、少しばかり時間がある」

「何をするの？」

桃香が聞いて来た

「裏の山を利用するのさ」

「……………裏の山？」

皆、分かってないみたいだな。まあそれの方が好都合だしな

「おっと、話はここまでだ。後は見てのお楽しみってやつさ。じゃあ、軍議はここまでにする何か質問のある奴はいるか？」

「……………」



「よし、それじゃあ各々頑張ってくれ！」

「「「「「「「「「「「「「「「「」  
「「「「「「」  
「「「」

そう言っって皆が言った瞬間………

「光男様!！」

副官が飛び込んできた

「どうした？副官」

「こ、公孫讚様がここに辿りつかれたようです!！」

「え!?!白蓮ちゃんが!?!」

「すぐに、ここに通してくれ」

「はっ!！」

そう言っって副官は出て行った

数分後公孫讚がやってきた

「白蓮ちゃん!！」

桃香が泣きながら抱きついた

「お、おい桃香」

「良かったよ〜白蓮ちゃん〜」

「無事でよかったですよ公孫讚」

「光男」

公孫讚の姿を見ると所々返り血が飛んでおり銀色の鎧は泥で汚れきっていた

「事情を説明してくれないか？」

「ああ、袁紹は突然、軍を私の城に向けてな。応戦はしたんだが数には勝てなかった。私はなんとか脱出して数日間行方を晦ましていたんだ。やっと落ち着いた頃にここにたどり着いてな。だが、部下も他の皆も助けてやれなかった。結局、私だけが生き残ってしまった」

と泣きながらこれまでの経緯を話してくれた

フワッ

「………光男？」

俺は自然的に体が動いていた

「もういい。もういいんだ。後は気が済むまで泣け。そいつらの分まで生き続けるんだ」

「み……光男……うわああああ……!」

公孫讚は思いつきり泣いた。

数分後

「どうだ、気が済んだか？」

「ああ、ありがとう。光男……それと頼みがある」

「なんだ？」

「私を軍に入れてくれないか？もう頼るのはお前達しかないんだ」

「……そうか。分かった」

「ありがとう。それから私の事は白蓮と呼んでくれ」

「分かったよ。白蓮、俺の事も普段通り光男って呼んでくれ」

「ああ、わか……」

ドサッ

白蓮が突然倒れた

「白蓮ちゃん!？」

「大丈夫だ。気が緩んで気絶したみたいだ。誰かいるか!!」

「はっ！なんでしょう？！」

「公孫贄を医務室に連れてってくれ」

「分かりました」

そう言っつて兵士に救護を任せた

「よし、皆、さっき言った通りにしてくれ」

「「「」

そして、俺達は行動を開始した

## 最新鋭

白蓮がここに辿り着いてから俺達は行動を開始した。

愛紗を筆頭に武将たちは訓練をやっていた

内政は桃香、月の二人に頼んでもらっている

朱里、雛里、詠の三人は袁紹をどうやって撃退するのかと逐一入ってくる情報を整理していた

俺はある物を作るために裏山へとやって来ていた

（裏山）

「よし、パツパツとやっちゃいますか」

そう言っている物とある団体を創造した

「トレース・オン」

そう言って創造したのは建設車両と海兵隊工作部隊の皆だ

海兵隊は光男と面識があり、向こうにいたところに大将と仲良くなっていたのだ。そして、こっちに来てても何も思わないように設定してある

「第20師団工兵部隊揃いました！」

工作部隊の隊長が言った

「よし、皆聞いてくれ。ここにある物を作ってもらいたい。大至急だ！できるか？」

「……………サイエッサー！！」「……………」

「では、始め！！」

そう言って工作部隊は作業に取り掛かった。

俺は近くに張ったテントで隊長と話し合っていた

「では、ここをこつするのですね？」

「ああ、そうだけできるだけ距離は長くしてくれ。それから……」

そうして、数時間後

「建設完了しました！！」

そう言って隊長は敬礼をした

「御苦労！皆、帰ってゆっくり休んでくれ。向こうの大將によろしくな」

「はっ！では、失礼します！」

そう言って海兵隊は消えた

「さてと、」

俺は完成した建物を見て満足した

左に大きな建物があり、真中には巨大な滑走路があった。

これで分かるだろう。航空基地を作ったのだ。周りはフェンスで囲み、一般人が入れないようにしてある。

奥には巨大な格納庫があり中にはいろんな機体が揃っている。

「これで、袁家の馬鹿を叩きのめせるぜ。ふふふ」

そして、俺は一旦城に戻った

（城内）

「さして、俺も自分の技でも磨くかね」

基本は航空による爆撃だがその後は接近戦でやるからな。ちゃんと練習はしておかないと……

そう思っつて鍛錬場に入ろうとした

その時

ガキン！

「ん？」

隊の訓練は終わってる筈だから……誰か鍛錬でもしてるのか？

そう思っただけで覗いてみるとそこには……

「はぁー！」

ガキン！

「くっ！やるやないか、愛紗」

「ふっお前こそな霞」

そこには愛紗と霞が模擬戦を行っているようだ。俺は二人にばれなようにそっと、近くのベンチに座った（ベンチは俺が作った）

ガキン！ガキン！ガキン！

二人はそのまま打ち合いをやっていった

愛紗はどちらかというパワー系だな対する霞はスピード系ってところか。二人とも強いからな

そう思いながら見ていると……

「これで……終わりだー！」

ブオン！

ガキン！



「なっ!?!」

ドサッ

「私の勝ちだな」

「あちゃゝ負けてもった。でも、いい試合やった」

二人はその場で笑い合っていた

パチパチパチ

「!?!」

二人は突然の拍手に驚いたのだろう。びっくりしていた

「いやゝ二人ともすごかったよゝ」

「ご主人様!」

「光男!」

「結果はどうあれとてもいい試合だったよゝ。思わず見とれちゃった」

「そ…そんなことはノノノノ」

「そ…そんなんちゃうでノノノノ」

二人は褒められて照れていた

「そういえば、光男」

「なんだ？」

「準備は終わったん？」

霞が聞いてきた

「ああ、もう準備は終わったよ。明日、皆に見せるよ」

「ほんまか？」

「ああ」

「それで、ご主人様はどうしてここに？」

愛紗が聞いてきた

「俺も、鍛錬しとこうと思ってな。そしたら二人が試合やってるのを見かけたというわけだ」

「そうですか・・・鍛錬は一人でやるんですか？」

「いや、ここに来れば誰かとやれると思ってな」

「それでしたら、私とその役目を受けましょう」

愛紗が拳げた

「あつ！ずるいで愛紗」

霞が抗議した

「霞は負けたであろう？」

「ぐっ……それはそうやけど……」

「霞、今回は負けたんだから我慢なさい。それに疲れきっている体でやつても壊すだけだぞ？」

俺がそう言った

「はあく分かったで、でも今度はうちがやるからな！」

「はいはい」

そう言って霞は観覧席に向かった

「さてっと、愛紗できるか？」

「はい、いつでもいいですよ」

「そうか。じゃあ本気で来てくれ」

「分かりました。」

そう言って構えた

俺も構える、因みに銃は訓練用の銃で弾は衝撃弾だ

「ご主人様、最初に武器と違いますね？」

「ああ、これは訓練用のやつでな。弾は当たっても死なない奴だから安心してくれ」

「そうですか。分かりました」

そう言ったとき俺達は無言になり互いに隙を窺っていた

そして……

「はあ!!」

先に動いたのは愛紗だった

「甘い!!」

ガキン!ガキン!

「まだまだ!!」

ブオン!

「おっと!!」

俺は一旦愛紗から離れた

そして、今度は俺が動いた

「でりゃあー！」

ダン！ダン！

「これしきー！」

愛紗は弾を避けた

「おおー愛紗すごいな〜こっちの世界で初めて避けられたよ〜」

俺は愛紗を褒めた

「ありがとうございます。ご主人様」

「じゃあ、そろそろ終わりにしますか」

そう言っつて構えを低姿勢にした

「行くぞー！！」

ダン！

思いっきり足を蹴って低空飛行の形になった

「くっ！？」

突然のことで下がろつとする愛紗

「させるかよー！！the endー！！」

ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！

下から回転して無数の弾を相手に叩き込む技だ。広範囲に散らばる為、相手は絶対に避けられない技である

「なっ！？きゃあああ！！」

愛紗はもろに喰らってしまいそのまま、倒れてしまった

「ふう、これで終わりだな」

「ええ、完敗ですご主人様」

倒れている愛紗立たせると霞がやってきた

「いや、すごかったで光男」

「そうか？」

「そうやで。まるで、舞ってるみたいに見えたん」

「そう言われると照れるな。でもそこまで強くはないさ」

「そんなことないですよ。ご主人様は確かに強いです」

「皆に比べたらそんなことはない。俺は飛び道具を使って初めて強くなれるんだ。」

「ご主人様」

「だからさ、二人とももつと頑張ってくれるかい？」

「はい！」

「おう！」

二人は元気よく返事した

「よし、それじゃあ、飯食いにいきますかね？」

「もちろん、光男のおごりやな？」

「もちろんだ！よしいくぞ！」

「」「応！」

こうして俺達は飯を食いに行った





「ああ、そうだ。これは飛行機を発進させるための基地なんだ。」

「……………飛行機？」

皆が声を揃えて言った

「飛行機ってのは空を飛べる乗り物なんだ。今見せるよ」

そう言って格納庫の扉を開いた

そして、中から出したのはB-52爆撃機である。こいつは長距離で爆撃できるアメリカ軍の誇る飛行機だ。

皆、そのでかさに驚いていた

「でっかいな、光男、これが飛行機なん？」

霞が聞いて来た

「ああ、こいつは長距離で飛べる飛行機なんだ。だから、ちっとやそっとじゃあ落ちないぜ？」

そして、皆は飛行機の周りを見ながらいろんな感想を言っていた

「おーい、他にも見せるから、皆見とけよ」

そう言っただけで色々な物を出した。アパッチロングボウ・F-4ファントム・SU-27などをお披露目した。

その間、皆は驚きの連続に違いなかった

そして、粗方見せ終わると皆に戻るように言った。

そして、戻ると同時に伝令から袁紹軍が領地に入ってきたという報を受けて俺達はすぐに軍議を行うことにした

「それでは、軍議を始める。朱里」

「はい、袁紹軍は現在、ここから、数里はなれた場所に居ます。そして、数は20万です」

やっぱりそう来たか数で物を言わす気だな。あの高飛車女は……  
・その理屈を覆してやるぜ

続いて、雛里が今回の作戦について説明を始める

「作戦ですが、まず、ご主人様の兵器を使います。その間、愛紗さんと霞さんと近くの森に移動して下さい。正面はご主人様、鈴々ちやん、星さんでお願いします。」

「「「「応!」「」「」」

「作戦はこれで以上です。」

そう言っつて雛里は下がった

「じゃあ、今言っつた通りに動いてくれ。あの馬鹿袁家に世界の常識つてものを叩きこんでやろっ!」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」

そして、そのまま戦準備に動いて行つた

「side袁紹」

「おっっほっほっほっほー!!!!皆さん、華麗に進撃なさい!!!!」

「「「「「「「「「「「「「「」

白珪さんは簡単に落ちましたわね。このまま劉備さんの所も落とす  
てしましましょう。確か、あそこには天の身遣いとかいう胡散臭い  
男がいましたわね

どうせ、ハツタリでしょうけど。まっこの袁本初の前では意味がな  
い事ですよ

「麗羽様」

「姫」

「あら?猪々子さんに斗詩さんどうしたんですの?」

「なんか、劉備軍に動きがあるみたいですよ」

「どうせ、ハツタリでしょう。構わず進軍なさいな」

「いいんですか?」

「この袁本初が良いと言ったら良いんです！どうせ、我が軍の数にも及ばないのよ？そんなのに怯えてどうするのです？我が袁家は最強でしてよ！」

とその時だった

「我おれは神田光男！！天の身遣いである。貴様ら我にたて突いた事を後悔しろ！！」

この時、ここで引けばよかったのかもしれない

そう思ったのは数刻後の事だった

〈side袁紹out〉

俺は一人で城門を出て袁紹軍に対して宣戦布告した。奴らは慢心してるのかそのまま進軍し続けていた

ならば……………見せよう地獄と言つ物を……………

「イツッ、show time！！！！」

そう叫んだ後、裏山から航空機が発進した

最初に出たのはハリアー？だ。こいつは普通の飛行機とは違い垂直飛行が可能なのである。だから、空中で止まっているように見えるのだ

「な、なんだあれは！？」

袁紹軍の一人の兵士が叫んだ。

フッフッフもう遅いよ君達、

「これが、私の力だ！！とくと見よ！！」

そうやってハリアー隊（六機編成である）に指示を出した

「全機、機銃掃射せよ！！」

そう言うとハリアー隊は光男の上で止まり機体に備わっている機銃で掃射を開始した

ウイイイインドルルルルルル！！！！！！！！！！

それぞれの機体から無数の鉄の雨が袁紹軍に降り注いだ

「うわああああああ！！！！！！」 「たすけてえええええええ！！！！！！！！！！」

「しにたくないよおおおお!!!!!!!!!!」

様々な所で悲鳴の嵐になった。

後ろに居た奴らも今の攻撃で怯えきっていた。

「おら!! 次のが行くぞ!!」

そう言って次の隊を出した

馬鹿袁家をぶっ潰せ！！（後書き）

続きは次回に持ち越します



袁家をぶっ潰せ！！パート2！！（前書き）

これなんて、シリーズ物？

袁家をぶっ潰せ！！パート2！！

（桃香 side）

私達は袁紹さんがこの土地に向かっていると聞いて軍議を行うことにした。

初めはここから逃げようってなったけどご主人様が迎撃しようって言うってきた

ご主人様は自分の力と私たちの力があれば十分だと言った。そして袁紹さんが来るまで私たちはそれぞれの役割を果たした。

愛紗ちゃんたちは訓練を私たちは内政を朱里ちゃん達は策略を練った。ご主人さまは裏山で何かを造ったみたい

ご主人様に聞いたけど「見てからの楽しみ！」と言ってばらしてくれなかった

完成した次の日に私たちを案内してくれた。そこで見たのは天の国の乗り物だった。見た時はすごく驚いたし、興奮した。

そして、そのまま戻ると兵士さんから袁紹さんが攻めてきたということで軍議を行った。作戦はまず、ご主人様の兵器で相手を攪乱してその間に愛紗ちゃんと霞さんが近くの林に隠れて機を見て攻撃するというものだ

私はご主人様の近くにいた

「フッフ、我に逆らったこと後悔させてやる。」

(ご主人様、怖い〜!!)

「桃香、しっかり見てるよ？これが俺の国の力だ」

そう言ってご主人様は指示を出した

（桃香 side out）

よし、まずはハリアーによる機銃攻撃は終わった次は……

「おら！次、行くぞ！！B - 52！！」

そう言うとB - 52が二機編成で上空を飛んでいた

あっ前に言ってなかったけど、航空機は全自動操縦に設定しました。

ゴオオオオオ！！！！！！

「爆撃！開始じゃあああああ！！！！！！」

そう言った瞬間B - 52の機体から1500ポンド爆弾をどんどん出していた

ヒュウウウウウ

ポカン！ポカン！ポカン！ポカン！

爆弾はあちらこちらで爆発を起こしていった

「はーっはっはっは！！！！！見たか！！！！これが我の力だ！！！」

俺は全体に聞こえるような声で言った

力の大差？何それ、おいしいの？

そして桃香達は………

（（（（ご主人様、怖ッ！！））））

その場にいた全員が震え上がっていた

「よし、これで数はほぼ同等になったろう。朱里！！銅鑼を鳴らせ！！！」

「ぎょ、御意です！！！」

そう言ってすぐさま銅鑼を鳴らし始めた朱里

ダーン！ダーン！ダーン！

すると………

うおおおおおおお！！！！！！！！！！

林から愛紗と霞の兵士が一齐に出てきた

袁紹の兵士はさっきの攻撃で浮足立っていた

「うわ!? 伏兵だ!」 「逃げる!」 「このままじゃあやられる  
!」

そう言っつて兵士たちはじりじりと退却していた

それを見た俺は

「よっしやああ!!! 全軍、突撃じゃああ!」

「「「「「「「うおおおおお!!!!!!!!!「「「「「「

俺の元にいた本隊も一斉に袁紹軍に突撃していった

俺も動くためM1A2エイブラムズを出した

「我也行くぜ!!!」

そう言っつてエイブラムズに乗った

ブオオオオオ!!!!!

俺は本隊の後ろから付いて行った

先に進むと、愛紗と霞が袁紹の天幕を取り囲んでいた取り囲んでいた

俺もなんとか着いた

「袁紹!!! 天幕から出て来い!!! お前らは包囲されている!!!」

俺は大声で言った

すると、袁紹が二人の部下を連れて出てきた

「わ、わたしは袁本初と知ってのことですよ!？」

袁紹は自分の立場を分かってないみたいだな

「おまえ、今の立場を分かっているのか？」

「お黙りなさい!私は三公を出した。袁家の者でしてよ!」

「黙れ!！」

ガチャン!

俺はデザート・イーグルを袁紹の額に向けていた

「ひっ!？」

「てめえ、いい加減にしろよ?お前がどこの出だろうと知ったこつちやねえよ。だがな、お前が軍のなんたるかを語るのはな、お門違いなんだよ!！」

俺は切れたように言った。桃香や愛紗達もみんな驚いていた

「いいか?お前みたいな高飛車女にな軍人を語る資格はない!それが分かつたらな。とつとどこから出ていきやがれ!！それとも殺されたいか？」

銃で突っつきながら言った

そうすると、部下の一人が……

「お前！ 姫に何するんだ！？」

そうやって大剣を振りかぶってきた

「……………ご主人様！！（光男！）」……………

突然の動きにみんなは動けなかったみたいだ

「ふっ甘いな新兵<sup>ルキ</sup>」

そうやって回し蹴りで思いっきり大剣を蹴り飛ばした

ガキン！！

「お前も死にたいのか？ 文醜」

ガチャ！

「……クツ」

イーグルを文醜の額に付けた

「文ちゃん！」

顔良がハンマーを思いっきり振り上げた





袁家をぶっ潰せ！！パート2！！（後書き）

作「は〜い作者です！」

神「光男だ」

「いや〜すごかったね。今回の話も」

「ああ、自分でやっておいてなんだがすごいな」

「まさか、航空機が出てくるとは思わなかったでしょう？」

「ああ、あれには俺もびっくりしたぜ〜」

「でも、桃香たちは君に驚いたみたいだよ？」

「ああ、俺が怒ったところなんて初めてみただからだろう？」

「でも、何に対して怒ってたの？」

「まあ、簡単に言えば軍人に対して舐めた態度を取ったってところかな？あいつは、俺が見てきた中で最低の部類に入る輩だった」

「ふ〜ん、それが許せなかったんだね？」

「まあ、そついうことだ」

「あ、そうそう、ここで重大発表で〜す」

「なんだ？」

「なんと、アクセスポイントが8万5千件以上いきました」パフ  
パフ

「お、本当か？こんな駄文でも見てくれる人はいるんだな」

「だ、駄文ってひどくない？」

「うっさい、事実だろう？」

「否定はしないけど、主人公がそれ言っちゃあダメでしょ？」

「俺は事実を言ってるまでだ」

「うっ……反論できない」

そう言っって作者は拗ねちゃった

「あ、あ、拗ねちゃった、まあいいや、じゃあ、次回もよろしくな  
」！

## 協力者と反乱のお知らせ

袁家をぶっ潰し、無事に自分達の街を守れた俺達は、一時の平和な時間を楽しんでいた

俺は自分の部屋で仕事をしていた

（光男の部屋）

「……………なんでさ」

俺は某アニメの主人公みたいな口癖を自分の部屋で愚痴っていた

だって、今までより半端ない量の仕事に来てんだもん。これは、さすがにお手上げだよ？

そんな事を思いつつも仕事をこなす光男だった

「……………黙れ作者、お前がやってみろ」

無理、だって中国語分かんないんだもん

「なら、黙ってる。それ以上しゃべるようなら撃ち殺すぞ」

へいへい、ほら、手が止まってるぞ」（笑）

「……………絶対後で撃ち殺す」

そんなこんなで仕事をしていると……………

コンッコンッ

「ん？はい、どうぞ〜」

ガチャ

「失礼します。ご主人様」

入って来たのはメイド服姿の月と詠だ

「ご主人様、お茶はいかがですか？」

「お〜丁度、休みたかったんだ。休憩にしよう」と

そう言っつて中央の机に移動した俺

「二人もせつかくだから、休んで行きなよ。」

「へう、詠ちゃん仕事はないよね？」

「うん。急な仕事は粗方済ませたから、休んでいこっか」

そう言っつて向かいの椅子に座った

「ズズ〜あ〜生き返る〜」

俺がそう言っつた

「何言っつてんのよ。まだ、若いくせに」

詠が言った

「だって、あの量はさすがに堪えるぜ」

そう言って、後ろの机を指差した

「あれぐらい、どつってことないわよ。それこそ、洛陽の時の仕事は半端じゃなかったわ」

「え？あれより、多いの？」

「うん。確か、あれの二倍はあったわよ」

「……マジかよ」

それどんだけの量だ！？さすがに持たないぞ俺

「まあ、それは置いといて、二人はもう慣れたかな？この生活に」

「はい、いろいろ分からない部分もありますが城の皆さんが教えていただけるので頑張っ行ってます」

「そうね。皆優しいし、愛紗達もいろいろ気に掛けてくれているから結構楽しいわよ。」

「そうか。そりゃあ良かった。」

「でも、一つだけ気になる事があるのよ」

「なんだ？」

分からない事でもあったか？

「この服よ！なんなのこの服は！？」

そう言っつてメイド服を指した

「何っつてメイド服だけど？」

俺はスラツと言った

「だから、なんでこんな服しかないの！？」

「しょうがないじゃないか。女官の服は丁度切れてたんだよ。それに俺制作だぞ？」

「「え！？」「」

二人は驚いた

「この服、ご主人様が作ったんですか？」

月が聞いて来た

「ああ、俺の記憶を頼りに作った奴だからな。この世に二つとない物だぞ？」

そう、女官に聞いた時、服が丁度在庫切れしてて、何かすぐに作れないかと思っつて閃いたのがこのメイド服だ。

倉庫を探した時、丁度二着あったがあれはどういうことだ？

まあ、そんなこんなで二人にはメイド服を着てもらっている。もちろん、作った事になっているが……

「すごいわね。あんた」

と詠が言ってきた

「そんなに誉めても何も出ないぞ？」

「誉めてないわよ！！」

ありゃあ、そうなのか残念

「そりゃあ、残念だな」

「あ、あんなんかに贈り物されたってべ、別に嬉しくなんかないんだからね！！」

顔を赤くしながら言った

これが黄金比率のツンデレと言う物か。素晴らしい！！

「そんな事はさておき、さして仕事に戻りますかね」

「はい、では私達も、行く？詠ちゃん」

「うん。そうだね。じゃあ」

そう言って二人は出て行った

そして、仕事を再開した俺

〜数分後〜

「終わった〜」

ようやく、仕事が終わったため俺は外に出ることにした

「は〜!! やっぱ外の空気はおいしいな〜」

現代世界に比べてこっちの空気は澄んでいるな〜

静かに外に居るときだった

「おい」

「？」

どこからだ？

「こっちこっち〜」

「ん？」

声のした方向を見ると、そこには一人の少年がいた

「君は？」



「俺は、竜崎たけしってんだ！」

そうこの少年こそクリスタルパワーを持つ少年竜崎たけしだ。彼は変身する事によって絶大な力を手に入れる事が出来る

小学四年生だが将来はハリウッドスターになるため空手と器械体操を習っている。そのため、トリッキーな戦闘ができる

「たけし君、君はこの時代の人間じゃないね？」

「うん！そうだよ。お兄さんもそうでしょ？」

「まあな、自己紹介が遅れたな。俺は神田光男だ。以後、よろしく頼む」

そう言って敬礼した

（背は鈴々と同じくらいか。顔は昔見てたアニメのキャラにそっくりだな）

「それで？たけし君はどうしてこんな所に？」

「実は俺、この世界に散らばったクリスタルを捜してんだ。それでこの街に天の身遣いがあるって聞いて来たんだ！」

「ふ〜ん、っで？クリスタルってどういう物？」

「こつこつ奴ー！」

そうやって出したのは青色のクリスタルだった。

「ずいぶんきれいな奴だね。これと同じ物を探してるのか」

「うん！」

たけし君は元気良く返事した

「で？俺に何をして欲しいんだい？」

「探すのを手伝ってほしいんだ」

「うーん一緒に旅でもしろってか？それは難しいぞ」

「大丈夫、探すのは僕で光男さんには情報を集めてほしいんだ！」

「なるほど、それなら大丈夫だが実際は大変じゃないか？」

「そうだけどね。でも、そうしないと大変なことになるらしいから」

「そうか。なら、協力するよ」

「本当か！？」

「ああ」

「やった！！あつ後、手紙が有ったんだつた」

そう言ってジーパンのポケットに手を入れた

「これは？」

「ん〜、中身は分かんないけど、伝書鳩が持ってた」

「何！？」

そう言っ手紙の中味を確認した。

見ると、雪蓮が反乱を起こすとの事、一週間後にやるつもりだ

「とつとつ。やらかすつもりだな雪蓮」

「何？どうしたの？」

「たけし君、一旦俺に協力してくれないか？その後でクリスタルを探すの手伝いだから」

「どんなの？」

「一週間後に孫呉が反乱を起こす俺達はその手伝いに行かなきゃあならん。」

「ん〜分かった！協力するよ」

「本当か！？恩に着る」

「じゃあ、改めてよろしく！光男」

「応！」

そう言って互いに握手した

「それじゃあ、さっそく軍議だ。一緒に来てくれたけし君」

「うん！」

そう言って会議室に向かう二人だった

協力者と反乱のお知らせ（後書き）

「は〜い、作者です」

「光男だ」

「たけしだ」

「桃香です」

「今回はゲストに来てもらってます。龍の骨さんの小説クリスタルパワーの主人公、竜崎たけし君です！」

「よろしく！」

「きゃ〜！可愛い！」

「桃香、落ちつけよ」

「竜崎君は将来ハリウッドスターになるのが夢なんだよね？」

「その通り！スターになって有名になるのさ！」

「ほ〜うハリウッドスターかいいセンスだ」（スネーク風）

「ご主人様、はりうっどすたーってなに？」

「ハリウッドスターってのは要は役者だ。演劇とかと同じだよ」

「へ〜そうなんだ。すごいね！たけし君！」

「えへへ、そんなことないよ」

「たけし君、今後はいっぱい出てもらおうからね。よろしく頼むよ」

「オツケ〜楽しみにしてくれよな！ついでに俺の小説も読んでくれ！」

「はい！今日はここで、お開きにしたいと思います！では、閉幕」

龍の骨さん、ちゃんと出させていただきました。本当にありがとうございます！

## 呉の反乱・出発

俺達は雪蓮から一週間後に袁術に対して反乱を起こすと手紙が来てさっそく、軍議を行うことにした。もちろん、たけしくんも一緒に参加してもらった。

初めは桃香がたけし君を見て俺の隠し子だ！とか言い出してそれはめっさ大変でした。

途中から愛紗や朱里がデスワールド全開の殺気を放ち、それはもう大変でしたよ。ええ

それから、OHANASIという名のリンチを受けました。・・・  
・もう肉体的にも精神的にも駄目になったこの頃です。

それから、なんとか誤解が晴れたものの桃香が「次は私の番だよね？」となんか裏がありそうな言い方で言ってきました。

正直、チビリそうです。

そんなこんなで現在、軍議を行っています。

「では、軍議を行います。ご主人様」

「・・・ああ。聞いての通り、一週間後に雪蓮が袁術に対して反乱を企てる。俺達はその手伝いをする。内容としては周辺で民が一揆を起こそうとしているからそれを鎮めるとい物だ」

「それで、他の將と合流し一気に袁術のいる城に向かうんですか？」

愛紗が聞いてきた

「ああ、そうだ。俺達は反乱開始時に乱入するからな。と言っても全軍で行くわけにはいかない。だから部隊的には俺、霞、愛紗、星だ」

「」「応!」「」

呼ばれた三人が返事をする

「光男、俺は？」

たけしが聞いてきた

「もちろん、一緒に来てもらうよ。」

「分かったぜ」

「ご主人様、私達は？」

桃香が聞いてきた

「桃香には内政をやっておいて貰ってくれ。人手が足らなかつたら、白蓮を補佐に付けねばいい。朱里・雛里は治水工事などを手掛けてくれ」

「」「」「分かった! (御意です!)」「」「」

「じゃあ、他に質問はあるか？」



.....

「よし！準備してくれ！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

その一言で一気に準備へと向かった

（5日間後）

俺を始めとした遠征部隊は準備を終え出発しようとしていた

居残り組は見送るため、街の外についてきた

「それじゃあ、桃香、行ってくるよ」

「うん。怪我しないようにね？」

「分かってるさ」

そう言っつて桃香が離れた

「ご主人様、どうやって移動するのですか？さすがに馬だと間に合  
わないような気がします……」

愛紗が最もな事を言った

「あゝそのことなんだけど、馬は使わないから」

「『『『『『え!?』『』『』『』』」

皆が驚いた。仕方ないよなこの世じゃあ馬が主戦力なんだからな

「大丈夫、大丈夫、雪蓮が向こうで用意させてもらっているからさ。すまないな愛馬じゃなくて」

「いいえ、大丈夫です。いかなる状況でも鍛錬をしていますから」

愛紗が言った

「そうか、ありがとう。」

「でも、馬を使わないんじゃないあ何使っんや?」

霞が聞いてきた

「もちろん、俺の力でさ。トレース・オン」

そう言っ出したのはMI - 24A・CH - 53Eスーパータリオ  
ン・UH - 60ブラックホーク（攻撃型）・アパッチロングボウだ

数は……

MI - 24A x 2

CH - 53E x 4

UH - 60ブラックホーク x 3

アパッチロングボウ×4

の大編成を出した

「はあ〜ぎょうさん出したな〜」

霞が感心しながら言った

「これは、俺の国を代表する物だ」

皆は今までいろんな物を見て来たので驚くことは無くなったのだ

「光男、すごいな〜」

たけしが感心した

「そうでもないさ。それより皆、乗り込んでくれ」

そう言うと皆は荷物を入れたりして、全員乗り込んだ。

俺はM I - 2 4 Aに乗り込み、武将もこちらに乗り込んだ。兵士はC H - 5 3 EとU H - 6 0ブラックホークに分かれて乗り込んだ

「よし、皆、乗り込んだか？乗り込んだなら、各機、代表で返事をしてくれ。操縦席の所に黒い箱みたいなのが置いてあるだろ？それに向かってしゃべってもらいたい。」

そついうと各機からおどおどしながらもそれぞれ、報告してきた。

「それじゃあ、出〜発！〜！」

そう言つと、それぞれのエンジンが始動し全機が離陸した

そして、呉に向けて出発した。俺たちであった。

呉の反乱・攻撃（前書き）

戦争映画で一気に有名になったあの曲を聞きながら読んでみてください  
さい

## 呉の反乱・攻撃

〔雪蓮 side〕

私達は袁術の命で近くの村で蜂起した。反乱軍を鎮めよと言ってきた。本当にムカつくわね

でも、いいわ。これは、私達の作戦なんだから本当に蜂起したのは私たちの方なんだからだって、この一揆自体が私たちの作戦なんだから

ふふふ、首を洗って待っていなさい。袁術

そう思いながら私は蓮華のいる村に向かった

〔村〕

「蓮華」

「ねえ様、御無事で何よりです」

「あなたこそね。それでどう？」

「ええ、順調です。これなら予定通り」

「そう。後は光男達だけね」

「彼らは、いつ頃、来るんです？」

「冥琳」

「ちょうど、反乱開始時に来る予定です」

「そう。でも、どうやってくるのかしら？」

それは、あれでしょ、天の国の乗り物じゃないの？

「さあ？どっちにしろ協力者であることには変わらないわ。大いに利用させてもらいましょう」

言い方がちょっと悪いけど今の世じゃ当たり前前よね。それを承知でかれは引き受けてくれたんだから

「ねえ様、口が悪いですよ」

「ごめんなさい。」

その時だった

「孫策様」

一人の兵士が来た

「何？」

「準備が整いました。」

「そう。ありがとう」





俺は双眼鏡で見てみた。そこには突撃を開始した雪蓮の姿が……

敵さんはすでに散開しているようだ

だったら、俺達も介入しますか!!

そう言っただけで高度を下げて

「ダダダダーダーダダダダーダーダダダダーダーダ  
ダー……」(ワルキューレの騎行風)

自分テンションを上げるため歌いながら攻撃を開始した。

ドドドドドドドド……!!

12・7ミリ機銃が袁術軍を襲う

それに続いてアパッチとほかのハインドも攻撃を開始した

ドルルルルルル……!!

ブシューウウウウ……!!ドカーン!!

ドドドドドドドド……!!

それぞれの武器が火を噴く

「よし、みんな粗方終えたぞ。降りる準備をしろ!!」

全機に連絡した

そして、全へりは着陸をして、武将・兵士はへりから降りた。俺も、後から続いた

く外く

「光男！」

「ん？おおー雪蓮か」

「駆けつけてくれたのね。」

「もちろん、可愛いお姉さんに頼まれちゃあ断れないさ」

俺はニッコリと笑った。

「か・・・可愛いってもう！何も出ないんだからね！／＼／＼」

雪蓮は赤くなりました

「光男、また出て来たよ」

たけしに言われて見ると散開した敵がいた

「あちゃーまだいたのかよーしょうがない。たけし、一暴れするぞ」

「OK！」

「光男、その子は？」

「ああ、この子は竜崎たけし君、頼もしい助っ人だ！」

「よろしく！」

「ふうん、実力は？」

「見ていればわかるさ。たけし君」

「おう！！」

そう言つて正面に向き直る

「モビルクリスタル！発動！」

モビルクリスタルは光だし、オーレンジャーロボに似た鎧になり、たけしに装着する。

そしてたけしは気合いで光を晴らす。

超力タケシ

「超力タケシ！オーレ！」

こうしてたけしは、超力タケシになった。

「な！？」

雪蓮は驚いた

「よっしゃあ！行くぞ！タケシ！！」

「応！」

俺と同時にタケシも動いた

「スーパークラウンソード！」

超力タケシは、剣型の武器、スーパークラウンソードを取りだした。

そして、近づいてくる敵を薙ぎ倒していった

「お！やるな！タケシ、んじゃあ、俺も！！！」

ここで、俺も新しい技を見せてやるぜ！

え？初めて聞く？だって、今、思いついたんだもん

「今までの罪を償え……さすれば天に召されるであろうっ」

独り言のように言った………なんか、聖書に出てきそうな文だな

俺は前方にいる敵に照準を合わせた

「buririan・dragon・Valletta!!」(フリリアン・ドラゴン・バレッタ!!)」

この技はバビロンモドキを作り出しその中から様々な銃が出てきて大量の弾の嵐が敵を襲う



そう言って呉軍は城に突入した。

## 呉の反乱・終戦

袁術軍の兵士を退けた俺達は袁術の城に突撃をしていた

（城内）

「よし、無事に入れたな。雪蓮、ここからは手分けして探そう」

俺が言った

「ええ、私達はこつちから光男達はあつちをお願い」

「了解」

そう言って、俺達は一旦分かれた

「よし、こつからは俺達も手分けして探そう。愛紗、星、霞はそつちを俺とたけしはこつとを探す」

「分かりました。ご主人様お気お付けて」

「ああ、愛紗達も気お付けてな」

「はい、それでは」

そう言って愛紗達とも別れた

「なあ、光男」

「なんだ？たけし」

「これが終わったら、今度は探すのを手伝ってくれるか？」

「ああ、もちろんだ。まずは情報を集めてその情報源を元に詳細な位置を割り出すという方法だ」

「分かった。その方法でお願いするわ」

「応」

その時だった

「ピ~~~~~!!!!」

「!!!!」

どこからか叫び声が聞こえてきた

「あつちだ！光男！」

たけしが指さす方向に走り出した

「分かった！」

そう言って叫び声の方に向かって行った

〜数分後〜

「ゆ、許してたも」



「ゆ、許して下さい」

そこに着くと雪蓮と蓮華が二人の少女の前で怒りを露わにしてた

多分、あれが袁術と張勳だろう

「さあ、覚悟しなさい」

そう言つて南海霸王を二人にチラつかせた

俺達はただ見てるしかなかった。だって、これは彼女達の戦いなんだから

数分、沈黙が続いた。

そして……

「はあ、もういいわ」

雪蓮がため息を吐きながら言った

「「え？」」

「だから、さっさと行きなさい」

「ゆ、許してもらえるのかえ？」

「そんなに泣かれたら殺す気なんかなくなるわ。だから、さっさと出て行きなさい。そして、二度と呉には近づかないで今度来た時は

容赦しないんだから」

「わ、分かったのじゃ」

そう言つて袁術と張勳は出て言った

「ねえ様、良かったのですか？」

「だって、あそこまで泣かれるとね、それとも蓮華は殺した方が良かったのかしら？」

「そうではありませんが……」

そう言つた後、なんだかんだで呉の反乱はここに終了した。

そして、その後は宴会になった。俺は一足先に会場を抜け出して一人、城壁で飲んでいた

「ふう」

なんとか、終わったか。後は雪蓮達が頑張つてこの国を繁栄させてくれるといいんだがな

そう思つて一人で飲んでいると……

「光男」

「ん？雪蓮かどうした」

「いや、その、一人で出て行ったからどうしたのかなー？って」

「なんだ、ただ、一人で飲むのが好きだからさ。こつやっつて月を見るのが」

そう言って、ワインを翳しながら言った

「一緒に飲んでもいい？」

「ああ、もちろんだ」

そう言って雪蓮は俺の隣に座った

「では、呉の建国に乾杯」

「乾杯」

そう言ってそれぞれの酒を飲んだ

「ンクツンクツプハツ！良かったな雪蓮、取り戻せて」

「プハツ！ええ、あなたのおかげよ」

「いや、俺だけじゃないさ。みんなのおかげだ」

「そうね。でも、本当にありがとう」

「気にするな。お互い様だそれより、これからが大変だ頑張っ  
てい  
けよ？」

ナデナデ

「……うん。ありがとう」

雪蓮は酒が入ってるのか妙に艶やかな顔を浮かべていた。

正直、見とれていたのは秘密だが……

そうして、俺と雪蓮は静かに飲んでいった

・・・・・・・・片目になった

あれから、俺達は少しだけ呉の建国を手伝った。と言っても巡回や資料整理などの下っ端のやることだが・・・・・・・・そんな事を気にしても仕方ない

因みに、愛紗達には先に帰ってもらった。少々を駄々をこねられたがなんとか行ってもらったようだ。・・・・・・・・なんて言ったかは秘密だ

まあ、そんなこんなで俺は呉の手伝いをしている

だんだんと周りも落ち着いてきて平和になっていった

そんなある日・・・・・・・・

「ふわ〜ねむ〜」

俺は欠伸をしながら庭で寝っ転がっていた

「やっぱ、仕事明けはきついな〜」

そんな事を愚痴っていると

「光男〜！」

「ん？」

起き上がって見ると雪蓮がこっちに向かってきた

「どうした？雪蓮」

「光男、この後、暇？」

「んまあ、仕事は終わったしな」

「なら、私に付き合ってくれろ？」

「OK、行くござ」

「おーけー？」

「ああ、良いよって意味だ。それよりどこに行くんだ？」

「それは、着いてからのお楽しみに」

そう言っつ俺の手を引つ張つた

「お、おいおい。そんなに急ぐ事はないだろっ？」

「いいのいいの」

そう言いながら俺達はある所に向かつた

（数分後）

俺と雪蓮は近くの森まで来ていた

「なあ、雪蓮、こんなとこに何があるんだ？」

「それは、これよ」

そう言っ指さしたのは小さな墓みたいなものだった

「墓、か？」

「ええ、私のお母さん、孫文台のお墓よ」

そう言っ周りを掃除し始めた

「……手伝っよ」

そう言っ俺も掃除を始めた

くその頃

建業の近くでは曹操軍が来ていた

「桂ふあ、軍の状態は？」

「はい、全員、来ています。しかし、許庄の部隊が離れました。」

「放っ置きなさい。この戦で功績を上げればそれなりの待遇をす  
るわ」

ふふふ、これは英雄による戦い。楽しみだわ孫伯符

くそして、再び文台の墓の前

俺達は掃除を終えて再び手を合わせた

「母さん、ようやく国を取り戻せたわ。これから孫呉の宿願を果たしてみせるわ」

「初めまして、孫文台様、同盟国・蜀の神田光男です。この度は呉の建国に手伝わせていただきました。これからも、よろしく願います」

「光男……ありがとう」

「いや、当然の事を言っただけだ。それに桃香と雪蓮の根本的な願いは一緒だしな」

「ええ、そうね。」

雪蓮は優しい笑みで墓を見つめていた。

その時、不意に気配を感じた

（なんだ？この気配、殺気丸出しじゃあねえか。数は………5人が仕掛けてこなけりゃあいいが）

「ん？どうしたの光男」

「いや、なんでもないそれより、行こうか？」

「ええ」

そう言って動き出した瞬間



「！雪蓮、伏せる！」

「！」サツ

俺はすぐさまガバメントで正確に賊を撃った

ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！

「ぐわ！」「ぎゃあ！」「ぐえ！」

次々と賊が倒れて行く

「ふう、おわつ……（ガサツガサツ）！」

不意に後ろを振り向くと、賊が雪蓮の方に向かって矢を放っていた

「くっそ……！」

そして……

グサツ……！！

「ぐおおおお……！！……！！このやる……！」

ダン！

「うわ！逃げろ！」

チツ仕留め兼ねたか

「光男！それ……」

「あ？これか……」

矢は俺の眼に刺さっていた

「仕方ない。うりゃあ！！」

ズブツ！

目から矢を抜いたそれに伴い目玉も一緒に出てきたが……

確か、夏侯惇は目ん玉を食ったんだっけな。それはさすがにご遠慮しておこう

「つ~~~~痛~~~~！！」

よくもまあこんな事が出来たな……俺、痛みは半端じゃあねえぞ

「光男！大丈夫！？」

雪蓮が駆け寄ってきた

「ああ、大丈夫だ。あれ？」

なんだか、クラクラして……きた……よづな

ドサッ

そのまま、俺は気を失った

「光男？光男！！！！」

「ねえ様！」

「蓮華……」

「どうしたのですか？……！！！！」

「……どうしたの？」

「その……曹操軍が攻めてきました」

「そう……蓮華」

「はい」

「光男をすぐに医務室へ連れてって、私はそのまま戦場に出る」

雪蓮の眼は完全に得物を狩る目になっていた

「はい！分かりました」

そう言って蓮華は光男を抱え城に戻っていった

「ふふふ。この代償は大きいわよ曹操？」

そう言って雪蓮も戦場に向かった

皆の光男さんが帰ってきましたよ」

「う・うん？」

あれ？確か、俺は雪蓮を庇おうとして敵の矢が目に刺さったんだよな。それで、気絶して・・・。。それにしてもここは、どこだ？

「目が覚めましたか？」

「ん？あんた誰だ？」

そこには、絶世の美女と言っても過言ではない人が立っていた。昔の王族の服を纏い尚且つ威厳があるように見えた

「私はアルバート・シスターと言う物です。」

「で、ここはどこだ？後、何者？」

「ここは、アヴェンジャー、簡単に言うなら裁判所みたいな所です。それに私は裁判長と言っても過言ではないでしょう」

なるほど、あの世への裁判所って所か？なら、納得できるかな

「で、俺はどうなるんだ？やっぱり、地獄か？」

「なぜ、そう思われるのですか？」

「いや、人殺しをしているしいくら仲間を守るためとはいえ変わりはないしな。」

「いいえ、あなたは理解しています」

「理解？」

「そうです。仲間を守るためにやったそれだけで十分評価に値します。そして、人殺しの意味をちゃんと理解していますから、本来、人間は二つに分けられます。」

「それって、善と悪か？」

「そうです。人を殺した際、無差別に殺す、人を守るために殺すその二つだけは変わりのない物です。そして、あなたは自分で言った人を守るために」

「確かにそうだが、殺した事には変わりないだろう？」

「それはあなたの言うとおりです。ですが、あなたはあの世界に来た頃自分で悩んでいましたね？」

「ああ、人を殺したのはあの世界に来て初めてだったからな。」

あの頃はガチで震えてたからな

「ですが、あなたはむやみに殺すことはなかった。それはその後の行動で示されています。だから、あなたをあの世界に戻します」

「え？でも、俺って毒矢で死んだんじゃあ」

「受けたと言っても失明で収まっていますからね。幸い体の方は大

事じゃないみたいです」

「そうなのか・・・よし、シスター俺をあの世界に戻してくれ。大切な皆が待っているんだ」

そう。あそこには大切な皆がいる。笑って世の中を平和にするという目標が達成されない限り俺は死んではいけないんだと思う。だから・・・

「そう言ってもらえると信じていました。では・・・」

シスターは光の門を開けた

「ここを潜ればあの世界に戻れます」

「サンキュー、シスター」

「あなたに神の加護があらん事を」

そう言つて俺は光の門を潜った

side雪蓮

私は光男が運ばれたのを確認するとすぐさま戦場に向かった。曹操を殺すために・・・

戦場に着くとすぐさま皆が来た

「雪蓮、曹操は・・・」

「分かってるわ。それより聞いて皆」

そう言うと皆が振り向いた

「光男が曹操の暗殺部隊にやられたわ」

「……………な!?!……………」

「それはどういうことですか!?!雪蓮様」

明命が言ってきた

「光男は何者かの気配を感じて帰ろうとした時、向こうが仕掛けて来て奴らが倒れたと思ったら、まだ、残りがいて私を庇って毒矢を受けたわ。敵は逃げて光男は重傷よ。今、蓮華に医務室に向かわせ  
たわ」

「おのれ、曹操!」

祭が憤りを感じてるみたいね

「とにかく、今回は光男のために戦うわ。皆もそれをお願い」

「……………応!?!……………」

そうやって私は前線に向かった

まずは舌戦からよ

「遅かったわね!孫策!」

「はっ！よくもまあそんなに堂々と居られるわね！曹操！暗殺部隊を送っておいてそんな事が言えるものね！」

「なんのこと？」

「まあ、あなたが知っていようとしまいと構わないわ。おかげで神田光男が毒矢を受けて瀕死の重傷よ。この落とし前どう付けてくれるのかしら？」

「な！？」

本当に知らなかったみたいね。でも変わりはないわやった事には

そうして舌戦を繰り返して行った

〈side雪蓮out〉

〈医務室〉

「う・・・うん？」

ここは、医務室か？

「光男！！」

「ん？蓮華か、どうしてここに？」

「あなたが、毒矢を受けて・・・ヒックそのまま倒れてしまったから、私が連れて来たのよ・・・」



「そうか、ありがとうな」

ナデナデ

「でも、本当に良かったわ。あなたが無事で」

「ああ、自分でもびっくりだが……そうだ！雪蓮は!?!」

「ねえ様なら戦場に向かわれたわ。曹操が来てるんですって」

「なんだって!?!それで、場所は!?!」

「す……すぐ近くの平原よ。」

「よし、なら……」

「待つて!!今の体では無理よ!それに……」

「それに?」

「あなた、目は見えているの?」

「あつ」

そうだった。毒矢を受けて俺の右目は完全失明状態だった。こんな格好だとみんなから怖がられるな

そう思って、すぐさま眼帯を作った。某へビの人が付けてたのと同じものだ

キユッ

「よし、これで大丈夫だろう」

「光男、大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だ。それより、行かなきゃあな。こんな無駄な争いで犠牲者は出してはいけない。今頃、皆怒り狂ってるだろうから」

「そうね。私も協力するわ」

「ありがとう。蓮華」

そう言っただけで俺達は医務室を抜け、近くの広場に来た

「光男、どうやっていくの？」

「それは、こいつさ。トレース・オン」

そう言っただけで出したのはUH-1ヒューイヘリコプターだこいつはアメリカ軍で開発されてから長年にわたって活躍してきたヘリコプターだ。武装はM134ミニガンとロケット弾だ

「行くぞ！蓮華、後ろに乗れ！」

「え、ええ！」

そう言っただけで俺達はヘリに乗った

キュイイイン

バラバラバラ

へりは無事に離陸する事が出来た

「待っているよ。皆！」

そう言いながら皆のいる戦場に向かった

ロシアン・ルーレット(前書き)

久々に更新します



私達の軍と孫策軍の間を何かが通った

「なに!?!」

そこで、私が見た物は……

曹操 side out

俺と蓮華は丁度雪蓮達のいる戦場の上空を飛んでいた

「見て!光男、ねえ様突撃を開始したわ!」

蓮華に言われて見ると丁度、雪蓮達を戦闘に全軍が突撃を開始していた

「くそ!蓮華、あれに割って入る!掴まっとけ!」

俺はそう言ってヒューイを無理な方向まで曲げた

(しかし、このままじゃあ両軍に被害が出る、仕方ない!)

俺はそう思ってミニガンを起動させた

ドルルルルルル!?!?!?!?!

発射された弾は見事、両軍の間に着弾し全部が止まった。雪蓮達もなにが起こったか分からないみたいだ

そして、俺達はそのまま、着陸した

「皆！そのまま動くな！」

俺は全体に響くように声を張り上げた

「み、光男！生き返ったの？」

雪蓮が聞いて来た

「ああ、なんとかこの通り、な。まあ、失明は避けられなかったが元気だよ」

「そう。良かった……」

雪蓮が泣きながら言った

「それより、こんな無益な争いをしてもしようがないだろ？」

「でも、それじゃあすまされない世界なのよ。ここは」

「だから、俺に考えがある。」

「………どんな？」

不機嫌そうに言った

「なに………犯人に出て来てもらえばいいのさ。」

そう言って曹操の方に歩きだす

曹操の前に着くと夏侯姉妹が塞いだ

「大丈夫だ。お前らの主に手を出すつもりはない。ただ、話をさせてくれ」

「少しだけだからな」

そう言って引き下がった

「さて、曹操さん、質問があります」

「何？」

「暗殺部隊はあなたの意志ですか？」

「華琳様がそんなことするわけないでしょ!!」

ネコミミフードの少女が言った

「桂花、黙りなさい」

「でも!!」

「いいから!!」

「………はい」

そう言って下がった

「質問に答えるわ。私の指示ではない」



「そうですね。それは良かった」

「?どういこと?」

「いえ、もし、あなたの指示だったらそこまでの人物だと言う事でその場で撃ち殺してたかもしれませんでしたからね。なにしろ、俺の世界じゃあ霸王と呼ばれる人物なんですから」

何気に恐ろしい事を言うもんだ神田よby作者

「で、暗殺部隊はどこに居ますか?」

「捕まえて縄で縛っているわ。それがどうかしたの?」

「その部隊、俺に預からせてもいいですか?」

「それじゃあ私の面目が立たないわ」

「大丈夫です。これは個人の問題ですから、それに穢れた人物ならそれ相応の人物でないと」

そう言ってニヤリと笑った

「そう、分かったわ。春蘭」

「はっ」

「今すぐ連れて来なさい」

「承知しました」

そう言つて夏候惇が暗殺部隊の残りを連れてきた

「は、離せ！この野郎！」

縄に縛られたおっさんが言った。しかもさつき、逃げたやろつじやねえか

「おいおい、あんた、さつき逃げた野郎だろ？」

殺気交じりに言つてやった

「ヒッ!？」

「それに、目を失われた代償は大きいんでな。本当ならその場で撃ち殺したい所なんだが一つ、賭けをしよう」

「か、賭け？」

「ああ、何、簡単なことだ。この銃で自分の頭に向かって撃てばいい。もし、はずれならそのまま逃げてもいいさ」

「けっ！そんな罠に誰が引つか・・・」

ダァン！

おっさんのいた位置の少し前に銃弾を撃った

「ヒッ!？」

「黙れよ。お前らみたいな下等動物に選択権があると思ってるのか？さつさと座れ」

そう言っておっさんたちを座らせた。

因みに発射方法は自分たちでやらせる。撃ち方も簡単に教えた。それでも、こっちに向けるかもしれないからな曹操に頼んでおっさんたちの周りに弓兵を立てさせていつでも撃てるようにしてある

「さあ、始めてもらおうか」

そう言っておつさんと笑った

「はあ、はあ、はあ、」

おっさんは自分の頭に銃口を突き付けて息を荒くしながらなかなか自分で撃とうとしない……が次の瞬間

ダン！

おっさんの頭に銃弾が撃ち込まれた

「あゝあ、さつそく当たりが来たかゝんじゃあ次はゝあんだだ」

そう言っておつさんに銃を渡した時

「た、たすけてくれゝ！」

一人のおっさんが逃げ出した

「おいおい、罪の重さを知らないのか？簡単に逃げられると思うなよ。」

そう言って出したのはバレットライフルM82A1を出した

ドオーン！

弾は見事足を貫通した

「ぎゃあ！あ、あしが……」

「おいおい、仲間を見捨てて逃げるのか？薄情な奴だな。我はそんな奴が嫌いなんだよ。あばよ」

そう言ってデザートイーグルを構えた

「ま、待ってくれ！」

ダァン！

「うるせえんだよ。下衆が」

そう言って残り二人のおっさんのところに行った

「あれで、分かったらろう？逃げても意味はない。ちゃんとやればいいんだ。それじゃあ続きだ」

そう言って銃を持つてるおっさんのほうに向いた

「わ……わかったよ！やればいいんだらう！？」

そう言って銃口を付けた

カチッ

「へ？」

「お、あんたは運が良いな。それじゃあどこへでも行くがいい。ただし、軍には入るなよ？お前の顔を見たときは殺すからな」

そう言った

おっさんは黙って頷いて去った

「さて、あんただけだな」

「お、俺もやるのか？」

「当たり前だろう？一国の主を狙って置いて、ましてや自分の主の顔に泥を塗るような真似さえしたんだからな。俺はどうでもいいが彼女達に気持ちを考えてみる。それがどれほど痛いかわかるはずだ」

「くそ！」

カチャ！

「ほう？」

「こんなもんクソ食らえだ！」

そう言っておっさんは引き金を引いた

カチン！

「へ？」

「残念だったな。今のを自分でやっとならば無罪放免だったが、仕方ない」

そう言っておっさんはM500を出した

「この銃はな今までの奴より強い奴だ。」

「ま、まっけてくれ！」

「残念だな。その要求は受け付けない。さようなら」

ダァン！！

おっさんの額に銃弾を撃ち込んだ

ドサッ

「ふう、終わったな。さて」

「お疲れ様、そんな役を演じきれたわね」

「あら、ばれたか。まあ、これくらいじゃないと迫力がないかなって思っただけさ。それより、曹操」

「ええ、分かっているわ。今は軍を引くわ。これ以上は私にとって無意味だから」

「そうか、それじゃあな」

そう言つて俺は雪蓮の元に戻つた

（孫策軍）

「光男！」

ガバア

「おっと、落ちつけよ雪蓮」

「だ……だつて……光男が……生き返つてくれたんだもん！嬉しいに決まつてるわ！」

「大丈夫さ。俺はこの通り元気そのものさ。まあ、目は失つたがな。片目で十分行けるから大丈夫だろう」

「でも、本当に良かったわ。」

そう言つた後皆も集まりだしている。大変だったが……今の俺にとつちやあ蜀も呉も家族同然だしな。だから、言う事は一つだ

「ただいま、皆」

こうして、曹操軍を撤退させる事が出来た

さあ、帰ろう

俺は曹操軍が撤退してから、しばらくの間、呉で療養をしていた。

その間、祭さんや他の仲間達が見舞いに来てくれたりした。そして、桃香達にもありのままの事を手紙にて知らせた。

さすがに、皆驚いたらしく愛紗などが曹操に攻め込もうとしたらしい。まあ、無理もないけど一応、桃香に抑えるように言っておいたが抑えられるのも時間の問題かな？

さすがに、これ以上はヤバいと思ったので俺は急遽、蜀に帰ることにした

〳呉の城門前〵

「行くのね？」

雪蓮が聞いて来た

「ああ、愛紗とかが暴走したらヤバいしな止められるとしたら俺ぐらないもんだろ。それに早く、皆に無事を知らせたいしな」

「そうね。また、家に寄ってってもいいからね？」

「おう、そんなときは皆を連れて遊びに行くわ。」

「ふふ、そうね」



「それから、冥琳」

「なんだ？」

「このゴタゴタで言えなかったが、あんた体の調子が悪くないか？」

「どうして、そんな事を言う？」

ふむ、まだこの時には気づいてないようだな。なら早めにさせておいた方がいいだろう。史実通りなら周瑜は赤壁の戦いの後、病死する事になっているからな

「いや、なんとなくだけどさ。蜀に大陸一の名医がいるからそいつをこつちに呼ばせておくよ。夢に向かうのも大事だけどさ、ちゃんと自分の体と相談してくれよ？」

「ああ、分かった。すまないな」

「いや、いって事よ。皆が笑って暮らせればそれで構わないんだ。俺は」

「そうか」

冥琳は納得したように言った

「それじゃあ、俺も行くとしますかね。トレース・オン」

そう言って出したのはハンヴェーである

「あれ？光男」

「なんだ？雪蓮」

「あの、空を飛ぶからくりには乗らないの？」

「ああ、その事だがこいつを失っちまったからな。飛ぶにも慣れが必要なのさ。」

そう言って目を指した

「その……ごめんなさい」

雪蓮が暗くなって謝った

「気にすんな。あれは俺が自分でやった事だ。別に後悔はしていない。だから、雪蓮も気にすんな。せつかくの美人が台無しだぞ？」

俺は茶々を入れてやった。だって悲しい顔はさせたくないんだもん

「……もう！そうやって茶化すんだから！」

顔を真っ赤にした言う雪蓮

「ははは！それだけ元気があれば充分だろ。それじゃあ行くわ」

「ええ、気お付けてね」

「そつちに着いたら連絡してくれ」

「応」

ブオオ!!

俺は二人に答えた後、アクセルを全開まで開いた

〔雪蓮 side〕

「行っちゃったね」

「ああ、そうだな」

やっぱり、こつちに残ってほしかったけど光男は蜀の方だしね。まあ敵にはならないからいいかだとしたら、残るは……

「よし！決めた！」

「何をだ雪蓮」

冥琳が聞いて来た

「そんなもの決まってるじゃない。光男をいつか虜にして見せるのよ」

「ほう？これは大胆だな」

「あら、珍しく反対しないわね」

「なに、私も同じ所と言うべきだな」

あら、冥琳も光男に惚れちゃったの？まあ、それはそれで面白いけど

「それじゃあ、戻りましょうか」

「ああ、そうだな。」

そう言っただけで私達は城に戻っていった

（雪蓮 side out）

ブオオ

雪蓮と分かれてから俺は暫く荒野を走っていた

「いや、車を走らすのも久しぶりだな。ここなら標識もないから自由にぶっ飛ばせるぜ」

いや、本当に教習所で習うような標識もないから警察に追われる事もないしな。免許も必要ないしいろいろ、お徳が有るじゃねえか。

そう思いながら走っていると

「ん？」

走ってる先に砂塵が見えてきた

「どっかの軍隊が争ってるのか？いや、それにしても少ない方だしな。」

やっぱりあれか？賊か？地上で最底辺に存在するゴミ集団か？

「やられてるのは……商人か。まあ助けておいて損はないだろう」

そう言つてハンヴィーを賊の集団に突っ込ませた

ブオオオオオ！！！！！！！！！！

「うわ！！なんだ！？」「ぎゃあああ！！！！」

フッフ、ゴミ共の泣き声が聞こえるぜ

そして、突っ込んだ先には商人がいたそれも、他の国の軍隊もいたみたいだな。

「貴様！何者じゃ！？」

おっぱいが特徴的な銀髪の女性が警戒しながら聞いて来た

「あつと、待つて下さい。俺は神田光男、蜀の武官です。」

「蜀の？」

「ええ、まあとりあえずは周りに居る奴らを潰すことにしましょう。話はそれからです。」

「……分かった。よし！一気に敵を殲滅する！わしに続け！」

「うおおおおおおお……！！！！！！！！！！」



そうやって見ると兵士はおろか銀髪の人まで皆、呆けていた

「おい！しっかりしろって！」

俺が声を掛けると

「お、おう！？なんじゃ？」

「だから、号令をお願いしますって言ったんですよ。ここまできたら片っ端から潰さないでだめだ」

「わ、わかっておる！皆の者！わしに続け！」

「「「「「「「「「「「「「「「  
「「「「「「「「「「「「「「  
「「「「「「「「「「「「「「  
「「「「「「「「「「「「「「

そうやって銀髪の人軍隊が突撃を開始した

「さあ、俺も行くかね？」

そう言って構えた。

「そら！」

そう言って足の迫撃砲を使ってロケットの如く手短かにいた賊に向かって突っ込んだ

「く、来るな！」

「んなこと言われても聞かないよ！」

そう言って下からアッパーを掛けた

ドカ!

「ぐは!」

「そろそろそろそろ!」

ダン!ダン!ダン!ダン!

空中に上がった所でハンドガンを連射した。因みにハンドガンはM92Fである。

何故かって?一番安定感があるからさ

「ぐあ!」「ぎゃ!」「ぐへ!」

次々と賊は弾を喰らって倒れて行った

↳数十分後

「よし、終わったな」

「ああ、そのようじゃな」

俺が言った瞬間、銀髪の人が近づいた

「わしから礼を言わせてもらおう。ありがとう」



「良いってことよ。それより、商人達は大丈夫か？」

「ああ、商人達に被害はなかった。そうじゃ、まだ、名を名乗ってなかったな。わしの名前は敵顔、真名を桔梗じゃ、よろしくな光男」

「おう、よろしくって真名までいいのか？」

「なに、わしばかりか部下まで助けてもらったのじゃ返しきれないほどじゃよ。だから、受け取っておくれ」

「分かった。俺には真名はないからそのまま光男で良いよ」

「もしかして、噂される天の身遣いか？」

「まあ、そう呼ばれる事もあるけど、俺はそんな大層なもんじゃないわ」

「そうか、それでは、わしらはこれで失礼する」

「ああ、気を付けてな桔梗」

「ふふ、そっちもな」

そう言って桔梗達はその場を立ち去った

「さて、道のりはまだ長いからな。気楽に行こう」

そう言って俺はハンヴィーに乗った

〜夜〜

ブオオオオ

「ふう、今日はここで野宿かな？」

俺は近くの森にハンヴィーを止めた。そして、周りに赤外線センサーを設置した

ついでにM3自動機関銃も設置した

「さて、飯だ飯」

そう言っつて、軍用食を出した。これは、バックの中に常に入れてある物だ

「ん〜やっぱ、日本産が一番いいな」

そついいながら俺は夕食を済ませるのであった

さあ、帰らう

俺は、呉を出て皆のいる蜀に帰還しようとしていた。しかし、その途中で他の国と賊が争っていて俺はその中に突っ込んだ。

そして、賊を殲滅した後、その国の武将である厳顔こと桔梗と出会った。しかし、先を急ぐらしくそのまま去って行った。

俺もその場を離れ、近くにあつた森で野宿をすることにした。そして、そのまま時間が過ぎ、朝を迎える所であつた

（森）

チュンチュン

「んんもう朝か。飯を炊いて出発する準備でも始めますかね」

そう言つて俺はカロリーメイトを出して口に入れた

むしゃむしゃ

「んんさすがは大〇製薬だな。スネークも愛用するわけだよ。もう一個」

むしゃむしゃ

え？朝飯らしくないって？馬鹿野郎！！戦場じゃあいつ、いかなる時も気を抜いてはいけないとお爺ちゃんに言われなかったのか！？

え、言われなかったのか……それならば仕方あるまい、次からは覚えておくように

っと、話がそれたなでは、いざ桃香達のいる蜀へレッツゴー！！

ブオオオオ

俺は、ハンヴィーに乗り勢いよく森を抜け荒野を進んでいった。

プハー

「ん〜キューバ産の葉巻はレベルが違うね〜」

葉巻を吸いながら運転していた。分かる人とまるでスネークミタイだ。

「まあ、一種の憧れもあったからな。まさか、葉巻まで有ると思わなかったよ。さすが無限倉庫だな。」

ブオオオオ

俺はそのまま荒野の中へと進んでいった

〜数十分後、山の中〜

ハンヴィーで勢いよく飛ばしてそのまま山道へと進んでいった。この山を抜ければ桃香達のいる街はすぐそこだ。

「しかし、こつちじゃあ雨でも降ったのか？地面がグシャグシャだ。」

「

そう。現代ならば気にする事ではないのだが道路を舗装する暇なんてなかったのだろう。ましてや山道なんぞ大勢が通るわけでもない。おかげでスットクを起こしそうになる。

「こいつは舗装が必要だな。帰った時、議題に上げとこう。おっと危ない」

キキー

俺はでつかい水たまりを避けてそのまま進んでいった

「ん？なんだありゃあ」

キキー！ガチャ

ボタン

俺は車を降りてその場所へと向かった

ザザー！

「あちゃ〜こいつは……………」

俺は目の前の事を見て言った

多分、昨日は嵐だったのだろう。橋がこれでもかっつくくらいに壊れて渡れない状態だ。恐らく川が増水して橋が耐えきれなくなりそのまま流れたって具合だろう。きれいさっぱりなくなってるんだもん

「どっすかな〜ここ渡らないと桃香達のところには辿りつけない  
しな」

う〜ん、どうやって渡る？

飛ぶ？

いや、スーパーマンじゃあるまいしできるわけねえよ

作る？

それが一番手っ取り早いが正直、めんどい

何か出す？

そうだな。それが一番いいか

「トレース・オン」

そう言って出したのはM48A2架橋戦車

架橋戦車とは、戦車のシャーシに橋梁を乗せ運搬するものであり、  
必要に応じて橋梁を後架・設置する能力を有する車両である。それ  
により、設置される橋梁は、通常、その軍の主力戦車が通行できる  
設計となっている。また、主力戦車を改造し架橋戦車としている例  
も少なくない。

「よし、こいつがあれば十分だろう。それ、ポチツとな」

ウイイイン

ガチャン！

そして、見事に橋が完成した

カン、カン、カン

「うん、我ながらすごいね〜と言っても出したんだけど」

そういつてハンヴィーに乗った

ブオオオ

そして、見事に通過しそのまま通り過ぎて行った

「よし、後はこのまま突き進むだけだな。のんびり行こうつとまだ、日もあんなに高いんだし」

日は丁度昼時を指していた

グウウウウウ

「およ、腹の虫が鳴ったか。じゃあここら辺で飯にするかな〜」

そう言つてハンヴィーを止めタクティカルバックから食料を出そうとした。その時！

ガサガサ

「!?!」

近くの草むらから物音がした。慌ててガバメントを音のした方向に向けた。

「誰か、いるのか？」

一応、声を掛けて見る。撃って倒したのが人間でした。ってオチは作りたくないからな

ガサガサ

だが、声を掛けても草をかき分ける音しか響かなかった

「気配的には、こっちに来そうなんだけどな」

ガサガサガサ

！一気に近づいてきやがる。来るなら来い！

・・・・・・・・・・そして、出てきたのは・・・・・・・・

「プギー！」

・・・・・・・・・・

「なんだ、子供の猪かビックリさせんなよ。ほれ、うまいぞ」

そう言ってビーフジャーキーを猪に向けて投げた

「プギー？」



猪は一瞬、戸惑ったがしばらくして

ハグッ

ビーフジャーキーを食べた

「おいおい、そんなにがつつくなよ。喉に詰まるぞ」

そう言いながら俺はカップラーメン（味噌味）を食べた

ズズ

「ん〜久しぶりのインスタント食品だな。やっぱりイケるぜ」

そう言いながら昼食を済ませて言った

「さて、昼飯も済んだ事だし出発するとしますか」

そう言った瞬間

ツンツン

「ん？どうした、まだ、帰ってなかったのか？」

「プギ！」

どうしたんだ？この猪は懐いちゃったのか？

「お前、仲間はいないのか」

「・・・プギ」

そうだと言わんばかりに落ち込んでいた

「なら、一緒に来るか？俺は今帰りなんだ」

「プギ！」

そう言っただ元をクルクルと回っていた。よっぽど嬉しかったのだ  
ろう

「じゃあ、こっちに座ってくれ」

そう言っただ子猪を助手席に座らせたが・・・

「プギー！プギー！」

「ん？嫌か。じゃあここで大人しくしててくれ」

そう言っただ頭の上に乗せた

「プギー！」

今度は落ち着いてくれたみたいだ

「よーし、じゃあ出発すんぞー」

「プギー！」

返すように鳴いてくれた

ブオオオ

「あっそつだ、お前の名前を決めなきゃな」

「プギ？」

子猪は頭に？マークが見えるような鳴き声を出した

「ん〜じゃあ雷電ってのはどうだ？」

「プギ！プギプギ！」

おっどつやら喜んでくれたみたいだ。

「よし、じゃあ今からお前の名前は雷電だ！」

「プギ！」

「よし、雷電、一気に帰るぞー！」

「プギー！」

そう言いながら俺達は進んでいった

ついた

俺と雷電（子猪）はハンヴィーで山を抜け無事に桃香達のいる町にたどり着いた。

「いや〜久しぶりだな〜街もずいぶん大きくなったもんだ」

俺は、遠くから街の様子を見ていた。そして、ハンヴィーで街の入り口まで着いた

「貴様！何者だ！」

あれ〜？桃香は雪蓮からの手紙をもらってないのか？俺がついたらすぐに迎えを回すと聞いていたが、門番の青年は最近に入った子かな？見慣れない顔だしな

「いや〜街がずいぶん大きくなったもんだな。君、所属は？」

「は？何を言っている。怪しい奴め」

そう言っつて青年は槍の矛先を俺に向けた

「だから、所属だよ」

「まさか！他の国の密偵だな！」

あれ？また勘違いされているしまあ、これはこれで面白いしな

「ああ、そうだ。最近、劉備軍が大きくなったと聞いてなどんなど

「ころかと思っただ。」

「そう言いながら俺は、不気味にニヤリと笑った」

「そんなことはさせない！劉備様の所にも一歩も行かせぬわ！」

「そう言っつて槍を俺に向かって突いた」

「ヒュン」

「おっと、怖い怖い」

「そう言いながらCQCの応用で槍を避けた」

「くそ！くそ！なぜ当たらない！」

「青年は当たらないことにイラついているようだ」

「まだまだ、甘い新兵」

「俺は鼻で笑いながら言った」

「貴様——！！」

「青年は渾身の一撃で仕留めようとしたみたいだ。しかし……」

「だ——！！やめろ——！！」

「門の奥から声が聞こえた」

「は？た、隊長！」

そう言つて敬礼した

「お前、この方をどなたと心得ているんだ！」

「は、他の国の密偵かとも思ひまして……」

ゴチン！！

「馬鹿野郎！！こんな堂々と密偵だつて言う奴がどこに居るんだ！  
……さて、」

男はこちらに振り向いた

「お久しぶりですね。光男様」

「おう、元気そうで何よりだよ。阿網」

そう。この男こそかつて、光男の副長を務めた男である。

「ええ、こちらは元気そのものですよ。光男様もよく御無事で」

「まあな、目を失つちまったがこの通り体はピンピンだよ」

「はっはっは、そうですね。」

俺と阿網は笑い合つて再会をした

「あ、あの、隊長」

「ん？なんだ？」

「こちらに居るお方は」

「ああ、この人は俺に生きる希望をくれた人だよ。蜀の王であり、  
我らが総大将様だ」

そう言っつて俺を讃えるように言っつた

「よしてくれよ。阿網、俺はそんな器じゃない。どちらかと言えば  
桃香が適任だ」

俺は照れながら言っつた

「そう言わずに我らにとってあなたが総大将なんですから」

「こ、これは失礼しました！！！」

「ん？」

「さ、先程は失礼な態度を取っつてしまい申し訳ありません！」

そう言いながら青年は土下座をしていた

ポン

「へ？」

俺は青年の肩に手を置いた

「気にするな。門を守るゆえにした行動だ。門番としてはしっかりと働いてくれているようだしな。それでいいんだ」

「で、ですが……」

「はい、そこまで、俺が気にするなと言ったんだ。気にしなくていいんだ」

「分かりました。」

青年はそう言うと敬礼をした

「さて、阿網、皆の所に案内してくれるか？」

「もちろんですとも」

そう言って俺は阿網について行った

く城内く

「いやく広くなつたね」

俺は城をみながら言った

「ええ、ここ最近で劉備様の名声が広くなりましたね。以前よりも多くの人がここに来るようになりました。おかげでこっちは大忙しですけどね」

阿網は笑いながら言った



「そうか、悪かったな。俺の我儘を聞いてくれて」

俺はそう言った

「いいんですよ。私は最初からあなたについて行く決めていましたから、その選択が我らにとっても優良な選択なんですよ」

「ありがとうな」

「いえ、あつここです。みなさんここにいらっしやいますから」

そう言って一つの扉の前で止まった

「さて、行きましようか」

俺はそう言った

〈休憩室〉

「失礼します。劉備様、お客人です」

「あつ阿網さん、お客さんですか？」

「ええ、お通ししてもよろしいですか？」

「うん、いいよ」

「では、こちらへ」

阿網の合図で俺は部屋の中へ入った

「久しぶりだな。皆」

ポカーーン

「……あれ？」

何、この空気、俺、やっちゃった？

「ご、ご主人様……！！」

ポフッ

「おわつと!？」

桃香が抱きついて来た

「ご主人様だ ご主人様だ」

泣きながら言っていた

「ただいま、桃香、それに皆」

「ご主人様、御無事で何よりです」

愛紗が言ってきた

「ああ、ずいぶんと迷惑を掛けたな。愛紗」

そう言って愛紗の頭を撫でた

「いえ、本当に御無事で何よりです。」

若干、目に涙を溜めて言った

「光男く久しぶりやな〜」

「ああ、霞、久しぶりだな。元気にしてたか？」

「もっちらんや、それに光男に勝てるよう修行もしたさかいにな」

「ほんとか〜だったらせひおて合わせ願いたいよ。」

そう言って霞の頭にも手を置いた

「ご、ご主人様」

「おっ月か〜久しぶりだな。どうだ？仕事は慣れたか？」

「はい、だいぶ慣れました。」

「そうかそうか」

俺はにこやかに笑った

「そつや！〜！」

「どうしたんだ？霞」

愛紗が聞いた

「せっかくやし、宴、開こうや！光男の帰還祝いとして」

霞が提案を言う

「あー！いいね。やろつやろつ！」

いつの間にか泣きやんでいた桃香が言った

それに続いて次々と賛成の声が上がった。そして、急遽、宴会が開かれることになった

〳大広間〳

「それじゃあ、ご主人様の帰還を祝って、乾杯！」

「「「「「「「「「「「乾杯！！！！！！」

桃香の合図を元に宴会が始まった

「すごいな、俺のためにわざわざやってくれてありがとうだな」

俺は桃香に言った

「うつん、いいの祝いたいのは皆同じだから」

「そつか」

そう言って近くの酒を口に入れた

「あっ！そうだ、ご主人様に紹介したい人がいるんだった」

そう言って桃香は席を離れた

「主」

星が声を掛けてきた

「星か。久しぶりだな」

「ええ、主もお元気そうで」

「そうだな。とは言っても右目はなくしちまったし、いろいろ大変だったぞ」

「ふふ、そうですね」

そう言いながら星は自分の酒を飲みほした

「ほら、」

そして、俺がすぐに酒を入れてやった

「ありがとうございます。主も」

「悪いな」

お返しに星に酒を入れてもらった

その時

「ご主人様」

桃香が来たみたいだ

「なんだ？桃香」

「ご主人様に紹介したい人がいるんだ！さっ」

そう言っつて桃香の後ろから二人の少女が出てきた。一人は愛紗と同じポニーテールで栗色の髪をした女の子、もう一人はそれをちっちやくしたバージョンだ

「初めまして、あたしは馬超っつていうんだ。よろしく」

「同じく、馬岱です！」

「初めまして、俺はみた事は有ると思うけど神田光男だ。よろしく」

そう言っつて手を出した

「・・・これは？」

「握手だよ。これからもよろしくっつて意味合いです」

「よろしく」

そう言っつて握手してくれた

「それで、二人はどうしてここに来たんだい？」

俺は二人に聞いた

「・・・曹操が私達の土地に攻め込んできて、一族もろとも滅ぼされてしまった」

震えながら言った。きっと悔しいんであろう

「そうか、で、二人だけが脱出してここに辿りついた。そう言う訳か」

二人は黙って頷いた

「つらかったろう。今は大いに心を落ち着かせてくれ。」

俺は二人の頭を撫でながら言った

「だけど、復讐だけは考えるなよ。それをやった所で何も解決しない、だが、いつかは曹操と対峙する。その時までしっかりと己の信念を貫くんだ」

「・・・ああ！分かった」

「分かったよ！」

二人は吹っ切れたように言った

「じゃあ、改めて、名は马超、真名は翠だ。よろしくなご主人様」

「私も！名は馬岱、真名は蒲公英だよ！よろしくね。ご主人様」

二人は真名を許してくれたようだ

「ああ、これからもよろしくな、翠、蒲公英」

その後は大宴会になって行った。

こうして光男は無事、蜀に帰還できたとき



## 現代の料理

俺が蜀に帰還した後、宴会を開いてそのまま夜通しでぶっ続けた。次の日が大変だった。ほとんどの武将は飲んだくれになり、生き残ったのは俺、霞、星、蒲公英、鈴々ぐらいで残りはベッドで休んでいる。

因みに、月や詠はメイドの仕事があつたため宴会には参加できなかった。

〈自室〉

「うーん、ここがこうで、こうなるから……」

俺はいつも通り仕事を行っていた。しかし、桃香や朱里などの主要な人物がいないためほとんどの仕事を受け持つことになってしまった。……正直言つてキツイ

「皆、大騒ぎしてたからな。俺は途中で行方をくましましたけど、」

皆が大騒ぎをしてた頃、俺は外で阿網や他の兵士達と飲んでた。男同士の付き合いも大切だからなそんなこんなで俺はなんとか無事だったわけだが、戻って見た時は力オスだったな。一人一人、それぞれの部屋に運ぶときなんかドギマギしたもん。

スラスラ

「よし、午前の部の仕事は終わりっつと！」

そう言いながら筆を置いた。

「おっ？そろそろ、昼時だな。食堂へ行こうっかな？」

俺はそのまま食堂へ向かうことにした

〈廊下〉

「ふんふんっふん」

若干鼻歌を歌いながら廊下を進んでいると

「光男」

「ん？」

後ろから声がしたのでみて見ると

「おっ。霞」

「光男、どこ行くん？」

「これから、食堂へ向かおうと思っていたのだがそう言う霞は？」

「うちも訓練が終わったから昼食へに行こうかなって思ってた所  
や」

「そうか。なら、一緒に行くか？」

「うん！」

そう言って俺と霞は食堂に向かうことにした

（食堂）

食堂に着くとほとんど人はいない状態だった。兵士達はもう食ったのかな？

「人はほとんどいないな」

「仕方ないやん。兵士達は忙しいんやから」

「そうか。それなら仕方ないか。と言っても厨房にも人がいないな」

厨房にも誰もいなかった

「そつやねどこいったんやろ？」

「仕方ない。自分で作るのでしょうか。」

「えっ？光男、料理できるん？」

霞が聞いて来た

「まあ、ある程度はな。向こうじゃあ一人暮らしたつたし」

そう言って俺は厨房に入った

「さて、何を作るとしますかな？」

中華料理とかはほとんど食ってきたしな、正直言っただ飽きた。たまには欧米料理でもいいかな？

「倉庫には何かあるかな？」

そう言っただ探ってみた

「おっ、豚肉かゝりだしたら、ドンブリ系にするか。」

まずは、ブタを食べられる大きさまで切って、

ストーンストーン

「おお〜！」

霞が俺の包丁捌きを見て驚いているようだ

「霞、料理したことないのか？」

「うん、うちはほとんど食べる専門だったしな。」

なるほど、そういえば呂布も確か食べる専門だった気がする。理由は………なんとなく

豚肉を焼いている間にタレも用意してしまおう

そう思っただ用意したのは塩ダレ、味噌ダレの二種類だ。他にもあった気がするけど覚えてないからいいや。

あとは簡単だ。ご飯を盛って、その上に豚肉を乗せてその上にタレ

を乗せる

「よし、完成だ」

「おお〜！」

霞が完成品を見て歓喜の声を上げた

「で、光男、これなに？」

「驚いていてそれかよ。これは俺の世界にあった塩ダレ豚丼だ。結構うまいぞ」

そう言って霞の分も出した

「へ〜、これが向こうの料理か〜頂きま〜す！」

そう言って霞は口を大きく開け豚丼を一口食った

パクツモクモク

「どうだ？」

「めっちゃ、うまいやんけ〜！これ」

そう言って霞はバクバクと食っていく

「ほらほら、そんなに慌てるな。喉に詰まるぞ〜」

そう言いながら俺も一口食べていく。

「うん。我ながらうまい。」

そう言っただけでもどんどん食べていく。

そうして昼を食い終えた。

「は、うまかったな。あれ、光男、また作ってくれへん？」

「ああ、いいとも。ただし、俺が暇なときな。忙しいととてもとも」

だが、この言葉がいけなかった。

次の日、いつも通り、仕事を終えて、食堂に行くとき皆（武将のみ）が揃っておりどうしたのかと聞くと俺を待っていたのだと言う。

「なぜ、こうなった」

俺は厨房で現代の料理を作っていた。

そして、皆は俺の作った料理を食べまくっていた。

「おいしー！！」

桃香が大きな声を上げながら言った

「まあ、皆が喜んでるからいいかな？フフ」

俺はそう言いながら次の料理を作って行った

## 侵攻作戦

現在、俺達は次の作戦のために軍議を行っていた

それは、領土を広げる事である。いくら、優秀な将や軍師、民が多かるうと土地がそれに見合う分の物が無ければ繁栄する事は難しい物である。

そのための軍議なんだ

「現在、同盟国の呉は着々と領土を広げています。曹操さんも、同じく領土を広げており、近くの諸侯はほとんど、降伏を行っていません」

朱里が現状の説明をした

「こつちも民は入ってくるが、土地がもう少ないんだよな」

俺が愚痴るように言う

「そうですね。これだと、逆に民が出て言ってしまう可能性もあります」

朱里が補足する

「現在、そのままの国はあるのか？」

愛紗が聞いて来る

「はい、蜀という国とその周りが独立状態です」

「なら、そこを攻めちゃえばいいんじゃないかね？あそこの太守は支持率がかなり低いみたいだし」

俺が提案を出した

「ですが、出すとしてもこの守りも考えなければなりませんぞ。主」

星が言ってきた

「そうだよな。それが難しい所だ」

俺はふうふうとため息をつきながら言った

「それに進軍をするにも結構、掛かります。すべて落とさない限り、これは破れないと思います」

と朱里が言った

「よし、ここは公平にくじ引きをしよう」

俺は思いつきで言っただけを見た

「……………はあ!?」「……………」

すると、予想通りの答えが来た

「何を言っているのですか!?!?」



愛紗が言ってきた

「まあまあ、聞けつてどっちにしる決めなきゃいけないのに、ずっとこのままじゃあ取り残されて行くだけだぞ。そうだったらせつかく付いて来てくれた兵士や民に対して申し訳ないじゃないか」

「そ……それはそうですが……」

愛紗は戸惑っていた

「だったら、くじで引いちゃった方が公平的に決められて良いじゃないか。因みに行き組は俺が筆頭、残り組は桃香だからな」

「私は残り!？」

桃香が驚いた声を上げた

「しょうがないだろう? こっちは政務が必要なんだ。桃香は勉強がてらしつかりとやってもらわなきゃな。大守なんだし」

「うゝわかったよ」

若干ふて腐りながらも了承した桃香であった

その後、みんなでくじ引きを行ってそれぞれの配役が決まった

進行組

俺、愛紗、翠、朱里、星、蒲公英

居残り

桃香、鈴々、霞、雛里、白蓮

と言う風になった。霞が駄々を捏ねていたがなんとか抑えた。それから、いろいろ準備して二日後に出発する事になった

「出発の日」

「さて、皆、準備は良いか？」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

全員が元気よく返事をしてくれた

「トレース・オン」

俺はいつも通りハンヴィーを出して乗った

ブオオ！

「じゃあ、桃香行ってくる」

「うん、無茶はしないでね？」

「当たり前だ。こんな簡単に死んでたまるかよ」

そう言って俺達は出発した。

「荒野」

俺達は出発をして暫くしてから休憩を挟むことになった

「ふう〜結構長旅になるな〜」

「そうですね」

ハンヴィーの上で俺と朱里が今後の事について話し合っていた。

「それにしても、城が多いように見えるな」

俺が言った

「そうですね。この辺りは昔、一国の王によって統制されていたみたいでその名残かと思われませうね」

朱里が説明する

「なるほど、敵戦力を徐々に削って行って本国には辿りつかせない寸法か」

「はい、その通りです。」

現代戦なら戦車と航空機があればそれぞれ、分散して敵にあたれらんだけどな〜そこは難しい所か……………

「ご主人様」

「ん？なんだ、翠」

馬に乗った翠が現れた

「さつき、放った斥候が戻って来たぜ」

「おっわかった。じゃあこっちに来るように伝えてくれる？」

「わかった」

そういつて翠は元いた場所に戻って行った

「とりあえず、斥候の話を聞きましょうか」

朱里が言った

「そうだな」

そう言つて暫く待った。

そして、斥候が俺達の所に来た

「街の状態はどんな感じだった？」

俺が聞いた

「はい、街は穏やかでしたが、兵士たちが慌てておりました」

「兵士たちが？」

「はい、それで、町の住民やらに話を聞くと袁紹が太守・黄忠殿の

娘を誘拐したとの情報が手に入りました。そして、袁紹も我々が近づいているということに気づいているみたいです」

なんとまあ、あの野郎懲りずに人道を外れやがったか。

「分かった。ありがとう。休んでていいぞ」

「はっ失礼します」

そう言って斥候が離れて行った

「朱里、至急皆を集めてくれ」

「はい、分かりました」

そう言って朱里は走って行った

数分後、皆が俺の元に来た

「話とはなんですか？ご主人様」

愛紗が聞いた

「うむ、実は斥候からの報告なのだが、今、目指している城の太守の娘が袁紹によって誘拐されたらしい」

「「「「なっ！？」「」「」

俺と朱里以外は驚いた様子だった

「袁紹め、ろくな事を起こさないな」

翠が怒った表情で言った

「そこで、急遽作戦を変更する。作戦内容は……」

俺はそこにいる人物だけに今回の作戦内容を言った

〈黄忠軍の城壁〉

「ん？」

「どうした？」

「あそこに見えるのは砂塵じゃないか？」

そう言って指さした

「あれは………劉備軍だ！」

「おい、すぐに黄忠様に報告だ！」

「お。おう！」

そう言って一人の兵士がすぐさま城壁を降りた

果たして、光男の作戦とはどういうものだろうか？それは次回、明らかになる

## 愛紗の決闘＋ゲスト登場

俺達は領地を広げるために蜀と言う国を攻略する事になった。しかし、その手前にはたくさんの城が構えており、こいつらを一つ一つ落とさなければならなかった。

そして、一番最初に見えた城を落とすことになったのだが、その太守、黄忠の娘が馬鹿袁家に誘拐されたとの情報が斥候より届き急遽、別の作戦を立てることになった。

その作戦とは表で派手にやっている間に別働隊が黄忠の娘の救助を行う作戦だ。

別働隊には蒲公英と星が行く事になった。だが、二人だけでは頼りないのでもう一人援軍を呼ぶことにした。

「ご主人様、もう一人呼ぶと聞きましたが、一体誰なのですか？」

愛紗が聞いて来た

「まあ、待つてな。もう少しだから」

そう言って俺は城とは逆の方向を見た

すると、水平線の向こうから砂塵が出てきた

その正体は一台のハンヴィーであった。皆、身構えたが俺が手を出すとは皆はそのまま降ろした。

そして、ハンヴィーは俺達の前に止まった。

キキーツ!!

「サンキュー、クリス、それじゃあな」

一人の男が出てきた。

彼は、BSAA学園の生徒、北郷零斗くんである。彼はマイティ真拳の使いでどんな技でも出せるのである。因みに恋姫無双の北郷一乃くんの従弟である。

ハンヴィーはそのまま来た方向を戻って行った

「よく来てくれたな。零斗」

そうやって俺は敬礼した

「いきなし、ウエスカー理事長の依頼が来たと思ったらこんな所に連れて行かれるとはな。まあ、よろしく頼むぜ」

そうやって零斗も敬礼した

「それで?どんな依頼なんだ?」

零斗が聞いて来た

「ああ、実は……」

俺はこれまでの経緯と今回の依頼を話した。





「分かった」

そう言っつて二人は零斗から離れて行く

「さて、俺も始めるとしますかね。マイティ真拳奥義ウエスカー理事長の嫉妬ウロボロス」

そう言っつと零斗の周りが若干黒くなる。だが、本人にはそこまでの影響はない。ただ単に身体能力などの向上に繋がるだけなのだ

「さて、情報だとこの近くに袁紹の兵士がいるらしいが……  
いた」

大通りから外れて裏道に繋がる通路の奥深い所に金ぴかの鎧を着た兵士が五人ぐらいいた。俺はそこまで移動する事にした

（裏通り）

俺は何とか奴らのいる家の付近まで来ていた。反対側を見ると星と蒲公英も来ていた

家の前には金ぴかの兵士が五人で屯っていた

「マイティ真拳奥義二丁拳銃レヴィ」

そう言っつと手元に二丁のハンドガンが出てきた。これはブラックラグーンのレヴィが持っている二丁拳銃である名はソードカトラス

こいつがあれば十分だろう。まずは俺が出て馬をけん制する事にな

った

「おい！なんだ、貴様は！」

一人の金ぴか兵士が叫んだ

「お前らが誘拐した娘を助けに来たんだよ。阿呆が」

「なんだと！でりゃあ！！」

そう言っつて兵士が突っ込んできた

「おせえよ」

ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！

あっと言っつ間にそこに居た兵士はやられた

その後、星達が出てきた

「すごいですな。零斗殿」

星が誉めた

「なあにこんなの朝飯前よ。さて、さっさと片付けるか」

そう言っつて三人がドアの前に立つ

ガタン！！

「動くな!!」

部屋の中には兵士が三人と袁紹、文醜、顔良がいた。袁紹の近くには黄忠の娘がいた

「な、なんですか?!?あなた達は!」

袁紹が叫ぶ

「うるせーよ。それより、その子を返してもらおうか」

「それは駄目ですわ!」

ダァン!

「ヒッ!?!」

一発の銃声と共に袁紹が小さく声を上げた

「ガタガタ言うんじゃないやねえ!!さっさと渡せ!」

袁紹は光男に銃を突きつけられているのがトラウマになっている

「わ、分かりましたわ。」

そう言っつて娘を解放した

「大丈夫かい?お譲ちゃん」

「うっ……こ……こわかったよ」

娘は泣きながら言っていた

「よしよし、お母さんの所に行こうか。そういえば名前は？」

「うつく……璃々」

「璃々ちゃんか良い名前だな。星、蒲公英出るぞ」

「「応！」」

二人は袁紹達に武器を構えながら外に出た。

「よし、早く、光男の所に行くぞ」

そう言っつて俺達は城外に出るために向かった

（零斗パート終了）

「そら！いけいけいけ！！！！」

俺は前線に立っつて戦闘を指揮していた

装甲車を出して兵士の楯にしていた。因みに装甲車は89式偵察車である。

「装甲車隊、前へ出る！」

ブオオオ！！！！

五台出していた装甲車を横に一列に並べた

カン！カン！カン！カン！

矢のほとんどが装甲車に直撃して行った

「おい！門が開くぞー！」

一人の兵士の叫びと共に門が開いて行くのが分かった

そして、そこから一人女性が出てきた

「全軍、攻撃やめい！！！」

俺が指示を出すと全員戦闘行為をやめた

「あなたは何者ですか？」

俺が近くまで行き、聞いた。愛紗隣に立っている

「私は黄忠、ここで決闘を申し込みしますわ」

「なるほど、我々が勝てばそちらは降伏すると言つことですか」

俺が言った

「ええ、そうよ」

「そうか。愛紗」

「はい」

そう言っつて愛紗が一步前に出る

「我が名は関羽、貴様の決闘私が受けよう！」

そう言っつて青龍堰月刀を構えた。黄忠も自分の得物弓を出した

「それじゃあ、見届け人は俺が引き受ける。両者始め！」

そう言っつて俺は一步引き下がった

.....

長い沈黙、これはお互いに相手の出方を待っているな

そして.....

「フツ！」

先に動いたのは黄忠だった

シュシュシュ！！

矢が愛紗に向かって飛んでいく

「はぁ！！！！」

ザキン！ザキン！ザキン！

愛紗は矢をすべて落として行く

その攻防が数分間続き……

「やるわね。関羽」

「そちらこそ」

お互い、体力の限界だろう次の一手で決まるはずだ。零斗達はまだか？

とその時

「その勝負、待った！！！」

「……来たな」

俺は小さく笑った

「な、何！？」

黄忠は突然の事で分からなかったみたいだ

「おかあさくん！！！」

「璃々！！！」

お互いに抱き締めあっていた



「よっ 零斗」

「おっす光男」

互いにハイタッチをする

「おかあさん、おかあさん!!」

璃々はわんわん泣きながら黄忠を抱きしめていた

「璃々、本当に良かった」

黄忠もまた、娘を強く抱きしめていた

「良かったな。黄忠殿」

愛紗が近づく

「ええ、ですがどういふことですか？」

黄忠が最もな質問をする

「それは俺が説明しよう。」

「あなたは？」

「俺は神田光男、以後よろしく頼む。で、説明に入るが、俺達はあんたらの主である。蜀の王が私腹を肥やし民には目もくれぬ有様で許せないと思い、出て来たんだ。その途中、黄忠の娘が袁紹に誘拐

をされたと聞いてな。別働隊で救助を行う間こっちは派手にやっつたと言っ訳さ。」

「そう。そうでしたの」

黄忠は納得したようだ

「まあ、それともう戦意はこちらはないんだが、懐に隠してある。短剣は刺し違えにでも使うつもりだったか？」

「あら、ばれてましたのね」

そう言つと懐から短剣を出し下に落とした。

「こちらとしても、危害は加えたくはない。全部はそちらの主がいけないからだ。」

「ええご尤もですわ。私は自分の街と娘がいればそれで良いと思つていました。しかし、これでは乱世には乗り切れません。そこであなたにお願いがあります」

「何でしょう？」

「私を仲間に加えては頂けませんか？」

そう言つて黄忠は臣下の礼を取る

「もちろん！仲間に加わつていただければなら大いに歓迎します」

「では、改めて姓は黄、名は忠、字は漢升、真名は紫苑です。よろ

しくお願いしますね。ご主人様」

「ああ、よろしく」

そう言って互いに握手をした

「では、ご主人様。私の城へと案内します。付いて来て下さい。」

「ああとその前に、城壁が壊れちゃったな。直しておこうか」

そう言って城壁を見た。所々が89式のチューインガンによって損傷していた

「そうですね。でも、これぐらいなら」

「いや、ちゃんとやらせてくれ。費用はこちら持ちだ」

「そ、そんな、いけませんよ。ご主人様」

紫苑はタジタジになった。

「大丈夫だ。家にはそれだけの人員とこれがある」

そう言って重機を出した。

「まあ」

紫苑は驚いたようだ

「これが俺の能力さ。それじゃあ皆、もう一仕事やるぞ……」



愛紗の決闘＋ゲスト登場（後書き）

「どうも、作者です！」

「光男だ」

「桃香だよ！」

「いやー今回も無事に終わったね」

「ああ、そうだな」

「そうだね」

「おっと、今回はゲストがいるんだった。零斗くん」

「ういゝす」

零斗が暖簾をくぐりながらやって来た

「おっす零斗」

「こんにちは、零斗さん」

「こんにちは、てか作者」

「なに？」

「今回、出番少なくなね？ゲストとはいえ」

「大丈夫大丈夫、次回も出演予定だから」

「マジ!？」

「ああ、だから、安心して待っておけ」

「えくん。私、出番ないよう!」

「桃香も安心しろ。ちゃんと出してやるから」

「本当に!？」

「ああ、だから今晚俺の部屋に……」

「はい作者、そこまでしておこうか」

「なんだよ?光男、今いいとこ……!?!」

作者が振り向いた瞬間、そこには般若がいました。

「g!%I(&'VISOW<)^O^)/」

「作者、酷い事になってんな」

零斗が言った

「気にすんな。いつもの事だ。それじゃあ今回は零斗がやってくれ」

「了解!じゃあいくぞ。……次回もお楽しみに!?!」

## 仲間になるか？パート1

俺達は紫苑の城で一晩夜を明かした後、次の城へと向かうため行進していた。もちろん、零斗君にも引き続き手伝ってもらっていた

そんな途中……

「なあ、光男」

「なんだ？零斗」

俺と零斗はハンヴィーで移動していた。

「どうなんだ？彼女達とは」

「どっつて？」

「だから、仲良くできているかってことだ。いろんな意味で」

「……！！！！」

零斗の言葉の意味がようやく分かった俺

「ななな！！！！何をい言ってるんだ！？」

「そのまんまの意味さ。どんな時でも彼女達はお前の期待に応えようとしている。それは俺が見ても分かるほどだぞ。なのに、お前はそのまんまの状態を維持している俺の言ってる意味が分かるか？」

「……んまあ、なんとなくは分かるさ。」

俺は静かに答えた

「ま!どうするかはお前次第だけど、あまり焦らすなよ?」

「わかってらい。それより次の城が見えるぞ」

そう言って戦闘態勢に入った

「光男、ここの太守はどんな奴なんだ?」

零斗が聞いて来る

「情報だとロクな奴じゃない。私腹を肥やし何でもかんでもやりた  
い放題だそうだ」

「そうか。じゃあ、一発派手に行きますか?」

零斗は笑いながら聞いて来る

「OK、派手に行こうか」

そう言ってハンヴィーをドリフトさせ止めた

ガチャガチャ

それぞれがドアから出た

「愛紗!」



俺は愛紗を呼んだ

「はっ！ここに」

愛紗はすぐに来た

「俺と零斗が一発派手にブチかますからその後、全軍で制圧作戦を行ってくれ。紫苑は弓部隊を率いて愛紗達を援護してくれ」

「分かりました」

「分かりましたわ」

愛紗と紫苑が答える

「それじゃあ零斗行くぞ。」

「応！」

そう言って自分達の武器を出す。出すのはもちろんあの武器だ

「トレース・オン」

「マイティ真拳奥義、バイオハザード専用武器」

そして、二人の手元には大型の武器が現れた

「行くぜ！四連装無限ロケットランチャー！！！！！！」

そう言つて城に向かってロケット弾を発射した

バシユバシユバシユバシユ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

弾は城に向かって行き……………

ドカーン！ドカーン！

弾は見事城に直撃した

「今だ！愛紗！」

「はっ！行くぞ！お前達！今こそ関羽隊の力を見せるぞ！」

「……………応！」「……………」

「あらあら、愛紗ちゃんやるわね。黄忠隊も負けてはられないわね」

そう言つて両者は競い合うように攻撃を始めた

そして……………

無事、城を制圧する事が出来た。そこに住んでいた住民たちは俺達に対し感謝をしていた。

「よし、次の城に向かうか」

俺がそう言った瞬間

「あの・・・ご主人様」

紫苑が声を掛けてきた

「どうした？紫苑」

「次の城ですが実はその太守は今までの太守より一筋縄ではないかない者です」

「誰なんだ？」

零斗が聞いた

「敵顔という者ですわ」

「敵顔？・・・ああ！桔梗か！」

俺は記憶を巡らせ辿りついた答え

「知っているのですか？ご主人様」

「ああ、呉から帰る時、丁度、商人が賊に襲われている所に出くわしてな。そのときに助けたんだ。真名も本人から許してもらっている」

「そうですか。」

「だったら、戦わなくて済むんじゃない？」

零斗が言った

「いいえ、もう一人。こっちが問題ですわ」

「誰なんだ？」

俺が質問した

「魏延ですわ」

「魏延か。」

歴史では劉備軍に入って太守まで昇りつめた。諸葛亮と仲が悪いで有名だ

「ですけど、彼女達もこちらの実力が分かれば彼女も納得するでしょう」

「なるほどな」

俺は考えるように言った

「よし、一旦話を持ち込んで見よう。だけど、それが駄目な時は実力で分かせてやる」

「それでしたら、私も手伝いますわ」

「ありがとう。紫苑」

そう言って準備を始めた

「それじゃあ、紫苑、始めてくれ」

「ええ、分かりましたわ」

そう言って弓矢を構えた。矢には紙が添えられている

ヒュン！

矢は城に向かって一直線に向かって行きやがて見えなくなった

「よし、後は待つだけだな」

そう言って相手の出方を待つことにした俺達であった

## 仲間になるのか？パート2

俺達は次の城を落とすため進軍していた。しかし、次の城は桔梗が納める城が待ち構えていた。そこで、紫苑に頼んで矢文を城に向けて放って様子を見ていた

「どう出てくるかね？」

俺が言った

「さあ？お前の知り合いとはいえそう簡単に聞くとは思えないからな」

零斗が言った

「まっ相手が出るまで様子を見よう」

そう言っつて俺達は城外で待機していた

そして、数分後

ギギ

城下町の城が開いた

そして、その中から桔梗やその他の武将が出てきた。

「久しぶりだな。桔梗」

俺が言った

「ああ、久しいな、光男」

「矢文は読んでくれたか？」

「ああ、私もできればお前との戦はしたくない。しかし、他の者が納得いかなくてな」

その時だった

「貴様が光男か!!」

横から殺気がこつちに向かっていた

「おっと」

ヒュイ

ドコーン!!

俺がいた所にクレータが出来ていた

「焰耶!! やめんか!!」

桔梗が大声で叫んだ

「し、しかし……」

「しかしもかかしもあるか!!」

「まあ、待てよ。桔梗、こいつは誰だ？」

俺が言った

「こいつって言うな！」

「こいつは魏延、儂の弟子じゃ」

桔梗が説明した

「ほう。お前が魏延か。」

「そうだ！お前が桔梗様より強いなんてありえない。お前みたいな貧弱男が・・・」

その後、なんかガミガミ言っていたが俺は無視して桔梗に聞いた

「桔梗、あいつなんか勘違いしてないか？」

「ああ、あれは儂はちゃんと言ったはずなんだがあいつが勘違いしていてな。」

桔梗は呆れながら言った

「ああ、脳筋って奴か。つまり、あれは力を見せれば納得いくってことだろ？」

「まあ、あれは少々自信過剰過ぎる所があつてな。何事も自分でやっつけていけるって言うてる口でな」



「なるほど、それなら簡単だ」

俺はニヤリと笑った

「魏延、もしお前が勝ったら俺達は素直に引き返そう。けどどなお前が負けたら俺達の勝利って事で良いか？」

「それは決闘と受け取っていいのか？」

「ああ、好きなように取れ。因みに桔梗は了承している」

「何！？本当ですか。桔梗様」

魏延が聞いた

「ああ、僕は光男達とはやらないと言っておったじゃろう？僕は今回、観戦に回る」

「・・・分かった。決闘を受け取ってやる」

魏延は了承した

「じゃあ、俺が見届けてやるよ」

零斗が言った

「悪いな。よろしく頼む」

「良いってことよ。それより日本人としての誇りを思う存分ぶつけ

るよ?」

「ああ、分かっているさ。トレース・オン」

そう言っただけで創造したのは一本の日本刀(長刀)である。名前は阿修羅、ある鍛冶屋が年月をかけて作りだした至高の逸品である。

現代なら国宝級に認定されている代物だ

「な・なんだ!?!」

魏延は驚いていた

「これは俺の能力さ。何でも出せる。それより始めようぜ」

俺は肩に阿修羅を担いで立った

「では、始め!」

零斗の号令で決闘が始まった

ヒュウウウウウ

周りは静寂に包まれた。

(俺と魏延の距離は約60〜70mか。向こうはどっ動くな)

俺は阿修羅を担いだまま、目測で距離を図った

そして……

「はあ！！」

先に魏延が動いた

彼女の得物が真上から来た

ガキ　ン！！

俺は阿修羅を前に出して受け止めた

「な・・なに！？」

魏延は驚いた

「動きが単純だな。それじゃあ素人にだって分かりやすいぞ」

「なめるな！！これからだ！！」

そう言つて次々と攻撃を繰り出す。光男は阿修羅ですべて攻撃を流した

「はあはあ」

魏延は疲れ切っていた

「もう、終わりか？なら俺の番だな」

そう言つて刀を納刀した

「私をなめているのか!？」

納刀した事によって終わりだと感じたらしい

「違う違う、これが構えなんだよ」

そう言っつて姿勢を低くした

「くそ!!--これで終わりだ!!--」

そう言っつて魏延は一気に詰めてきた

「ふっ甘い……な!!--」

シャッ!!--

俺は阿修羅を一気に鞘から放った

ドロッ!!--

鈍い音が響いた

「ぐ……は……」

ドサッ

魏延は気絶した

「終わりだな」



「おっいいいのか？」

「ああ、僮主催の宴会も開こう。その後で中央の城を攻めるといい」  
桔梗は笑顔で言った

「そうか。分かったそれじゃあ他にも伝えてくるから桔梗は先に行  
つてくれるかい？」

「ああ、分かった」

そう言って一旦分かれた

その後、俺達は桔梗の城で宴会を行うことになった

その話はまた次回にしようではないか。

## 桔梗主催の宴会

俺は魏延との決闘で見事勝利しそのまま桔梗主催の宴会に参加する事になった。俺達は宴会が始まるまで各々自由行動になった。

そこで、俺は街を見て時間を潰そうと考え一人で城下町に来ていた

〱城下町〱

「おお〱やっぱ賑わってるな〱」

俺は街を見ながら言った。さっき、外で戦が起ころうとしてたのにも関わらず街は賑わいを見せていた。

「すごいな〱うちの方にも負けなくらいの賑わいだな。」

「ああ、そうだな」

「うお!?!」

「よっ光男」

いつの間にか零斗が隣に来ていた

「ビックリした〱なんで零斗はここに居るわけ?」

「いや〱俺も暇だったからさ城下町に来てたんだよ。そこで、光男を見かけたわさ」

「は〜そうなのか〜」

「それより、光男はどうしてたんだ？」

「ああ、俺も暇だったからさ。零斗と同じ理由だよ。それにしても賑わってるな〜」

「ああ、そうだな」

そう言いながら俺達は街を散策していた。

その時

キヤアアアア!!!!!!

突然、叫び声が聞こえた

「「!!」」

俺達は叫び声のした方向に向かって行った

.....

しばらく走ると人混みが出来ていた。俺は近くのおっちゃんに聞いてみた

「どうしたんだ!？」

「ああ、盗賊が娘を人質にとって金を要求してるみたいだ。」



そう聞いた後、俺と零斗は二手に分かれ挟撃作戦を実行する事になった。俺は陽動だ

人ごみを掻き分けて行くと三人組の盗賊がいた

「あんたらか。騒がしてるのは」

「なんだ？てめえは」

「名乗るほどのもんじゃないさ。さっ娘を返しな。さもないと、あんたらが酷い目に遭うぜ？」

「ははは！！！何言ってるやがる？こっちは三人もいるんだぞ？どうやって相手をするんだ？」

リーダーらしき男が言った

「おいおい、俺は一人と言った覚えはねえぜ？もう一度聞こう。返さないんだな？」

俺はちょっとだけ殺気を込めて言った

「あ・・・当たり前だろ！！俺達は金を用意しろって言ったんだ！じゃないと娘をもらって行くぜ！」

「ふう、終わったなお前ら。」

そう言って零斗に合図を送った。合図は俺が指を頭に向かって撃つ時は殲滅作戦で行くと

「よう。お前ら」

零斗は後ろから二人の盗賊を瞬時に気絶させた

「何!？」

リーダーの男は驚いていた。その隙に娘は自力で脱出した

「おやおやく? 形勢逆転だな」

俺はニヤリと笑いながら言った

「クツなめるな!」

そう言っておっさんは自分の腰から剣を取り出した

「ほう。そう来るか。零斗、手は出すなよ?」

「OK、」

そう言っつて零斗は後ろの壁にもたれ掛かった

「さあ、来いよ。邪魔する者はいないぜ?」

「死ねやああああ!.....!!」

そう言っつておっさんは大きく振りかぶった

「ふっ甘いな。」



「ほんとだよ！すごいわね」

俺達は住民に囲まれていた

「なんか、ハズいな。零斗」

「同感だ」

その後、警備隊が来て三人組の盗賊は連れて行かれ、やがて俺達の周りに居た住民もどこかへと行ってしまった

「さてと、そろそろ宴会の時間だな」

零斗が言った

「おお、そうだな。早いところ移動しよう」

そう言って動き出そうとした時

「あ、あの…！」

「ん？」「ん？」

振り返るとそこにはさっき助けた娘がいた

「どうしたんだい？娘さん」

俺が聞いた

「さっきは本当にありがとうございました…！」

そう言って娘は頭を下げた

「いいっていいって、俺達が勝手にやった事だ。気にするな」

「で、でも」

娘は困惑していた

「いいからいいから。さっ早く帰んな。お母さんが待ってるだろう？」

「は、はい！！では、失礼します」

そう言って娘は帰って行った

「さて、俺達も行くところか」

零斗が言った

「ああ、そうだな」

そう言って俺達は城に戻った

〈城〉

城に戻ると兵士が俺達を呼んでくれてそのまま宴会会場まで案内された。入ると全員がすでに揃っていた

「遅いぞ。光男、主役がおらんでどうするっ？」

桔梗が言ってきた

「いやゝすまんすまん。ちょっと一騒動あったただだよ。では、さっそく乾杯！」

「『『『『『『『『『『乾杯！！』』』』』』』』』』』」

俺が乾杯の音頭を取った後、それぞれ思い思いに酒を飲んで行った俺は桔梗と酒を飲んでいた

「光男、焰耶の事は本当に世話になった」

そう言っつて桔梗が頭を下げた

「気にするな。強い敵を見るとついつい戦いたくなる性質でな。」

そう言っつて酒を飲む

「だが、焰耶もあの後、自分で何を見つけた見たいでな。暫く一人にしてくれっつて言われたわ。」

「そうか。だが、あいつも何かを見いだせたって事だな」

「ああ、そうとも」

そう言っつて二人で酒を入れた。それにしてもうまいなこの酒

「おーい！！桔梗、一緒に飲み比べをしないか？」

零斗が桔梗に飲み比べを挑むみたいだ

「おお！！僕も参加するぞ！！ちとまっとれい！それと、光男」

「なんだ？桔梗」

「僕らも劉備軍に入りたいのじゃが……」

「ああ、いいよ。大いに大歓迎さ。それより、早く行かないとあつちが先に潰れちまうぞ」

俺はあつさりと承諾してしまった。まあ、桔梗は信用できるからな

「そうか。ありがとう」

そう言つて桔梗は零斗の方に向かった

「ふう。」

俺は一人になり酒を飲んでいた。

「あ、あの……」

「ん？あつ魏延か。どうした？」

すぐ近くに魏延が立っていた

「じ……実は……」

「まあ、そんなところで立ってないでさ。一緒に酒を飲もうぜ。」

そう言っつて隣の席の椅子を引いた

「あ・・・ああ・・・すまない」

「ほら、」

トクツトクツ

魏延の前にあつたコップに酒を注いだ

「ありがとう」

そう言っつて魏延は酒を飲んだ

「それで？どうしたんだ？」

俺は聞いてみた

「私は、今まで負ける事を知らなかった。でも、光男に負けて、少し考えたんだ。」

「ほう」

そう言っつて俺は酒を飲んだ

「それで？何か見つけたのか？」

俺は聞いてみた



「ああ、私はもつと強くなりたい。だが、このままでは行けないと思っっている。だから、光男いや、師匠、私を弟子にして下さい」

「おお、こりゃあまた、でも、お前は桔梗の弟子じゃあなかったか？」

「桔梗様にはすでに破門だと言われた。光男の所でもう一度修行し直してこいとも言われた」

「ふっなるほどな」

桔梗らしいっちらしいけど

「分かった。それじゃあ今回の戦が終わったら、修行してやるう。」

「ほ、本当か!？」

魏延は笑顔で言った

「ああ、もちろんだとも俺は約束は守る主義だからな。安心していぞ」

「そうか。じゃあ、記念に私の真名を預けたい」

「まあ、お前がそれで良いって言うなら」

「私の真名は焰耶だ。よろしく頼む。お館」

そう言って焰耶は頭を下げた

「ああ、よろしくな。俺の事は好きに読んでもらって構わない。さあ、話はここまでだ。大いに飲もうじゃないか」

「ああー!」

そう言って俺達は宴会を楽しんだ

## 蜀と言つ名は俺がもらう！そして、新たな敵

俺達は桔梗主催の宴会を行つてその後、最後の砦、民が一番不満に思っている。大守の所を攻め込もうとしていた。

他の所は桔梗と紫苑がこちらに周つたからかほとんどがすぐに降伏を出した。そして、今でも抵抗を続けているのがすべての大元である大守（名前、忘れた）だ。

俺達はそこに向けて進軍していた

「さて、次で最後だな。」

俺が言った

「ああ、そうだな。」

零斗が答える

「これが終わつたら、俺は帰るからな」

「ああ、今まで本当にお世話になつたな。それと向こつ奴らにもよろしく頼むよ。それと、作者にもな」

「ああ、もちろんだ」

そう言つて俺と零斗は少し談笑した。

そうしている内に城の付近にまで到着した。

「さて、敵さんは籠城戦かな？」

俺が言った

「ええ、そうでしょう。この状態なら籠城になるのが妥当でしょう」

紫苑が答える

「ですが、アレの下には今までより多くの兵士がおりますぞ。お館様」

桔梗が言った

「数がどうした？俺にはそんなもの無用だ。なんせ、未来から来た兵士なんだからな。」

俺はニヤリと笑った

「そうでしたな。お館様はそんなにヤワなお方ではありませんでしたな」

桔梗もにっこりと笑った

「そうさ。朱里、この城の地図はあるか？」

「はい、ここにあります」

そう言って机の上に出した

「この城は籠城に特化した構造になっています。周りに堀を作り入口は橋の部分しかありません。それに兵器も充実しているとも聞きます。」

朱里が城の説明をした

「それは、本当か？紫苑、桔梗」

「ええ、私も一度は来た事がありますが、籠城には適している城だと思いますよ」

紫苑が言った

「それに、兵器はこの時代なら新しい物ばかりです。いつぞやの軍隊が来たときでもその能力を發揮しております。」

桔梗が言った

「なるほど、兵器の能力は侮れないと言つことですか」

愛紗が言った

「うーん、それなら航空兵器が必要かな？」

俺は独り言のように言った

「ご主人様、どうかした？」

翠が言った

「いや、なんでもない。大丈夫だ。それより皆に、ちょっと皆には時間稼ぎを行ってもらいたいんだが」

俺は皆にこれからの作戦を言った

そして、それから全員で攻撃を行った

ウオオオオオオオオオオ!!!

一旦突撃を行い引くをくりかした

「それ！それを続ける！敵を疲弊させておくんだ」

愛紗が号令を掛ける

「ウオオオオオオオオオオ!!!」

兵士たちが雄たけびと共に突っ込んで行く

「ご主人様、作戦は以上なのですか？」

朱里が聞いて来た

「いや、俺の所から兵器が来る予定なんだ、後、数十分は耐えるようにしてくれないか？そうしたら攻撃が可能になるからさ」

「分かりました。では極力、兵が減らない策をとりますね。」

「ああ、お願いしますよ」

そう言つて朱里は外に出た。因みに零斗も兵士や武将と共に攻撃を行っている。もちろん、限度を抑え目で出ていてもらっている

俺は懐中時計を見ながら援軍の到着を待った

・・・・・・・・・・・・・・・・

（数十分後）

「・・・・・・・・来た」

俺はそう言つてテントを出た

すると・・・・・・・・

バラバラバラバラ

城とは反対側の空から多数の機影が見えた。最新のアパッチロングボウ、Mi-24、UH-60、多数の攻撃ヘリがやって来た

「お館様、あれは!？」

桔梗が来た

「ああ、援軍だよ。それじゃあ、俺も出すとしますかね。トレースオン」

そう言つてM1A2エイブラムズ、10式戦車、T-90など、現代兵器に置いて最強の部類に入る主力戦車が揃っていた。軍事オタ

クなら誰もが感動する場面であろう

「よし！全軍、巻き込まれなくなったら後ろに下がれ！総攻撃をかけるぞ！！」

俺は大声で言った。

兵士達はすぐさま後ろに下がった。その瞬間、戦車部隊、航空部隊はすぐさま前に出て、城を包囲した。

へりの位置から考えて結構な距離があると俺は推測した。

「朱里、地図を出してくれるか？」

「あ、はい、ただいま」

そう言って朱里は地図を俺に手渡した

「ありがとう。うーん、やっぱりか」

「どうしたんだ？光男」

零斗が聞いて来た

「この地図より、城の方がでかくなっているんだ。」

そう言って城の部分を指さした

「と言う事はどうなるんだ？お館」



焰耶が聞いて来た

「それはだな。情報より兵士やすべてが違ってくると言っことだ。この場合、もしかしたら伏兵がいる可能性も高いんだ」

俺が説明した

「なるほど」

焰耶は分かったのか頷いた

「まあ、実際、中には行ってみないと分からない。まず、俺の部隊が城壁の上にいる兵士を叩き潰す、その後で戦車砲撃を行いに入る」

俺が概要を説明する

「分かりました」

愛紗が答えた

「それと、先陣は俺と零斗が行く。先に偵察してくるよ」

そう言ってテントを出た。

「よし、パーティーの始まりだ。始めてくれ」

俺は無線機で戦車、航空部隊に指示を出した。

次の瞬間



因みに装甲車は96式装甲車である

く街の中く

街の中は静かすぎた

「静かだな」

俺が言った

「ああ、確かにな」住民はおるか兵士がいない。まるで、ゴーストタウンだぜこりゃあ」

零斗が言った。

(これは、明らかにおかしい。もしかしたら罠なのかもしれないな。まあ、一応、奥まで行って見るか。)

そう思って俺達を乗せた装甲車は奥に入って行く

く城く

城の中に入ったが全然兵士の姿が見当たらなかった

「やっぱり、おかしいな」

「ここは、一旦、引くか？光男」

「ああ、そうだな。そう………」

しようと言いかけた所で気配を感じた

「誰だ!？」

ガチャン

俺はM4を構えながら言った。

「ふっふっふっふ、そんな物騒な物はしまつて下さい。」

そう言つて出てきたのは軍服を着た外人だった

「あんたは何者だ？」

俺が聞いた

「見て分かるでしょう。私は外の世界の者ですよ。」

そう言つて両手を広げた

「確かに服は俺達と似た物だが、あんた自身は違つたろ？」

「おや、察しがいい。さすがは神田光男くん」

「!?!?なぜ、俺の名前を」

「それはどうでもいい事でしょう。私の名前はアレキサンダー、私も軍人です。今日は挨拶に参りました」

男はアレキサンダーと名乗った

「挨拶？」

俺は銃を構えたまま言った

「ええ、私もこちらの世界に送り込まれた人間ですよ。」

「あんた、何が目的だ？」

俺は聞いた

「まあ、簡単に言えば征服ですかね？単なる征服ではない。絶対強者による征服ですよ」

「なんだと？」

「まあ、いずれは分かるでしょう。そして私とあなたは別の場所で戦うかもしれませんがね。では、これで、失礼します」

そう言っ行って行こうとした

「あ！そうそう。言い忘れた事が、光男君、今日の記念にささやかな贈り物しておきました。きつと喜びますよ？」

そう言っつて次は本当に消えた

「何者なんだ？あいつ」

零斗が言った

「さあ、俺達の味方ではない事は今ので分かった。あいつは強者による征服をもくろんでいる。三国志の歴史とは全く無関係な歴史を築こうとしている。それは確かだ」

「そうだな。光男の言うとおりかもしれないな。所で、贈り物って何だ？」

「さあ、きっとロクなもんじゃないだろう」

そう言った瞬間、なにか、鼻に来る匂いを感じた。俺達にしか分からない現代特有の匂いが

「……………!! 零斗! すぐに装甲車に乗れ! ここを出ろぞ!!」

「お……………応!!」

そうやって俺達は装甲車に乗りすぐさま城を出た。

次の瞬間……………

ドカーン!! ドカーン!!

城のあちこちから爆発が起きた。

「ヤバイヤバイヤバイ!!!!」

「光男、もっとスピードでないのか!?!」

「これが、最高速度だよ!!」

ブオオオオオオオオ!!!!!!!!!!

装甲車はすごい勢いで城下町を掛けて行った。その後ろから流れるように爆発が連続で続いた

「見えた！出口だ！しっかり、捕まってる！！」

ブオオオオオオ!!!!!!!!!

そして……

ブオン！！

ドカーン！！

出口に出た瞬間、爆発が俺達を襲ったが何とか間に合った

キキーツ

ガチャン

「ふう、助かったぜ」

零斗が言った

「ああ、本当にな」

「ご主人様！！」

愛紗が駆け寄って来た

「大丈夫ですか!？」

「ああ、何とかな。よりにもよってこの仕打ちはないわな」

俺は笑って言った。愛紗もなんとか落ち着きを取り戻したようだ

「そうですか。しかし、何があったのです?」

「ああ、それに付いては後で話すよ。とりあえず、帰る準備を始め  
てくれ」

「は、はい。分かりました」

そう言って俺達は帰る準備を始めた

アレキサンダーとは何者だろうか。そして、強者による世界とは?



## 今後の対策

俺達は蜀の国での戦闘を無事、終了する事が出来新たな仲間も加わって歡喜に溢れていた。しかし、新たな敵にも遭遇してしまい。それが、俺と同じ軍人であるということだ。

俺は喜びと共に懸念の思惑をしていた。

そして、桃香の待つ城に戻って武将だけで緊急会議を開くことにした

（会議室）

「で、ご主人様話って何？」

桃香が聞いて来た

「これから、話すよ。前回、俺達は領土を広げ蜀を奪ったな？」

そう言つと皆が頷いた

「実は、これから話す事は初めての事なんだが、魏以外にも新たな敵と俺は遭遇した」

ザワザワ

俺が言つと皆がざわめいた。当然の事だろう魏以外にも大陸を狙う奴が出て来たんだから

「ご主人様、では前回の爆発騒ぎも？」

愛紗が言った

「ああ、そいつによって仕掛けられたものだ。幸いこちらは人が死人は出てはいないがこれは、新たに警戒すべきではないかと思は思う」

「だけど、ご主人様、魏以外の国って言うたらあたしらの地域に居た五胡だったりしないのか？」

翠が言った

「いや、違う。次の言葉は他言無用だ。いいな？」

皆が頷いた

「敵は、俺と同じ未来からきた兵士だ」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

皆は驚いた

「どういう事や？光男」

霞が聞いて来た

「そのまんまの意味さ。と言っても俺とは違う世界に居た奴だと思は思う」

「どうしてなんですか？ご主人様」

朱里が聞いて来た

「これは俺の判断だが、敵は俺より昔の人間かもしれない。そして、危険な奴だ」

あの時見たアレキサンダーは服装は現代の迷彩服ではあったが、霧因気的にはまるで第二次世界大戦時にいた兵士のようにも思えた。なぜ、分かるかって？昔写真を見た時の顔立ちなどで判断した結果さ

「ご主人様より昔で私達より未来の兵士ですか」

紫苑が言った

「ああ、でもこの時代の人間にとっちゃあ十分脅威的だと思うしな。今後、何か仕掛けてくるかもしれない。十分に注意はしておいてくれ」

「……………」

皆が返事をした

「そういえば、こつちじゃあ何か変化はあったか？桃香」

「うん、特には無いんだけど最近、国境に密偵が送られているみたい。多分、曹操さんだと思う」

「そうか、仕掛けてくるかな？」

「いえ、物見の話ではただの調査だと言っています。」

愛紗が言った

「だが、警戒するに越したことはないだろう。それに裏の山にあるアレを見つけさせるわけにはいかないしな」

「確かにね、あそこには地元住民も行かせないようにしてあるからね」

桃香が言った

「よし、さっき言った事を忘れないでくれ。敵は三国の他にもいると言う事をな。それじゃあ解散」

そう言って俺達は普段の業務に戻った

〈部屋〉

俺は部屋に戻り、桃香や白蓮がまとめてくれた資料に目を通していた

「ふーむ、最近は小麦粉の収穫が少なくなっているな。これは改善の余地がありそうだな」

そう言って資料に必要な事項をまとめて次の資料を持った

「これは、軍備か。星とかは上げるとか言ってるらしいけど、そんな簡単に上がったなら国民から不満が増大されるぞ」

俺は独り言のように言った

とその時だった

コンコン

「ん？はいどうぞ」

ガチャ

「うっす、光男、邪魔するで」

そう言って入って来たのは霞だった

「おう、どうした？霞」

俺は顔を上げた

「・・・・・・・・／／」

「？」

霞は俺の顔を見て赤くなりだした

「どうした？霞」

「い・・・いや、光男、前から眼鏡なんて掛けてったっけな〜と思うてな」

「ああ、これが」

そう言って伊達眼鏡を外した。なんで、眼鏡を掛けるかって？掛け

ると不思議と集中力が増すんだよね。昔からそうなんだけど

「これは、伊達眼鏡さ」

「なんだ、付けとるん？」

霞が聞いて来た

「いや、ただの気分さ。こうして掛けると不思議と集中力が増すんだよ。だから、昔から掛けてるのさ」

「ふん」

「所で、霞はどうしてここに？」

「ああ、そうやった。光男、時間はある？」

「まあ、後はこれだけだから少し、待っていてくれるなら終わらすけど。どうしたの？ 買い物？」

俺は聞いた

「いや、最近、光男とやってなかったからな。一勝負でもしようと思ってるな」

「ああ、確かに霞は残り組だったからな。よし、分かったちよつと待っていてくれ。すぐに終わらすから」

「分かったで、ほな先に鍛錬場に向かってるわ」

そう言って霞は部屋を出た

「よし、さっさと終わらそう」

そう言って最後の資料に目を通す俺だった

↳数分後、鍛錬場↳

「悪い、待ったか？」

俺は仕事を片付けてすぐさま鍛錬場に向かった。霞は入り口で待っていてくれた

「大丈夫や。少しばかり準備運動もしてたところや」

そう言って霞は笑った

「そうか。」

「所で光男」

「何だ？」

「手に持つてる黒い物はなんや？」

そう言って手元のアタッシューケースを指さした

「ああ、これか？これは、俺専用の武器が入ってるのさ」

そう言ってニヤリと笑った

「ほな、さっそく行くか」

そう言って中に入った。俺も続いて中に入った

（鍛錬場内）

「さて、どの武器を所望するかな？」

そう言ってアタッシュケースを開けた

「うーん、光男はどれでも使えるんか？」

「まあ、基本的にはな」

「それじゃあ、この一番でっかい奴を頼むで」

そう言って指さしたのはロケランだった。これは俺が改造した。ロケランで手足に着けられるようにしてあるのだ

「よし、分かった。ちょっと待ってくれ」

そう言ってロケランを装着した

「よっしゃあ！―いつでもこいや！―」

そう言って俺は構えた

「言われなくてもな！―」



そう言つて霞が突つ込んできた。堰月刀が上から来た

ガキン！！

堰月刀とロケランが火花を放つた

「おら！！！」

俺は力押しで戻した

その後も何度か攻防を繰り返した

「やるな！光男」

「へへっそうでもないがな。それじゃあ俺から行くぞ！こいつの力を見る！」

ガチャン！ドーン！

弾は軌道を外れ霞の後ろに直撃した。

ドカーン！！

「あれに当たつたら終わりやな」

「怖気着いたか？」

俺は挑発のように笑つた

「アホか。むしろ盛り上がってきたわ！！！」

「そこなくつちな!!」

そう言っ互いにぶつかり合った結果……

「はあはあ、光男には敵わんわ」

「そつでもないさ。俺も結構危なかつたからな」

結果は何とか俺の勝利だつた。まあ、正直気を抜いてたら結果は変わつてたかもな

「霞はな速さはあるんだが、逆に力が微妙に抜けている感じがするな」

「そつか？」

「ああ、分からないかもしれないかもな。だつたら俺が特別に特殊訓練を施してやるつか？」

「ほんまに!？」

寝そべっていた霞が起き上がった

「あ、ああ。俺の国の奴だがなきつと霞ならいけると思つぜ?」

「ありがとう!光男」

そう言っ抱きついた

「おいおい、喜びすぎだろ」

（おお～霞の胸が当たる～!!）

俺は内心喜んでいた

「よし、最初は霞の問題点から直して行くぞ」

「応！」

そう言って基本練習から入ってく俺達だった

## 新規部隊

俺は敵が三国以外にも居る事が分かって考え方が変わった。前回では霞の他に愛紗や他の仲間達の個人訓練を行っていた。

しかし、それだけでは勝てないような気がしたので一般の兵士の中で腕に自信のある者たちを集めさせて銃が扱える奴を選定していた。

もちろん、桃香などにも相談をして決定した事だ。そして、桔梗にも銃の訓練をしてもらっている

何故かと言うと桔梗の武器が一番、銃の形に近いからである。それにそれだけの腕力を持っているのでこれを使わない手はない

「じゃあ、桔梗、この武器を使ってあの的を撃ってみてくれ」

そう言っただ俺は的を指さした

「しかし、俺はこんな武器は使った事はないですぞ。お館様」

桔梗は困っていた

「大丈夫だ。この武器は桔梗が使ってるのと同じ構造だから。持って見れば分かるさ」

そう言っただ武器を渡した。

渡したのはブローニングBARという銃である。こいつは種類的には軽機関銃に入るのだが第二次世界大戦で活躍した物である

「ふむ、重さ的には僕の武器と変わりありませんな」

そう言っつてBARをいろんな風に持った

「構え方はこんな感じだ。」

そう言っつて俺は肩掛けの構えを見せた

「こう……ですかな？」

桔梗も真似るように構えた

「そうそう。そんな感じ。じゃあ、撃つてみて」

「分かりました」

そう言っつて的の方に銃口を向けた

そして……

ドーン！

一発の銃声が響いた

「うーむ、すごい衝撃ですな」

桔梗は若干驚いてはいたがすぐに冷静さを取り戻した

「弾は……はずれか」

俺は的を見たが弾は的の近くに弾着していた

「申し訳ありません。お館様」

桔梗はしょぼんとなった

「仕方ないさ。始めは誰でもこうだよ。俺だってそうさ。だから、一緒に頑張っ行ってこう。な？」

俺は慰めた

「ありがとうございます。お館様」

桔梗は元気を取り戻した

「よし、他の奴らも射撃開始だ。各々好きな武器を取って見てくれ。自分に合う銃を見つけ出すんだ」

「「「「「「「「「「「「」

選定された兵士たちが返事をした

最初は皆、戸惑いながらやっていた。それは仕方ない事だ。見た事も触ったこともない武器で訓練をするんだからな。

俺は手取り足とりしっかりと教えていった

そして、数刻後……

「よし、撃て！」

ダダン！ダダン！

ダーン！

ドーン！

桔梗や他の兵士達はあつという間に銃の扱いに慣れてしまった。正直、これには俺も驚いた。だって、一日で習得しちゃうんだからな。驚いたさ

「よし、今日の訓練はここまで！皆はさきに引き上げて体を休めてくれ。お疲れさん」

そう言った後、兵士達は宿舎に向けて歩いて行った

「お館様」

桔梗が近づいた

「おう、桔梗もお疲れさん。どうだった？初めて銃を持った感想は？」

「ええ、衝撃がありました。が僕の武器とほとんど変わらなかったの。でこなす事が出来ました。」

「そうか。それは良かったな。それに桔梗にはこの部隊を率いて貰わなきゃいけないからな。」

「は？」

桔梗は素っ頓狂な声を上げた

「だから、この新しい部隊の隊長として率いて貰うんだよ。桔梗には戦場で付いて来た経験がある。それに銃の素質まであるんだ。だから、俺は桔梗に頼もうと思ったんだよ」

「そうなのですか。それはありがたいことですね。お館様のお目にかかって」

桔梗は嬉しそうに言った

「ああ、これからも頑張つてほしい。もし、分からない事とかあれば俺に聞きにくりゃあいいさ。その時は俺もちゃんと教えるからな」

そう言つて桔梗の肩をたたいた

「ええ、もちろんですとも、この敵顔、お館様の期待に応えて見せようぞ」

「ああ、期待してるよ。所で、桔梗」

「何でしょう？」

「この後の予定はあるか？」

俺は聞いた



「いえ、特にはありませんがどうかしましたか？」

「いや、もし暇なら月見酒とでも洒落こもつと思ってな」

そう言っつて空を見上げた。

空にはきれいな星空が広がっていた

「なるほど、そう言っつことですか。せひともお供させて頂きましょう。」

そう言っつて俺達は城壁に向かった

（城壁）

「お館様、そう言えば酒はどうするのですか？」

桔梗が聞いて来た

「慌てなさんな。それ」

そう言っつて無限倉庫から肺を二つ取り出した

「おお！？」

桔梗は驚いた

「ああ、ごめんごめん。これも俺の能力でさ。いろんな物が取り出せるんだ」

「はあく便利ですな」

桔梗は納得したように言った

「じゃあ、酒は日本酒と行こうか」

そう言っつて日本酒を取り出した

「お館様、それは？」

桔梗が聞いて来た

「ああ、これは俺の世界にある酒でさ。日本酒っていうんだ。味は保証するよ？」

「お館様のおすすめですか。ぜひ頂きましょう」

俺は桔梗の杯に日本酒を注いだ

トクツトクツ

「お館様もどうぞ」

そう言っつて桔梗は俺の杯に日本酒を注いだ

「ありがとう。それじゃあ乾杯」

「乾杯」

小さく盃の音が響いた

「ん〜これはうまいですな」

桔梗は味わうように日本酒を飲んだ

「そうだろ？」

そう言っつて俺も日本酒を飲んだ。口の中に味が広がって行く

「お館様」

「なんだ？桔梗」

「儂らは一体、なんのために戦っつておるのだろうな？」

そう言っつて月をみる桔梗

「さあな、理由なんていくらでもあるさ。ある奴は平和のためにまたあるものは親の敵とかな。少なくとも俺は桔梗や皆の笑顔のために戦っつている。それが俺の役割だとも思っつている。桔梗は何のためにやっつているんだ？」

「儂は・・・最初は民のために戦っつておりました。しかし、世の中は民を虐げる者で溢れております。儂はそれが許せなかつた」

「なら、答えは出てるじゃないか」

「え？」

「桔梗は民のために戦っつているんだろう？理由はそれで十分じゃないな

いか。それに俺は尊敬もするぜ」

「お館様が？」

「ああ、人のために動くつてのは楽じゃない。それは俺の世界でもよくあつた事だ。皆が皆自分のためにしか動かないような連中ばかりだったからな。だけど、この世界に来て正解だったと俺は思うよ。桔梗や桃香が他の人のために動くのを見て感動もしたし尊敬もした。だからこそ俺は自分の役割を果たす」

「役割とは？」

桔梗が聞いた

「さつきも言つたけど、お前や桃香、それに他の仲間の笑顔を守るためだ。だったら俺は鬼でも何にでもなつてやる。その代わりしっかりと守つて行くつもりだ」

そう言つて酒を飲んだ

「お館様、分かり申した。僕もお館様のために戦いましょう。そして、皆で笑つて暮らせる世を作りましょう」

そう言つて桔梗も酒を飲んだ

「ああ、頼むぜ。俺もできるだけの協力はするさ」

そう言いながら俺達は酒を飲んでいった

## 実戦投入試験

俺は新規部隊の桔梗と共に調整していた。

桔梗も最初は戸惑っていたが段々となれるようになり、指揮統制ま  
でできるようになった。そして、今回は実験も兼ねて実戦投入しよ  
う考えていた。

相手は黄巾党の生き残りが近くの町で暴動を起こしたとのことなの  
で桔梗の部隊と一緒に連れて来ていた

（荒野）

ブオオオ

俺はLAV-25で桔梗達と一緒に暴動が起きている街に向かって  
いた

「お館様、速いですな」

桔梗は初めて乗る装甲車に興奮していた

「まあ、馬よりは断然速いぜ。他の兵士達の様子はどうだ？」

「まあ、初めての得物で実戦を行うんですからな、皆緊張していま  
すよ。」

そう言って後ろを見る桔梗

「仕方ないか。初めてだしな俺も援護に周るから後ろの事は心配しなくていいぞ」

「ありがとうございます。お館様」

そう言ってペコリとお辞儀をする桔梗

「良いってことよ。それより、もうすぐ着くぞ。皆に活を入れてやれ」

「分かり申した。皆の者聞けい！」

そう言って桔梗は一般兵に活を入れる話をした

く暴動が起きた街く

「ヒャツハアアアア！！！燃やせ！壊せ！奪え！」

首領である盗賊が号令を出して他の盗賊に指示を出していた

「チツ、相変わらず外道な奴らだな。」

俺は舌打ちをして言った

「早く、終わらせてしましましょう」

桔梗が言った

「ああ、そうだな。よし、戦闘開始だ！敵に恐れを見せるな！その時は自分の最後と思え！」

俺が大きな声で車内に響くように言った

「くくくく応!!」「くくくく」

兵士達は大きな声で返事をした

ブオオオオ、キキーンッ!!

LAVは大きくドリフトをして止まった

ウイイイン、ガチャン!

後ろのハッチを開けて、その中から兵士を出した

「そら!行け行け行け!!!!」

「ウオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

兵士達は勢いよく飛び出て近くの盗賊から倒し始めた

「お館様、僕も行ってきましたぞ」

「ああ、気お付けてな」

「ええ、お館様の期待にお応えしましょうぞ」

そう言って桔梗も車外に出た

因みに桔梗が持っているのはブローニングではなくソ連の対戦車ラ

イフルPTRD1941である。

こいつは歴戦の兵士でさえ扱うのは非常に難しいとされているライフルで最悪、肩をぶっ壊してしまう代物である。

この前、試しに使っていたのだが、桔梗がやってみたくてきたのでやらせて見たら何なく使いこなせてしまったのである。俺は正直、驚いたよ。

それから、桔梗はこのライフルを使うようになった。本人に一応聞いてみたのだが、肩は異常ないと言ってきた。まあ、本人が大丈夫ならそれで良いんだが、思ったけど対戦車ライフルってチート過ぎやしないか？

俺はそう思っていた。それに近距離でも扱えるように特製の銃剣を装備してある。これは桔梗からの要望だった

「まあ、心配はないと思うけど、気お付けてやらなきゃな」

そう言いながら俺はLAVで援護射撃を始めた

（桔梗視点）

「それぞれ！！皆の者、日ごろの成果を出せ！お館様が見ているぞ！！」

わしは大声で近くに居る兵士に声を掛けた

「わあ！？」「なんだありゃ！？」「見た事ねえ！？」



盗賊は儂達の武器を見て驚いていた

儂も自分の得物を構え撃っていた

ズド　ン！！

こいつは最初、お館様が使っていたのだが、興味本位でやって見た所ずいぶんとしつくり来たので以来、儂はこいつを使うようになった。

お館様は最初、儂を心配そうに見ていたが儂が大丈夫というと安心してくれた。

それにしてもこいつは使いやすいな

ガチャン！ズドーン！

儂は次の弾を装填して次々と遠くに居る敵を倒していった

その時

「死ね！」

後ろから盗賊が振りかぶって来た

ガキン！

「儂はこんな所でやられるほど甘くわないわ！」

ズバツ！

「グハッ！」

ドサッ

振りかぶって来た剣を防いですぐさま銃剣で盗賊を倒した

「そら！敵は待ってくれはないぞ！」

そう言っつて敵を倒しに行った

（桔梗視点終了）

「頭！こつちが押されてまっせ！」

一人の盗賊が言った

「くそ！ここは一旦撤退・・・」

そこで、首領は黙ってしまった。無理もない自分の後ろに見た事もない物があればな

そこには一人の男が立っていた

「フツ、逃げられると思ってんのか？うちのシマ、荒らしてタダで済むと思うなよ？」

ウイイイン、ガチャン

光男の後ろにはタイガー戦車が止まっておりますすべての砲身が盗賊達

に向いていた

「言っとくけど、動こうとするなよ？誰かが動けばすぐさま撃てるように設定してあるんだ」

俺はニヤリと笑って言った

「く・・・クソ・・・」

首領はどうするべきか迷っていた

「お館様！」

盗賊の後ろには桔梗の部隊が辿りついた

「おう、桔梗、ご苦労さん。ずいぶんと戦ってくれたな」

俺は桔梗に言った

「さて、盗賊の首領に条件を与えよう」

「条件・・・だと？」

「ああ、ここから逃げられる条件だ。なに、難しい事じゃない。決闘を行ってもらいたいんだ」

「・・・ああ、いいだろう。それで、相手は？」

「話の分かる奴でよかったよ。相手はそちらに居る武将だ」

そう言っつて桔梗を指名した

「そういうことか。つまり、こっちの武將を倒したら俺達は逃げても良いんだな？」

そう言っつて自分の得物を出した

「そう言うことだ。桔梗、やっってくれるな？」

俺は桔梗に聞いた

「儂も武人の端くれ。喜んでその申し込み受け入れましょうぞ」

そう言っつて構えた

「それでは、始め！」

俺が開始の号令を出した

「……………」

二人はお互いの際を窺っていた。

そして……………

「でりゃあー!!」

先に動いたのは首領の方だった

ガキン！ガキン！

桔梗は防戦一方だった

「どうした!? どうした!? 攻撃してこないのか!?!」

首領は攻撃しながら言った

「フツ、甘い。」

「何!?!」

「今度は僕の番じゃ!」

そう言ってPTRDを近距離で構えた

「終わりじゃ!」

ドカーン!

近距離で撃つため首領は吹っ飛ばされてタイガにぶつかった

「なん・・・だ・・・こりゃ・・・」

そう言っつて首領は死んだ

「この勝負、敵顔の勝利!」

俺が終了の宣言をした

「ウオオオオオオオオオオオオ!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

兵士達は桔梗の勝利に喜んだ

「おめでとう、桔梗」

俺が言った

「ありがとうございます。お館様」

桔梗は礼を言った

「さて、お前らはこのまま付いて来てもらうぞ。そこで、今後の事を考えるんだ。」

俺は残りの盗賊達に向かって言った。首領を失くした今、彼らは戦意喪失していた

「さて、村人の生き残りを探すぞ。それから凱旋だ」

そう言って俺達は作業に取り掛かった

## 漂流者と南蛮進行作戦会議

俺達は新しい部隊の実戦試験を行い見事、それを成功に収め公式的に部隊が認められた。正式名は第三銃器部隊と名付けた。

そして、俺達は南蛮を領土にするべく会議が行われた

（会議室）

「では、会議を行います。内容は南蛮の進行についてです」

朱里が言った

「南蛮は未だ分からない事が多いです。」

「どういう事だ？朱里」

愛紗が言った

「どの文献にも載っていないので誰も言った事が無いんです。しかし、分かっている事はいくつかの部族が住んでいてそれを統べるのが南蛮王・孟獲です」

朱里が説明した

（確か、史実なら諸葛亮が七回捕まえた事によって仲間になったんだよね〜こつちの世界でも同じなのかな？）

と、俺は思っていた

「他に情報はないの？」

桃香が言った

「はい、これが僅かな情報です。」

「どうする？ご主人様」

桃香が聞いて来た

「まあ、周辺の村にも多少の被害を受けているからな。見過ごすわけにはいかないだろう？だったら、俺達が出るしかないさ。」

俺が言った

「そうだね。朱里ちゃん進める方面で考えて貰っていい？」

「はい、分かりました。では、皆さんも準備は行って下さい。他に質問はありますか？」

.....

「では、解散して下さい。」

朱里の合図で会議は終了し皆、外に出た

「さて、今日はどうするかな？」

一応仕事は終えたし、午後の仕事までまだ、時間はあるな。だった



ら、外で何か食うか

そう思って俺は下町に向かった

く城下町く

「いやく相変わらず、賑やかだねく」

俺は町を見ながら言った

「さてくどこの店で今日は食おうかなく？いろんな店が出来たからな。より取り見取りだぜ」

ザワザワ

「ん？なんか向こうの方が騒ぎになってるな。何だろう？」

そう言って騒ぎの方に向かった

「いいから！金を出しやがれ！さもないとこのガキを殺すぞ！」

「何をするのです！離しやがれなのです！」

騒ぎの中心には盗賊らしき三人組のおっさんと一人の少女がいた。  
あの少女、どこかで見た事があるな

俺は念のため近くに居たおっちゃんに聞いてみた

「おい、何があったんだ？おっちゃん」

「あつ光男様、盗賊ですよ。盗賊、あの子を人質にして金を出せつて言ってるんでさあ、今、警備隊がこっちに向かっています。しかし、ずっとこの状況でさあ」

おっちゃんが説明した

「なるほど、なら、領主である俺が出張っても構わないな。」

そう言つて人ごみを掻き分け中心に出た

「誰だ！てめえは！」

一人のおっさんが言つてきた

「まあ、待て俺は神田光男、この土地の領主つて奴だ。意味が分かるな？」

「何！？」

「おい、盗賊、俺の国を荒らしてタダで済むと思つてんのか？」

俺は若干の殺気を出して言った

「こ、こつちには人質がいるんだぞ！俺がこの剣を引けばこのガキの首なんかスパツと切れちまずぜ！」

そう言つて剣をチラつかせた。

「ヒッ！？」

少女は震えながら小さな叫びを出した

「おいおい、そんな小さな事で俺が怖気着くとも思ってたのか？  
まあ、やれるもんならやってみせて欲しい所だがな。その前にできなくなるぜ」

「な、なめんなよ!!」

おっさんは今にも剣を引こうとしていた

「フツ嘗められたものだな。」

俺はそう言って射撃体勢に入っていた。

そして……

ダァン!

ガキーン!

ヒュンヒュンズサツ!

「へ?」

おっさんは一瞬の出来事で何が起こったか分からないみたいだ

俺はピースメーカー（マグナム銃）でおっさんの持っている剣を弾き、武装解除を行った。

「さて」と

ザッ！

俺は一気におっさんの懐に飛び込み腹パンを加えた

「おら！」

ドカッ

「グエツ！」

おっさんに腹パンをした後、少女をこちらに掴み一気に離れて少女を降ろした

「大丈夫か？」

「あ、ありがとうございます。お前は・・・」

「待った。まだ、終わったわけじゃない。ちっとまってくれや」

そう言っただけで立ち上がって盗賊の方を見ると三人とも臨戦態勢に入っていた

「で、てめえ、タダで済むと思うなよ」

リーダー格のおっさんが言った

「あんたらみたいなのは雑魚相手に遅れるわけないだろ？まっ三人がかりでも俺は倒せないがな。手加減してやるから掛かってこいや」

そう言っで手で挑発した

「クソツ、お前ら！」

「「へい！」」

そう言っで後ろ二人の盗賊が出て来て同時に襲いかかった

「「死ねやー！」」

「フツ、甘いな。」

ガッ！

「おら！寝てる！」

ガコ　ン！！

俺は二人の盗賊の攻撃を避けて後ろに回った際、頭を掴んで同時に突っ込ませた。

「ぐおお・・・」

「クソツ・・・」

二人のおっさんはそのまま気絶した

「さて、残るはあんだだけだ。どうする？」

俺はニヤリと笑った

「うわああああああ」

そう言って突っ込んできた

「はあ、もうちょい張り合いがあったらな。興奮だ」

ガツ！ドコツ！

おっさんが突っ込んできた勢いを利用してそのままひざ蹴りをお見舞いした。おっさんはのたうちまわっていた

「ぐおおおお腹が」

「はい。これにて一件落着なりつと」

うわあああああ！！！！！！

住民から歓喜の声が上がった

「さすがだぜ！光男様は！」

「惚れ惚れするわ！」

「あたいと結婚してくれ！」

「ブルアアアアアア！！！！」

住民から俺に対する感想が飛び交っていた。……最後の二人は明らかにおかしいと思うがな。気にしないようにしておこう

その後、警備隊が来たので盗賊を彼らに引き渡した。

「さて、やっと飯が食えるな」

「おい！」

「ん？」

そこにはさっき助けた少女がいた

「おう、どうした？」

「その……さっきは……ありがとう」

少女は赤くなりながら言った

「ああ、無事でよかったな。そういえば名前を聞いてなかったな」

「ねねは陳宮」

「陳宮？……あ！思い出した！」

そう、この少女こそ呂布の軍師として活躍した。陳宮である

「思い出しましたか。まさか、こんな所で会うとは思わなかったのです。」

そう言ってムスッとしていた

「いやあ、すまんすまん、ずいぶん前の事だったからな。元気にしてたか？」

「おかげ様で元気ですよ。」

「そういえば、呂布はどこにいるんだ？一緒じゃないのか？」

「恋殿は町はずれの小屋に居ますよ。まさか、ここがお前の国だとは思わなかったのです」

「そうかそうか。今までどうしてたんだ？」

「ずっと放浪の旅でしたよ。あちこちで用心棒やら傭兵やら仕事をして稼いでました。でも、それも尽きていてこの街でまた、仕事を探そうとした時さっきの状況になったのですよ」

「なるほどな〜ん？あれは……」

「……ねね」

「あっ！恋殿」

そう言っつて陳宮は呂布の元に行った

「久しぶりだな。呂布、元気にしてたか？」

「うん……元気、そっちは？」

「ああ、俺も元気さ。ところで呂布、この後、宛てはあるのか？」



俺が聞いた

「フルフル」

呂布は首を横に振った

「だったら、俺達の所に来ないか？」

「いいの？」

「ああ、大歓迎さ。月や詠、霞が喜ぶぞ」

「月がいるの？」

「ああ、表沙汰には死んだ事になっているが、今は俺達の所で係として働いてるよ」

月はこの事を知ったら喜ぶだろうな

「分かった。行く。ねねも一緒に行く」

「分かりましたぞ！光男、案内して欲しいのです」

「応！任せとけて」

そう言っつて俺達は城に戻った

（城内）

「えーと何処かな？」

俺は月、詠、霞を探していた

「あついたいた。おーい月ー！詠ー！」

二人は丁度洗濯をしていたところだった

「あつご主人様、何か……」

そこで月は止まった

「……月」

ダッ！ガシッ

「恋さん、恋さん無事だったんですね……良かった」

月は呂布に抱きつくと涙を流しながら言った

「詠も無事で良かった」

「ふ……ふん、まあ無事で良かったわ」

詠は赤くなりながら言った。素直じゃないな

「光男、本当にありがとうなのです」

陳宮が言ってきた

「いや、俺はただ合わせただけさ礼を言われるほどじゃない」

そう言って呂布と月の再会シーンを見ていた

## 焰耶の修行

前回、恋とねね（真名は許してもらった）が俺達の仲間に加わってかなりの大所帯になった。そんな中、俺達は南蛮進行のためいろんな準備をしていた。

そして、先行部隊として紫苑、星、翠、霞、雛里、蒲公英の六人が南蛮の近くにある城に向かった。これで、多少なりとも被害は抑えられるだろう。まあ、場合によっちゃ俺が出張ればいい話だからな

そして、俺は自分の部屋で仕事をしていた

「え〜と、ここの見積もりは・・・合ってるな。合計の金額は・・・」

俺は一人、黙々と仕事をしていた。

そして、数分後

「よ〜し、午前の仕事は終わりっつと!」

カタッ

筆を置いて背中を伸ばした

「ん〜と、昼まではまだ、あるな。ちよつと体を動かすか」

そう言って部屋を出た

（廊下）

「今日も良い日差しだな。」

空は雲ひとつない晴天だった。

「あら？ご主人様」

「ん？おお、愛紗か」

振り返ると愛紗がいた

「ご主人様、仕事はもう終わったのですか？」

「ああ、だけど、昼までまだ時間があるから少し、体を動かそうと思ってるな。愛紗もどうだ？」

と誘って見た

「すみません。行きたいのは山々なのですが、私も片づけなければいけない仕事があります」

「そうか。それは残念だな。まあ今度は手合わせしような。それじゃあ仕事頑張れ」

「はい、ありがとうございます。ご主人様も頑張ってください。それでは」

そう言って愛紗は俺とは逆の道を行った

「さて、鍛錬場には誰がいるかな？」

そう言っつて鍛錬場に向かった

く鍛錬場く

「誰か、いるかな？」

そう思っつて鍛錬場に近づいた。

ガキーン！

「おっ誰かやっつてるな。」

そう言っつて入った。中に入ると桔梗と焰耶が鍛錬をしていたようだ

「はあはあはあ」

「焰耶、肩で息をしまつてゐるぞ」

「は、はい、すみません」

どつやら結構な時間やつていたようだ

「一旦休憩にしよう。体を壊してしまつてはいけなからな」

そう言っつて桔梗は武器をしまつ

「おーい、桔梗、焰耶！」

俺は大きな声で言った

「おお、これはお館様、どうかされましたか？」

桔梗が聞いて来た

「いや、仕事がひと段落したからさ。ちょっと体を動かさそうと思っ  
てな。桔梗は焰耶の鍛錬相手？」

俺が聞いた

「ええ、いくら、破門扱いにした所でこいつがそう言うのを関係な  
しにやってきますからな、俺も気張りがいがあると云う物です」

そう言ってベンチに座っている焰耶を見た。俺は焰耶に近づいた

「よっ焰耶、お疲れさん」

「あっお館」

と言いながらゼーゼー言っている焰耶

「かなり疲れてるな。そうだ。ほれ、これを飲めよ」

そう言って倉庫からある物を出した

「これは？」

「それはスポーツドリンクって言ってこういう風な体を動かした後  
に飲む物だ。疲れているときなんかには結構いいぞ」

そう言ってペットボトルの蓋を開けてやった

「すみません。頂きます」

ンクツンクツ

焰耶は勢いよくスポドリを飲んだ

「どうだ？」

俺が聞いた

「とっても美味しいです！お館」

焰耶ははしゃぐように言った

「そうかそうか。桔梗もどうだ？」

「ええ、頂きましょう」

そう言ったので桔梗にもスポドリを渡した

「どうだ？桔梗」

「ええ、とっても美味しいです。こんなのは初めてですな」

桔梗は満足そうに言った

「さてっとお館様、儂と一手しましょうか？」



「いいね。じゃあ焔耶はそこで見ていてくれ」

「はい、分かりました」

そう言っただけで俺と桔梗は鍛錬場の中央に立った

「さて、お館様、行きましようぞ」

「ああ、つとその前に一つ」

「何ですかな？」

「今回は”アレ”で頼む」

「分かり申した」

そう言っただけで桔梗は本来の武器を置いて、俺が渡したPTRD194  
1（銃剣付き）を取り出した

「それじゃあ、俺は……」

と言っただけで出したのは、一振りの日本刀とサムライエッジだ。

「また、変わった武装ですな」

桔梗が言った

「ああ、こいつは滅多に使う事はないんだがな、試しにやってみようと思っただけ」

「そうですね。では、よろしいですか？」

「ああ、いつでもいい」

そう言って居合の構えをした

「それ！」

ドコーン！

桔梗は最初にPTRDで撃ってきた

「甘い！」

スラッ！！

スパッ！ドコーン！

俺は刀を抜いてそのまま弾を切った。

切られた弾はそのまま後ろで爆発を起こした

「これで終わりではないですよ！！」

そう言って次々と発射してきた

ドーン！ドーン！ドーン！

「おら！おら！おら！おら！」

ジャキン！ジャキン！ジャキン！

ドコーン！ドコーン！ドコーン！

「それ！俺の番だ！」

そう言つて一気に桔梗の懐に入った。そこで初めて銃を抜いた

カチャ！パーン！

ガキン！

桔梗はPTRDの銃身で銃弾を弾いた

「そら！」

ドカツ！

ドサツ

俺はそのまま足払いで桔梗を倒した

「グッ！」

カチャ

「勝負、ありだな」

俺は刀を桔梗の首筋に置き言った。

「やれやれ、お館様には敵いませぬな」

「そうでもないさ。実際、俺も危ないところはあったしな」

そう言って桔梗を起こした

「おかげで良い鍛錬ができました。ありがとうございます」

「いや、俺の方こそ」

そう言って互いに礼をした

「さて、次は焰耶の番だな」

俺が言った

「え？私ですか？」

「ああ、前に言ったろう？鍛錬がしたいって言ったろう？」

「は、はい！すぐに行きます！」

そう言って自分の武器を持ち鍛錬場の中央にやって来た

「さて、今回は試して所かな？」

俺が言った

「試し……ですか？」

「ああ、ほら焰耶とやったのって前の戦いだけだったじゃん。それいらいしていないからさ実力の限度も兼ねてつてところかな」

「分かりました。本気で行ってよろしいですね？」

焰耶が言った

「ああ、来いよ。その自信を叩き潰してやる」

ニヤリと笑って言った

俺はさっきの武装を解除してバレットアーツに変化させた

「どりゃあああああ！……！！！」

焰耶は大きく振りかぶって来た

「フン！」

その攻撃を俺は正面から受け止めて攻撃を止めた

（ふむ、パワーはそれなりにあるな。武器の重量もあるからそれに加えてつて所か。しかし、スピードが今一つだな。）

「今度は俺の番だ！」

そう言って武器を思いっきり弾き、そのまま打撃の攻撃に移行した

「そろそろそろ……！！！」



「ああ、これに関しては遅いに等しい。一般兵なら楽に倒せるが武将相手ならきついと思うな」

「そう……ですか。」

焰耶は落ち込みながら言った

「とは言っても直せる範囲だからな。焰耶がその気になれば結構な速さまで行くと俺は思っている。だから、これから直していこう、な？」

「はい！お館！」

そうして俺の個人授業が始まった

## 南蛮進行作戦

暫くは平穩でいた俺達であったが、紫苑達がいる城の付近では南蛮軍が活発に動き出しているとの報告が紫苑からあった

なので、俺、愛紗、桔梗、焰耶、朱里の部隊は目的地に向かうため進行していた

「ふむふむ、あっちから動いてるのか」

俺は報告書を見ながら言った

「ご主人様、どうかされたのですか？」

愛紗が聞いて来た

「ああ、紫苑からの報告書を見てたんだ。やっぱり南蛮軍が積極的に動いてるみたいだ」

「そうなのですか。では、急がせますか？」

「いや、そんなに急ではないみたいだ。このままの速度で行くよ」

「分かりました。」

そう言って愛紗は黙った

「そつだ。愛紗」



「はい？なんですか」

「愛紗ってさ。いつ頃から武術をやり始めたんだ？」

俺は疑問を言った

「そうですね。まだ、私が小さかった時、父上が兄上に教えているのを見て興味を持ったのが最初ですね。それから兄上としたり、自分でやっていましたね」

「へ〜だから、あんなにうまいのか。納得」

「そ、そんなに褒めないください。自分なんてまだまだなのですから／＼／」

そう言つて赤くなる愛紗であった

「そんなに謙遜するな。本当の事なんだし、だからと言つてそれを鼻に掛けないから尊敬もするよな〜俺自身は」

「ご主人様も十分に強いではないですか」

「いや、前にも言つたけど俺は飛び道具を使って初めて強くなれた物なんだ。素手だとそこまで強くないさ」

「でも、私自身は見てみたいとは思いますがね」

愛紗はそう言った

「ん〜そうは言つても実際、機会がないからな〜」

そんなこんなで愛紗達と雑談して行った俺達であった。

そして、数刻後、無事紫苑達のいる城に到着した

「よし、皆、長旅御苦労、暫くは休んでいいぞ。次の命があるまで待機だ」

「……………応!」「……………」

そう言った後、兵士たちは解散して行った

俺達は紫苑達のいる玉座に向かった

〈玉座〉

「ですから、ここは黄忠隊と趙雲隊で納めましょう。」

「ですわね。それが一番妥当じゃないかしら?」

「せやけど、弓矢だけじゃあれには太刀打ちできひんやないか」

「確かに霞の言うとおりだぜ。もっと大きな兵器が必要じゃないか?」

玉座に入ると丁度、軍議を行っていたみたいだ

「いよ!皆、お疲れさん」

「ご主人様、到着されたのですね」

「光男や〜！久しぶりな〜」

ダキッ！

霞が俺に抱きついて来た

「おうおう、久しぶりだな。霞、元気にしてたか？」

「うん！もっちろんやで！」

「ご主人様、久しぶり〜！」

蒲公英が手を上げながら言った

「おう！久しぶり」

「あわわ、ご主人様・・・」

「雛里も久しぶりだな。よく仕事を全うしてくれたな」

ナデナデ

「あわわ〜」

雛里は赤くなりながら帽子で顔を隠した

「ご主人様、久しぶりだな」

「ああ、翠、久しぶり」

「主、元気にしていましたか？」

「おう。星、この通り元気だぜ」

そう言ってそれぞれに挨拶をする俺であった

「さて、現状を説明してもらおう」

「はい、現在、南蛮軍はこの先にある森の中に潜伏しています」

「兵力はどのくらいだ？」

「それが、多数としか言いようがありません」

「どういう事だ？紫苑」

愛紗が言った

「数えきれないほどたくさんいます・・・」

そう言って苦笑いする紫苑

「そんなにたくさんで来られたのにこっちの負傷兵は0に近いと書いてあったが？」

俺が言った

「はい、負傷兵の大元は大きな動物によるものです」

「大きな動物？・・・ああ、象か」

俺は思い出したように言った

「象ってなんや？光男」

霞が言った

「ああ、霞達が見た物ってこんな長い鼻に巨大な体をしてただろう？」

「そうや。それが結構、難しくてな。剣や槍でも効かないから厄介なものや」

霞はやれやれと言った感じで言った

「それが象って名前なんだ。俺らの世界じゃあ結構人気のある動物でな。南蛮軍にとっては一番の主戦力だろう」

「……………へ〜……………」

皆は俺の説明で納得するような声を上げた

「では、ご主人様、その象には対処法はあるのですか？」

愛紗が聞いて来た

「ああ、もちろん。と言っても俺の世界の物だがな。よく、動物退治で使用されるものなんだ」

「ふうん、そうなんだ。」

蒲公英が言った

「では、次に攻めてきたときにはご主人様をお願いしてもよろしいですね？」

紫苑が言った

「ああ、それでいいぜ」

「では、解散」

紫苑の号令で俺達は解散した

「さて、森がどんなものか見てくるとするか」

そう言って城壁に向かった

〈城壁〉

「おお、あれが南蛮軍のいる森だな。結構、広そうに見えるな」

おれは双眼鏡で見ながら言った

「ご主人様」

「ん？おっ翠」

振り返ると翠がいた

「何してるんだ？」

「いや、南蛮軍がいる森の方を見ていたんだ。翠こそ何してるんだ？」

「あたしは鍛錬が一通り終わったからさここで休憩しようと思って  
そう言っただけの隣にきた

「そうか。ご苦労なこった」

「そうでもないさ。自分の鍛錬にもなるし」

「そうか。だが、あんまり無理はするなよ？お前が倒れちゃあ蒲公英だって心配するだろうし何より俺が一番心配するだろうな」

「どついう事？ご主人さま」

「そのまんまの意味さ。可愛い女の子が倒れたりしたら心配するのは当然だ」

「な！？何言ってるんだ。ご主人さま、私なんて不器用で女の子らしい部分なんて一つもないだろ！」

翠は顔を赤くしながら言った

「おいおい、お前が可愛くなかったらその他大勢に失礼があるぞ。お前は可愛いんだからそれでいいだろ？」

「hすghヴおいj.p.jpし!？」

翠は訳のわからない言葉を発した

「jj.....jj.....」

「jj~」

「ご主人様の馬鹿ー!!！」

ドコッ!!

「ウゴハッ!？」

翠に突然アツパーをかけられ見事、俺の顎にヒットし俺はそのまま後ろに飛ばされた

「ご主人様のエロエロ魔人!!馬鹿ー!!！」

タッタッタッタ.....

翠はそのまま走り去ってしまった

「お・・・俺が何をしたってんだ.....後、.....なぜ.....カタカナ表記が使えるんだ?.....」

その言葉を最後に俺は意識を失った.....



な……に……？ネコミミだと！？

翠からのパンチを食らって気絶していた俺は、その後、愛紗に発見され自分の部屋まで搬送されていた。しかも、気がついたのは翌日の朝であった

（朝）

「う……ん？」

俺が目を覚ますとそこには……

「スウ〜スウ〜」

愛紗が寝ていた。

「あれま、俺は昨日、翠に渾身の一撃をくらって気絶したんだっけ、もしかして、愛紗が見つ付けてくれたのか？だとしたらありがたいな……しれにしてもいい寝顔だ」

そう言つと……

「う……ううん」

愛紗も起きた

「おつ愛紗、おはよう」

「ご主人様？おはようございます……」

若干寝ぼけていた

「昨日はありがとうな。」

「昨日？……あ！……！」

と言って愛紗は飛び上がった

「ご主人さま！昨日、どうしてあんなところで倒れていたのですか！？」

「い……いや、実は昨日……」

そう言って昨日の状況を教えた

「……というわけなんだ」

「なるほど、すべては翠の仕業ということですか……ふふふ、翠めこの落とし前はどうか？」

そう言って自分の得物を持ち外に出ようとした

「待て！早まるな！愛紗」

「大丈夫ですよ。ご主人様、ちょっと翠と話をしてくるだけですから……」

「大丈夫じゃない！目がやばいよ……！」

そう言って俺は羽交い絞めで抑えた

そういうやりとりが数分たって……

「申し訳ございません。ご主人様」

愛紗はしゅんとしていた

「良かったよ。正気に戻ってくれて……あははは」

正直、俺は思った。愛紗は怒らすとヤバイ方向（多分、○ンデレ要素が入っている）に向かって行っちゃうこと学んだ。

「でも、本当にありがとうな。愛紗」

ナデナデ

そう言って撫でた

「そんな……当然の事をしたまですよ／＼」

愛紗は赤くなって言った

「じゃあ、朝になったし、食堂に行こうか？」

「はい」

そう言って俺達は食堂に向かった

（食堂）

俺達が食堂に着くと兵士やら武将が食べていた

「ご主人様、おはようございます」

「おはよう。紫苑、璃々ちゃんもおはよう」

「おはようございますー！ごしゅじんさまー！」

紫苑に挨拶を返し璃々ちゃんも元気よく返事をした

「光男くおはようさん」

霞が欠伸を欠きながら言った

「ああ、霞おはよう。」

俺も挨拶を返した

「よう、おはようさん、翠、蒲公英」

「お・・・おはよう・・・ご主人様」

「おはよう！ご主人さまー！」

翠はぎこちなく挨拶を返し蒲公英は元気よく挨拶した

「ご・・・ご主人様！」

「なんだ？」

「昨日は・・・その・・・」

「ああ、気にするな。あれは俺が悪いんだ」

「で・・・でも」

「良いから、気にするな。分かったか？」

「う・・・うん。分かった」

「それじゃあ」

そう言ってその場を後にした

そして、朝ごはんを食べて、午前中は鍛練の方に入った

（鍛練場）

俺は自分の隊の訓練をしていた

「ほら、副長そんなんじゃないあ足元をすくわれるぜ！」

ブオン！

「なに、まだまだ、これからですよ！」

ガキン！

「その意気だ！」

そう言って訓練をしている中・・・

「ご主人様！」

朱里が鍛錬場にきた

「どうした？朱里」

「南蛮軍が攻めてきました！」

「何！？本当か！」

「はい、南蛮軍はまっすぐこの城に攻めてきます」

「よし、軍議は城壁の上で行う。朱里はみんなに伝えてきてくれ」

「分かりました！」

そう言って朱里は他の所へ行った

「よし、副長、すぐに戦闘準備だ」

「了解です。おい、お前ら！」

「」「」「」「」「」「」「」

そう言って俺達は城壁に向かった

「城壁」

「よし、ここなら見えるだろう」

そう言っつて双眼鏡を出した

「さて……」

俺は双眼鏡で南蛮軍を見た。

にゃーにゃー

「なん……だと!?!」

俺は絶句した。敵である南蛮軍はネコミミを装着して攻めてきていた!

(おいおい、どんな敵だよ……これじゃあ、確かにやり辛いつてことが分かったよ。昨日の軍議で紫苑がなんで苦笑いしたのか分かったぜ……)

だが、南蛮軍はどんどん増えてきていた

兵士達もその姿を見て攻撃しずらくなっていた

「た……隊長、これはやりづらいです」

副長が言った

「ああ、俺もそう思ったとこだ。こいつは曹操軍よりも難敵だぞ」

実際そうである。かわいい少女がネコミミを付けてきて攻めてきても男にとっちゃあ攻撃しづらいつてことが……

「神様……これは、なんかの試練なんですか？もしそうなら答えてください。300円ぐらい上げるんで……」

俺は独り言のように言った

「ご主人様！」

愛紗達がやってきた

「愛紗達か……今回は難敵だぞ……」

俺は挫折ポーズで言った

「ご主人様が言うほどの難敵とは……敵は見えているのですか？」

朱里が聞いてきた

「ああ、少なくとも男にとっちゃあ難敵だ……」

そう言って双眼鏡を渡した

「はわわ……確かに男性にとってはやり辛いかもしれませんね……」

「どれ、朱里、貸してみろ」



そう言って愛紗が双眼鏡で覗いた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ、愛紗さん？」

愛紗はその姿を確認すると動かなくなってしまった

「愛紗？どうしたんだ？」

俺が聞いた

「・・・・ご主人様」

「な・・・なんだ？」

「確かに・・・・ご主人様の言うとおりです・・・・」

そう言って鼻血を出しながらこっちを向いた

「あ、愛紗さーん!!!??」

「あれは・・・・うう〜」

そう言って愛紗は完全にダメになってしまった

「ふむ・・・・愛紗を攻撃せずに倒してしまうとは・・・・敵も中々やりますな。」

星が感心したように言った

「星さん！？そんなこと言ってないでなんとかして下さいよー!?」

雛里が言った

「まあ〜しゃ〜ないんちゃう？愛紗や光男が手えだせんちゆうことは……」

霞は苦笑いしながら言った

「そうね。霞ちゃんのいうとおりね〜」

紫苑も苦笑いしながら言った

「いや、こんなところでまっちゃあいけないんだ。俺達はたとえ難敵が出ようとそれを超えなければならぬ。」

俺は鼻血を出しながら言った

「そうです。その通りですご主人様」

愛紗も同意した

「よし！作戦を開始する。全軍、籠城戦だ」

そう言っつて南蛮軍に戦いを挑む俺達であった

ネコミミは偉大じゃあ！！！！

俺達は南蛮軍が攻めてきたので迎撃態勢に入っていた。しかし、相手は可愛い少女でネコミミを付けた集団であった。

さすがの俺も攻撃にためらいを覚える。相手がむさいおっさんの集団なら現代兵器で一掃する所なんだがな……

（城壁）

にゃーにゃー

城壁の下では南蛮軍が攻撃を仕掛け始めていた。俺達は迎撃を開始した。しかし、相手は少女なので現代兵器は少数に制限した

「それ！」

そうやって俺は城壁の上からスタングレネードを少女達に向けて投げた。こいつは飛殺傷兵器なので相手を傷つける心配はないだろう

パ  
ン！！

下で大きな音と共に少女達は目をぐるぐるさせながら倒れていた。  
正直、かわいい

「はっあ〜」

隣では愛紗が蹲りながら悶えていた。……今回、愛紗は使えないに等しい。まあ、それはしょうがない事だ

それでも、南蛮軍は攻めて来ていた。

「くそ〜あいつらは攻撃をやめないのか？俺も精神的に結構きつい物があるぞ〜」

タラ〜

「ご主人様！鼻血！」

「おおっと」

朱里の指摘で何とか限界突破は抑えられた

「光男、どうするんや？いくらなんでも、これはきつついで〜」

霞が言った

「確かにな〜主に俺の理性部分がおかしくなりそうだ〜」

「ご主人様、天の国の物は出せないのですか？」

紫苑が言った

「天の国の？う〜ん……………そうだ!!」

そう言って創造した

光が収まり手の中には小さなゴムボールとゴム銃が出てきた

「よし、こいつならいけるかもな」

「ご主人様、それは？」

雛里が聞いて来た

「これは、ゴム銃って言うてな。このゴムボールを使って相手の気をまぎわらせる事が出来るんだ」

「くくくへくくく」

カチャ

「それ！」

ポーン！

ゴムボールは放射線状を描き南蛮軍の中に入って行った。すると・・・

ニヤーニヤーニヤー

少女達はそのゴムボールめがけて追いかけて行った

「す・・・すごい・・・」

朱里は驚いていた

「はづあ〜！〜！おもちかえり〜！〜！」

と某アニメキャラの如く乱舞していた

「あわわ・・・愛紗さん!？」

雛里は驚いていた

「よし、これならいける!しかし・・・かわいいな」

俺も理性が吹っ飛びそうになっていた

「ご主人様!？」

朱里が驚いていた

そんな事を繰り返している内に南蛮軍は撤退して行くように見えた

「退いて行ったな」

霞が言った

「ああ、あのボールを持って帰って行ったてことは遊び道具にでも使うんだろう。暫くは戻ってこまい」

俺が言った。

しかし、その隣では・・・

「はぁ・・・ネコミミって・・・いい・・・」

愛紗が血だまりを作りながら倒れていた

「愛紗さん！？誰か！衛生兵！！」

朱里が衛生兵を呼びにはわわとか言いながらかけて行った

「と・とりあえず、脅威はさりましたね。ご主人様」

紫苑が言う

「ああ、これで俺も心起きなく逝けるってもんだぜ」

バタツ

「光男！？どうしたんや！？」

霞が駆け寄って言った

「ああ、燃え尽きたぜ・・・・・・・・真っ白にな・・・・・・・・」

鼻血を出しながら言った

「光男！死んだらあかん！まだ、戦いはこれからやで！？」

「大丈夫だ。一時の物だから心配は・・・・・・・・ない・・・・・・・・はず」

ガクッ

「光男！？誰か！！衛生兵！！」

そこで、俺の視界はブラックアウト・・・しなかった。すぐに霞に叩き起こされて理性も戻っていた

「よし、愛紗がまだ応急処置を受けているがこのまま軍議を行う。  
雛里」

「はい」

と言つて雛里はたった。因みに朱里は愛紗の付き添いで医務室に居る

「では、相手の規模から説明します。先の戦いで南蛮軍はかなりの数が森に潜んでいると思われます。それに象という動物も私達の戦いで導入されているため、この先はきびしい物になるでしょう。それに森にはいくつかの湖が存在しますが、どれも毒で汚染されているため気お付けて進まなければなりません」

雛里が説明して言った

「しかし、今、敵がひいたのは好機です。このまま進軍し南蛮軍の中核である猛獲を捕える事が出来れば、私達の勝利です」

「よし、このまま進軍して南蛮軍とケリを付ける。皆もそれでいいか？」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「よし、準備を開始してくれ！」

そう言つて進軍の準備を始めた



く森く

「あちく溶けちゃうよ」

蒲公英が言った

「うるさいぞ。蒲公英、しばらく黙っとけ」

翠が言った

「けど、お姉様、この暑さは尋常じゃないよ!？」

「それでもだ。」

森に入ると中は熱帯雨林だったらしくすぐくじめじめして蒸し暑い状態だった。兵士達もこの暑さでやられる者が多く途中、熱中症にかかる者まで出ていた

「ご主人様も熱いと思うよね!？」

「確かに熱い事は熱いながらも、これさえ我慢していればどうとでもなる」

俺が言った

「げえくご主人様までそういつの?？」

「まあ、もう少しの辛抱だ。敵さんは向こうからやってくるぞ」

「ご主人様、それはどういう・・・」

復活した愛紗が言ったその時だった

「待つのにゃ！」

「誰だ？」

星が言った

「みい達の土地に入ってくるとは恐れ知らずもいとこにゃ！」

そう言って出てきたのは・・・

ザッ

縞縞模様の猫だった

「はうあゝ!!！」

愛紗はまた、悶えてしまった

「な・なんにゃ!?!？」

「何でもない。気にするな。それよりお前が猛獲か？」

俺が聞いた

「そうにゃ！みいが南蛮王猛獲にゃ！」

そう言っつてえっへんと言っつた猛獲

「それじゃあ、猛獲ここは話し合いと行こうじゃないか」

「話し合い？」

「そうだ。まず、どうして近くの街を襲ったのかな？」

「簡単にゃ。食糧が欲しかったからに決まってるにゃ」

「そうか。あそこの街は俺達は保有している街なんだ。だから、ここまで出張ってきた。分かるか？」

「つまり、あれにゃ？お前らがみい達の土地に入ると同じってことかにゃ？」

猛獲は可愛く首をかしげた。正直かわいい

「そうだ。そう言う事だ」

「わかったにゃ！つまりは戦いに来たそういうことにゃ！」

「結果的にはそういう事になるな」

「じゃあ、勝負にゃ！」

そう言っつてどこに隠してたかは知らないがおおきなハンマーを取り出した

「いくにゃ!!」

そう言つて振りかぶつてきた

「あいや、待たれい！」

「にゃ!?!」

猛獲大きく乱れた

果たして大きな声の主とは？

悪戯ってわくわくするよね？(前書き)

更新が遅れてしまって申し訳ありません

悪戯ってわくわくするよね？

おれたちは南蛮王・猛獲と対峙した。そして、いざ、勝負しようとしたとき一人の声によって阻まれた。

「待たれい！！」

「にゃ！？」

「おっと、なんだよ。星、そんな大きな声を出して」

大声の主は星だった

「主、ここは、私に任せてはくれませぬか？」

「どうしようってんだ？」

「なに、ちよっとした悪戯ですよ。それに主は我慢の限界と見える」

「？」

タラッ

星が指さした瞬間、治りかけていた鼻血が出てきた

「馬鹿な！？治りかけていたはずだ！」

おれは叫んだ

「主、無理はしないことだ。では、行つてまいる」

そう言つて俺の返事も聞かずに猛獲の所に向かつた

「誰にや？お前は」

猛獲が言つた

「私は劉備軍の将、趙雲だ。さあ、猛獲よ。逃げも隠れもしない。かかつてこい」

「分かつたにや！にやああああ！！！！！！」

そう言つて猛獲は持っていた武器で思いっきり振り上げ星に向けて走つて行つた

「よつと」

ドローン！！！！

「にや！？避けるなんて酷いにや！！」

「当たつたら痛いではないか」

「さつき言つたにや！逃げも隠れもしないつて！！」

「確かに言つたが避けはしないとは言つてないぞ」

「にや！！！！」

「わかった。今度は避けもしないからもう一回やってこい」

「にゃあああ!?!?!」

猛獲は言われたとおり思いっきり振り上げた

「ふむ」

スッ

「にゃ!?!」

ドコーン!?!?!

「ひどいにゃ!また、避けたにゃ!」

「避けなかったら怪我をするではないか」

「言ったにゃ!さつき、避けないって!」

「言いはしたが、だからと言って避けなかったら私が怪我をするではないか」

「にゅにゅ……」

「む?」

「びえええ……!?!?!」

猛獲はついに泣いてしまった



「あゝあゝ、泣かしたな。星」

翠が言った

「む？これでは、私が思いっきり悪者ですな」

「ああ、その通りだよ。さすがにやりすぎだ」

俺が言った

「蜀の奴らはみんな酷い奴らばかりにや！」

猛獲が泣きながら言った

「ほら、星のせいで俺ら、全員が悪者になっちゃったじゃないか。どうしてくれるんだ？」

俺が言った

「ふむ……主、あとは任せた」

「おいおい、責任転嫁するなよ。まあいいや。なあ、猛獲」

「ぐすつ何にや？」

猛獲は泣きながら言った

「さっきのことは謝る。だから、元気になってくれ。ほれ、これは仲直りの印だ」

そう言っつて倉庫から飴玉を出した

「なんにゃ？これは」

「そいつは飴玉つて言っつて甘いお菓子なんだ。食べてみてくれ」

そう言っつて渡した。猛獲はじつと飴玉を見て意を決したように食べた

「コロコロ」

「甘いにゃ〜」

猛獲は蕩けながら言っつた

「そうかそうか。それは良かった。ほれ、他にもたくさんあるから仲間にもあげてこい」

「分かつたにゃ！」

そう言っつて近くの仲間に飴玉をあげていく猛獲

みんなも最初はじつと見ていたが一人が食べるとそれにつられて次々と食べたいった。

「いいね。こんなにものほほんとした空気は……」

そういつつた瞬間後ろに目を向けた

「ああ〜もう駄目……」

愛紗はまたビクンビクンと体を震わせながら蹲っていた

「はわわ〜愛紗さん、しっかりしてください！」

朱里が体を揺さぶるが変化はない。正直言って俺もヤバい状況であった

その時

トンツトンツ

「ん？どうした？猛獲」

振り返ると猛獲が立っていた

「お前はいい奴にゃ！これからは美以って呼ぶにゃ！」

「そいつは真名だろ？いいのか？」

「いいにゃー！」

「分かった。俺のことは、光男って呼んでくれ」

「分かったにゃー！」

「それじゃあ、美以、これからは敵同士じゃない。友達同士だ。分かるな？」

「分かるにゃー！」

「じゃあ、この争いももう無しだ。これからは近くの村を襲ったりしないよな？約束できるか？」

「できるにゃ！」

「そうかそうか。えらいえらい。じゃあ、美以、これから俺達は本国に帰ろうと思うんだが一緒に来るか？」

「いいのかにゃ？」

「ああ、おれたちの国に来ればお前らの知らない食べ物がたくさんあるぞ。どうだ？」

「行ってみたいにゃ！」

「よし、決まりだ。じゃあ、数日したら迎えに来るからな。それまでに準備をしておけよ」

「分かったにゃ！みつお、待ってるにゃ〜」

「おう！それじゃあ、帰るとしますか。ほれ、愛紗、さっさと起きろ」

ドコッ！

俺は愛紗に手刀を浴びせた

「はっ！？ハッ！？ここは誰！？私はどこ！？」

手刀を喰らった愛紗は周りを見ながら言った

「おはよう、愛紗。」

「あつご主人様、」

「ほれ、南蛮軍は俺達の味方になったぞ。争いはもう必要ない」

そう言って手を出した

「あつそうですか。それは良かったです」

そう言っつて俺の手を掴み立ちあがった

「さて、帰るとするか。美以、また後でな」

「分かったんや！気お付けて帰るにゃ」

美以は手を振りながら見送ってくれた

く街までの道く

「ふうく今回は無駄な争いをしなくて済んだな」

俺が言った

「そうですね。おかげで兵の皆さんも安心してるとよっに見えます」

朱里が言った

「これで、後ろを気にしなくて済みますわね」

紫苑が言った

「確かにその通りだ。後は……翠」

「何だ？ご主人様」

「確か、お前の故郷の方には五胡とかいう勢力があったよな？」

「ああ、あたしらにとっちゃあどうってことないけどこっちの方じゃあいつらの戦闘を見た事がないからな」

「翠、できるだけいい奴らの情報を頼む。」

「情報？」

首を傾げながら言った

「ああ、奴らの規模とかどんな戦い方が有効なのかとかな」

「分かった。帰ってから書簡にまとめることになるけどそれでいいか？」

「ああ、そうしてくれ。それじゃあ、今夜は宴会でも開くと思いますか」

「おお、光男、太っ腹やな」

霞が言った

「何、皆頑張ってくれたんだ。これぐらいは無用さ。もちろん、費用は俺持ちだ。ジャンジャン騒いでくれていいぞ」

「ご主人様、それでは、ご主人様が厳しくなるのでは？」

愛紗が言った

「大丈夫大丈夫、俺には強い味方が付いてるからな」

そう言って城に凱旋して行くのであった

そろそろ、大決戦かな？（前書き）

更新が遅れてしまい度々申し訳ないです・・・



そろそろ、大決戦かな？

俺達は南蛮を抑えた後、無事、本国に戻った。そして、美以達を桃香に紹介すると桃香はすぐに仲良くなった。まるで、転校生にさっそく自己紹介する天然娘みたいだった

そして、俺は曹操との最終決戦に向け準備を進めた。武将部門は愛紗を筆頭に演習が行われていった。そのおかげで錬度は日々高まっている

俺は桔梗と一緒に桔梗の部隊を現代の訓練方法をみっちり教えた。ついでに俺の部隊も一緒に訓練させた

～鍛錬場～

「ほれ！二番部隊、そのままでは敵にやられてしまうぞ！」

「……………応！！……………」

桔梗の檄が飛ぶ

「お前ら！怯えるんじゃないぞ！この恐怖心に勝てば大抵の事なんぞ耐えられる！」

「……………ヘイ！大将！！……………」

俺は自分の部隊に檄を飛ばした。副官を筆頭に皆士気が上がり恐れることなく突撃して行った

そのおかげで桔梗の部隊は命中精度が上がり、俺の部隊は一人が一騎当千並みの強さを会得した。また、軍師部門は魏の方に間諜を送り逐一情報を整理、今後の戦闘に向け作戦を練っていた。

治世の方は桃香や白蓮、俺などで手分けして行っていた。桃香は街の治安活動に俺や白蓮は流通、経済面で金をどんどん増やしていた。

その金で軍事的道具の買い付けなどを行う、さらに、食糧を買い現代風に改良（保存食品など）した後、保管する。

このおかげで約5年は戦争ができる状態にまで備蓄する事に成功した

（俺の部屋）

「よし、備蓄に関しては問題ないな。これで放火とかされない限り戦争はできる状態だ。次は……」

そう言って大量にある資料を黙々と片づけていく

その時

コンコン

「はい、どござい」

俺が呼びかけた

ガチャ

「ご主人様、この前言った五胡の資料が完成したぞ  
入って来たのは翠だった」

「おお、完成したか。ありがたいぜ。見せてくれ」

そう言って翠から資料をもらう

「ふむふむ、規模はかなりでかいな」

「ああ、複数の部族が固まってなってるからな。ヘタしたら一国より多い人数になる時もある」

翠が言う

「ほゝその時の対処の仕方もあるんだな」

「ああ、と言っても蒲公英が作りだした畏だけどな、これが案外役に立つもんだよ」

そう言って苦笑いする翠

「ともかく、ありがとう。今度、何か奢るよ」

「まじ!?!?やった!?!」

そう言って飛び跳ねる翠

「ああ、約束するぞ」

「おっしや、じゃあ、またなご主人様鍛錬の途中だから行くわ」

そう言って部屋を出て行く翠だった

「フフ、あんなによるこんじゃってまあ、まあ、彼女らの笑顔が見られれば俺は十分幸せなんだがな」

そう言って仕事を片づける俺だった

〱翌日、裏山〱

「さて、基地は大丈夫かね？」

俺は朝早く裏山の航空基地を目指していた。何故かと言えばここん所い로운な所に向かっていたからな基地を放りっぱなしにした状態だった

キキ

「おお、まさに廃墟寸前って感じだな。見た目はそんなにひどくないが……」

基地に入って言った。建物自体はそんなに損傷などはしていないが滑走路付近などは雑草などがこれでもかかってぐらいに生えていた

「ん、これはさすがに一人じゃ無理だしな、どうしようか？あつそうだ！」

そう言って出したのは何機かの芝刈り機を出した。

「こいつらを自動操作にしてっど……よし！エンジン始動！」

ブオン！ブルルルル……

芝刈り機は動き出して辺りにある雑草を排除し始めた

「よし、これならばらくしておけばきれいになるだろう。さて、管制塔とか大丈夫かね」

そう言っつて建物の中に入った

く航空基地、建物の中く

「んぐやっぱ使っつてないだけあつてやっぱきれいだな」

中を見たが思っつたより酷くはないようだ。

「よし、後は、雑草とかが終われば戦闘機を発進させられるな」

そう言っつて外に出る

外に出ると芝刈り機は雑草を処理し終えて邪魔にならない所で待機していた

「おし、処理は終わつたな。じゃあ、戦闘機発進！」

そう言っつとハンガーで待機していた。SU-27 F-22ラプターなど現代を代表する戦闘機が滑走路に順々と入り離陸して行つた

キーン！

けたたましい爆音と共に戦闘機達が飛びだって行く

「よし、全機に通告する。今回は模擬戦だ。まずは自身の機体の調子を確認してくれ。問題があったら着陸してくれ。俺が整備するからな」

そう言うとそれぞれいろんな動きを始めた。スピードを出したり空中回転をしたりと色々な動きを見せた。そんな中ホーネットがギアダウンし着陸した

「うーん、あつエンジン部分がおかしいな。待ってる調整するから」

そう言って調子の悪い機体を見て行く俺だった

そんなこんなで全機の訓練が終了しハンガーに戻した。そして、山を降りて城に戻った

「あつご主人様」

廊下で会ったのは桃香だった

「よう、桃香」

「ご主人様、朝いなかったけどどこに行ってたの？」

「ああ、裏山に行ってたのさ。航空基地の様子見にな」

「へーあつそうそう。朱里ちゃんが武将を集めて軍議を開くみたいだよ。何でも重要な情報が入ったんだって」

「ほ〜そうか。思ったより早かったな。場所はどこでやるんだ？」

「会議室でやるって」

「分かった。時間は？」

「え〜と明日の午後だったよ」

「分かった。ありがとう桃香」

ナデナデ

「えへへ〜」

桃香は撫でられた事で期限が良くなったようだ

「じゃあ、ご主人様、私、仕事があるから行くね」

「おう。頑張れよ〜」

そう言って桃香を見送った

「さて、俺も頑張るとしますか〜」

そう言って俺は今日も一日に励むのであった

## 作戦準備

俺達は曹操との最終決戦のためいろいろ準備を始めた。しかし、どうしても足りない物があった。それは人員だ。いつの時代でも戦争には兵力は確実に必要となる。兵器を動かすのも人間の手があって始めて動かせるのだ。

〈会議室〉

俺達は朱里から召集があったため、会議室に集まった

「では、始めますね。」  
進行は朱里だ

「今回は、重要な情報が入りました。それは曹操さんの兵力です。」

535

「どのくらいの規模なんだ？」  
俺が聞いた

「約、50万です」

「50万!?それはきつついな」  
霞が言った

「確かに」  
桃香も言った

「こっちはどのくらい集まるのだ？」  
愛紗が言った



「えっと、最大で30万です。」  
雛里が言った

「どう考えてもこちらが不利か・・・雪蓮の所は？」  
俺が言った

「冥琳さんの話では再建したばかりで集められるのは20万が限界だそうです。」  
朱里が言った

「そうか。合わせて丁度つてところか。よし、雪蓮の所には俺が行って来るわ。話を付けてくるわ」

「ご主人様！それはいくらなんでも・・・」  
愛紗が言った

「大丈夫だよ。どうせ、行くとしても俺の時代の乗り物だからなあってという間さ」

「確かにそうですね。では、ご主人様、お願いしていいですか？」

「おう、任せろ」

「他に質問はあるか？」  
俺が言った

「ご主人様、いつ出発予定なのですか？」  
紫苑が言った

「そうだな・・・後、三日後にここを出発してくれ。雪蓮にも  
そういう風に伝えるから」

「分かりましたわ。」

「他に質問はあるか？」

「・・・・・・・・・・」

「よし、解散！」

そう言っただけで会議を終わりにした

（裏山）

「ご主人様、気お付けてね？」

桃香が言った

「ああ、大丈夫だ。何かあったら、このスイッチを持っててくれ。」

そう言っただけでスイッチを渡した

「これは？」

「そのスイッチを押せば、俺の持ってる発信機に反応するようにな  
ってるからな。そしたら、すぐさま救援に向かうから」

「分かった！」

元気よく言った

「よし、発進するから離れてくれ」

そう言ったら桃香達は離れた

因みに乗ってるのはハリアー？だ。この機体は垂直離着陸できる機体である。武装は20m機関砲と大地・対空ミサイルが積んである

「テイク・オフ！」

キイイイイン

機体は順調に上がって行った

下で桃香達が手を振ってる。俺も親指を上げて答えた

「よっしゃあ、発進だ！」

そう言って垂直モードから飛行モードに変えた

キイーーーーン

青空の元1機の戦闘機が悠々と飛んでいた。光男の乗る戦闘機である

「さて〜雪蓮達は元気にしてってかな〜？」

そう言って呉を目指す俺だった

〜呉、上空〜

「おっ、見えてきた。」

そう言って下を見ると雪蓮達の住む城が見えてきた

「さて、降りる所はあるかな？」

そう言って探す、

「おっ、あそこの中庭なんか良さそうだ。降りよう……ちよつと驚かせようかな？」

く呉の城、中庭く

中庭には、二人の美少女が小さな宴会を開いていた。

孫伯符と周瑜である

「かんぱーい！」

雪蓮が大きな声で言った

「乾杯」

冥琳も小さな声で言った

「はくこれで、光男がいれば一緒に乾杯できるんだけどな」

雪蓮が言った

「仕方ないさ。彼は蜀の人間だ。そう安々とくれはしないだろうよ」

冥琳が言う

「でもな」

「さあ、雪蓮、今日は二人で楽しもう」

冥琳は気を紛らわせるように言った

その時

キーン！！

「キヤツ！何？」

そう言つて空を見た。そこにあつたのは……1機の戦闘機であつた。これを所有している人物と云えば……

「光男ね！」

雪蓮はそう言つて階段を下りる

ハリアーはそのまま中庭に着陸した

ガチャ

「ふう〜やつと着いたぜ」

俺は大きく背伸びをした。背骨がボキボキと鳴った

「光男！」

「ん？うわつと！？」

雪蓮がそのまま飛び付いた

「よう雪蓮、来たぜ」

俺は雪蓮の頭を撫でた

「いらっしゃい、光男、今日はどうしたの？」

「ああ、ちよつとした報告があつてな」

「報告？」

「ああ、悪いんだが、皆を集めてくれないか？」

「いいけど、何を話すの？」

「それは皆が集まった時に話すよ」

「分かったわ。とりあえず、集めて来るわね」

そう言ってその場を離れる雪蓮だった

## 作戦会議2

俺は蜀を一旦、離れ雪蓮達のいる呉へと向かった。内容は今回の戦についてだ。今までの戦ならば、こんな事をする必要はないのだが、50万対50万という大戦争に限っては作戦を練る必要がある。そのために、俺は呉へと赴いたのだ

〱呉の城〱

あれから、雪蓮は皆を集めに行ってもらってる。その間、俺は冥琳と話していた

「しかし、急だな。何かあったのか？」

冥琳が言った

「いいや、そうじゃないさ。桃香達の考えを覚えておこうと思ってな。っとその前に……………」

そう言っただけ俺はM700を出した

「それはなんだ？」

冥琳が興味深そうに言った

「これはスナイパーライフルと言って、こっちで言う弓兵に近い物だ。だが、弓よりも確実に遠くの物を命中させられる」

そう言っただけ俺は。標的は遠くに位置する木に向かって…………

弾を装填してすぐさまその木に向かって撃った。すると……

「ぎゃあ!..!」

木の中から間諜と思わしき人物が落ちてきた。

「すごいな……」

冥琳は驚いたようだ

「そうかい?おっ発見」

そう言って次の標的を撃った。その後も間諜狩りを続けて合計で10体の死体が出来上がった

「よし、これで、完了っ」と

そう言って俺はM700をしまう

「これは、魏の奴らか?」

「ああ、そうだろうよ。逐一、情報を流れるようにしてたみたいだな。だが、もう安心していい。魏の間諜はいないからな。これで、余計な行動をしなくて済む」

そう言って近くの席に座った

「すごいな。光男は」



「いやいや、そうでもないさ。俺は冥琳みたいに特別、頭がいい訳でもないかといって雪蓮みたいに武で強い訳でもない。俺には飛び道具を持って始めて強いつて言われるだけさ」

「謙遜するな。一般兵からみたら光男は武将以上に見えるはずだぞ？」

「そうかね？」

そう言っている間に……

「おゝい、光男！」

雪蓮が皆を集めてくれたようだ

「皆を集めたわよ！」

雪蓮が言った

「」苦勞さん」

俺が言った

「光男、久しぶりね」

蓮華が言った

「ああ、久しぶりだな。蓮華」

そう言って皆と挨拶をした。その後、席についてももらった

「さて、始めて貰おうか。光男」

冥琳が言った

「仰せの通りに、現在、生き残ってる国は魏、呉、蜀の三つの国に分けられているのは知ってるな？」

俺が言つと皆は頷く

「でも、光男、その他の国は？」

蓮華が言った

「そんな物は知らん、あいつらは自分の利益だけ動いてるようなものだ。勝手に消滅してくれるだろうよ。もし、反抗してきたりしたら、その時は塵も残さず消し去るのみだ」

そう言つてニヤリと笑つた

「そ・・・そう」

蓮華も苦笑いした

「話が逸れたな。この乱世もあとわずかで終了する。皆は大体気づいてるだろ？」

「魏との最終決戦・・・と言つ所か」

冥琳が言った

「正解、今の魏は誰にも負けないほどの資金と兵力が存在する。そこで、蜀と呉による連合によってあの曹操と対峙する。そうすれば対等に戦ができるって訳だ」

「たしかに光男の言う通りね。今の私たちでは負けるどころか国を滅ぼしかねないわね」

雪蓮が言った

「まあ、兵力の方は特に問題はない。開戦場所だが」

「ああ、大体予想は着く、赤壁であろう？」

冥琳が言った

「その通り、ここは船の上で戦われる訳だが、呉にとっちゃ問題はないだろう？」

「ええ、私達は船による戦は得意中の得意よ。簡単には負けないわ」

雪蓮が自信を持って言った

「ああ、そこは期待してる。それに俺らの軍にも新しい部隊が出来たからな。それに俺独自の作戦もあるからな」

「何なの？」

蓮華が言った

「それは見てのお楽しみって言う奴さ。と言う事で冥琳」

「なんだ？」

「こっちは後どのくらいで出る予定？」

「そうだな。大体の準備は終わっている。後はそちらが出しだい出發する予定だった。」

「そうか。こっちは後、三日は掛かるからな。できるだけ急がしてはいるんだが」

「それはしょうがない。焦っても負けては意味がないのだからな」

「そうだな。話は以上なんだが、そっちから何か質問はあるか？」

そう言って皆に問いかけた

「あつ光男、あなたの国の武器も出すのかしら？」

雪蓮が言った

「そりゃあ、もちろん、それに今回はあつと驚くぜ？」

「驚く？」

「ああ、まっさつきも言ったように見てからの楽しみって言う奴だ」

俺は笑って言った

「むゝ私は知りたいたいんだけどなゝ」

雪蓮はぶーぶーと言った

「まあ、信用してない訳じゃないが敵を欺くならず、味方からっていつだろ？」

「その通りだぞ。雪蓮、光男には光男なりの作戦なんだろう」

冥琳がフォローしてくれた

「ぶゝぶゝ」

雪蓮はそれでもふてくされた。

「さて、俺からは以上になる。」

「よし、皆の物、今以上にそれぞれの分野を磨いてくれ。決戦の日は近い」

そう言うと皆「応！」と活気よくいつてその場は解散となった。

その後、雪蓮に「建国祝いだから一緒に飲みましょう?」とか言っ  
て小さな宴に誘われた

「じゃあ、改めてかんぱい！」

雪蓮が元気よく言った

「乾杯」

俺も合わせた

「光男」

「なんだ？」

「本当にありがとう。光男がいなかったらどうなってたか分からなかったわ」

雪蓮は建国の事に礼を言った

「気にするな。俺はただ手伝いをしただけだ。その後の功績は全部雪蓮達のものじゃないか。」

「それでも、私はお礼を言いたい、本当にありがとう」

そう言っ頭を下げる

「おいおい、そんな事で頭を下げないでくれ。そう言う事は無しだ」

そう言っ頭を上げさせた

「でも、今回だけじゃない。本当なら私は母様の墓地の隣にいたかもしれないなかった訳だし」

「あれは、俺が勝手にやった行動だ。普通なら死んでいたが運がいからな・・・昔から」

「そう……それより、じゃんじゃん飲んで行ってね」

「応」

そう言って俺は酒を飲んでいった

## 最終決戦前日

俺は、曹操との最終決戦のため呉から出発し、赤壁で桃香達と合流する予定だ。そして、何事の邪魔立てもなく無事、出発する事が出来た

（明朝、呉）

「いくぞ！呉の精鋭よ！いざ、赤壁へ！」

雪蓮の号令と共に呉の軍勢二万が一斉に動き出す、進んでいくごとに大地が赤に染まっていく

「すごいな……」

俺は思わず見惚れてしまった

「そんなにすごいか？」

冥琳が言った

「ああ、やっぱり軍隊ってのはいいね。改めて再認識した感じがあるよ」

「ふっそうか」

そう言って冥琳が少しばかり笑った

「みつおー！」



先頭から雪蓮がやってきた

「おう、どうした？雪蓮」

「暇だから、何か面白い話して！」

にこやかに言う雪蓮だった。とても呉の王様とは思えない行動であった

「話……か。何がいい？」

「うん……光男の世界の話！」

「よし、任せた」

「具体的には未来の軍隊かな？」

「そうだな……じゃあ、まず基本的な事を教えよう」

「基本的な事？」

「ああ、こつちの世界じゃあ剣・槍・弓矢が主流だな？」

「ええ、そうね」

「だが、俺達の国は銃と言って弾を飛ばす兵器があるんだ」

「??？」

雪蓮は今一分かってないみたいだ

「ん〜簡単に言うとな。弓矢をもっと速く飛ばす事が出来る物と思ってくれればいい。」

「なるほど〜でも、光男確か、持ってたわよね?」

「ああ、持ってはいるが、俺のは特別製でな」

「特別製?」

「ああ、俺が二十歳になった時、知り合いのおじさんからもらった物だ。」

そう言って愛銃である四丁を出した

「ふ〜ん、二十歳の時にね……………ってええ!??」

雪蓮が驚いた

「どうした?」

「光男って二十歳なの!??」

「ああ、そうだが?俺は去年二十歳になったばっかした」

「うそ……………」

「もしかして……………年下に見えた?」

「うん……見た目的に十八ぐらいかな？って思ってた」

「(。・。・)」

俺は思わず絶句した。だって、年下に見えてたって男としてどうよ？

「あつ気を悪くしないでね……私はそういう風に見えてたってだけだから」

雪蓮は何とか元気づけようとしたみたいだったが……逆に追い込んでしまった

「はあ〜」

俺は大きな溜息を吐いた

「もう……光男、元気出して？」

雪蓮が心配そうに言った

「大丈夫だ……気にしないでくれ」

光男はそう言うが、誰が見たって落ち込んでるようには見えなかった

「そつだ！光男、あなたの銃の腕前を見せてよ！」

「……腕前？」

「そつ！前から気になってたんだけど、光男ってどこまでの物かな

？って思っちゃって」

「そうか……よし、分かった。じゃあ……」

そう言っつて手元にモシン・ナガンを出した。こいつはボルトアクションなので一発ずつ弾を装填しなければならないがその分、威力はお墨付きだ

「じゃあ、雪蓮、これを持って」

そう言っつて雪蓮に双眼鏡を渡した

「これは？」

「それは双眼鏡と言っつて遠くの物がはっきり見える便利な物だ。あそこにある岩に向かって覗いてみな」

「う……うん」

そう言っつて双眼鏡でのぞく雪蓮

「うわー！すごい！あんな遠くにある岩が近くで見てるみたい！」

雪蓮は興奮しながら言っつた

「じゃあ、その隣にある岩を見てみな。」

「うん……？光男、何か乗っつてるけど？」

雪蓮は気づいたように言っつた

「ああ、俺が用意した的だ。じゃあ、そのまま見てろよ………  
それ！」

ドン！という重い重低音と共に弾が発射されていく、弾は吸い込まれるように的に向かっていった。そして、的である空き缶が衝撃と共に大きく吹っ飛んだ

「す……すごい」

雪蓮は驚いたようだ

「ああ、そうだろ？これが銃ってやつさ」

ガチャンと言う音と共に次の弾を装填した。そして、引き金を引いた。次の弾も一発目と同じく空き缶に命中し空き缶は吹っ飛んだ

その繰り返しをやって最後の一発を発射し射撃を終えた

「ふう、終わりだ」

そう言ってモシン・ナガンをしまう

「すごいわね……今の銃って」

「ああ、そうだが、実際、弾がなきゃただの鉄クズと同じだからな」

俺が言った

「そうなの？」

「ああ、刃が削がれるように銃も弾がなきゃあその威力を發揮しない。たとえどんな銃でもな。」

へビのおっさんの付けてるバンダナじゃあないけど無限に出てくるなんて事は夢のまた夢なんだから

「ふくん、そうなんだ」

「ああ、だから、この時代の人には尊敬するよ」

「尊敬？」

「ああ、銃もない時代剣や槍だけで勝敗を付けてたからな。それこそ自分の実力が無い限りやられる訳だ。だが、俺達の国じゃあ銃一つあれば何でも変わっちまう。」

そうやって俺は空を見上げた

「光男……」

「だから、正直、憧れはするな。雪蓮とか」

「わ……私？」

「ああ、あんな風に力強くしかも過信過ぎないってところが俺は憧れるよ」

「そ……そうかしら？／＼／」

雪蓮は顔を赤くしながら言った

「ああ、」

そう言うてにこやかに笑った

「くく／＼／＼」

雪蓮は顔を真っ赤にして俯いてしまった

「どうした？雪蓮」

「だ、大丈夫よ！？ええ、大丈夫……」

そんなこんなで無事に桃香達と合流する赤壁付近まで到着した俺達であった

## 赤壁

俺達は、呉を出発し無事、桃香達と合流を果たした。今、赤壁の手前の地域で陣を張り今後の作戦を会議することになった

（蜀呉連合陣営）

「では、始めたいと思います。」

進行を務めるのは朱里だ

「まず、私たちは赤壁より南のこの位置に陣を張っています。そして、曹操さん達は北より侵攻してくるかと思われます。」

そう言っつて机の上にある地図を指しながら言っつた

「朱里ちゃん、曹操は船を使っつてくるかと思っつ？」

雪蓮が聞いた

「はい、雪蓮さん達の流した噂が好いように回っつていますので、船は必ず使っつてくるかと思われます。」

実は、ここに来る途中で二つのうわさを流した。

一つ目は赤壁より北の道には人外の獣が生息しており、会っつたものは必ず、行方が分からなくなっつてしまっつたという噂、これは光男が流した噂で、この時代だと神様だとかが信じられていた時代であるから噂は早く回るだろっつと考へたのだ。



二つ目は漁師たちが互いを助けるため船と船を鎖で繋ぐ方法である。これは、雪蓮達が考えた噂である。もちろん、他の地域ではそんな方法は使われていない。これは曹操達を嵌めるための罠である

「ご主人さま、二つ目はいいとして、一つ目の噂は何で流したの？」

桃香が聞いた

「この時代だと、神様類の物を信じてる傾向が高いからな。もし、曹操が船を使わないってなった時の保険さ」

「ふん」

「さて、実は、もう一つ実行したいことがある。俺は一旦、皆と離れる」

俺が切り出した

「どういうことや？光男」

霞が言った

「何、曹操達を驚かそうと思ってな。表的には俺が複数の部下を連れて脱走という肩書きにする」

そう言つと蜀の皆は驚いたようにいう

「何を言ってるんですか！？ご主人様！」

愛紗が言った

「待った。よく聞いてくれ。表向きには皆と俺の思想が合わなくなつたとも言えはいい。そして、俺が脱走したことによって相手を油断させるんだ」

「なるほど、足元をすくわせるということですね」

紫苑が言った

「その通りだ。もちろん、俺は戦場に戻ってくる。その間、時間稼ぎをしておいてほしい。ある物を用意しなきゃあいけないからな」

「何を出すんだ？ご主人様」

翠が言った

「さすがにそこまでは教えられない。敵を欺くにはまず、味方からつて言うだろ？」

「うーん、そこまで言われちゃあしょうがないか」

そうやって翠は渋々納得してくれた

「じゃあ、準備があるから俺はちょっと抜けるぜ」

そうやって俺は会議場を後にする

（連合陣営内）

「さて〜おついたいた。お〜い桔梗〜」

俺は陣営内にいた桔梗を見つげ呼んだ

「どづかなさいましたか？お館様」

桔梗は鍛錬をしていたみたいだ

「桔梗、今回は俺に同行してくれるか？」

「と言いますと？」

「今回、俺は単独行動をする。この作戦が勝敗を決すると言ってもいい。だから、頼む」

そう言つて頭を下げた

「それは、もちろんですよ。お館様」

「そうか。ありがたい。じゃあ、内容を説明するな……」

そう言つて桔梗に今回の作戦を教えた。周りに間諜がいないかどうかを警戒しながら……

そして、桔梗に内容を伝え終わると、俺は陣の外の森にストライカーを出している改造を施した。まず、木にぶつかつても壊れないように耐久力を上げ、ついでに上に付いているガンナー機能を自動操縦モードに変更しオクトカム機能も取り入れた。

オクトカム機能とは、オクトパスつまりタコの擬態を真似した機能

である。周囲の色に溶け込み敵の目を欺くこれがオクトカム機能である。ステルス迷彩より、上のランクになるだろう。例で挙げるなら蛇のおじいちゃんが出ているゲームの武器商人が移動用に使っている装甲車を思い出ししてくれればいい

「よし、これで、時間は縮小するな」

俺は装甲車を見ながら言った

「お館様」

「ん？おお、桔梗、どうした？」

「ここを出た際の移動手段はどうされるのですか？まさか、歩きと  
いうわけにはいかないでしょう」

桔梗が言う。俺の後ろにある装甲車には気づいてないようだ

「ああ、そう言うだろうと思ってちゃんと用意はしてあるぞ」

そう言って俺の後ろにある装甲車を指差した

「？何もないではありませんか」

当然の反応だった。俺は思わず吹き出しそうになったが堪えた

「本当に分からないのか？よく見てみるよ」

「？・・・なっ!？」

桔梗は驚いた。光男の後ろから突然、装甲車が出てきたのだから、光男が出す場合なら手を合わせて何か言うのを見ていたのだから驚くのも無理はない

「お館様、今何かしましたか？」

桔梗が聞いた

「いや、こいつの能力さ。周りの色に溶け込むことによって敵の目を欺く能力があるんだ」

そう言ってもう一回ストライカーを消した

「は、未来の乗り物はすごいですな」

「とりあえずは、こいつで移動する事になるから心配しなくてもいいぞ」

「そうですね。分かり申した」

桔梗も納得したようだ

それから、数時間がたつて夜になった。俺と桔梗の部隊はこっそりと陣営を抜け出した。もちろん、作戦のためだ。桃香達には一度、断っているが派手な演出が必要だったため空きで使用していた天幕を爆破する事になっている。この事で敵にも反乱が起きたと思わせる事が出来るだろう

「さて、皆、準備はいいか？」

俺が言つと桔梗を含める部下達が頷く、もちろん、俺直属の部下（副長など）もこっちの作戦に参加している

「よし、派手に行きましょうか」

そう言つて手元のスイッチを押した。すると、俺達の反対側で爆発が起きた。この作戦は桃香達や雪蓮達の幹部にしか伝わっていないため兵士たちは大騒ぎしていた

「全員、乗車だ。いくぞ」

そう言つてストライカーに乗る俺達であつた

　　その頃、蜀呉陣営内

「早く火を消せ！」

冥琳が叫んだ

「あちゃ　光男も派手にやるわね」

雪蓮は苦笑いしながら言つた

「でも、ご主人様も優しいね。誰も使っていない天幕を爆破するなんて」

桃香もニコニコと笑つていた

「ほ、報告します！」

兵士が来た

「なんだ？」

冥琳が答えた

「光男様が……複数の部下を連れて脱走しました！」

兵士は慌てたように言う

「ええ〜！本当に!？」

桃香は慌てたように芝居を打った

「ふむ、あの爆発も光男による物か……雪蓮、どうする?」

「そ〜ね、思春、明命」

「「はっ」に」

「今すぐ、部隊を編成しなさい。できたら、光男の搜索に向かつて、彼は……いや、奴は我らを見放した。よって斬首とする。見つけ次第捕縛して」

二人は頷くとすぐさま部隊編成に向かった

「うわ〜、雪蓮さん、残忍ですね〜」

桃香が言った

「しょうがないじゃない？光男に頼まれたんだもの、桃香じゃああいう事は言えないだろうからって」

はあ、とため息を吐きながら言った

「ご主人様らしいや・・・あはは」

桃香も苦笑いした

くその頃、魏陣営

「ふう、船旅も楽しくないわね」

曹操が言った

「そうですが、北の道には妙な噂も立っていますからね。仕方ありません」

夏侯淵が言った

「華琳様！」

夏侯惇が入って来た

「どうしたの？春蘭、そんなに慌てて」

「はっ、今さつき間諜から入った情報なのですが、神田が連合の陣営より去ったとの情報が入りました」

「な！？それは本当なの！？」



曹操は驚いた

「はい、間諜によると陣営内で大きな爆発があった模様です。その前にも蜀呉と神田が言い争っているのも見ていたと言っています」

「そう。分かったわ、下がっていいわよ」

「はっ！」

そう言っつて夏侯惇は下がった

「秋蘭、あなたも席をはずしてくれる？」

「御意」

そう言っつて夏侯淵も下がった

「天は……我らに味方した……と言っ事か？」

曹操は考えるように言った

〈光男部隊〉

俺達は連合陣営を離れた後、ストライカーで赤壁に近い川を走行していた。夜のため、皆は寝ていたが、桔梗は起きたままだ

「お館様、これからどうするおつもりですか？」

「んん？そつだな。とりあえず、雪蓮達が追手を向けて来てるから、

その回避だな。それから、次の夜まで待機だ。行動はその後、行く、桔梗も休んでいいぞ」

「分かり申した。」

そう言っつて桔梗は寝る体制に入った

「さて、何を出そうかね？」

俺はこの後の作戦で出そうと思っている。兵器の思案に入った。きつと、曹操達の所にも情報が入ってるだろう。待つとけよ曹操

そう思いながら俺達を乗せたストライカーは闇に紛れこんでいった

赤壁と変態ビルダー + 天才的医者（前書き）

今回は桃香達は出ません

## 赤壁と変態ビルダー + 天才的医者

俺はある作戦のために桔梗と俺の部下を連れて一旦、桃香達と分かれることになった。曹操にはこちらが脱走したように思わせる為、わざと派手な演技を仕掛けた。

そして、俺らは追ってから逃れ、赤壁より下流に位置する場所に身を潜めていた

く下流く

俺らは追手を回避できたようなのでストライカーから降りて朝食の準備を始めた。食糧は事前に俺が作った保存食品を皆に配っている。最初は何なのか？と質問攻めを喰らったが俺が説明すると納得して食べてくれた

「光男様、これはうまいですな」

副長が言った

「そうか。それは何よりだ。作った甲斐があるってもんだ」

そうやって俺も保存食品を食べる。因みに保存食品の見た目は大○製薬のカ○リー○イトに似ている。某ゲームのへびのおっさんがうまい！というのも分かる気がした

「お館様、これからどうするのですか？」

桔梗が言った

「そうだな。雪蓮達の話じゃあ会敵するのは今夜らしいからな。それまでの間は自由行動とする。夕方になったらここに集合するってのはどう？その間、俺はやらなきゃあいけない事があるからな」

俺は保存食を食べながら言った

「そうですか。では、我々は鍛錬といきましょうか。副長殿手伝ってはくれまいか？」

桔梗が言った

「了解です。我々のためにもなるし、一石二鳥ですな敵顔殿」

「ふふ、そうだな。では、お館様、我々は離れた所で鍛錬をしておりますので……」

「おう、頑張ってくれや。俺も頑張るわ」

そう言つと桔梗達は森の奥へと向かった。

「さて、俺も出すとしますか、種類はどうしようかね？」

戦艦、航空戦艦、空母、巡洋艦と言つてたらキリがないな。絞り込むとして戦艦、航空戦艦、空母の三種類だな。

「よし、（ガサガサ！）誰だ！」

そう言つて立ち上がった瞬間、草むらから物音が聞こえたので銃を構えて言った

「待て、俺は医者だ。」

そう言っ出てきたのは俺より若い青年と……ムツキムキのマツチヨ変態がいた……これは夢だろうか？

「青年、名は？」

俺が言った

「俺は華陀、大陸中を回っているしがない医者だ」

「なあ、華陀」

「なんだ？」

「後ろにいるのは何なんだ？新車の動物か？」

そう言っ後ろにいる二人を指さした。一人はビキニパンツにおさげ髪が特徴なボディービルダーだった。そして、もう一人は禪に紳士服てきな物を着ていたボディービルダーだった。現代ならばぐさま警察に御用になってるだろう

「あら、卑弥呼、私達を御所望だそうよ？」

おさげビルダー（命名、光男）が言った

「がっはっはっは！！我々を所望するとはまた、変わった大人よのう」

禪ビルダー（命名 光男）が笑いながら言った

「お前ら、人間じゃねえ！未確認生物だろ！」

俺が言った

「んまあ！！失礼しちゃうわ！こんなか弱い乙女を見るなりそう言う事言うなんてひどい、酷過ぎるわ！およよよ……」

と言つて泣きながらポーズをとった。やめろ！全国の視聴者に謝れ！

「そんな変なポーズをとるな！夢に出て来ちまう！」

俺が言う

「この二人は俺の供をしている者だ。ただ、良い骨格を持った医者だ」

華陀が間を割るように言った

「医者！？あれが医者って呼べるものなのか！？ただの変態筋肉達磨の塊みたいなものじゃねえか！！」

俺が言った

「んまあ！誰が、反吐が出るほど筋肉ムキムキマッチョで夢に必ず出てきそつなほど気持ち悪いですってえ！！？」

おさげビルダーが言った

「誰も、そんな事言っていないわ！！どんだけの被害妄想なんだよ！！」

それから数十分後……

「ほほう、光男は劉備軍に属しているのか」

あれから、数分言い争いをしていたが、結局、俺の勝ちで幕を閉じた。そして、今は華陀と話していた

「ああ、ここから先にある赤壁って言う所だな。戦闘が始まるんだ。相手は曹操だ」

「そうか……また、けが人が多くなるかもな……」

華陀はどこか悲しそうな目で言った

「まあ、これが戦争って言う奴だ。誰かがやり合えば、それだけが人は出る。死ぬ奴もいるだろう。だが、それが世界の理って言う奴だ。」

俺が言った

「確かにな。それは光男の言う通りだ。戦争を行えば誰かが死ぬ。しかし、俺達には俺達の役目がある」

華陀が言った

「ああ、それは分かっている。あんたみたいな人がいるこそ、俺達も安心してやっていけるってものだ。人々にはそれぞれの役目があ



るって言うしな。」

「そつだな。」

「そつだ。華陀」

「なんだ？」

「この森を抜けると蜀呉の連合陣営がある。そこで、お前の力を貸してくれないか？頼む、この通りだ」

そう言つて俺は頭を下げた

「・・・分かつた。微弱ではあるが手伝わせてもらおう」

華陀は賛成してくれたようだ

「ありがたい、紹介文は俺が書くからそれを劉備か孫策に渡してくれ」

「分かつた。ん？孫策・・・」

「何か心当たりでもあるのか？」

俺が言つた

「ああ、確か・・・妹がいなかつたか？」

「ああ、孫権に孫尚香の姉妹がいるが」

「思い出した。孫策殿に頼まれて孫権の病気を見た時があったのだ。」

華陀は手をポンとやって言った

「そうなのか。じゃあ、紹介文とかいらんないか？」

「いや、一応作っておいてくれるか？そうすれば変な誤解は生まず  
に済む」

「分かった。ちょっと待ってくれ」

そう言って紙と筆を用意して簡単な紹介文を作った

「ほれ、これを持って行けば、入れてくれるだろうよ」

「すまない。助かる」

「いって事よ。それじゃあな」

「ああ、この戦闘が終わったら一杯飲もう」

そう言って華陀は例の筋肉達磨を引き連れて森の中へと入って行った

「さて、俺も例の兵器を出しますか。はあ！..」

そう言って川に出したのは、戦艦系 大和、ミズーリ、ビスマルク、  
航空戦艦、伊勢、デラウエア、空母、キティ・ホーク、信濃など、  
計七隻の現代兵器を出した（と言ってもWW？時代の兵器が多い気  
がするがまあ、気にしないでおこつ）

「とりあえずはこんくらいかな？後はあっちに行ったときに追加で  
出せばいいかな」

そう言っただけ目の前の兵器群を見て言っただけだった

赤壁3（前書き）

初めは桃香場面から始めます



「桃香、行くわよ?」

「はい!」

「「突撃————!!!」」

そして、私たちの戦いが始まった

（赤壁より下流の区域）

うおおおおお・・・

「おや、始まったようだな」

俺は下流で開戦の時を待っていた。川には戦艦と巡洋艦、フリゲート艦が停泊していた。（空母や航空戦艦はいささか使いづらいついか、航空機はダメかな?って変な電波が入ってきたからやめた）

この鋼鉄部隊であれば、十分すぎる火力が手に入ったのも同然だ。

「桔梗」

「なんですかな?お館様」

鍛錬を終えた桔梗が隣に来た

「出発の準備だ。全員を船に乗せる。」

「わかり申した。おい！船に乗り込む準備をしろ！」

桔梗が大きな声で言うと全員が返事をしてそれぞれの船に乗り込んだ。因みに船は自動操縦になっているため、ここにいる者たちが舵をすることはない。全部、俺の声で対応するシステムとなっている。そつだ。今から乗る船を紹介しておこう

〈戦艦〉

大和

46？砲を装備した当時世界最大と言われた戦艦、だが、時代が遅かったため航空戦力の前にあつという間に沈没してしまった悲劇の戦艦

近江

外見は大和と同系だが46？砲から50・8センチ砲に変換された戦艦、計画はされたいがその前に終戦となつてしまい完成することとはなかった

〈巡洋艦〉

タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦

世界で初めてイージスシステムを取り入れたミサイル巡洋艦で現代でも使用されている。当初は駆逐艦とされていたが、イージスシス

テムが強力な対空迎撃能力を持っていたため急きよ巡洋艦に変更された

ヴィットリオ・ヴェネト（ヘリコプター巡洋艦）

イタリア軍のヘリコプター巡洋艦で対空迎撃能力が非常に高い、そして、ヘリの搭載数も通常の巡洋艦よりはるかに高い、対空ミサイルはスタンダードミサイルを使用しているスタンダードとはイギリスのほうで旗艦という意味を表している

フリゲート艦

こちらは現代でも使用されていない光男オリジナルフリゲート艦を作り出した。船体は米軍のフリゲート艦を使用している。そのため搭載重量はどのフリゲート艦よりも高い。艦橋はイギリスのリアンダー級の艦橋を使用している

尚、船の名前はギルゴア

由来はベトナム戦争で実際にいた兵士の名前である。一人で何人もベトナム兵を殺したがそのせいで、狂気に走ってしまい行方不明になったアメリカ兵士である

武装は76mm機関砲、CIWS、対空ミサイル、新型魚雷（4連装）、対艦ミサイルVLS、対潜ミサイルとしている（てか対潜ミサイルって必要か？まあいいや）

機関 ガスタービン

その他 アパッチロングボウ×4機



この艦隊であれば無敵であろう

「お館様、準備ができましたぞ」

桔梗が言ってきた

「ああ、行こう。桃香たちの所へ……」

俺がそういうと船は汽笛を上げながらゆっくりと進んで行く。旗艦はオリジナルフリゲート艦、ギルゴアである。

「さあ、地獄の始まりだ。覚悟しろよ……曹操」

そう言って俺らに乗せた船は赤壁へ舵をとった

（雪蓮side）

「冥琳、状況は？」

私が言った

「少々、押されているな。特に東側が微妙ではあるが押されている」

「あそこの配置は、祭や紫苑の弓部隊の所ね。どうする？助けに行く？」

私が聞いた

「大丈夫だろう。祭殿は引き際が分かるお方だ。要請があったら行

「けばいい」

「そう。それにしても光男、遅いな」

戦闘が開始してからどれぐらいが立ったのだろう。光男はまだ、現れていなかった。本当にどうしたのかしら？

「光男が心配か？雪蓮」

冥琳が言った

「うん、微妙にね」

「大丈夫だろう。光男は早々にやられはしないさ。片目を失っても我々の所に来たのだからな」

そう言っつて冥琳は前を向いた

「そうな。あなたの言っつとおりね私たちは信じて待ちましょ」

そう言っつて私も前を向いた瞬間だった

「ん？何あれ……（ドカーン！）きゃ！？」

私が前を向いた瞬間、西の方から一直線に何か曹操の船に向かっていき、爆発を起こした

「もしかして……」

私はそう言っつて西の海域を見た

〈雪蓮 side out〉

「おっやりあつてんな」

俺は双眼鏡で見ながら言った

「さて、盛大な花火でも打ち上げますか。対艦ミサイル起動、目標曹操の船、発射」

俺がそう言うとギルゴアに搭載されている対艦VLSが勢いよく飛んで行き、まっすぐ曹操の船に向かっていき大きな爆発を起こした。攻撃を受けた船は真っ二つに折れて沈んで行った

「よっしゃあ……！命中……！行くぜ！戦闘開始じゃあああ……！！」

そう言って赤壁の戦いに身を投じる俺達であった

## 時代は大鑑巨砲主義じゃあ！

俺は赤壁の開戦と同時に戦場に乱入した。俺が作りだした鋼鉄部隊と共に。それによって敵は混乱状態に陥ってるのが見て分かる

（赤壁）

『うわああああ！！！！逃げろ！！』 「情報はウソだったんだ！！」

敵はこの艦隊を見るなりすぐさま逃げ出した

「よっしゃあああ！！！！大和！近江！主砲発射ああああ！！！！」

俺が大きな声で言うと大和と近江の主砲が発射される。轟音と共に一トン以上ある砲弾が曹操軍の船に向かって行く。

現代ならあまりというか全く使われない物ではあるがそんな事は関係ない！大鑑巨砲主義は男の浪漫だ！！！！

「よし！それぞれの乗員に連絡！連合の船に近づけるから各自、行動を開始せよ！」

俺がそう言うと他の船に乗ってる連中も大きな声で返事をした。そして、丁度近くに連合の船があったのでそこに全員降ろすことにした。船を降りる際、桔梗がご武運をと言ってくれた。因みに俺はまだ船を降りていない

何故かって？簡単さ。曹操軍の船を塵も失くさず消し去るまでよ。ここにある兵器すべてを使ってな……

「よし、全システムオンライン、司令 曹操軍の船を木端微塵に消し去れ、大和、近江は艦砲射撃、タイコンデロガはミサイルを使用し陸の方の陣地に攻撃を仕掛けよ。ヴィットリオ・ヴェネトはその場で停止し、アパッチを発艦させよ。ブラックホークも出動し上空から味方の援護に周れ、以上」

そう言うとそれぞれに船は行動を開始し始めた。大和、近江は艦砲射撃で曹操軍の船を沈めて行き、タイコンデロガは陸地の陣地に速射砲とミサイルによる攻撃を開始する。

へりも発艦して、地上の護衛に当たっている。しかも、この艦隊を見た瞬間連合の兵士たちは一気に士気が上がったそうだ。

俺はギルゴアで曹操が乗っている船を見つけ出そうとしていた。

「さうて、どこにいるかね」

双眼鏡で覗きながら言った。夜なので普通のは使えない、赤外線仕様の奴だ

双眼鏡で覗くと曹操軍の船はいくつかあったがその中でも割とでかい船を見つけた。きつとこつちで言う旗艦なのだろう。普通の船とは倍違いの大きさであった

「ふむ……あそこかね。なら、一旦、桃香達と合流するか」

そう言ってギルゴアを連合の陣地に向かわせた

（連合陣地）

連合に陣地に到着した。陣地と言っても船を陣地代わりに使っている。遠くの方では発射音やローター音が聞こえる

「あつご主人様〜！」

桃香が手を振って呼んできた

「おう、桃香、無事だったな」

俺はギルゴアから桃香のいる船に移った

「ご主人様〜」

そう言って抱きつく桃香　おいおい、ここは戦場なんだぞ？ちった緊張感ってのを持ってないのかね？この天然娘は

「こら、桃香、少しは緊張感を持って、兵士に示しが付かないぞ」

そう言ってコツンと軽く頭を叩く

「えへへ〜だって、会えたんだもんいいじゃない」

「はあ〜」

何かこっちまで緊張感がなくなって来ちまうな〜

「光男」

「おう、雪蓮」

そういつて振り向いたのだが……

「あ、あの、雪蓮さん？」

いきなし、抱きついて来た

「何？」

「いや、どうして抱きつくのかな？っと思ひまして

つい、敬語口調になつてしまふ

「ぶゝ私だつて心配してあげてるのよ？感謝しなさい。こんな美女に心配されてるのだから」

そういつて抱きつく力を強めるつて言うか痛い

「冥琳さん？いるなら助けて下さいませんか？」

傍にいた冥琳に言つた

「ふふ、いいじゃないか。光男、まさに両手に花だな」

そういつて笑いながらこつちを見る冥琳……きつと助けてはくれないだろう。だつて目が完全に悪戯の目だもん

そんなこんなでやつと離れてくれた二人は状況を聞いて来た

「ご主人様、前線はどんな感じなの？」

桃香が言う

「ああ、俺の兵器が現れた事によって混乱が起きてるぞ。今なら守りは薄いはずだから、それに前線の兵士たちにも援軍を送ったからな。怖いもんなしだろ」

俺が説明した

「光男、兵器ってアレの事なの？」

そう言っってギルゴアを指さす雪蓮

「ああ、と言っってもアレは俺専用に取り上げた物だからな。防衛用に使っっている。前線には他の船が言っってるぞ」

「ふ〜ん、でも、大丈夫なの？火でやられたりしないの？」

「大丈夫だ。問題ない」

「ならいいけど、曹操軍の船はどうなってるの？」

「ああ、先行した部隊で駆逐を行っってるぞ。それこそ壊滅まで遅れるだろうな。それと、曹操が乗っけると思われる船を見つけた。一番奥に桁違いの船があっただからな」

「じゃあ、曹操さんもそこにいるのかな？」

桃香が言う



「多分な。でもそう簡単に行くとは俺は思っていない」

「どういう事だ？光男」

冥琳が言う

「簡単さ。曹操は頭の切れる奴だからな。もしかしたら、この場を放棄して自分の城に逃げるかもしれないって事さ。」

俺が説明する

「なるほどな。しかし、捕縛はできるんじゃないか？」

「いいや、無理だろうな。あいつの前には魏武の大剣 夏侯惇や夏侯淵がいる。それに曹操直属の親衛隊もいるだろうしな。確率的に難しいだろう」

「そうか。だとすれば後者になるわけだな」

「そうだな。それに焦ってもしょうがない一歩一歩確実に仕留めなけりゃあおわらんだろうしな」

俺の力をもつてすればあつという間にケリがつくだろう。しかし、それでは面白くはない戦争するのは簡単に終わらせられるほど簡単なものじゃない（本音を言うとおつという間に終わっては面白くないからだ）。

「確かに、光男の言う通りだ。焦っても仕方のない事だな」

冥琳もそう言って納得したようだ

「さて、これからが本番よ。俺はもう一度前線の方に行って来るわ。桔梗達もうまくやれるかどうか心配だしな。」

「そうね。光男、お願いできるかしら？」

「おうよ。任せておけ！」

そう言って前線に向かう俺であった。

## 赤壁4 終結

side 曹操

「なんてこと……」

私は目の前の光景を見て絶句していた。自分の軍の半数所有していた船が光男の創り出した未来の船によって尽く長江の底へと向かっていく

陸のほうにも空飛ぶカラクリで連合の士気が上がっているようだ。こちらが押される形になっていた。

「華琳様！ご無事ですか！？」

春蘭がたどり着いたようだ

「春蘭、無事だったのね。それで、前線はどんな状況？」

「はい、絶望的です。光男の介入により連合の士気は上がり、敵の勢いは増して行くばかりです」

春蘭が報告する

「そう……この戦。私達の負け……ね」

「華琳様、そんなことは！」

「いいえ、これは火を見るより明らか、さすがのあなたでも分るで

しよつっ？」

「そ……それは……」

春蘭は困惑している

「ここは、一時撤退するわ。城に戻り体制を立て直しましょう」

私が言った

「でしたら、私が殿を務めます。その間に逃げて下さい」

「分かったわ……春蘭、必ず戻ってくるのよ」

そう言って口づけをする

「んっ……分りました！この春蘭、必ずや戻ります！」

そう言って出て行った

「桂花、撤退の準備を早急にしなさい」

「御意」

そう言って私達も撤退を開始するのだった

side曹操out

「さ〜て、状況はどうなってますかね〜」

俺がギルゴアで進みながら陸の方を見た。連合の兵士達は破竹の勢いで敵を押ししていく、敵は抑えられずに徐々に押されているようだ

「おっ桔梗がいたな。よしよし、うまくいってるようだな」

双眼鏡で桔梗の姿をとらえた、遠距離から狙撃をしていた。時々、近づいてくる敵には接近戦で対応しているようだ。

「訓練の成果がよく出ているようだな。よっしゃ、俺も参戦すると思いますかな」

そう言っつてギルゴアから近くの船に飛び移る

「覚悟！」

どうやら連合の船に敵が潜んでいたようだ。

「甘いな」

俺はバレットアーツモードで敵の剣を防いだ

「何!？」

「おら！」

力押しで剣を押し戻し、続いて回し蹴りをお見舞いしてやった

「グハッ!！」

敵はもろに喰らってしまいそのまま吹っ飛んで気絶した

「やてつと」

そう言っつて俺は陸の方を目指す

く桔梗のいる小高い丘く

俺は桔梗がいる小高い丘に到着した。

「お館様、ご無事でしたか」

桔梗がこちらに気づいたようだ

「そつちこそ大丈夫だな」

「はい、敵はほとんど押されておりますからな。」

「そうか、じゃあ、俺も一暴れしてきますかな」

そう言っつてハンヴィーを出す

「どうだ？桔梗も行くか？」

「ええ、是非とも」

そう言っつて俺達はハンヴィーで丘を下る。兵士たちはそのまま丘に残り狙撃をしているように指示した。

「さて、どこに突っ込もうかね」

「お館様、あそこなんかよろしいかと」

そう言っつて桔梗が指さす先には団体さんでやりあっている所であつた

「おお、なんか難易度が高そうだな。それじゃあ派手なpartyと行くかうか！」

そう言っつてアクセルを全開にする

連合の兵士は気づいたのかすぐさま回避行動に移した。一方、魏の兵士達是对応が遅れてしまい、そのままハンヴィーに跳ね飛ばされる者までいた

「敵さんには悪いが……」

跳ね飛ばしてる途中で俺が言った。そしてハンヴィーを停めた。しかも敵の中心で

「桔梗、準備はいいか？」

「ええ、もちろんですとも」

そう言っつて獲物であるPTRDの弾を装填した

「行くぜ！」

俺達はドアを開けた……瞬間、敵の槍が俺を襲つ

「あじよつとー！」

そうやってその場に伏せる。槍はそのままハンヴィーに当たるが突き刺さることはなかった

「そろそろそろ!!!」

その場で回転しながら銃を撃っていく、敵はわんさかといるので外れることはまずなかった

「ぐわ!」「ぎゃあ!」

銃で撃たれた兵士たちはその場で倒れて行った

「これからが本番よ!」

そうやって銃をガトリング砲に持ち替えた。持っているのはGAU-8と呼ばれるガトリング砲（機関砲とも呼ばれる）でアメリカ軍のA-10などに積まれる機関砲だ。それを手持ちできるように改造してある。

「なんだありゃあ!?!」「しらねえよ!とにかく攻撃するぞ!」

と魏の兵士たちは口々に言っている。甘いな、砂糖よりも甘すぎる!

「逃げた方が得だぜ!!!うらららら!!!」

そうやって俺は引き金を引く

ガトリング砲は砲身を回転し始めた。やがて口径30mmから弾丸が発射される毎分3900発の鉄の雨が魏の兵士達を襲う



敵は声を上げることもできないまま殲滅されていく。一方的な光景だった。

桔梗の方もPTRDを使用する。発射される弾丸は規格外であり、戦車をも葬る威力を持つましてや人間相手に使用するのただただでは済まない

「そら！それが魏の兵士の力か！」

桔梗は撃ちながら言った。いや、そんな規格外の弾丸を発射しながら言わないで下さいよ桔梗さん（by作者）（。o。）

「ん？今何か聞こえたような・・・まあいいか。」

桔梗は気にすることなく敵を撃ち続ける

「ご主人様！」

愛紗が来たようだ

「おう、愛紗」

俺はガトリング砲を持ちながら言った

「何をしてるのですか！ご主人様自ら行くなど！」

着て早々説教ですか・・・勘弁して下さいよ

「まあまあ、愛紗、主が先に行くなど今に始まった事ではないだろう」

星が言う

「お前に言われたくはないな。星」

俺が言う

「何を申します。主、私はちゃんと場面を選んでやっていますぞ」  
そう言っつて胸を張る。いや、胸張ることじゃないよ

「敵が引いてくぞ!!」

一人の兵士が叫ぶ

「やったな。」

俺が言った

「ええ、そうですね」

愛紗が言う

「我が方の勝利・・・ですな」

星が言う

「お館様」

桔梗が戻ってきた

「おう、桔梗、御苦労さん」

「お館様こそ」

そう言って笑う桔梗

「さて、桃香の処へ戻るとしますか。皆、乗ってくれ」

そう言って俺はハンヴィーを動かす

こうして、俺達の赤壁の戦いは勝利を納めた。

## 予想外

俺は曹操軍を撤退させた後、愛紗や桔梗を連れて連合軍の陣地に戻った。

〈陣営〉

「ご主人様ー！お帰りなさい！」

桃香が出迎えてくれた

「おう。ただいま、いや〜勝ったな〜」

俺はハンヴィーを降りて言った

「でも、撤退しちゃったね。曹操さん」

「まあ、仕方ないさ。次こそが最終決戦になるだろうな。兵士の皆には悪いがもう一頑張りしてもらわないとな」

「そうだね」

「光男」

雪蓮がやって来た

「おう、雪蓮」

「曹操は逃げちゃったみたいね」

苦笑いしながら言った

「それは仕方ないさ。また、次がある」

「そうね。今日はここで泊まって行くって感じかしら？」

「そうだな。兵士たちにも休息を与えなきゃな」

「分かったわ。冥琳、お願いね」

「ええ、」

そう言っつて冥琳が指示を出す。こっちでも紫苑が兵士に指示を出していた

「しかし、こんなにすんなり行くとは思わなかったな」

俺が言った

「どういうことですか？ご主人様」

愛紗が言った

「だって、曹操があんな噂に乗ってくれるとは思わなかったからさ。もし、ばれてたらと思うとヒヤヒヤしたぜ」

「この時代にとっては間諜からの情報が唯一の戦略決めになりますからね。曹操もそれを過信したという所でしょう」

「だな。」

「所で、ご主人さ……」

桃香が俺に聞こうとした瞬間、俺の停めてあつた船 ヴィットリオ・ヴェネトが爆発 炎上を起こしたのだ

「な、なんだ!？」

翠が驚いていう

「皆さん!警戒を厳にして下さい!」

朱里が大声で言う。周りの兵士達も慌てて動いていた

「な、何が起きたの?」

雪蓮が言った

「ご主人様の船が沈んでいくよ」

桃香が言った

「この時代の兵器じゃあ俺の船が沈めることができない。だとすれば……」

俺はそう思うと同時に動き出していた

「ご主人様!？」

愛紗が言った

「皆！船から降りるんだ！桃香！船には一切近づくな！」

俺はそう言っつてギルゴアに乗船した

「ご主人様！」

桃香が叫ぶ

「桃香、今は兵士たちの誘導が先よ！祭！呉の兵士たちにも呼び掛けて！」

「分かり申した！」

そう言っつてそれぞれの行動に移った

（ギルゴア艦橋）

俺はギルゴアに乗船すると艦橋に向かった

「やっぱりそうか」

俺は船に備わっているソナーを見て確信した

ソナーとは、海中に潜んでいる潜水艦を探知する装置である。超音波を利用して物体の大きさや海中の音まで拾える。そのソナーが大きな影を映しだしていた

「おいおい、普通の潜水艦じゃあないぞ。この大きさは」

どう見ても米軍が保有している原子力潜水艦よりはるかに大きな影が映し出されていた

「とにかく、行動あるのみだ。対潜VLS 発射！」

そう言うとギルゴアに搭載されている対潜ミサイルが発射されていき目標であるでっかい影に向かって行った。その時、警報が鳴る

「警告 対艦ミサイル接近」

「クソ！CIWS 迎撃しろ！」

そう言うとCIWSがガトリング掃射を開始する。毎分4000発の弾が対艦ミサイルに向かって掃射されていく

そして、空中で爆発を起こした。しかも、距離が近かったため爆風の衝撃がギルゴアに到達してしまう

「うお！？」

俺は何とか踏ん張った。何とか耐えてソナーを見ると丁度対潜ミサイルが敵艦に直撃する所だった。

「よし！タンクに直撃したな」

ソナーに反応があると同時にメインタンクから水が放出される音が聞こえた。

ギルゴアから目視を確認する。丁度、曹操軍が停まっていた船の奥



の方から巨大な水しぶきが上がる。そして、姿を見る

「おいおい、規格外だろ」

長江の河から出てきたのは、潜水艦と言うよりも戦艦に近い艦影をしていた。巨大な砲塔 天まで高くそびえる艦橋そして後方艦橋

外見は大和そっくりだった。しかし、それだけではなかった。なんと船体が一隻ではなく二隻が横に繋がれていた。

「あいつは……双胴戦艦か！！厄介な代物だな……」

俺は苦虫を潰したような顔をしていたであろう。双胴戦艦とは先の説明の通り戦艦を二隻横に繋げた巨大な戦艦である。大排水量を得て巨大な兵装が搭載可能になっている。その証拠に双胴戦艦には80cm砲という本来なら陸上でしか使われない砲塔が禍々しく搭載されていた

「今の兵装じゃあ無理があるな。大和、近江連携して攻撃に当たれ後に増援を回す」

そう言うと陸の方に停めてあった大和 近江が双胴戦艦の方に近づいて行く。向こうも気づいたのか動き始めていた

「これじゃあ、あつという間にやられるな。航空部隊を出すか」

そう言って空母と航空戦艦を造り出す

空母

## キティホーク

現在、アメリカ軍で使われている最後のガスタービンを積んだ空母である。堅牢な装甲ではあったが兵装は対空ミサイルだけという貧弱さだ。そのため今回はほかにも兵装を追加してある。航空部隊はホーネットなどの最新鋭戦闘機だ

## 航空戦艦

## 伊勢

世界で唯一建造された航空戦艦 戦艦の能力を持ちながら尚且つ空母の役割も果たすという一隻で二役の船だ。日本ではこれを建造したのは良いが活躍する前に戦争が終結してしまいお蔵入りとなっただかいそうな船である  
航空機は多く搭載できないがそこそこに力のある船である

## 光男オリジナル航空戦艦

## 大江山

この船は船体自体を大きくさせた航空戦艦である。伊勢と比べて航空機も搭載数が大幅にアップして砲塔自体も大和と同じ46cm砲を搭載してある。その他にも兵装は最新鋭の物ばかりを積んである。

## 〈大江山の兵装〉

46cm砲

76mm速射砲

25mm CIWS

対艦ミサイル

対空ミサイル

57mm高角砲

その他諸々

航空機は世界中から厳選した航空部隊を編成してある。まさに最強の航空戦艦という代物だ

「よし、これからが本番よ」

そう言っで見ると大和 近江が丁度戦闘に入ったようだ。俺は無線で指示を出す

「空母、キティーク 航空戦艦、伊勢は航空機を発艦させよ。大江山は航空機を発艦させながら艦砲射撃を行え、タイコンデロガはミサイルを発射しながら戦艦部隊の援護に周れ」

そう言っで無線を切る

伊勢とキティークはすぐさま航空機を発艦させた。大江山は動きながら射程圏内まで移動する。その間にも航空機を発艦させていた

タイコンデロガは速射砲やミサイルを使用しながら戦艦隊の援護に周って行く

「後は状況次第で変化させていくか……」

そう言いながら俺は戦闘の状況を見て行く

**超兵器 撃破せよ！**

あらすじ：超兵器、出現！（WSG風）

side 雪蓮

「何なの？・・・あれ・・・」

私達は光男が戦っている船を見て言った。どう見たって船って呼べる大きさはじゃない・・・あんなのが光男の世界にはあるの？

「雪蓮さん、何でしょう？あれ」

桃香が言った

「さあ・・・少なくとも私達には理解しがたい事ね・・・光男、必ず倒してよ・・・」

私はそう言っただけで戦いの行く末を見続けた

side out

〜ギルゴア〜

「クソ！対艦ミサイル 発射！」

そう言っただけでVLSが一直線に双胴戦艦に向かって行く・・・が機銃に落とされてしまう。航空攻撃も行っただけだが損傷は軽微である

「どつすればいい……ちくしょう」

俺はそう言っつて壁に手を着く

「あいつの装甲は非常に高い……だが、甲板はそうでもないな。さっきの攻撃で確信した。」

爆撃機が甲板を攻撃した時、火災が生じていたからな。これを使えば何とかなるかもしれないが……

「戦艦隊と空母艦隊を出すか……」

そう言っつてギルゴアの後ろに大和や近江級の戦艦隊 キティーホーク級の空母艦隊を創造した。そして、指示を出した

「戦艦隊は艦砲射撃を行え 空母艦隊は航空機をありったけ飛ばせ……奴を長江の喪屑としてやれ」

そう言っつと戦艦隊は艦砲射撃を空母艦隊は格納庫にしまつてある航空機を発艦させた

「よーしよーし、攻撃は聞いているな……こちらも超兵器を出すのでしょうか」

そう言っつて今まで出してきた兵器（ギルゴア以外）の兵器を消し去り、代わりの兵器を出した。外見は敵超兵器と同じ双胴戦艦である。

61cm砲を標準装備とし、主砲は100cm砲である。その他にも様々な兵器を搭載している。戦艦の名前は播磨……旧世界で

最も活躍した戦艦の名前である。記録によれば合計撃破数は100を超えと言う

その英雄的な名前を付けるのはこの戦艦にとって誇らしいと思ったからだ

まあ、そんな事はどうでもいい、とにかく奴を沈めればこちらの勝ちだ

俺はギルゴアから播磨に乗り換え指示を出す

「播磨、システムオンライン 目標 敵双胴戦艦 主砲 発射用意 撃て ！」

そう言うと100cm砲から3トン以上の砲弾が発射される。普通の砲台と違って一発しか撃てないので装填には時間がかかる

弾はきれいな放射線を描いて……敵超兵器に直撃する

当たり所が悪かったのか中央の煙突が大爆発を起こしたが、沈むまでに至ってはいない。代わりに向こうから80cm砲がこちらに向かって発射される

「くそ！播磨 回避行動を取れ！」

そう言うと播磨は着弾地点を予想して回避行動に入る

弾は見事はずれ……巨大な水柱が代わりにできる

「うお！？ くそ……とどめだ……全砲台……発射あ





「こらこら、桃香 光男は疲れてるんだから、その辺にしておきなさい」

雪蓮が言う

「はい」

そう言つと桃香は離れる

「お疲れ様、光男」

「ああ、さすがに疲れたな、今回は」

「でも、あれはなんだつたの？」

雪蓮が言う

「ああ、あいつはちよつとした敵さ」

「敵？」

「ああ、実はな……」

そう言つて俺は蜀侵攻戦の時の事を話した

「なるほど……三国以外の敵って事ね……」

雪蓮は納得したようだ

「ああ、もしかしたら、三国の戦乱が終結した際に攻めてくるかもしれない。奴はこの大陸を手に入れるためあらゆる障害を排除するつもりだ」

「そう……もし、そうなたら私達も手を貸すわ。光男」

そう言って笑顔で言う雪蓮

「ああ、その時はお願いするよ。じゃあ、今回はこのまま寝るとしますか」

そう言って俺達は赤壁で留まることにした

## 回収作業

俺らは赤壁での戦いの後、一日その場に留まって、移動の準備を始める。が、50万と言う数だ。そう簡単に準備が完了できないため、今日1日は作業に徹する事になった

〈朝〉

作業は朝食を食って開始となる。

俺は自分の天幕で軍用食を食いながら自分の好きな小説を読んでいた

「いや、正規の小説も面白いが二次で作られた小説も斬新でいいな。」

そう言いながら軍用食を食う。因みに軍用食は自衛隊が食っているのと同じ物だ。味はいける。

そして、食い終わって天幕を出るとさっそく、作業が開始されていた

「あつ、光男様、おはようございます」

副長が他の兵士に指示を出しながら俺に挨拶をしてきた

「おう、おはよう副長、どうだ？作業の方は」

「ええ、皆、昨日の疲れがあるとは思えないほど効率がいいですよ。これなら、予定されている時間帯より早く出発できそうです」

「そうか。じゃあ、俺はちょっと周りを見てくるわ」

「そうですか。気を付けて行って来て下さい」

「了解」

そう言つて副長と分かれ、長江の方へと歩き出す。現代とは違い空  
気も汚れてはいないため、とても気持ちいい朝日が俺を照らす

「んん、現代とは違うな、気持ちがいいや」

そう言つて歩いている。川の方を見ると、昨日撃破した超兵器が沈  
みきつておらず半分、姿を見せた状態で留まっていた

「朝になって大きさが分かるもんだな。あんな爆発を起こしておい  
てよく保ってるな」

「ご主人様、おはようございます」

「ん？おう、愛紗、おはよう」

振り返ると愛紗が起きたようで俺に挨拶をした

「何を見ておられるのですか？」

「ああ、昨日戦った奴を見に来たんだよ。あんな爆発を起こしてお  
いてよく保ってるなと思ってな」

「ああ……」

愛紗は納得するように言った

「次で最後ですね」

「ああ、この乱世にも終止符が打たれると言う訳だ」

「そうですね……ご主人様」

「なんだ？」

「ご主人様は……その……この乱世が終わったら、どうされるのですか？」

「その後の事って言う事か？」

俺が言うと愛紗は頷く

「そうだな。呉や魏と仲良くやって平和に暮らしていけば俺は何もいらないな。皆と笑い合って馬鹿やって怒られて、そんな生活をしてみたいな」

俺が言う

「ご主人様、きっと来ますよ。」

「ああ、そうだな。」

「では、私もこれで。」

そう言って愛紗は戻って行く

「さて、俺は整備でもしますかな。最終決戦に向けて」  
そう言って銃器と車両を出す。

「さてっと、まずは……」

そう言って整備していく俺

side雪蓮

私は天幕から出て朝日を浴びる。冥琳はすでに兵たちに指示を出しているようだ

「あら、雪蓮、おはよう」

「おはよう、冥琳、どう？作業の方は」

「ああ、光男のおかげで兵たちには疲労がそんなに見えない。おかげで作業が効率よく動いている。」

冥琳が言った

「そう。じゃあ、私ちょっと回ってくるわね」

「ああ、あんまり長くないかなよ」

「はい」

そう言って私は光男のいる天幕に行った

く光男の天幕く

「光男、いるく？」

中に入ったが、光男の姿はどこにもなかった

「どこに行ったのかしら？」

「どうされた？雪蓮殿」

振り返ると愛紗がいた

「あら、愛紗、おはよう」

「おはようございます。それで、どうしました？ご主人様に用でも？」

「ええ、ちょっとね。どこにいるかしら？」

「それでしたら、川の方に行って見て下さい。ご主人様がいますよ」

「ありがとうございます」

そう言って私は川の方へと向かった

く川のほとりく

「あっ光男く！」

ほとりに着くと光男がいた

「ん？おう雪蓮、」

「何してるの？」

私が聞いた

「何、最終決戦に向けての調整さ。」

そう言っただけなら天の国の兵器が置かれていた。

「すごい！これ全部、天の国の？」

「ああ、こつからは陸上戦になるからな。その専用の兵器を調整しているんだ」

そう言っただけなら光男は作業しながら説明する

「そう。私に手伝える事ってないかな？」

「そうだな……じゃあ、その工具箱からレンチを取ってくれないか？」

「レンチ？」

そう言っただけなら足元にあった鉄製の箱に目を向ける。そこには大きな工具から小さな部品まで揃っていた。

「その……レンチってこの大きな工具の事？」



「ああ」

私は大きな工具を持った。ずっしりとしていて、これだけで武器になるのではないかと思いつながら光男にそれを渡す

「はい」

「サンキュー」

そうやって光男は乗り物の前に向いて、その中を見ながら作業している

「ふう、こいつはOKっと」

そうやって閉めた

「次はどうするの？」

私が聞いた

「ああ、今度は俺の武器を整備するんだ」

「光男の武器って・・・銃の事？」

「ああ、」

そうやってバレットを取り出す、このバレットは通常弾の他に焼夷弾や手甲弾などしようする。優れた対物ライフルなのだ

「うわゝ、なんかすごいそうね」

バレットを見ながら言う

「こいつは、結構な距離まで行くからな。例えば、あそこの山の付近からこの陣地なんて射程範囲だからな。」

「ええ！？本当に？」

雪蓮は驚いた

「ああ、この時代じゃあ考えられない事だろうな。だが、俺がいた世界ではそれが当たり前だった。」

「ふん、弾はどんな形なの？」

「こいつだ」

そう言って通常弾の12.7mm弾を雪蓮に見せる

「これも大きいわね」

「そうだろう？この弾がこいつの専用の弾なんだ。連射性はないが一発で仕留めるにゃあいいかもしれないな」

「へ」

雪蓮はただそう言うしかなかった

その後もいろんな銃を私に見せてくれた。そうしている内に軍でも準備が整ったようだ

私は一旦、光男と分かれ、自分の陣地に戻った

（side out 雪蓮）

「さて、準備が終わったようだな。」

俺は軍全体を見て言った

そして、ハンヴィーを出して、いつでも行ける状態を取った

前の方で雪蓮が皆に活を入れているようだ。そして……

「「出発!!」」

雪蓮と桃香が同時に言って軍全体が動き始めた

「さあ、曹操、最終決戦だ」

俺もそう言ってハンヴィーを動かすのであった

撃ち落とし か 一刀両断 どっちがかっこいい？

どうも、皆のご主人様こと光男です。

なに？いつもと調子が違うって？ちみい、そんな事を気にしてはいかんのよ。

世界は広いのだから！H A H A H A！！！！

さて、話は変わり俺達は一日かけて回収作業を行ったよ。そりゃあめっさ大変でしたよ。ええ

そして、俺らは曹操がいる城に向かって一直線に進軍していた。上から見ると赤と緑のオンパレードだ。実に美しい

因みに前回出した車両やら航空機はそのまま出して一緒に連れてきている。この方がすぐに戦闘態勢に入れるだろう？

「・・・様、ご主人様！」

「おおっ！？」

どうやら、桃香が呼んでいたようだ

「どうしたの？ご主人様」

「いや、ボーツとしてただけだ。気にするな」

「ん、それならいいけど」

桃香は渋々納得してくれたようだ

「で、何かあったのか？」

俺が聞いた

「うん、前にご主人様が言った敵のことなんだけど」

「敵っていうと前に話した奴の事か」

「そうそう」

「そいつがどうかしたか？」

「うん、ご主人様と同じ人になるならもしかしてやり方も違ってくるのかなって思ってた」

「ああ、そういうことか」

桃香が懸念しているのは戦い方のことだろう。奴のことだとうせ、戦車やら飛行機やら出してくるだろうしな。しかし、あいつに軍隊はあるのか？前に会った時もあいつ一人しかいなかったし、赤壁に出てきた。あの超兵器でさえ人の気配を感じられなかったからな

「やり方は違ってくるだろうよ。きっと俺のいた世界の兵器やら出してくるだろうし、銃だつて使ってくるだろう」

「そうだよな。でも、それに対抗できるのってご主人様と桔梗さんの部隊ぐらいしかないよね」

「確かにな。でも、一つだけ違和感がある。」

「どんな？」

「あいつに人員はいるかどうかって事だ。最初に会った時も赤壁での戦艦の時も俺と同じ感じの人間はいなかった。そこが気になるところだ」

「そういえば、翠ちゃんの報告で五胡に動きがあるってあったよな……」

そう言って考え込む桃香

「まあ、実際に対峙してみないと分らんしな。今は曹操の方を考えるとしよう」

「そうだね」

そう言って桃香は先頭の方に向かう、きっと雪蓮の処に向かったのだろう

「さて、このままじゃあ、暇だしな……どうしようかね」

そう言って考える俺

移動中でも暇潰しができる物って言ったら……

「試しにクレール射撃でもやってみますかね」

そう言つて後ろに動いているエイプラムズに乗つかった。そのまま中に入り、弾を実弾から模擬弾へと変換する

この模擬弾は普通の銃の弾でも破壊できるように設計されている、そのため爆発などは全くない安心安全の砲弾だ

クレール射撃ならぬ砲弾射撃を始める俺

「エイプラムズ、砲弾を発射せよ。尚、タイミングは貴官に任せる」

無線でエイプラムズに指示を出す

すると、エイプラムズは砲台を動かして射撃体勢に入った。

砲弾はクレール射撃とは違い、規格外の速度で飛び出してくる。その為、勘に近い行動で撃たなければならない

今持つてるのはバレットを改造した改造銃である。名前は……ぎゃらくていかだ。

ネーミングセンスが無いって?……ほつといてくれ。

このぎゃらくていかはバレットと違い対物ではなく対戦車ライフルなのだ。しかも弾は14.5mm弾という規格外の大きさで反動は半端なくヤバイ、多分、PTRD1941よりも上になるのではないだろうか。そんな事をして俺が大丈夫かって?

平気平気、伊達に鍛えてるわけじゃないぞ。多分な

そうこうしている内に轟音が響いた。砲弾は他の色と同調しないよ

うに分かりやすい色にしてあるがそれでもとてつもない速さだ

「ん、こっから弾が速すぎて追いつかないな。よし」

そうやって俺はハンヴィーを動かしてエイプラムズの前に来るように止めた

ということは戦車砲はまっすぐ光男の所にやってくる訳だ

「ご主人様！何をしておられるのですか！」

愛紗が来たようだ

「何してるって訓練だけど？」

俺はさも平然に答えた

「だから！なんで、許可もなしに行つのですか！呉が警戒態勢に入ってしまったではないですか！」

「え？あつ」

言われてみると雪蓮達が何か大声で騒いでいるのが見えた

「悪い、愛紗、説明付けといて」

「はあ、分かりました。ですが、今回だけですからね？」

そうやって愛紗は先頭の方に戻った





それに先の戦いでその実力は見てるから威力も分かるわ。それを撃ち落とすなんてすごいわね！」

「そ、そうか。それは嬉しいね」

「ねえねえ、私もやってみていい？」

雪蓮がいった

「え？そいつはだ」じゃあ、行ってくるわね！」っておい！」

なんと雪蓮が挑戦するようだ。しかも、銃ではなく愛刀である南海霸王でやるつもりだ

「じゃあ、お願いしまーす！」

そういうとエイプラムズは了承したかのように砲弾を撃ちだした

「おい！エイプラムズ、お前も何やってるんだよ！」

あああ、このままじゃあ雪蓮が怪我所じゃない重症になりかねないぞ！っと思っていたが

「せいやー！」

雪蓮はそのまま砲弾を真つ二つに一刀両断してしまった。

その光景に俺は

「……………マジかよ……………」

これしか言えなかった

多分、顔はこんなだろうよ。(。o。)

だって、あつちは第三世代のMBTなんだぞ！それを、いとも簡単にクリアしてしまうなんて雪蓮、なんて恐ろしい子！！

「んゝ気持ちいいわね。これ 次、お願いしまーす！」

そう言っつて構えた

その後、他の武将もやりたい人が続出、結果、小さな大会が開かれる羽目になった。その後、その場で陣を張って次に備えました

君達は包囲されているゾ！

俺らは無事に曹操が潜んでいる城に到着した。奇襲を掛けてこないって言うのは曹操なりの誇りがあるからだろう

（連合陣地）

「さて、こいつが乱世の最終決戦と言っても過言ではないだろう。ここから先は純粋な力と力の勝負だ」

俺はエイブラムズの上に乗って言った。その周りには蜀・呉の武将達がいる

「光男の言う通りね。ヘタな策はいらない。真剣勝負そのものね。ぞくぞくしちゃうわ」

雪蓮が言う

「かと言って無闇に突っ込むのは愚の骨頂と言う物だぞ。雪蓮」

冥琳が言う

「その通りじゃ、策殿、ヘタに突っ込まないようお願いしますぞ」

黄蓋こと祭が言う

「ぶーぶー いいじゃないの。この先、いつでも戦いがあるって訳じゃないのよ？祭だって、本当はうずうずしちゃってるくせに」

雪蓮が笑いながら言う

「はっはっは！！！それはそうじゃな。儂とて武人の端くれ。腕が鳴りますわい」

からからと笑いながら言う祭さん

「祭殿、あなたの他に雪蓮を止められる人物はいないと思いますよ」

冥琳が言う

「だって、儂だって暴りたいんじゃないもん」

と可愛い子ぶる・・・正直、グツと来てしまった俺

「まあまあ、この戦いは総力を挙げてやるような物だし思いつき暴れて貰ってもいいよ。ただし、無理はしない事、これはお兄さんとの約束だ」

俺が言った

「まあ、光男がそう言うなら最善を尽くすわ」

雪蓮が言った

「ご主人様、曹操軍は城から出てきた模様です。籠城戦はやめた模様ですね」

愛紗が言う

曹操の城の前には曹操軍が立ち並んでいた。先頭から武将が勢ぞろいし、その後ろには兵士達が並んでいる

「おやおや、そう来たか。じゃあ、俺らも同じようにしますかね。それで良いだろう？桃香・雪蓮」

「うん！」

「そうね」

そう言っただ俺らも曹操と同じように並んで行くと言っても武将の他に戦車やら攻撃ヘリやら現代兵器も一緒に並んでいるんだけどね。曹操から見たら圧倒的だろう

「さて、俺が話してみようかね。」

そう言っただメガホンを取り出す

「あーあー、マイクテストマイクテスト」

俺はメガホンの音量を調節しながら言った

「よし、曹操！聞こえるか？お前らとは二回目の戦いになるだろうが、これが最後だ。そちらも準備が整っているなら、お前一人で来てくれ、俺も行くから」

そう言っただエイプラムズから降りる

「じゃあ、少しだけ、待っててくれ」

そうやって俺は一人で向かう。当然、曹操も一人だ。そして、丁度真ん中で立ち会う形になった

「よう、曹操」

「光男、赤壁では世話になったわね。まさか、奇襲を掛けてくるとはね」

「まあ、お前ほどの武将なら簡単には行かないだろうと思ってな。そう言う作戦を取らせてもらった」

「そう。あなた、策士としても優秀なのね」

「そうでもないさ。こっちには孔明や美周郎と言った策士がいるしな。」

「そう」

「話は変わるが、曹操、お前は俺以外の人間で未来から来たとか言ってる奴は現れなかったか？」

「何よ、藪から棒に」

「これは重大な事だ応えてくれ」

「いいえ、私はあなた以外で未来から来た人間は見てもないし、あった事もないわ」

「そうか。分かった。それじゃあ、始めるとしますかね。こっちは

やりたくてうずうずしてるらしい。」

「あら、不思議ね。私の所にもいるのよ。やりたくてうずうずしてる子が」

そう言って笑う曹操

「そうか。それじゃあ、合図はこっちで出すがそれで良いか？」

俺が言った

「ええ、それで良いわ。それと街に居る民達には手を出さないで貰えない？彼らはこの戦争には関係ないのだから」

「了解、兵士たちにもそう言う事は伝えておく。じゃあな」

そう言って俺らは自分の軍へと戻って行く

〈連合陣地〉

俺は陣地に戻って軍議が行われている天幕に向かった。他の武将はすでに集まっているようだ

「今戻ったぞ」

「ご主人様、おかえりなさい」

桃香が言った

「それで、どうだったの？」



雪蓮が言った

「開戦の合図はこっちで出す事になった。それと、民達には手を出さないで欲しいだそうだ。きつと巻き込みたくないんだろうな」

「そう。曹操も中々優しい所があるじゃない？」

「そうだな。さて、作戦を決めよう。今回は………無尽蔵に戦いを繰り広げよう。もちろん、俺の所の兵器もありったけ出さず。後方援護は任せてくれ。それと、降伏する者などについてはその場で捕縛してくれ。武将に関しても同じだ」

「そうだね。ご主人様の言う通りだね。無闇に殺生はやらない。だね」

桃香が言った

「つまり、自由に暴れ回っていいって事？」

雪蓮が言う

「ああ、だが、一人で奥深くまで突っ込もうとするなよ？それだと手に負えん」

「分かってるわ。さすがにそう言う事はしないわ」

「そうだといいが、とにかく気お付けてくれ。俺は兵器の点検に向かうわ」

そう言って天幕を出る

陣地の後ろにはエイプラムズやブラックホークと言った現代を代表する兵器が勢ぞろいしていた

「さて、最終点検だ。それに野砲出しておこうか。」

そう言っ出したのはM65280mカノン砲である。こいつはアメリカ軍で実際に使用された核砲弾専用大型カノン砲である。自立移動ができないためトレーラー二台を使用して移動させなければならぬ

今回は普通の砲弾である。さらに自立で動くように改造したため人の操作はいらぬ。音声認識システムで動くようにした。これと同じ物を3両だして合計4両にした

「いや〜爽快だね〜」

俺は見上げながら言う

「光男、これは何だ？」

冥琳が来たようだ

「ああ、これはカノン砲と言って大型の大砲だ。これを発射する事で遠くからでも攻撃ができるようになる」

「ほ〜う、こちらにある戦車とはまた別物か？」

「ああ、全く違う」

「そうか。天の国ではこんな兵器まであるのだな。正直びっくりする」

「正直言つて悲しい物があるさ。人類の成長に伴つて兵器の成長も育ってきた。いかに遠くから正確に相手を殺す事が出来るのか。正直、使つて欲しくない兵器もたくさんあるんだよ。俺の国では」

そう言つて空を見上げる。

「そうか。優しいのだな。光男は」

「優しいか・・・そうでもないさ。さてつと話はここまでだ。最終調整に入る、冥琳も兵士達の方を見てやつてくれ。」

「そうだな。では、光男、また後でな」

「ああ」

そう言つて冥琳は立ち去る

「さて、エイプラムズから見るとしますか」

そう言つて俺も最終調整に本腰を入れるのであった

乱世の最終決戦 part 2

俺らは無事に曹操のいる城に到着し、開戦の時を待っている。と言つても狼煙を上げるのは俺らの方だが……

〔蜀兵陣営〕

「さて、開戦だな」

俺が言った

「ええ、ついに決する時が来たわね」

雪蓮が言った

「これで、民の皆も平和に暮らせるね！」

桃香が言う

「さあ、行こう。最後の宴幕をご覧あれだ」

そう言つて広場に向かう

広場にはすでに一兵卒の兵士達が整列していた。皆、不安や緊張と  
いった顔をしていた

「光男、今回はあなたが士気を上げなさいよ」

雪蓮が言った

「俺が？」

「そう。最後ぐらいは総大将のあなたが言っても士気は上がるでしょうし、なにより、皆から信頼を得ているからね」

「そうか・・・分かった」

そう言って俺は一步前に出る

「皆！ここまでの道のりをよく超えて来てくれた！これが、最終決戦になるだろう！その先には、皆が望んでいた平和が待っている！隣の奴を見る！もしかしたら、二人の内のどちらかが死んでしまいかもしれない！それでも、勇気のある奴は一步前に出てくれ！」

そう言うと全兵士が一步前に出た

「よし！皆は勇気ある兵士たちだ！俺は皆と戦える事を誇りに思う！最後まであきらめずに戦ってくれ！以上だ！」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」  
「うおおおおおおお！！！！！！！！！！」

俺が話し終わると皆が雄叫びをあげるように叫んだ

「すごいね！ご主人様！」

桃香が言った

「何、あの位朝飯前さ。さっこつからが本番だ。皆、気合いを入れ

てけよー!

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」  
「」  
「」

そうやって俺達はそれぞれの配置に付いて行く

俺はブラックホークに乗って上空を旋回している。

「よし、砲撃開始じゃあ！」

そう言うとエイブラムズが上空に砲弾を打ち上げる。皆にはこの砲弾を撃つと同時に戦闘開始だと言ってあるので問題ない

砲弾が放たれたと同時に兵士達が駆けていく、同時に曹操軍の兵士達も駆けていった。そして、丁度真ん中でそれぞれの部隊がぶつかって行く

「カノン砲、砲撃準備！座標、アルファ、56 bravo、43」

俺が無線で指示を出すと、後方に待機していたカノン砲が動き出す、重さ83t以上の砲身がゆっくりと動き出し、空高く砲弾を発射していく、改良型のため一分間に約4発撃てるようにしてある。曹操軍からしてみたら鉄の雨が降ってくるのと同じだ

「うわあ！？」「な、なんだ！？」

曹操軍から驚いた声が聞こえてきた

「よし、アパッチ、ハインド、イロコイ、スーパーコブラ、それぞれ

れ別で動いて各地域の援護をせよ。攻撃方法は任せる」

そう言うと連合陣営から現代を代表する攻撃ヘリが離陸していく、ついでに陸上ではエイプラムズ、チャレンジャー、87式偵察車、89式戦闘車、M2ブラッドレーなど、各国の強い部分だけを取りだした機甲科を揃えて前線に上げている。威力は折り紙付きだ

「さて、俺も行くとしますかね！I can fry!!」

パラシュートを装備してブラックホークから勢いよく飛び出す、地上からそんなに高くないのですぐに開かなければならないが……

「うお!?あぶね!矢を飛ばすな!」

俺がパラシュートを開いて降下してる時、曹操軍から多数の矢が俺めがけて飛んできた

「くそ!ストライカー、俺の援護をしろ!櫓付近にチューインガンをお見舞いしてやれ!」

そう言うと前線にいたストライカーが近くにあった櫓めがけて射撃する。橋脚部分に命中し櫓は音を立てながら崩れ去って行く

「サンキュー、よっと!」

そう言って着地する前にパラシュートを捨てて、降り立った。

「食らえ!」

一人の敵兵が俺めがけて槍を突いてくる

「このやる！」

俺はすぐさま刀を出して真正面から切る。槍は見事、真つ二つに切れて使い物にならなくなった。

「おら！」

そうやって俺は蹴りを敵兵にお見舞いする

「グハッ！」

敵兵は吹っ飛んで気絶したようだ

「待て！」

「おろ？おやまあ、夏候淵じゃないか」

声がした先には、夏候姉妹の妹、夏候淵だった。弓の照準をしつかりと俺に合わせる

「お前をここから先に通す訳にはいかない。」

「そうだな。それが妥当だろうよ。言っとくがああの時の借りは無しで良いからな。」

そう言いつつ俺はバレットモードにした

「ああ、お前を倒して初めて借りを返す事になる。」



夏候淵は弓矢を思いつきり引つ張って……

「勝負だ！」

そう言つと同時に矢を放つてくる

「おら！」

そう言つて銃弾を撃ち放ち矢を撃ち落とす、それがしばらく続いた

「ふう、ふう、やはり強いな。光男は」

肩で息してるほどではなかったが。少し疲れが見えるようだ

「そうじゃないさ。俺の強さはこれにある」

そう言つて銃を出す

「その飛び道具の事か？」

「ああ、こいつを使って初めて強いとか言われるんだ。俺自身はそんなに強くない」

「そうか？実際は強いと思うが」

「それは他の奴が決める事だ。俺自身が決めちまつたらそこで終わりだと思つしな。お前の姉ちゃんだって、毎日、鍛錬はしてるんだろ？」

「ああ、姉者は華琳様のために欠かさず鍛錬をしている」

「用はそれと同じって事さ」

「なるほどな。なら、私はお前を超えて見せる！」

そう言っつて今まで一本だった矢が6本に増えた

「おいおい、今までののが本気じゃなかったのかよ。だったら、俺も別の方式で行くとしますかね」

そう言っつてバレットをやめてリボルバーマグナムを取り出す、そして、ホルスターに収める

「……馬鹿にしているのか？」

夏候淵が言った

「違う違う、こう言う戦い方なんだよ。気にしないでくれ」

「むう、そうか」

そう言っつて静かになる。周りでは怒声の他に砲撃音や銃撃音が聞こえているが気にしていないようだ。

そして……

「ハッ！」

一気に六本もの弓矢が俺めがけて飛んでくる……が、

「ハイハイハイハイ!!!!!!」

ホルスターからマグナムを素早く取り出し、一本一本確実に命中させていく、無事に全部落とすと同時にホルスターにしまう

「そ、そんな、私の技を破る者がいるなんて……」

夏侯淵は驚いた表情でその場に立ち尽くしていた

「いや、実を言うと結構しんどかったりするんだよね、良かったよ。全部落とせて、こっちの弾も六発しかないと外したら終わってたよ」

「完敗……だな。私の負けだ」

そう言って片膝を付く

「いいのか？それで」

俺が言った

「ああ、私の最高の技を破ったんだ。これ以上戦っても私が負ける、それに矢も無いしな」

そう言って矢筒を見せてくる

「そっか。じゃあ、俺と一緒に来てくれるか？悪いようにはしない。ただ、大人しくしてくれればいい」

「分かった。従おう」

「よし、敵将、夏侯淵、撃ち破つたり!!!」

大声で叫んだ。周りの味方兵士達には士気が上がったようだ

「よし、ブラックホーク、着陸してくれ。」

上空で旋回していたブラックホークが俺の近くで着陸する

「これが、空飛ぶからくりか・・・」

夏侯淵がそう言ってブラックホークを見る

「ああ、そつちじゃあ、そう言うみたいだな。俺達の世界ではヘリコプターと呼んでいる。こいつは主に輸送用だ」

「ほうう、それじゃあ、あそこで飛んでいるのは」

「あつちは攻撃型だ。いろんな性能を持っている」

「そうか。面白い物だな天の国の乗り物は」

「そう言ってもらえると嬉しいね。さて、行こうか」

そう言って俺達はへりに乗って連合陣営に向かった

乱世の最終決戦 part? (前書き)

合宿から戻って来ました!

## 乱世の最終決戦 part ？

前回のあらすじ：夏候淵、撃破

「よし、連合の陣地に着いたぞ」

そうやって俺はブラックホークを着陸させる

「ふむ、思ったより速いのだな」

夏候淵は感心しながら言う

「少なくともこっちの世界よりは数倍、速いと思っぜっ」

そう言った

「なるほどな」

「じゃあ、こっちに来てくれ。案内するよ」

「いいのか？ 仮にも私は敵将なのだぞ？」

「良いって、夏候淵なら、信じられるしな。少なくとも俺はそう言える。俺の世界のやり方を見せてやるよ」

そう言って歩き出す

「ふう、全く、掴みどころがないな」

そう言つて夏候淵も歩きだす

〈狙撃場〉

連合の陣地を抜けて一番近い場所に向かった。ここは、桔梗の部隊が狙撃をするために作った。外見はバンカーだが、砂でできているので、本来のより耐久は低い

「光男、ここは？」

夏候淵が言う

「ここは狙撃ポイント、ここから遠距離攻撃をするための場所だ。

おい、桔梗〉

「おや、お館様、戻っておられたのですか。っとそちらは……

夏候淵殿か？」

バンカーから出てきた桔梗が言う

「ああ、光男に負けてな。安心しろ私は捕虜だ」

夏候淵が言う

「捕まってるだけじゃあ暇だろうと思つてな。俺が案内してるんだ。夏候淵自身も逃げ出すよ様子は無いみたいだからな」

俺が言った

「なるほど、では、夏候淵殿、見ていかれるか？」

「ああ、是非に」

そう言っただ中に入っていく。俺も後から入っていく

〈バンカー内〉

中ではスナイパーライフルや重機関銃を使っていた

「ほーう、これは……」

夏候淵は感心しながら見ている

「ここでは、狙撃が主な役割となる。もちろん、弓よりはるか遠くにいる敵も狙撃する事が可能なんだ」

俺が説明する。その間にも銃声やむ事は無かった

「しかし、すごい音だな。耳鳴りが酷くなってきたような感じだ」

そう言っただ耳を押さえながら言う夏候淵

「初めて聞くとそうなるだろうな。まあ慣れてくるさ。さっ俺はもう一働きしてくるかね。桔梗、夏候淵の事は任せたぞ」

「了解した」

そう言っただ俺はバンカーを後にする

〈連合陣地内〉



「さうて、次はどんな風にするかね〜あつちは結構な数を揃えてるしな〜今、出払ってるのは……ストライカー、アパッチ、ハインド、とかか……じゃあ、ここで戦車部隊でも出すかね」  
そう言つて陣地に残してあつたM1A2エイブラムズ、チャレンジャー、T-90など、現代陸上兵器では最強の部類に入る重装甲部隊が動き出す

「よし、エイブラムズは左翼にT-90は右翼、チャレンジャーは真ん中の区域に支援を行け、それぞれにストライカー、M2ブラットレーを付ける。行動は自由だ」

そう言つとそれぞれの戦車が動き出していく、後からはストライカー、M2ブラットレーが付いて行く。そして、それぞれの戦車砲が放たれて遠くの方で土煙が上がる

「いいね〜、この音、堪らないね〜」

そう言つてニヤリと笑う

「じゃあ、俺も動くとしますか。」

そう言つてハンヴィーを出す

「よっしゃ、いっちょ派手に行きますかね」

そう言つて再び戦場に戻つて行く

〜戦場〜



「丁寧に、俺は神田光男だ。知ってるかもしれないがな」

一応自己紹介をする

「光男さん、情報では秋蘭様を捕縛したと有りましたが」

「ああ、確かに夏候淵は俺が捕縛したよ。だけど、酷い扱いにはしてないからな。安心してくれ」

「良かった。やっぱり、聞いていた通りの人でしたな」

「どういう事？」

「秋蘭様が言ってたんです。あいつは強い奴だが決して人を卑下にするような奴ではないと」

「あれまゝそんな風に言われてるのね。俺って」

「はい、ですが、今は戦闘です。私の勝負を受けて頂けますか？」

典章が言った

「ああ、いいぜ。そっちの方がむしろ面白い、受けて立つぜ」

そう言って挑発のポーズを取る

「お願いします。では！」

そう言って思いっきりヨーヨーを投げてきた



「ひっ!?!」

典葦は酷く怯えていた。おいおい、あんなにも可愛い少女を怯えさせるとはいるんな人に怒られるぞ〜by作者

「典葦、さっきの続きだ・・・全力で掛かって来い!」

「わ・・・分かりました!!!!」

そう言っつてヨーヨーを再び光男に向かって投げる

「行くぜ・・・チエーンソ      !!!!!!!」

そう言っつて出したのは大型のチエーンソーだった。エンジンはすでに掛かっている

「どりゃああああ!!!!!!」

けたたましい音を立てながらチエーンソーはヨーヨーと衝突する。が、ギユウイイイインという音を立てながらヨーヨーは真っ二つに切れてしまう

「そ、そんな・・・」

典葦は驚いているようだ

「グヒ、グヒヒヒヒ・・・次の得物は・・・誰だ?」

しばらくお待ちください（恋姫教育委員会）

「敵将、捕縛したぞー！ー！！！」

光男の声が戦場に響く、その傍らでは……

「ガタガタブルブル……」

典葦が震えあがっていた

何があったのかはお察し下さい……

「さて、連れていくとしますか。おい、典葦？」

「ピッ！？ガタガタブルブル……」

もはや、話せない状態だった

はあ、仕方ない、夏侯淵に頼むとするか……

そう言ってハンヴィーを出してその場を去って行った

乱世の最終決戦 part?

俺は夏候淵の次に典章を捕獲したが、まともに話せない状態なので仕方なく、陣地に連れていく事にした

〔陣地〕

「到着」

「ガタガタブルブル……」

典章は未だに震えていた

「はあ、夏候淵はどこにいるかね？」

そう言っただけで周りを見る。武將はみんな前線に出ているので一般兵士や医者（華陀など）は少ない。時折、天幕の方から悲鳴が聞こえてきたり奇妙な奇声が出ていたりしていたが、気にしないでおこう

「あっ光男様」

「お、副長、どうしたんだ？」

「いえ、敵顔殿から弾が無くなったと報告を受けたので光男様に用意してもらった弾薬を運ぼうと思いましたが」

「ふんそんなに使ってるんだ。あっそうだ。夏候淵、見てないか？」

「ああ、敵顔殿とずっといますよ。光男様の世界の武器をまじまじと観察してます」

「了解、ありがとう」

そう言っつて副長と分かれた

（バンカー）

「隊長！弾薬がありません！」

兵長が言う

「少し休憩しておけ、また、撃つからな」

桔梗はそう言っつてPTRD1941をぶっ放していた。すごいな・・・

「桔梗、いるか？」

俺が言った

「おお、お館様、どうされました？」

「いや、夏侯淵、いないかな？っつて」

「私がどうしたって？」

「うお！？」



俺の後ろに突然、夏候淵が現れた

「?どうした?」

夏候淵はどこ吹く風だった

「いや・・・なんでもない。それより、また、そっちの敵将を捕まえたんだが」

「誰だ?」

「典韋だ。今、まともに話せないでいる。と言うか、俺がやっちまった」

「ほう?詳しく聞かせて貰おうか」

夏候淵は笑顔で小刀を突き付けた

一瞬、緊張が走るが俺が手で皆を制した

「分かった分かった。話すから小刀はしまってください」

青年説明中・・・

「なるほど、そう言う事か」

「ああ、だから、夏候淵に会わせれば元に戻るかな?って思ってた。今、陣地内にいるから会って来てくれ。副長に場所は伝えておくから」

「分かった。だが、お前はどうするんだ？」

「なあに、また、前線に行くのさ」

そう言ってリトルバードを出す

リトルバードはアメリカ陸軍で使用されている。攻撃強襲用ヘリコプターである。正式名称はMH-6リトルバードである。武装はGAU-19 二門 ハイドラ70などである。

「さて、愛紗達は大丈夫かね？」

そう言って離陸した

〈side 愛紗〉

私は、星や鈴々と共に前進していた。ご主人様や桔梗達、ご主人様の世界の武器のおかげで戦闘がやりやすくなっている

「愛紗よ。このまま行けば、我々の勝ちだな」

星が言った

「星、まだ油断してはならんぞ。夏侯惇の動きが無い。あ奴の性格なら真っ先に動くはずだ。」

私が言った

真っ先に動くはずの魏武の大剣である夏侯惇が一向に動きを見せて

いないのが怪しい、やはり、夏侯淵が捕まった事によって曹操が慎重になっているのか？

「死ねえ！」

一人の兵士が私に向かってきた

「甘い！」

「ぐはあ！！」

私は攻撃を受け流してそのまま突いた。敵兵はそのまま倒れ込んだ

戦況はこちらに傾いているのは明らかだった。その証拠に味方の士気は上がり、敵の方は勢いが減っていた

「ふう、夏侯惇！どこにいる！私はここにいるぞ！首が欲しくば、ここまで来い！」

私は戦場に響くような声で言った

「うおおおおお！……関羽！……勝負だ！……！」

夏侯惇はものすごい勢いで来た

「やはり、そうでなくては……！」

そう言って自分の得物を構える

「しえい……！」

夏候淵はそのままの勢いで刀を振った。そして、私の武器とぶつかり激しい火花を散らす

「その首、もらっぞ！」

「できる物ならな！」

そう言ってそのままお互いに技をぶつけ合う。その度に激しい火花が散らす

side 愛紗 out

「さして、愛紗達は居るかね？」

そう言って低空で地上を回る。地上では一般兵達がそれぞれの戦闘を繰り返していた。愛紗達の姿は見えていない

「ん、もうちょい先かな？」

そう言ってへりを先に進めた

「おつ愛紗がいるな、相手は……夏候惇か。予想通りだな」

そう言ってへりをホバリングさせた

「星達は……ちょっと離れた場所でやってるな。あつちは大丈夫か、なら、俺はそのまま降りますかね」

そう言ってパラシュートを背負って外に出た。同時にリトルバード

を消す

「あわわわわ、だから、矢はやめろって！！アパッチ！援護してくれ！」

そう言うつと一機のアパッチがすぐさまこちらに来てチューインガンで掃射を始める。敵は蜘蛛の子を散らすように逃げていく、俺はすぐ近くに有ったエイプラムズの上に着陸する

「よつと、せつかくだからこいつで進むとしますかね」

そう言うつてエイプラムズに乗り込み、自動運転から手動に切り替えた。砲塔は俺の動きに合わせて動いてくれる。

「さてさて、どちらが勝ちますかね。」

そう言うつて愛紗達が戦っている場所に向かった

「てえい！」

「せいや！」

二人は未だに決着が付いていなかった。体力すごいな

俺はすぐ近くにエイプラムズを止めて二人の戦いを見守る。一応、周りに気を配らせながら、見守っていた

「はあはあ……………」

「ぜえ…………ぜえ……………」

二人は肩で息をしましてしまっていた

「……………そろそろ……………だな」

俺は独り言で言った。

「せえやああああ！！！！！！」

「うりゃああああ！！！！！！」

二人が同時に向かって、それぞれの得物を振りかぶる。一瞬、火花を散らしたが、一つの得物が空中に投げだされ、エイプラムズの前に刺さる

刺さっていた得物は夏侯惇の物だった

「くっ完敗だ」

そう言っつて片膝を付く夏侯惇

「さすがだな。愛紗」

俺は拍手をしながら言った

「ご主人様、いつからそこに？」

「あれま、熱中し過ぎてたのか、さっきからいたぞ。」

「そうでしたか。」

俺はそのままエイプラムズから降りて夏候惇の方に向かった

「すごかったぞ。夏候惇」

俺が言った

「さあ、好きにするがいい。殺すなりなんなりと」

「待ってくれ。誰がいつ、殺すなんて言った？お前も捕虜になつてもらうぞ」

「生き恥をさらせというのか！？」

「一回の戦いで負けたぐらいでそんなにコロコロ死んでたらキリが無いぜ。逆に生きてた方が同じ相手に再戦だってできる。その時に愛紗を倒して見せる。お前にはそんな根性があるはずだ。」

俺が言った

「しかし……」

「夏候惇、私だつてお前に死んでほしくない。この戦争が終わつたらいつだつてお前の挑戦を受けて立つぞ。」

「分かった。捕虜になろう」

夏候惇は決意したかのように言った

「よし、決まりだな。愛紗、夏候惇を連れて行け。」

「分かりました」

そう言って愛紗は夏侯惇を連れ、陣地に戻って行った

「さて、残るはあんなだけだな。曹操」

そう言って城の方を見ながら言った



## 乱世の終結

「さて、後はお前だけだぞ。曹操」

俺はそう言っつて城がある方向を見た

「ご主人様！」

愛紗が来たようだ

「おう、愛紗、こっちだ」

俺は手を振って呼んだ

「夏侯惇は無事に送り届けました。後は……………」

「ああ、曹操だけだ」

「ついに、終わらせられるのですね」

愛紗が言った

「ああ、ついにな……………さっ行くとするか」

そう言っつて俺はエイプラムズの上に乗った

「はい！」

愛紗も馬に乗った

「出発！」

そう言つて俺は城の方に向かった

（曹操side）

「くっここまでね・・・」

私は戦場を見ながら言った

「華琳様！」

桂花がやってきた

「桂花、こちらの戦力は？」

「はっ真桜、沙和、凧が主戦力です。後は親衛隊の季衣だけです。兵士は士気が下がってます」

報告をする桂花

「戦力差があり過ぎるか・・・降伏しかないのね・・・」

私が言った

「華琳様！そんな事は！」

「じゃあ、くっからどう反撃すると言つたの？相手には光男の世界の

兵器、さらに呉や蜀の猛将が勢揃い、これだけの戦力差があると言  
うのに?」

「ぐっそ、それは……」

桂花は痛い所を突かれたようだ

「曹操!年貢の納め時だ!」

光男の声が聞こえた

〈曹操side out〉

「曹操!年貢の納め時だ!」

俺が大きな声で言った

あの後、雪蓮達と合流し、そのまま曹操の城に向かった。上空には  
アパッチやハインドが飛びまわっており、陸上には戦車や装甲車、  
さらに、蜀や呉の猛将が勢揃いしていた。

「さて、曹操はどう出るでしょうね?」

雪蓮が言った

「まあ、この戦力差だ。降伏するしか手は無いと思うな」

冥琳が言った

「そうだな。ここで突っ込んできたってただの愚の骨頂だ」

俺が言った

その時、曹操が複数の部下を連れてやってきた。俺はエイプラムズを降りた

「光男、私達は降伏するわ。これ以上戦っても意味がない」

曹操が言った

「そうか。分かった。これにて、魏は落ちた。」

「さて、敗将にはそれ相応の罪を被せてくれるのかしら？」

「おいおい、誰が罪を被らせるって言ったよ？」

「何を言ってるの？」

「だって、これで一件落着なんだぜ？誰かが死んで来る平和なんて、仮の平和に過ぎない。それはいつの時代だって変わらないさ。だから魏、呉、蜀の三つで力を合わせて平和を築いて行こうかと俺は思ってる。他人からすれば甘いかもしれないがな」

「そう・・・甘いよね」

「ああ、俺は甘いさ。だが、この仲間たちならできると俺は信じてるぜ。」

「その仲間達には私達も入ってるのかしら？」

「もちろんさ。仲間はずれは誰一人いない。これからは、国のため、民のためにしっかりと基盤を作らなきゃいけないしな。」

「分かったわ。あなたの甘々な提案に乗っかるわ。友好の印として真名をあげるわ。真名は華琳」

そう言っつて笑顔になる曹操

「そうか。これからもよろしくな。華琳」

そう言っつて手を出す

「ええ、よろしく、光男」

そう言っつて曹操も手を出し、握手した

その時

『ドオオオン！！！！』

上空を飛んでいたアパッチが爆発を起こし、墜落した

「な、なんだ！？」

愛紗が言っつた

「ほ、報告します！！」

蜀の偵察兵がやってきた

「なんだ？」

「現在、五胡の軍勢が進行しており、近くの村を襲いながら南下してます！さらに、光男様と同じ天の国のカラクリも目撃されました！！」

「なんだと！？」

曹操が言った

「ついに動き出したか……」

俺が言った

「光男、開戦の前に言ってた事？」

「ああ、間違いない、この世界で俺以外の人間だとしたら奴しかない」

そう言っつてエイプラムズに乗り込む

「偵察兵、今から行つたらどの場所で当たる？」

俺が言った

「はっ！約二里行つた所かと思われます！」

偵察兵が言っ

「ご主人様！！まさか、おひとりで！？」

「ああ、奴には借りがあるんだ。それにどっかの部族に俺の国に入ってきた事を後悔させてやる。ハインド、アパッチ、T-90、エイプラムズ、ストライカー俺に続け」

それぞれの車両および航空機に指示を出す

「待ちなさい！光男！」

雪蓮が言った

「なんだ？」

「誰が、あなた一人に戦わせるって言った？光男の敵なら私達の敵だわ」

雪蓮が言う

「だが、今まで以上の戦闘になるかもしれないぞ？」

「それでもよ！」

「そうだよ！ご主人様！」

桃香が言った

「ご主人様が困ってるなら助けてあげる！私達のと看だつて助けてくれたじゃない！」

桃香は真剣な目で俺に訴えかけた

「ふっ俺もヤキ回ってたのかな？すまない。」

そう言っつてエイプラムズを降りる

「一緒に来てくれるか？桃香」

「もちろんだよ！困ってる時はお互い様！」

そう言っつてニツコリと笑う桃香

「光男、私達も行くわ」

「私達も」

雪蓮と華琳が言った

「皆……ありがとう」

「いいのよ」

「ああ、じゃあ、行くとするか！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

そう言っつて俺達は動き出した



## 地上戦艦 ラーテ

俺らは五胡の進軍を止めるべく、魏・呉・蜀の三国、全勢力をもつて進軍していた。もちろん、その後方には俺の世界の兵器が勢揃いしている

〜荒野〜

「さてさて、敵さんはどんな感じなのかね？あいつの支援を受けているんだ。それなりの装備が整っていると考えた方がいいか……」

俺はエイプラムズの上で愚痴っていた

「ご主人様」

桃香がやってきた

「どうした？」

「ううん、何か悩み事かな〜って思って」

「いや……奴の事を思い出していたんだ。多分、五胡の奴らはあいつの支援を受けている。だとしたらちょっと厄介だなんて思っただな。まあ、あっちの兵器は俺に任せて貰って構わない。桃香達は五胡の方を頼むよ」

俺が言った

「分かった。だけど、無理はしないでね？」

「当たり前だ。死人に口なしとはよく言った物だ。死んでしまっ  
ては元もこうも無いしな」

「うん。それじゃあ、前の方に行つて来るね」

そう言つて桃香は雪蓮達の方に向かった

「これが、最終戦争である事を祈るばかりだな……………」

そう言つて葉巻に火を付ける

数分後……………

俺らは五胡を対峙できる位置に全軍を配置した。上空には攻撃ヘリ  
の他にAC-130ガンシップが飛び交っていたり、F-14トム  
キャットが高速で過ぎて行く、地上には第三世代の主力戦車の他に  
ストライカーやM2ブラッドレーなどが配置してある

「うゝむ、今回は主力戦車を変えてみるか……………出すとした  
らドイツの試作戦車でもだすか……………」

そう言つて一旦、戦車を消した

「さて……………はっ！！！！！！」

そう言つて思いっきり力を込める。

「ぐっ！？……………ふー、やっぱり力を込めるとそれなりの代償が

来ちまうみたいだな．．．．戦車とか大量に出せるのに．．．．  
もう一回」

そう言つて再び力を込める

「そいや!」

そう言つた瞬間、後ろに巨大な物体が出てきた。今までの戦車に比べると数十倍のでかさだ．．．．

「ふうくやつぱでかいな．．．．」

そう言つて見上げる

そこに有つたのは第二次世界大戦時、ドイツ第三帝国が極秘で造つていた試作超重戦車ラーテである。この戦車．．．．いや、戦艦と言つた方が正しいな。試作機の重戦車 Maus よりも遙かに倍の大きさで主砲は 38cm 砲、そう。戦艦と同じ砲台が付いている。他にも副砲は 20.5cm 砲を四方に取り付けてある。対空用として 88mm 砲通称アハト・アハト砲が積み込まれている。もちろん、重機関銃も取り付けてある

「うむ、いい出来だ!」

俺は納得したように言う

「光男．．．．これは、なんなの?」

華琳が近づきながら言う

「ああ、これは俺の世界の超重戦車、ラーテだ。今回はこれを使う。威力は折り紙付きだぜ？」

「そう……まあ、あなたは常識破りだしね。こんなのがあってもおかしくは無いわね」

華琳が言った

「そうか。それで、五胡の様子はどうか？」

「ええ、斥候の話じゃあこの先に有る村を襲撃中だそうよ。もう少し時間はあるわね」

「そうか……だったら、もう一台出しておくか」

そうやって力を込めて同じタイプの超重戦車を出す、今度はアメリカ合衆国が造り出したモンスター戦車、名をエリウス。こちらは39.5cm砲を搭載しており、後ろには巨大カノン砲が搭載されている。(核砲弾も使用可)副砲は30センチ砲で対空砲に二連装の機関砲が付いている。もちろん、重機関銃も搭載できる。こちらははつきり言って動く要塞だ。速度が遅い代わりに装甲はとんでもなく固いように設計されている

「あら……これもでかいわね……」

啞然としながら言う華琳

「ああ、こっちもお墨付きや。」

「そう、とりあえず五胡の方が先に出てくるみたいよ。準備をして

おいてね」

「あいよ」

そう言っつて華琳は去っつて行く

「制空権は確保してあるしな。まあ、万が一という事もあるしな」

そう言っつてラーテの方に乗り込んだ。もちろん、自動で動くようにも設計してあるため俺が離れた場所に居ても動かせる

「システムオンライン、登録、神田光男」

そう言っつて兵器システムに登録していく

「ようこそ、神田光男様、これよりあなたの指揮下に入ります」

女性の音声でシステムが登録されたようだ

「ああ、よろしくな。しばらくはこのままでいいぞ。敵さんはまだ、来てないみたいだしな」

「了解です」

そう言っつて俺は外に出てラーテの上から五胡がいる方向を見ていた

「覚悟しろよ……この国に入ってきた事を後悔させてやる」

↳さらに数分後↳

「敵襲！！！！五胡の軍勢がやって来ました！！！！！」

見張りをしていた兵士が叫ぶ、その瞬間全員に緊張が走る

「よし、ガンシップ 敵さんが見え次第、鉄の雨を降らせてやれ」

無線で指示を出す、すると上空で待機していたガンシップが円を描くように旋回し始めた

「おおっ………どんだけの数がいるんだ？地面が真っ黒じゃないか………」

森の奥から少しずつ地上が真っ黒になって行くのが見えた。同時にガンシップの105mm砲が集団めがけて発射される

着弾と同時に巨大な爆発が起こった。少なくとも2万ぐらいはやれたかな？

「よしよし、そのまま撃ち続ける。トムキャット周囲を警戒しろ。ファントム、ナパームをくれてやれ」

そう言った瞬間、2機のファントムが水平飛行で突入し、ナパーム弾を投下していく。地面にぶつかる直前、線状の火が五胡を襲う

有る者は爆発の衝撃で、またある者は火の餌食になった

「今だ！兵士諸君！我々に続け！！！！！」

叫んだのは雪蓮だった。それぞれの勢力の武將が叫びながら突っ込んで行く、その後ろにはたくさん兵士達が雄叫びを上げながら突

っ込んで行く

「よし、アパッチ、彼らを援護してやってくれ。くれぐれも兵士たちを巻き込むなよ」

アパッチはそのまま上空で兵士達と水平に動かしながら次々と五胡を蹴散らしていく

「いいね、いいね……これが戦争ってものだ」

そう言ってニヤケながら俺は経緯を見守っていた……

## 大戦争

アレキサンダー side

「ククク、さすがですよ光男君、まさに兵士の顔ですね」

うまく、五胡の野郎どもを誑かすことに成功した私はそのまま三国に対して攻撃を仕掛けた。暗がりの部屋の中で私は笑っていた

「大佐、こちらの準備ももう少しで終わります。」

一人の兵士が言った

「そうですね。ご苦労さまです。準備が終わり次第出發しますよ。」

「偵察兵によるとラーテが投入されているようです。五胡は次々と撃破されていますが……」

「五胡は放っておきなさい。どうせ、捨て駒ですから、それより、戦艦の方はどうなっていますか？」

「ハツすでに弾薬は積み込んでおります。究極機関は80%完了しています。」

「そうですね……では、最初は通常兵器でお相手しましょう。いいですね？」

「分かりました。すべては総統のために」



そう言って部屋を出る兵士

「ククク、楽しみにしててくださいよ。光男君」

そう言って再びモニターを見る私だった

〈アレキサンダー side out〉

〈荒野〉

荒野はすでに戦場と化していた。辺りには死体や焼け焦げた匂いが立ち上っていた

「ラーテ、貴官はそのまま援護射撃を加えよ。俺は前線に出る」

ちなみにエリウスの方には三国の皆が乗っている。

「ご主人さま、気を付けてください」

朱里が言った

「大丈夫だよ。これでも戦地を潜り抜けてきたんだ。こんな処で負けるわけにはいかないからな」

そう言って俺はエリウスから降りる

「さてさて、まずは接近戦から行きますか」

そう言って出したのはゲイ・ボルグだ。こいつは英雄クー・フリンが使っていた魔槍である。

「%\$#%\$&!?!」

一体の五胡がやってきた。何を言ってるのかは分からんが……俺はやつの剣を槍で受け止めてそのまま力押しに押し返す

「うりゃあ!?!」

押し返された五胡は一瞬ひるんだようだ

「貴様の心臓……貫い受ける!?!」

そう言つて心臓めがけて槍を突き出す、ろくに防御もできないまま槍を突かれた五胡はそのまま糸が切れた人形のように動きを停止した。槍は心臓を貫いて反対側に突き出ていた

それを見た他の五胡は動きを止めたようだ

「さあさあ、こつからが本番よ!?!」

そう言つて突き進んでいくだが、敵の数は不特定で倒しても倒しても次が現れる状態だった

「だー!面倒くさい!?!こいつでもくらつてろ!?!」

そう言つて次に出したのは神槍・グングニルだ。この槍は神話に出てくるロキが作らせた投げやりで速さは不特定である。

「そりゃあああ!?!?!」

そう言って思いっきり投げる。投げた先には一人の五胡がいたがそれを貫いて次々とロックしてるように五胡の体を貫いていく

「よし、A-10、出番だ!!」

そう言って対地攻撃機であるA-10サンダーボルトはガトリング掃射を地上に向けて行う。この攻撃機は対地専用なのでほとんどの武装が対地専用の兵器である。普通の戦闘機なら低速で移動させた場合、失速する可能性があるのだが、この攻撃機は下に折れ曲がったドループのおかげで長時間の低速移動が可能になった

戦闘機からのガトリングは凄まじく地上の土が抉られるように着弾していく、人間の体に当たってしまえば粉々になってしまうのは必然だ

さらに、反転したサンダーボルトはロケットポッドからロケットを発射する。瞬時に大量のロケット弾が発射されていき、連続で爆発を起こしていた。その周りにいた五胡の連中は無残な形になっていた。

「よし、この辺の掃討は完了したな。前線の方にいる愛紗とか雪蓮は大丈夫かね？行ってみよう」

そう言ってシボレーのタホ（装甲仕様）を出した。

「よっしゃあ、待ってるよ!」

そう言ってアクセルを思いっきり踏んだ

夕方はだんだんとスピードを上げていき、後ろでは砂煙を出していくその時だった

「ん？レーダーに反応があるな。五胡が出てきた森の方が……しかも、大量に来てんな……なんだろうか？」

反応があった方の森を見ると、そこにあっただのは旧ドイツ軍の重戦車、キングタイガーだ

「光男さまのじゃないよな……」

近くにいた兵士が言った。次の瞬間、タイガーが火を噴き、その近くにいた兵士が爆発に巻き込まれた。

「うわ！？敵か!？」

「くそ！エイプラムズ！出て来い！」

そう言う後ろにエイプラムズが4両出てきた

「エイプラムズ、森にいる伏兵を潰してこい！」

そういうと同時にエイプラムズは動き出し、森に向って砲撃を加えていく、向こうも気づいたようでエイプラムズの方に砲撃を仕掛ける。が、時代が時代のため、キングタイガーは最初は抵抗していたものの一気に殲滅される

「いいぞ！まだ、森の方から来るからな、警戒を怠るな！ガンシツプ！エイプラムズの援護についてやれ！」

すると、上空にAC-130が出てきて、森の上空を旋回しながら待機していた

「よし、次は機甲部隊か。こっちも要塞を動かすとしますかね。ラーテ前進せよ。」

そういうと後方に待機していたラーテ（朱里達が乗っていない方）が動き出し、森の方まで射程圏内に収める

「前方、森を射程に収めました」

「よし、エイプラムズと共に対戦車戦闘を行え、敵が出てきたら速攻で潰せ」

「了解しました」

そう言ってラーテはその場で停止した

「よし、ハインド、こっちの援護を頼む、アパッチは他の兵士の援護をしてくれ」

そう言って俺は愛紗達がいる戦闘区域に進んでいく

「愛紗!!」

「ご主人様!？」

愛紗は驚いたようだ

「何をしているんですか！？ここは危険です！早くお戻りになってください！」

敵を攻撃しながら俺に警告を入れていくのだった

「愛紗、光男の行動は今に始まったことじゃないでしょ？」

雪蓮が言った

「そうだぞ。少なくとも星よりかはマシだぞ」

「主、それはどういう意味ですか？」

星が言う

「そのまんまだよ。自分の胸に手を当てて見る」

そう言いながら俺は近くの敵をM3で撃つていく

「フム、私の胸には正義と希望が溢れておりますぞ！」

胸を張りながら言った

「そうかい。それはお気楽なこった。」

そう言って今度はミニガンを出して掃射を行う。足元には大量の空薬莖が散乱していく

「愛紗、こっちの状況は？」

おれは撃ちながらいう

「こっちの兵力も削られました、なんとか撃退しました」

「そうか。こっちは新しいお客さんがお出ました」

「と言つと？」

「ああ、俺の世界の兵器を出してきやがった。敵さんは業を煮やしたのか。それとも計画通りなのか。分からんがね」

俺が言った

「で？策はあるんでしょ？」

雪蓮が言う

「ああ、今はラーテで戦況を留めている。多分、こっからは完全に俺の戦いだろっとなつとお客さんか。雪蓮、五胡の方はお願いするよ」

「任せて、そっちのことも任せたわよ」

「了解！」

そう言うって俺は敵戦車の方に向かった

秘密兵器（前書き）

更新が遅れて申し訳ない！！



## 秘密兵器

俺らが戦争をおっぱじめしてから一日が経とうとしていた。五胡の方は数を減らしつつあるが、如何せんこっちの人数を上回っている。こっちの兵士にも疲れを見せる者が出て来ていた。兵器の方は俺の力で抑えているため被害は少ない

（連合陣地）

俺とその他の武将は一旦、集まって軍議を開くことになった

「こっちはどんな感じなの？」

雪蓮が言う

「はい、被害こそはそこまで酷くありませんが、兵士の皆さんは疲れが見えています。」

朱里が答える

「そう・・・光男、あなたの方は？」

「こっちは被害0だ。敵さんは古い装備ばっかだからな。だけど、油断はできない。奴の事だ。主力は残してあると思う。一応、そっちにも増援を送っておいた。援護の方は任せてくれ」

俺が言った

「どうしましょう？五胡はあんまり勢いが衰えてないように見えま

すけど……」

桃香が言う

「常に交代制で行くしかないな。五胡は数に任せての暴力だ。押さ  
れたらこっちが全滅しちまうぜ」

「そうだな。光男の言う通りだ。交代制で見張るとしよう。攻撃は  
光男の国の兵器を使わせてもらおう」

冥琳が言う

「ああ、自由に使ってくれ。いざとなったら戦闘機も出して爆撃も  
やっちまえばいい。俺は一応、現代兵器の方を見張っておくさ」

「そうか。頼む」

「誰か、質問はある？」

華琳が言うが、皆は黙っている

「よし、では、今言ったように行動して頂戴。くれぐれも油断しな  
いように」

『一応……』

そう言って解散した

く仮設空港く

俺は陣地を離れて仮設空港に向かった。援護用のヘリを出すためだ

「よし、偵察ヘリと攻撃ヘリを出すか」

そう言ってUH-60とアパッチ・ハインドを出した

「よし、お前らは五胡の動きを見張っていてくれ。何かあり次第攻撃はやっていい」

そう言って離れる。アパッチなどは離陸して上空に上がって行った

「さて、自走砲でも出すか」

そう言って次はM109 155mm自走榴弾砲を出した

こいつはアメリカ合衆国が開発した自走砲。専用に開発された車体と155mm榴弾砲を装備した旋回式砲塔を持つ。結果としてM44 155mm自走榴弾砲の後継車両としてアメリカ陸軍の第二次世界大戦後第2世代の自走砲となる。

「よし、お前らは陣地の後ろ側に待機しろ。ヘリの攻撃が始まったら、榴弾を喰らわせてやれ。敵に鉄の雨を降らせてやるんだ。行け」

そう言うつと移動を始める自走砲達、因みに4両出してある

「これで少しは気休めになりやあ良いんだがな……………あいつはどんなのを出してくるかね……………」

そう言って夜空を見上げるのだった



「我らが、最後の大隊。敵に圧倒的な力を見せるのだ！戦艦”シユトルムビンセント”発進せよ！！」

そう言うのと重低音のエンジンと共に地上では地響きが起こった。土が盛り上がったかと思えば、そこには巨大な戦艦が地中から顔を出した

この戦艦はアレキサンダーの手によって作られた。まさに要塞に相応しい外見だった。主砲は前後に二基ずつ配置されており46cm砲が太陽の光に反射する。この戦艦、それだけでなく空中を飛べるように設計されておりエンジンは核燃料を使用している。副砲は35cm砲、その他諸々と武器は満載している

その巨体はゆつくりと浮遊し始めやがて大きなエンジン音と共に前進し始める。そして、護衛としてかMe262が戦艦の周りに姿を現し始める。この戦闘機は第二次世界大戦中、旧ドイツ軍が作り出した。世界初のジェット戦闘機である。これを元に多くの名機が作られていった

「ククク・・・さて、どんな戦争になりますかね・・・実に楽しみです」

アレキサンダーは椅子に座り外の世界を見ながら笑っていた

〈アレキサンダー side out〉

〈連合陣地〉

「フワ、さて、どうなってるかね」

光男は朝早く起きてしまったため、五胡の様子を見に行ってみた

（連合前）

「わゝお、こんなに来てたんだ」

そこには屍が山の様にあつた。ほとんど体が吹っ飛んでいたのでもうと自走砲の被害にあつたのだろう

へりは未だに上空を旋回していた

「ふむ……結構な数がやれたと思うが……奴らの動きが無いのは何故だ？」

俺が言ってるのは五胡ではなくアレキサンダーの動きだ。まるで、指揮官がいなくなったように敵戦車などの襲撃が収まったのである

「奴がなにかでかい事をやり始めたか……どんな策を出してくるかね」

そう言つて俺は陣地に戻つた

「こんなありがたいよ……」

五胡の戦力は削られ、次第に戦力が落ちてきていた。しかし、奴らの姿が見えていないのが気になる。それについて数時間前には地震が起きた。そこまで大きくなかったので皆は気にしていない様子だった。

（連合陣地）

「ふむ、さっきの地震はなんだったんだろうな……地震にしては急に揺れた感じだったしな……」

俺は高台で胡坐をかきながら遠くのほうを見ていた。もちろん、上空にはアパッチが旋回しており、警戒は解かれていない。

「五胡は、戦力が無くなって成りを潜めてはいるが……問題は奴だな。どこから来るかな……」

「光男」

「ん？おお、蓮華か。どうした？」

やってきたのは蓮華だった

「いえ、光男の姿が見えたから何か考え事？」

そう言って隣に座る

「ああ、前に話しただろう？」

「光男と同じ武器を使う人間のこと？」

「ああ、奴は前半は五胡と一緒に攻めてきたが、後半は全くって言うていいほど攻撃が無くなった。」

「攻撃の機会を見ているのではないか？」

「それだけならあんまり気にしないが……問題はさっきの地震だよ」

「地震？」

「ああ、地震にしては収まるのが早すぎる。それが気になるんだ」

「そう……光男がそう言うなら何かあるんでしょうね」

蓮華はそう言って空を見上げる

「今度こそが総力戦になるだろうな。俺は奴を倒すことに専念する」  
「よ」

「そう。私は天の国の武器は使えないけど応援はできるわ。頑張っ  
てね」

そう言って蓮華は高台を下りていく

「ああ……」

俺はそう言って遠くを見ていく俺だった



「ん？」

俺は遠くで何か動いたのが見えたので双眼鏡を出して見てみた

「……………おいおい、あんなのを作ってたのか？馬鹿にもほどがあるよ……………どこぞの無理ゲーじゃないんだからさ」

俺はそう言ってため息をつく、いや、溜息をつかざるを得なかった

光男が見たのは一隻の空中戦艦だった。もちろん、アレキサンダーが乗っている船だ。光男がため息をついている時、腰に付けていた無線機が鳴った

「誰だ？こちら、光男」

「ククク、光男君、どうですか？この船の感想はいかがですか？」

相手はアレキサンダーだった

「おい、ふざけてんのか？空中戦艦なんてどっから持ち出したんだ  
「よ」

「フフフ、それは褒め言葉としてもらっておきましょう。あなたは  
どうやって攻略するつもりですか？」

アレキサンダーは余裕のようだ

「いいぜ。そっちがその気なら沈めてやんよ。そんな馬鹿げた船な  
んか片を付けてやるぜ」

そう言って無線機を切った

「よし、一旦、戦力を戻すか。それね!」

そう言つと今まで出てきていた兵器が姿を消した

「おゝ体力が漲ってくる感じだね。こっちも同等の物を出すとしたら、すか。」

そう言つて頭の中で想像をする。すると、連合の陣地の隣に巨大な”何か”が現れた。アレキサンダーの船と同等の物が出てきていた

「なんだありや!?!?」

近くにいた兵士が言った。すると、周りの兵士も騒ぎだした。

「ご主人さま!」

桃香がやってきたようだ

「よう、桃香」

俺が言った

「なんなのあれ!?!?」

陣地の隣にあるものを指さす

「ああ、こいつは俺が出したものだ。あいつが動き出した」

「出てきたの？」

「ああ、あいつとの総力戦をしてくるよ。」

「それだったら私も！」

桃香はついてこようとしてるらしい

「駄目だ。今回はかりは危険が大きすぎる」

俺が言った

「でも！」

「桃香、やめなさい」

やってきたのは華琳だった

「なんでですか！？ご主人様が行っちゃうんだよ！私、そんなこと（パン！）か、華琳さん？」

華琳は叩いたようだ

「甘えるのはやめなさい！光男は覚悟を決めて行くのよ。そんな彼に駄々をこねて困らせないの！！」

華琳は怒鳴るように言った

「華琳……」

「光男……あの肩に一発お見舞いしてあげなさい。私は信じてるわ。ここからは私たちは出だしができないもの」

華琳が言った

「ああ……五胡の動きがないからって油断するなよ。一応、後方戦力は残してあるからな」

そう言っつて戦車が止まってるほうを見る

「そう……すまないわね」

「いいつてことよ。保険みたいなものだ。権限はそっちに渡しておく」

「解ったわ。気をつけてね」

そう言っつて華琳は降りていく

「桃香、顔上げろ」

「ぐっす、ご主人しゃま……」

桃香の顔は涙でグシャグシャになっていた

「桃香、泣くな。俺は必ず戻ってくる。約束だ」

そう言っつて笑う

「絶対……絶対だからね？」

「ああ……イロコイ、出て来い」

俺が言うと後ろにイロコイUH-1が出てきた。俺はそれに乗ってエンジンを起動させた

数秒後、ゆっくりと機体上がり浮遊し始める

そして、隣で停泊している巨大な空中戦艦の甲板に着陸する

「よし、システムオンライン。戦艦バラライカ発進せよ」

そう言うとエンジンが起動し始め、巨大な船体がゆっくりと上がっていく

戦艦の説明をしよう。この戦艦の名前はバラライカ、船体は大和型より一回り大きい近江型と呼ばれる船体だ。様々な重火器で守られた戦争の火種のような戦艦である。主砲は50?砲を三基も備えており、後方甲板には滑走路が設置してある軽空母と同じ搭載能力がある。副砲は35.5?砲を備えており、対空ミサイル、対艦ミサイル、対空砲など様々な装備が施されている。さらには超電磁砲レールガンも搭載されているまさに最強というに相応しい戦艦であり要塞ともいえる船である

この船は光男がいた時代にロシアで発案された計画を元に作り上げた。もし、これが設計されていれば、世界の主導権はアメリカではなくロシアに傾いていたとも言われるほどであったが、経済面に難があり、計画は白紙に戻されたと言われている

「よっしゃ、最後の戦や。こいつですべてを終わらそう。」

そう言っただけはゆっくりとした足取りで艦橋へと向かい始めた

（side 桃香）

「ご主人さま……無事でね」

私はそう言っただけでお祈りをする。私にはこれぐらいしかできないから

「桃香、こつちも休んでられないわよ。」

華琳さんが言う

見ると、再び五胡の勢力がやってきた。数から察するに向こうも必死なのだろう。だけど、私は負けない！ご主人様が帰ってくるまでここを守らなきゃ！

「華琳さん、さっきはありがとうございました」

「お礼は後で言っただけだよ。今は目の前の敵を叩き潰すのよ」

「そうよ。桃香、ここで勝たなきゃ光男に顔向けできないわよ？」

雪蓮が言う

「はい！わかってます！」

「ふっその意気やよし！呉の精鋭よ！いまこそ、憤怒するときぞ！力を惜しまず、戦い抜け！」



## 空中決戦　そして、決着

俺は戦艦バラライカに乗って奴の戦艦を迎撃しようとしていた。

「下でも始まったか」

俺が言った。丁度、モニターには三国の武将と五胡がぶつかっているのが見えた

「さて、こつちも決戦と行きましようか？」

そう言っただけに乗っているとされる戦艦に目を向ける。奴の戦艦は旧世代の戦艦を空に浮かせているだけに見えた

すると、奴の戦艦からミサイルが飛んできた

「CIWS、対空迎撃　同時に対艦ミサイル発射」

すると、甲板などに搭載されているCIWSが即座に動き出し掃射を行う。同時に対艦ミサイルが発射される。敵のミサイルはすべて落とされたがこつちのミサイルも落とされてしまった

「やっぱ、そう簡単には行かないか・・・一気に決着を付けるしかないな。レールガン発射用意、充填が完了するまで砲塔で攻撃する50cm砲　発射」

モニターにレールガンの充填ゲージが現れた。同時に艦砲射撃を開始する。向こうも艦砲射撃を開始した



「このままの行動を維持、充填が完了するまで続ける」

そう言っつて奴との空中戦を続けるのであった

side 愛紗

「行け行け！！五胡などに後れを取るな！！」

私はできる限りの声で兵士に指示を出した。丁度、雪蓮殿と華琳殿の軍もぶつかっているようだ。

「はあ！！！」

堰月刀で横に振った。それだけで数人の五胡が吹っ飛んだ

「%&\$\$&#&%\$\$&%！！！」

後ろから五胡の一人が飛びかかって来たが……

「てりゃあ！！！」

さらに後ろから飛びかかった奴に切られて絶命した

「愛紗、隙だらけだぞ」

そう言っつて剣を肩に乗せる春蘭

「すまない。油断していたな。」

「貴様には借りがあるんだ。それまでは死んでもらっては困るから

な。」

「ふっ承知した。」

そう言っつて背中合わせに並んだ

「行くぞ!!」

そう言っつて敵陣に突っ込む私達だった

〈愛紗sideout〉

〈side桃香〉

「皆、頑張つてね!」

私は剣を使えるはずもなく陣営で応援しかできなかった。それがとても歯痒い

「ご主人様、私はどうすればいいのかな……?」

今も空で戦っているご主人様の船を見て言った

「あっそういえば……」

そう言っつて後ろを振り返る

そこには待機中であつた戦車隊が止まっていた

「これって……私の声にも反応するのかな?」

そう言った瞬間、戦車隊が一気にエンジンを起動させた

「きゃっ!?!」

私は驚いて尻もちを付いたが、戦車隊を見て心の中で何かが変わった気がする

「お願いです！私も皆の手伝いがしたいんです！力を貸して下さい！」

戦車隊に向かって言った。すると、数台の戦車が動き出した。その中の一台が私の前で止まった

「乗れって事？」

その戦車は返事をするようにエンジン音を上げる

「分かった！皆さん、私の指示に従って下さい！左の三両は華琳さんの軍隊の援護を！右の三両は雪蓮さんの軍隊の援護を！残りは私と一緒に愛紗ちゃん達の援護を行います！」

そう言うと戦車隊が一気に動き出しそれぞれの区域に向かって行き、砲撃を開始する。私が乗る戦車も一気に速度が上がった

すると、後ろにあつた蓋が開いた

「中に入れて事？かな」

私は恐る恐る中に入った

「うわ〜こんな風になってるんだ」

中に入った私が言った。すると、目の前の画面が写り出し外の様子が  
が出た

「皆さん！一気にぶちかましちゃって下さい！」

そう言うと砲弾が一斉に発射され敵のど真ん中に着弾した。

「いいですよ！皆さん！どんどんやっちゃって下さい！」

私は戦車の中で指示を出していった

〈桃香 side out〉

〈空中〉

俺は未だにレールガンを発射せずにいた。何故かって？そりゃあ砲  
弾を馬鹿みたいに撃つて来ちゃあ撃てるもんも撃てないって

すると、船体に衝撃が走った

「うおっと！？」

「船体に砲撃を喰らいました。 損傷は中破」

「あれま、けっこう手痛いな。 出力フルパワー、一旦離れるぞ」

そう言ってエンジンの出力を上げた

「よし、1111で旋回」

そういうと強力なGが俺の体を襲う

「ぐっ……今だ！レールガン発射！！！」

そう言うと超音速の弾丸が奴の戦艦めがけて飛んで行った。弾丸はそのままエンジンに当たり爆発を起こした

「命中！！！」

だが、奴の戦艦も負けてはいなかった。後ろにあった砲台がこちらめがけて発射してくる

「しまった！！！」

そう言った頃には遅かった。船体に衝撃が走った

「バラライカ！損傷は！？」

「損傷は重度 これから先、長くは持ちません。艦長、船を降りる事をお勧めします。」

船のAIであるコンピューターが言う

「何言ってるんだ。艦長は沈みゆく船と共に行くのが常識だろ？手動に切り替えてくれ。後、砲塔の兵装をこちらに回せ。例のシステムも解除しろ」

俺が言った

「……分かりました。ですが、私も最後までお付き合いさせていただきます。」

AIが言う

「おお、そりゃあ心強いね。それじゃあ、日本男児の底力を見せてやりますか」

そう言っただけに付いた。すると、操縦桿が目の前に現れた

俺はそれを握りこぎった

「日本に栄光あれ、三国に平和を」

そう言っただけに出力をフルパワーにさせる。船のスピードはどんどん上がって行く

「これで、奴を倒せりゃあ万々歳だな。砲塔連続射撃!!」

すると、砲台からあり得ないほどの砲弾が発射されていく、この機能はフル射撃システムと言い砲塔を限界まで撃ち続けることができるシステムだ。だが、砲塔がそれに耐えきれず故障してしまうため、光男は使う事を躊躇っていた

砲弾は艦橋、甲板、砲塔などに当たり爆発を起こしていくが、光男の攻撃は収まらない

「これで、最後だ!! 神風特攻!!」

そう言つてアレキサンダーの乗る船に突進していく、アレキサンダーの船は避けきれずもろに食らつてしまい船体が真つ二つに折れてしまった。中から数百人の兵士が落ちて行くのが見えた。光男の船、バラライカもその衝撃に耐えきれず、先端が折れてしまいバランスを取ることができなくなつてしまつていた

「警告 警告 衝撃が来ます。艦長 衝撃に……」

そう言つた瞬間、船全体が地面に叩き付けられた。数十メートル地面を抉りながら船は近くにあつた山にぶつかる。そこで初めて止まつた。船体は保っているものの艦橋や砲塔が滅茶苦茶になつていた。無論、光男の乗る指令室はコンピューターが火花を起こし、窓ガラスは割れていた

「システム……オフライン……」

AIはそのまま何も言わなくなつた。システムがやられてしまつたのだらう

「これで……皆を守れたかな……？ちつと疲れちまつたわ。休暇を貰わなきゃ割に合わないぜ……」

俺は額から血を流しながらそのまま気絶してしまふ

〈side桃香〉

「ご主人様！！」

私は思わず戦車の蓋を開けてご主人様の乗る船がどうなつたを見た。

遠くでも分かる巨大な船体は滅茶苦茶になっていた

「桃香様！ここは私達が止めます！ご主人様の方をお願いします！」

愛紗ちゃんが言った

「分かった！戦車さん、向こうの船に向かって行って下さい！」

私が乗る戦車に指示を出した。戦車はご主人様の船に向かって進んで行った

「ご主人様……死なないで……今、迎えに行くから」

私はそう言ってご主人様の安否を願った

（桃香 side out）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5544o/>

---

三国志演義～異世界の者～

2011年11月29日02時41分発行